THE CENTRAL REVIEW

中央公論

六月號

第廿八年第七號　第貳百九拾貳號

大正二年六月一日發行（毎月一回一日發行）

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

女五人

伊藤銀二（舊號銀月）著

新刊

■定價金七拾五錢……郵稅四錢

寸毫も僞らざる自己の表現、微塵も掩はざる眞實の生活の反影、著者が態度を改めて新たに純藝術的生活に入りたる最初の産物は是なり、卽ち或意味に於て本書は著者の處女作なり、最も眞面目なる讀者に一本を侑む。
尙竹内鶴子作『血風呂』『最初のお蔦』の二編を添ふ

發行所 東京府下北品川天王下（振替 二四九六七番） 便利堂書店

印刷

印刷の御需めに應ず

（特に）商品目錄並に營業案内の作製を其長所と致し候

（目錄 無代進呈）

東京市銀座大通新橋際
新橋堂印刷代理部
電話 一九一番 ‖ 振替 東京二〇〇番



■組合せ本箱

▲某宮家、德川公爵家、大隈伯爵家を始め其他の諸名家より御註文の榮を辱うする本箱!!
▲多數の優れたる特徴を有し現時歐米諸國に大流行を極め居れる本箱!!

定價
金廿六圓 檜製
金廿八圓 欅製
金卅圓 櫻製

運賃荷造費御自辨
目錄往復ハガキにて御報次第送呈す

信用なき店舖及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

中央[illegible]論[illegible]　[illegible]

[illegible]

故田岡嶺雲譯並註

和譯漢文叢書

新時代の最大要請は時間と勞力との節約也

本叢書は此要請に應じたる者也

◎全十二冊完成 總クロース堅牢美本
原文の一字を換へず且懇切明晰なる註釋を加へたる者
●內容裝幀等の詳細見本は郵券二錢を要す

第一編 和譯老子莊子 正價壹圓 郵稅拾貳錢
第二編 和譯韓非子 正價壹圓廿錢 郵稅拾貳錢
第三編 和譯戰國策 正價壹圓廿錢 郵稅拾貳錢
第四編 和譯荀子 正價壹圓 郵稅拾錢
第五第六編 和譯史記列傳 上下二冊 正價各一圓廿錢 郵稅各拾貳錢

第七編 和譯七書 附鬼谷子 正價壹圓 郵稅拾錢
第八編 和譯淮南子 正價壹圓廿錢 郵稅拾貳錢
第九編 和譯墨子列子 正價壹圓拾錢 郵稅拾貳錢
第十第十一編 和譯春秋左傳 上下二冊 正價各一圓廿錢 郵稅各拾貳錢
第十二編 和譯東萊博議 正價壹圓卅錢 郵稅拾四錢

故田岡嶺雲譯並註

和譯維摩經 附和譯般若心經

（三版）

全一冊 總クロース美本 正價金七拾錢 郵稅金八錢

佛經八萬四千卷 就中啻に方外緇衣の人に重んぜらるゝのみならず、亦其文字の幽渺と古奥とを以て古より詩人文人の間に喜ばるゝ者、其所説の維摩及般若心經の右に出づる者なし、今此二書をとりて逐字譯を施し且つ簡明親切なる插註を加へ、別に卷末に原文を添へて一冊となしたる者即ち此書なり、佛教の眞諦を味はんとするもの及び苟も文章に志ある者は一本を座右に備へ、明窓の下、淨几の上、爽晨靜夜香を焚いて之を讀め。

發行所 玄黄社 東京神田區雉子町 振替東京七九九五番 全國書店賣捌

社告

中央公論誌代として、振替貯金を以て本社へ直接御拂込相成候方に對し從來登記料として、一口に付金壹錢宛御拂込料金の內より、控除いたし來り候處、六月一日以降前記登記料は本社負擔といたし可申候間、此段廣告仕候也

大正二年六月一日

反省社庶務部

！大歡迎忽再版！

■ダンヌンツィオ氏作　矢口達氏譯■（野口柾夫氏裝）

巖の處女

全一冊四六判
總クロース金文字入
特製美本箱入
紙數四百餘頁
價金壹圓拾錢
小包料内地八錢

批評摘載

空しく幽く荒れ果てたる庭園には、しづかな泉がとこしへの諧調をかなでゝ居た。美しくも儚ない三人の處女は、こゝに咲いてこゝに散つたのである。同じ欝憂と悲哀とを呼吸しつゝ、いたましい靈の織物を相共に織りなした三人の處女を、運命はいかに愛し、いかに弄んだであらうか！

國民新聞。現代伊太利の文豪ダンヌンツィオが傑作を譯したるものにして「無限の優美と熱情と悲哀とを已にその中に表はした光と影とに充ちた顔の如く物言ふ名」なる三人の處女の匹ひなく哀れも深き戀のローマンス、絢爛諧謔を極めたる詞藻の美、雋鋭なる心理描寫、深刻なる性格解剖、さては南歐獨得の高韻と熾烈なる熱情と、蓋し新緑の窓下淨几に倚つて繙くに最も適はしき名篇といふべく、先きにビヨルンソンを紹介しトルストイを翻譯したる著者の譯筆は更に洗練自在の歩を進めて玩誦するに甚だ可なるものあり推奬すべし。

讀賣新聞。曩きにビヨルンソンの「アルネ」、トルストイの「コサック」等北歐の文學に親しんだこの譯者が、更にペンとインキとを新らしくして南歐の名篇を紹介したのは、かれの翻譯上の天分の試みともいふべきで、絢爛な文章、富贍なる語詞、官能の鋭さ、形式の美しさ原作は可なり六かしいものであるが、之をかくまでコナシたのは、たしかに成功と云ふてい丶。異彩ある小説として、一讀をすゝめたい。裝幀も實に美しく綺麗に出來た。

好評たちまち三版

トルストイ作　矢口達氏譯

コサック

四六版洋裝
頗美本箱入
正價金壹圓
小包料八錢

好評たちまち三版

ビヨルンソン著　矢口達氏譯

アルネ

四六判洋裝
正價六十五錢
小包料八錢

（前付の三）

發行所　東京高田豊川町　小石川區　新陽堂　振替口座東京一五一七〇番　賣捌東京堂外東京各地書店

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

（前付の四）

會員募集

第壹回新學期開講

此際入會者には種々の大特典あり

本會は家庭に必要なる簡易の醫學を教授するものにして各專門の大醫が最平易親切に醫學の一般を講述し更に素人診斷學素人藥物學疾病自宅治療法より救急法看護法に至る迄詳述す病に苦しむ者は勿論何人も本會に入り身の安全と幸福を得よ

拾ヶ月卒業

家庭醫學講義錄

會員には質問に應じ病氣の場合は自宅治療法醫療法を問はず其他便宜特典を與ふ◎會員には藥品器械の購入其他種々の便宜特典を與ふ◎會員には希望に依秘密治療法の便宜を與ふ本會卒業生を終身會友とし會員同樣種々の便宜特典を與へ優待す

會費 一ヶ月五十錢 全學期金四圓 東京神田區西小川町 電話本局四五四七番

大日本家庭醫學會

規則書 講義見本附錄 申込次第 無代進呈

會員募集

海外文藝叢書

第一篇

七死刑囚物語

アンドレーエフ作 相馬御風氏譯

新型美本 正價各金四拾五錢 郵稅各金六錢

第二篇

心の扉

ボリス・ザイツェフ作 昇曙夢氏譯

第一篇はロシヤ文壇新象徴主義の第一人者アンドレーエフ氏が、七人の死刑囚を拉し來て、深刻なる心理描寫を試みたるもの。第二篇はロシヤ新ロマンチシズム流のザイツェフ氏が、神秘の帷を透して觀照の世界を憧憬したる、氣分藝術の傑作。共に作者の本領を鮮かに發揮したる作にて、文學愛好者の見逃すべからざる新著である。

東京市神田區南神保町

海外文藝社

（振替東京二四四四番）

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絕す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

大隈伯新著（法學博士 文學博士 有賀長雄先生執筆）

紙數一千二百七十餘頁 大石版二寫眞版廿一枚

開國大勢史

▲角背革 ▲金塗美本 定價五圓 特價四圓 送料（△市内は四錢△内地十六錢 △臺樺卅五錢△鮮支四十五錢）

伯の論斷は舊來の史論を超越し

本書によりて始て世界的日本
の既往將來を自覺すべし

大隈伯識見高邁夙に我國近代四百年間の世界的發展に關し前人未言の卓見あり乃ち本邦外交史學の奏斗有賀博士に筆勞を囑し伯立案し博士執筆し數年の歲月畢生の心血を注て今や完成す

是最近四百年間に於ける我國民の世界的外交史なり

西洋人の日本發見に起り我開國の由來大勢の發端に溯源し以下世界の潮流が我沿岸に浸漸せる消長を視察し遂に幕末維新となり明治の條約改正大成となる上下四百年識見千古を凌轢す

博士の考證は世界の材料を渾融す

發行所及特價申込

東京牛込早稻田 早稻田大學出版部 振替東京臺壹貳番

東京京橋南紺屋町 實業之日本社 振替東京參貳六番

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

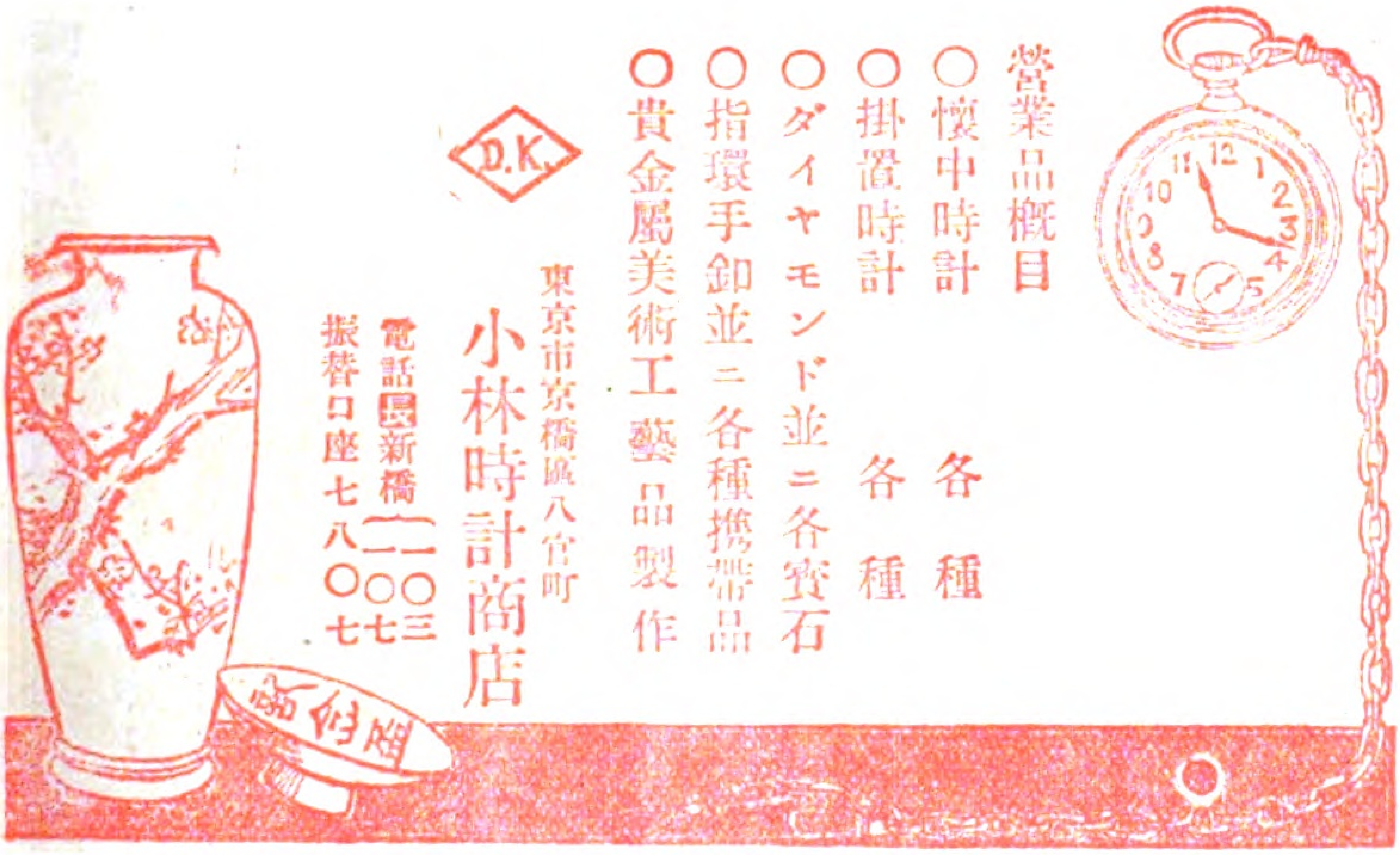


中央公論第廿八年六月號目次

▼公論



此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

DOMENICO GHIRLANDAJO



GIOVANNA TORNABUONI

中央公論



六月號
廿八年第六號
第二百九十二號

高處より見たる排日問題

加州排日案件は論說の題目として殆んど陳腐に屬するの感あれども吾人が更に筆を此問題に染めざるを得ざる所以は其關係の頗る廣汎にして其影響の最も遠大なるものあるを以てなり、加州に於ける我同胞五萬人の權理利益の問題は素より當面の急務に相違なけれども、利害の關係は遙かに之より遠且つ大なるものあり、卽ち大和民族發展の前途は直接に加州排日案件の最後の解決如何に繫がる處多く、從つて宇內平和の大問題に聯關せざるを得ず。是れ吾人が玆に聊か高處よりの觀察に基き該案件の關係を論ぜんと欲する所以なり。

（一）

加州排日案件を論ずるに當り須らく記憶すべきは其勞働者問題に非ざる事是れなり、我邦勞働者が無制限に米國に移入して白人勞働者と利害の衝突を來たし爲めに排日運動を喚起し、其一現象として桑港學童隔離問題を惹出するに至れるは七八年以前の事に屬し、當時日米兩國は協議の末、帝國政府が邦人渡行を制限するに對し桑港に於て隔離案の撤回を見て一時の難局を解決するを得たりしは尙ほ吾人の記憶に新たなる處たり、即ち該協定に由り(更に後の日米改訂條約に聯關する我當局の勞働者渡行制限覺書により)帝國臣民の勞働者として無制限に米國に渡行するとは事實上禁止され居るを以て、今日に於て米國白人勞働者は最早日本人の競爭を恐るゝの理由一も存ぜざる譯合なり、然るに近時に至り加州勞働者の利益を代表すと稱する議員聲頻りに外人土地法案を提議し遂に上下兩院に於ては歸化權なき外國人の土地所有を禁止するの法案を大多數を以て通過し、加州知事も正義を無視し之を裁可するに至れるものは自ら形勢の一大變遷を見るべきに非ずや、別語之を云へば今日の爭は賃限の多少を問題とする日米勞働者間の問題に非ず、寧ろ白人勞働者が其前日の同輩にして今は地主又は小作人と爲りて成功せる日本人に對する嫉妬と之に由り激發せられたる人種的反感に基因するものなり、若しも日本人が色相に於て他の米國人と同一たらんに於て米國人中何人も我が在加同胞の成功に異議を挾むものあるべからず、却て大に加州實業の發展に資するものあるを喜び之を歡迎すべかりしなり、而して其然らずして刻下の形勢を醸もしたる所以のものは、人種的反感に基因するを反證するものに非ずや、論より證據、加州サクラメント、ビー新聞社長マックラチー氏は實に左の如き露骨なる言明を爲せるを見る。曰く、

吾々が日本人を排斥するは地方的事情と人種的感情に基因するものにして、東部諸州の人々が吾々の心情を理解し能はざるは宛かも往年北部の人々が南部諸州の黒奴問題を理解し能はざりしと能く相似たり、抑も近年加州一般に菓樹園の勞働者を得るの困難なるに際し、日本人は低率の賃銀に由り白人の競爭者を驅逐し、而して米人、西班牙人、伊太利人、葡萄牙人等續々去りて跡を絶つや、日本人は勞働者を以て甘んぜず到る處小作人と爲りて成功せしが、更に進んで耕地を買收し今や遂に舊地主輩を驅逐せんとするなり、即ちサクラメント市に近き「苺の谷」と稱する一地域の如き今や全然日本人の所有に歸したり、彼等の慣用手段を見るに、彼等は先つ一方の耕地を占取するや種々の方略を盡して近隣の白人農家をイジメ、遂に彼等をして不愉快に堪へずして其土地を買却して去るの止むを得ざるに至らしむるものなり、然れども加州は日本の殖民地たるを甘んぜず、又中央政府が加州を放擲し日本人の跋扈跳梁に委し去らんことを欲せざるなり、云々。

排日紙の云ふ所素より悉く信を置くに足らずと雖も其露骨なる言明の中自ら人種的反感の熾甚なるを見るべきなり、殊に排日問題を以て往年の黒奴問題に比するが如き侮辱も甚しからずや、吾人の聞く處に據れば菓樹園の勞働の如きは最も善く日本人に適するものにして、日本人が白人勞働者を此範圍より驅逐せしは賃銀の關係よりは寧ろ適者生存の理に基けりと云へり、且最近五六年間に於て日本人の土地所有者及び小作人の激增せしは著明の事實なるが、其一の理由は前年の日米協議の結果、勞働者移入を停止せしに在りと云ふべく、即ち日本勞働者は爲めに相互間の競爭を免れて賃銀の增加を來たし、從つ

て地主と爲り小作人と爲るの便利を大に加ふるに至れるもの丶如し、斯くて排日を以て目的としたる日本勞働者制限が却て在米同胞の成功を助長したるは亦奇ならずや。

（二）

加州外人土地法案の最も遺憾とすべき所以は獨り此法案が加州人民間に欝積せる人種的反感の産物たるが故のみに非ず、加奈多に、濠州に、ニウジーランドに、太平洋の沿岸凡そ白人の領域内到る處に澎湃たらんとする恐るべき排亞細亞的風潮の偶〻加州排日案の勝利に依り益〻熾ならんとを憂ふるに由れり、我日本が東洋の桃源として珍重せられ、世界の骨董國として愛憐せられしは自ら別時に屬す、日清日露の兩戰役を經て國威の發揚せらるゝと共に、一般に恐怖せらるゝに至り、一たび獨逸皇帝が例の諷刺畫を公けにして「黃禍」を唱へし以來、排日思想は各方に浸潤し、殊に直接の關係密なる太平洋沿岸地方にありて太平洋の將來に對しては杞憂の念益〻深からんとするものあるに似たり、即ち白晳人種が太西洋に、地中海に、將た印度洋に於て主人公たるが如く、太平洋上の覇權も亦之を白人の手に占めんと欲するの情益〻切なり、從つて萬一にも日本人支那人の跋扈跳梁を見るに至り其下風に立つが如きは白人の最大恥辱と爲す處たらずんばあらず。今此一派の論者を代表するフランク、フォクス氏の近著「太平洋問題」中より一二要點を摘譯する亦無用ならざるを信ず、曰く

白晳人種が大體上有色人種より優等なることは世界的政治を論ずるに當り前提として認識せざるべからず、過去二千五百歳の世界の歷史に溯りて之を觀れば、白晳人種の優等なることは幾多の事實に由

り證明するを得べく、之に反し單に民衆の多數なると模倣的才能に富める耳を以てしては假令近代の戰術的組織と實業的組織を利用するも未だ以て優秀なる知識と獨創的才能とに(即ち白晳人種に)打勝ち得べきの證據を示すに至らず、素より近代的組織を應用すれば、亞細亞人を以て成れる軍隊も製造場も比較的有力なるに相違なし、因て日本の勃興と支那人民の覺醒とは獨創皇帝の首唱に係る所謂黃禍の因を爲すことなしと云ふべからず、萬一には白晳人種も一時は其占據せる或る地方より逐拂はれ、亞細亞は亞細亞人のものなりとの叫び一旦は效果を見ることあらんも計る可らず、然れども是れ只一時の現象たるに過ぎざらん耳、終局は世界全般に亙りて白晳人種の勝利に歸せんこと毫も疑を容るべからず。

太平洋の將來は白晳人種の掌握にありとは吾が信念なり、亞細亞人民は若しも其在來の本土を保有するを得ば以て滿足せさるべからず、日本の如きも曾て日露戰爭後には一時太平洋に覇を稱するの望なきに非ざりしも、今や好機一過し、パナマ運河の開通近づくに從ひ其望も絕無と爲れり、況んや今後濠洲、ニウジーランド、加奈多が協力して大海軍を起すの日に於てをや、該海軍は明かに排亞細亞的の目的を有すべければなり。

日本人民は武勇の評判に醉ひ實力を過信す、故に他日或る機會に至らば平素國力の限度を解して自制しつゝある政治家を强ひて遠征軍を發せしむることなしと云ふ可らず、然れども斯る暴擧の必敗に歸すべきは財政の理由より觀るも自ら明なり、但し最も恐るべきは日支同盟の成立にあらんも、支那人は

到底日本人と相和す可らず、同盟の恐怖は蓋し杞憂のみ、云々。

斯くてフォクス氏は日本を初め支那暹羅等の到底太平洋の覇權を握る能はざるべきを論じ、南米のラテン人種亦恐るゝに足らざるを説き、終に大英帝國又は北米合衆國の兩者の一又は兩國の協力に依り太平洋上に於ける白皙人種の優位は遂に保持し得らるべしとの結論に到着せり。

吾人は斯の如き夢想的意見の如何に廣く行はれ居るを知らずと雖も、濠洲、加奈多、又は合衆國の血氣に逸やる帝國主義者間には同情者の甚だ少なからざるべきを思ふ。今更眞面目に此種の議論に對し辯妄の勞を執るの要なしと雖も、帝國人民を好戰的にして侵略的なりと前提するとの根本的に事實相違なる耳ならず、加奈多濠州ニウジーランドが協力し帝國を威嚇するに足るべき大海軍を興さんとするとの一空想に過ぎざるは辯を待たず、殊に白人の一國若しくは二國協同して太平洋の覇權を掌握すべしとの希望に至りては局面の眞相を解せざるの甚しきものと云はざるべからず、往古羅馬カルセーヂが興亡を賭して爭ひし地中海の如き小域の海面にありては事自ら異なりと雖も、現に太西洋上に於て英、佛、米の諸大國其沿岸に位ゐすと雖も毫も窮屈を覺えず、獨逸亦た其勢力の擴張に努め居ると雖も、太西洋は自ら各國の發展を容るし尚ほ綽々餘裕あるに非ずや、太平洋上に於ても日米を初めとして、加奈多、濠州の如きも其人口の増加に從ひ益々航海權を發展し、支那亦之に參加して、益々海面の殷賑を來たし、今より數十年の後には宛も今日の太西洋の如くなるべきことと想像に餘あり、而かも排亞細亞的議論は其淺薄にして偏僻なる丈けに無名の英雄を以て任ずる策士論客の歡迎する處となり、殊に加州事件を動機と

しで北米、濠洲各方面に高調し來らんとは蓋し杞憂と云ふべからず、是れ豈内外識者の最も憂ふべき所にあらずや、

（三）

想ふに今次の加州事件に關し米國大統領ウイルソン氏及び國務卿ブライアン氏が深く帝國の主張に同情し極力土地法案の延期若しくは破棄に努めしは我邦人の諒とする所にして、是れ實に兩氏平生の主張に基く耳ならず、又實に斯くの如くして始めて米國建國の理想を空うせざるものと謂ふべし、然るに事總て志と違ひ、加州上下兩院は米國中央政府の忠告を用ゐず、全國の輿論を聽かず、大多數を以てウェブ案を通過し、加州知事亦た遂に之を裁可せり、其善後策果して奈何、想ふに米國當局も其前日來の主張に鑑み其態度に照らし、我政府の抗議に對しては遂に更に解決の方法を取らざるを得ざるべし、而して如何なる方法を取るべきやと云ふに、蓋條約改締を試みる乎、歸化權許容の方法を講ずる乎、概ね二者其一に出でざるべく、又兩者とも採用するに至るやも知らず、而かも尙ほ焦眉の急あり、該問題の解決を見るまで如何にして土地法案の施行を延期すべきやと云ふと是なり、蓋し該法案は八月下旬を以て自然施行さるべければなり、想ふに延期の方法としては加州人民二萬人の署名を得て一般投票の請求を爲す乎、又は條約違反を理由として法廷に起訴する乎、恐らくは此二案中の一に出でざるべき乎、斯くて一方に土地法施行を延期したる上にて最後の解決如何、吾人は此の甚だ面倒にして容易に解決し能はざるべきを恐れざるを得ず、條約の改正は大統領が屢〻聲言せし處にして事、日米兩政府の交渉に關するを

以て甚だしく困難ならざるが如きも、米國當局は已に加州人の正當の苦情は必ず之を採用して解決を與ふべしと約束せるに似たり、而して所謂正當なる苦情の何たるに至りては兩政府の見解容易に一致すべくもあらず、前日大統領は加州當局に告げて曰く日本の抗議は國家の名譽と云ふ感情に基因するが故に同じく土地所有を禁止せんとするも法律を以てせず條約に由り其目的を達するを可とすと、若しも此報道にして誤なからしめば、ウィルソン氏の厚意なるもの頗る心細きの感なき能はずして、改正の協議容易に纒るべしとも思はれず、而して歸化權問題に至りては在來の歸化法を廣義に解釋し日本人は蒙古人種に非ずと云ふの主張法廷に於て成立せば誠に結構なれども果して註文通りに運ぶべきや否や、若しも歸化法改正を必要なりとして議會に於て修正の動議を提出するに至らん場合に於て、其兩院を通過して法律と爲る迄には幾多の障碍に打勝ざるべからざるは想像に難からず、條約の改正なり歸化權獲得なり吾人は必ずしも之を不可能と思惟せずと雖も、其決して輕々樂觀すべからざるを世人に注意せざるを得ざるなり、

(四)

然りと雖も大統領ウィルソン氏及國務卿ブライアン氏が平和の把持に熱心なるは一面大に人意を强うするに足るものあり、過日ブライアン氏の宣明せし處に據り察すれば米國政府は各國と一般的仲裁條約を締結するに意あるものゝ如く、殊に英國と日本とに對しては其希望頗る切なるものあるに似たり、若しも然りとせば吾人はブライアン氏の卓見を稱せざるを得ず、何となれば日米間の凡ての誤解の因を一掃

するに非ざれば一般平和の理想は到底實現すべからざればなり、然れば歸化權問題の如き案外に容易に解決し得べきやも未だ知る可らざるなり、但し此際に臨み吾人は我同胞に對し一言の警告なき能はず、歸化權問題は容易に解決し得べしとするも、得べからずとするも、吾人は何處までも正義人道に基きて平和の把持に努めざるべからず、而して彼が人種的偏見に對するに我が偏狹なる愛國心を以てし、兩者の衝突を激發し、平和攪亂の危險を迎ふるが如きは最も愼まざるべからず、一例を擧げ之を云はんに、我同胞の外國に在るや、多くは彼が風俗慣習と同化せざるを以て非難せらる、殊に邦人の忠君愛國の觀念は假令或る外國に歸化するも到底其忠良なる臣民たり得べからずと思惟せらるゝに似たり、古來我邦には忠臣二君に仕へずと云ふ堅固なる道念ありて、帝國臣民にして外國に歸化するが如きは許すべからざる背德と見做されたりき、今や萬國同胞、鎖國固陋の見を持ずるもの漸く少なからんとすると雖も、我邦人の愛國心には圭角頗る多くして異鄕の俗と相容るゝこと甚だ困難なるに似たり、故に加州に於けるが如きも多くは群居して自ら他の白人と隔離し、社會の中に一種の別社會を成し、國家の裏に他の國家を作るの奇觀を呈するに至るなきを保せず、是れ蓋し大に誤解を招くに至れる原因に非ずとせず、故に異鄕にあるものは勉めて其地の風俗慣習を尊重し、もしも歸化するに於ては宛も新婦が良人の家に歸するの心得を以てすべく、新たに籍を置く處の國家に對し僞なき忠誠を致さんことを要す、然らざるに於ては歸化は一種の詐僞的方便に外ならずして、平生信義を口に重んずる國民の行動として最も恥づべきに非ずや。

之を要する加州排日問題は孤立せる單箇の問題に非ず、其原因は各方面に瀰漫する人種的偏見に在るを以て、若しも根本の解決を爲さゞるに於ては禍の及ぶ處際限なからんとするものあり、我國家は維新後四十年の奮闘努力に由り國權を回復し得たりと雖も、大和民族か白皙人種に屬せずと云ふの故を以て尙ほ劣等民族たるの取扱を受くるを免れざるなり、此人種的迷妄を打破して東西融和の道を開き宇內平和の基礎を築くは大正年代の大事業に非ずや、幸に米國の人士中公平を持し人道に立つもの少しとせず、吾人は我邦人が毎に高處の達觀を忘れず、海外の同志と提契し、又擧國一致、以て根本的解決に向つて勇往猛進せんとを勸告す、此際屑々たる外交の巧拙の如きは必ずしも深く問ふを用ゐず、徹頭徹尾、姑息彌縫を排して民族の權理を主張し、彼をして遂に人道の大義に服せしむるの一途ある耳。

山本內閣の前途

人の噂も七十五日とは能くも人情の機微を穿てるものかな、山本內閣も已に三ヶ月に垂んとして、さしも喧囂を極めし非立憲の叫びも最早輦轂の下には之を聞くべからず、憲政擁護の運動は田舍巡回中の尾崎犬養の一派の政客に依り僅に形ばかりの命脈を保てる耳、想ふに今日となりては假令犬養尾崎兩氏を初め國民黨政友倶樂部歷々の總出を以て演說會を開くも明治座又は新富座の一半を滿たすさへ難事たらん、蓋し是れ政治思想の尙ほ甚だ幼稚なるに因るか、將た又山本內閣が漸く其實力を認識せられんと

する前徴なりと云ふべき乎、但し加州排日問題の突發は確に世間の人氣を其已にダレンとする際に憲政擁護より奪去りしの觀あり、斯くて現內閣は排日案の爲め非立憲の攻擊を稍こ寬和するを得たるは僥倖と云ふべきも、而かも米國問題は今後政府に取り多大の頭痛の種たらずんばあらず、一難去りて一難來る、得意なるが如き廟堂有司も必ずしも羡望すべき事のみあるに非ざるべし。

去る二月九日山本伯が突如として政界に出動し大鉈を振ひしは事局の解決に、憲政擁護に多大の功ありしが如きも、其身は遂に政黨より超然として政友會の基礎の上に內閣を組織せしは確に政界の理想分子を憤激せしむるに足れり、假令內閣組織の前日もしくは當日を以て高橋山本奧田三氏は政友會に入會したりとは云へ、批評家の眼には一時の瞞着手段とほか見えずして、薩閥の長老が其黨與を率ゐて政友會と苟合せりと思はれしは亦是非なき次第なり、山本首相が議會に聲明して誠心誠意公約を實行すべきを云ふや却て一部の批評家の冷嘲を買ふに過ぎずして、內閣の前途には少なからざる危虞を餘しつゝ帝國議會は閉會したりき。

爾來約二ヶ月に過ぎざるも首相は着々其公約の實行に努め、行政の整理に於ては約五千萬圓の節約を行ひ、且つ文官任用令、及び陸海軍大臣の任命規則を改正して以て言質を空うせざらんとするが如きは蓋し多しとするに足らずとせず、政黨內閣の純理より批判せば山本內閣は甚だ形式に於て不可なり、個人としての山本伯は對しては嫌焉たるものも多かるべし、然れども兎に角、着々政務の進行を謀り且つ眞面目に前日の公約を履行せんとする意氣に對しては世間に於ても近來漸く同情を表し來れるもの丶如

きは見遁すべからざる事相なり。

國家一日も政府無かるべからずして、現に政界を見渡す限り内閣を組織し得べきもの山本伯を除きて外多く見るべからず、桂公の新政黨未だ議會の多數を制するに足らずして、公亦た病に臥して劇務に堪へず、西園寺侯は京都に退隱して出廬に意なく、山本内閣の運命亦た必ずしも見縊りたるものに非ずと思ふ。大正三年度の豫算編制は現内閣の一大難關に相違なきも、而かも行政整理の問題已に解決せる以上には豫算の辻褄を合すると易々たらん耳、獨り陸海軍增師の事關心に堪へざるも、恐らく輿論を無視するの擧に出でざるべき乎、先づ以て現内閣の基礎は當分安心なりと謂ふべし、其當分とは一年を意味するか、將た二三年を意味するか、とは最も興味ある問題なれども事、預言に屬し吾人の敢てする處にあらず、然れども差したる大事故なき以上來年の御卽位式位迄は必ず繼續し得べしと云ふは多く見當違にあらざるべき乎。

ベルグソン論

中澤臨川

一、

ベルグソンの生ひ立ちを觀ると、祖先は猶太人で、其一家は永らく愛蘭に住つてゐた後、佛蘭西へ移住したのだと謂ふ。

昔から佛蘭西には一種の élite とも稱ばるべき人々で、常に高い所から、靜かに俗塵を見下してゐると云ふやうな團隊がある。て、至て自由意志的で、何事にも囚へられないラテン人種のなかでも、彼等ほど極端に自由な者はない。彼等は丁度晴れた眞晝の空に高く翔がる鳶のやうな沈着と冷靜の相を具へてゐて、その人々の住む空氣は潔く薄い。從つて彼等は自由に醉つて、重い現實を忘れる。彼等は餘りに怜悧で、餘りに見え透いて、餘りに自由である爲めに現在の生活から離れ、總ての拘束から脫け出して、たゞ破壞を貴び喜んでゐる。彼等はまた餘りに銳感的、神經的である爲めに、極度の個人主義に陷り、その果ては理智を絕した神秘主義にも往く。その『自由』の味はボルドーの酒よりも猶ほ甘く、猶ほ危險で、誰も一度之を口にした者は何んな犧牲を拂つても悔まないとさへある。……

あのフローベルの恐ろしい虛無主義の空氣の中に漾ふ

自由。ベルグソンの刻々新なる創造の天地の自由……。

エミル、ファーゲの評したやうに、フローベルの實體はローマンチストである。理智の眼の光つた、感覺の鋭どい彼は、冷かに夢見る人であつた。彼は夢の自由の中に生活して、『事物の眞理を信ずる憐れなる世間の動物』を冷笑する哲學者であつた。ベルグソンには矢張このノルマンデーの小說家に似た生粹の佛蘭西氣質がある。彼は現代の最偉大なるローマンチストで、高く翔り、冷かに夢み、飽くまでも離れたる自由思想家で、偶像破壞者(アイコノクラスト)であつた。誰が斯樣に深く稀薄な自由の空氣の中で眩惑を感じない者があらう。然かも我等は眩惑し、辛うじて呼吸しながら、猶ほその醉心地を忘れることが能きない。

ベルグソンは一方には猶太人である。故鄕のない、從て追慕すべき昨日を有たない斯の民は、また變つた意味に於ける自由の子である。彼等は飽くまでも活動的で、非常に理智的の民である。然かも一種の情熱がそれに加味されてゐる。ブランデスを見よ、アナトール、フランスを見よ。實際彼等はその活動的で、理智的で、自由で、因習的でない點に於て現代に最も適(ふさ)はしい民族である。

佛蘭西のローマンチックな自由思想に、猶太人の活潑な理智慾を加味して、ベルグソンが出來上つた。卽ち彼は浪漫的數學者、自由哲學者として遺憾なく其天分を發揮したのである。剩(あまつ)さへ彼には愛蘭人の神祕的氣質も雜つてゐる。

ウィリアム、ジエームスとベルグソンとの哲學を比較する者は、先づ彼等の國民性の相違に眼を着けなければならない。實質的な米國に生れたジエームスは飽くまで行爲主義、人格主義で、重い地上の空氣が其思想の上に蔽ひかぶさつてゐる。同じ時代の要求から生れて、同一結論に到着すべき傾向を强く有してゐた二人(ふたり)の思想家も、その稟けた國民性の著しい影響は爭はれないもので、ジエームスが下から進んだ所を、ベルグソンは上から降だり、一方が Flein vital (制動)的であつたに反して、他方は Élan vital (躍進)的であつた。

同じ多元論にしても、前者のそれには求心力的の傾向があり、後者のそれには遠心力的の傾向があつた。プランデスが曾て佛國のテーヌやルナンと英國のミルとを比較して理論の人と實踐の人との相違を擧げたのが、丁度ベルグソンとジエームスの比較にも該當する。從て前者の哲學は量に於て廣い代りに質に於ては後者に及ばない。現實的、人格的の光明に於てジエームスはより深い根柢を有してゐた。

佛蘭西流の自由思想家で、同時に猶太式の數理家であつたベルグソンは、限りない空想の絲を密實な理智の機にかけて、現代思潮の目も眩な模樣を織り上げた。彼はその自ら排斥した理智の道具を最も巧妙に應用して、イブセンの所謂 Vital lie を發揮した。實際、古來の何の詩人が彼のやうに巧みな文章と活きた比喩を驅使し得たであらうか。英國のフュネカーが彼を評して、西歐哲學の playboy であると言ひ、文章上のシパンであると言つたのも、斯樣な意味からである。

思想の自由、表現の自由——

佛蘭西人の言葉の自由を束縛する力は世界のどのはてにもない。丁度、地の中や穴の底へ太陽を埋めるとの能きないやうに。

と云ふ古い諺があるが、我等はベルグソンの文章を讀む時ほど此言葉の眞理を感ずるとはない。其處には彼の『純粹繼續』のやうに綿々として已まざる論理と聯想の流がある。それは第四ヂメンションの謎を解く高等數學の鮮やかな解式である。心的$\sqrt{-1}$のコータニオンである。更に創造的意識の微妙な變化 dy/dx を說明する微分學である。要するに彼は "Cosmic rhythm" を解說しようとした偉大な數學者であつた。

活動寫眞に喩へられた人間の意識の働きや、重い鋤を引く野の牛の樣な理智の解釋から、我等は知らず識らずの間に、自由に極めて高い純粹思索の仙鄕まで持ち搬ばれる。丁度、五月の麥畠から立つ雲雀のやうに、いま地から離れたと思つてゐるうちに、我等の身は既に雲表にかくれてゐる。その天地は唯だ『純粹記憶』のみ存する精靈世界である。其處には最早物質は存在し

ない。物質はたゞ比較運動(レレチーブ、モーション)から生れた幻想に過ぎない。その天地はまた『生の躍進(エラン、ヒタル)』の統轄する一大諧調の世界である。『時』のみの存在する世界である。活きたる宇宙の運動の波浪である。其處に我等の意識は其運動と歩調を合せて、創造の波を推し進めて行く。更にその天地に於ては生命は絶對に自由である。我等は最早機械的有限界の窮屈な因果律や宿命律を忘れるであらう。一なく多なき洋々たる流動の世界、潑剌たる生命の世界が我等の前に開けるであらう。

斯様に自由にして廣いベルグソンの世界にはパラドックスの謎が充ちてゐる。然かし其謎は古來の哲學者が提供したやうな枯淡な絶對的固定的のものではない。それは藝術の三昧郷までも達した構想的理智技を有つ人に由て描かれた多色多様の不可思議界である。しかもその世界は活躍と創造に充ちた世界であつて、いつも人を刺戟し、チヤームする力を有してゐる。彼れ、ローマンチツクな思索家にとつては、斯の形而上學の廣い迷宮、第四ヂメンシヨンの世界、神と惡魔の住家、『空間』と『時間』の森ほど樂しく面白い狩獵場はなかつた。彼は獵夫のやうな樂しい心と鋭い眼と藝術家の微妙な感觸と、數學家の明快な解説力を持つて、斯様な不可思議界を漁り盡さうとした。さらば、最後に彼の獲た物は何であつたらう。それは神秘――新しい神秘でなからう筈はない。

二、

ベルグソンの新神秘主義は愉快な創造の神秘である。行けども盡きざる生命の流に浮ぶ不可思議である。我等はあらゆる過去を背に荷ひ、刻々の未來に生れる新しい何物かを戰(をの)のき待ちつゝ、而かも無限創造の希望に煽られて進み行く。その創造の廣い海に於ては我等は『絶對に自由』である。我等が大宇宙の生命と融解して élan vital の波に浮ぶとき、我等の意識は『自由それ自ら』である。その自由創造の喜はまた現實に行爲の勇氣と信念をも齎す希望の榮光である。

『私のこの説は我等の思索を助けるばかりでなく、また行爲や生活にも力を賦へる。なぜなら、我等は最早

孤立したフユーマニチーを感じないからである。人間は最早それ自身が支配する自然の中に隔離されたものてはない。丁度一微分の塵も全太陽系に結び付けられてゐるやうに、總ての有機體は、その最下なる物から最高の物まで、生命の始元から現在の我等に到るまで、あらゆる場所あらゆる時に於て、眞に一つの躍進(インペタス)を構成して離すべからざるものである。總ての生物は互に相抱擁して同一の巨大な衝動に從ふ。動物は植物に足場を置き、人間は動物を踏まへて立つ。斯くして全フユーマニチーはあらゆる抵抗を打破し、最も恐るべき障害――恐らく死すらも推し退けて進む無限絶大の軍隊てある。』

て、ベルグソンの哲學ては神は最早絶對の實在てはない。彼は宇宙と謂ふ大きなラボラトリーに於て働く實驗者てある。彼に始なく終りがない。彼は萬能てはない。彼は完全に向つての奮鬪者てある。彼はまだ最善の宇宙を創造し誂さなんだ。否、彼は現に我等の眼の前て我等と與に創造の業にいそしみ勵んてゐる。『神は恐らく意識的、人格的、神人的(アンスロポモルフイツク)てはあるが、然かし萬能的、不變的てはない。』『斯樣に定義されたる神は豫め造られたる何物をも持たぬ。彼は斷えざる生命、行爲、自由てある。創造は神秘てはない。それは我等が自由に行動する時我等自身て經驗する所のものてある。』て、神にも人間にも定まつた最終の目的はない。蓋し創造は無限の過程てある。かくて、ベルグソンの哲學に從へば、この世界は次第に生命を得、意識に達しつつあるのてある。

在來の神學的乃至科學的宿命論から觀れば、彼の學説は絶望的神秘主義とも厭世觀とも極端な懷疑説とも見えるてあらう。然かし個人主義努力主義の近代人に採つては、その無限創造の神秘はあらゆる希望と憧憬の含まれた光明の迷路てある。我等は洋々たる生命の波に棹して、常に新なる發見の好奇心に誘はれつつ進むとが能きる。要するにベルグソンの學説は自由と向上の『進歩哲學』てある。彼は個人的努力主義の現代に最も適切な福音を齎した豫言者とも稱ばれよう。ショ

ーペンハウエルの『生存意志』の哲學も、彼に由て新なる希望の光に復活することが能きる。

『恐らく宇宙は日毎にそれ自らを求め捜してゐる』と、メーテルリンクが言つたとき、ウイリアム、ジエームスが、斯の塵の世に於て我等と與に勞働する『有限』の神を説いた時、または、バーナード、ショオがlife-forceの説を唱へたとき、オイッケンが彼の『活動主義(アクチビズム)』を叫んだとき、更にローマン、ロランが『ジヤン、クリストフィー』の大著で新努力主義を宣傳したとき、我等は現代人に共通する一種の熱想をその脈搏に覺えなんだであらうか。古い夢から覺めた我等の胸にはまだ熟せざる新しい理想の音を感じたんだであらうか。而して斯様な福音を最も明確に最も多様に示してくれた者は實に我がベルグソンである。

新自由主義と新努力主義の學説。希望と光明の新神秘主義の哲學。

三、

自由思想家ベルグソンの哲學は、一面から觀ると至てリジッドで現實的なものである。彼は始め科學者であつただけに、其哲學には堅固な出立點を有してゐる。誰もジエームスの辿つた『根本的經驗説』の行き方に疑を挾むとの能きないやうに、何人かベルグソンの時即ち繼續(デューレーション)の眞理を否認することが能きよう。丁度前者が心理學の研究に當つて、Introspection(内省)を其根柢に置いたと同じく、後者は先づ其哲學の基礎として自分の意識の考察から始めた。彼の考では、宇宙間で我等の最も知悉してゐるもの、其核心を把持してゐるものは、疑もなく我等自身である。自己以外の事物に對しては我等は只だ表面的の概念を持つに過ぎないが、自己に對する我等の知識は内面的であり深酷である。自己を知ることは即ち我等の眞の知識の第一歩でなければならないと。斯様にして最近の二大哲學者は期せずして其發足點を同じくしたばかりでなく、其學説の間には一道の氣脈が通じてゐて、晩年のジエームスムをして言葉を極めてベルグソンを歎稱せしめたのである。彼の學説のうちでも一番に斬新で非難の多い直

觀說てさへ、有名な科學者のサー、オリバー、ロッヂが裏書してゐるくらゐてある。ロッヂは言つた、『我等は今日なほ理性よりは遙に多く直觀に賴つてゐる』と。また言つた、『生命は算術を輕蔑しうる』と。

兎に角、ベルグソンの哲學が、着實な經驗家のジェームスの歎稱と承認をうけ、科學者のロッヂをして點頭せしめたと云ふことは深い意味のあることてある。我等はここに時代の要求と、偉きな哲學界の革命とを見るのてある。

カントやヘーゲルが純粹理性や絕對やを振り翳かざして、我等の生命の理智的說明を試みたときに、唯心論の哲學がその極度に達した。そこて科學が裏切した。然かし科學者は餘りに急いて唯物論を歸納した。物質界を統率する因果律を我等の心靈界にも當てはめようとした。それから彼等はまた方法論に於ては、矢張昔の哲學者の舊套を脫することが能きなんだ。理智を人間の知識の唯一の武器と思込んて、意識や生命の flux の世界にまて物質界の法則を持込んだ。

然るにベルグソンは斯樣な古來の唯心論や唯物論が提唱した絕對または固定の哲學の代りに流動の哲學を起した。『空間』の代りに『時間』の實在を說いた。特に彼は今まて萬能視された理智よりもより廣い直觀の世界を發見して、理智の力を制限しようとした。彼の說の前ては一元と多元の久しい爭も溶けた。物質界と精神界の堅い界限も撤せられた。斯樣な點に於てウィリアム、ジェームスは亦彼と其功を分つべきてある。

原始自然人としての人間の心靈には、たゞ直觀のみの行はれる混沌たる『無意識』の雲霧ネビユラが存在した。然るに我等は生存の必要上から、進化の行程に於て、其一部を沈澱せしめて固定意識を形作つた。それは我等の『行爲の附屬物』たる理智の世界てある。その世界ては我等はたゞ分離し概括し、敵視し拘束する。そこにはたゞ死と固定があるばかりだ。從前の哲學者にとつてはこの理智が實に金科玉條てあつた。彼等は廣い意識の全體と理智とを同義に解してゐた。

然るに近代人は何時までも斯樣に窮屈な幽閉に甘ん

じうるものてはない。我等は久しい以前から理智に對する反抗を起した。この運動こそは實に近代文明の底を流れる最も重要な潮流てある。我等は最近諸藝術の新運動に於ても明らかに其傾向を讀むとが能きる。更に哲學界に於てはカントの『實踐理性』も、ハルトマンの『無意識』も、ジエームスの『宗教意識』も、みなベルグソンの所謂『直觀』の先驅にほかならない。かくして我等は内省の眼を開いて生命の流の中に入り、之と同情し融合するとが能きるやうになつた。我等は久しく幽閉せられてゐた固定意識の島から離れて、洋々たる無意識の海に泳ぎ出した。それは變化と創造の斷えざる無限の生命の海てある。そこには最早理智の領土のやうな敵視も束縛もなく、唯だ同情と自由があるばかりだ。全く開放されたる心靈の喜があるばかりだ。

四、

自由の哲學よ——理智から開放された自由、物質から開放された自由、努力創造の自由。その自由の世界は餘りに廣く、餘りに淨く、その空氣は餘りに稀薄てある。初めて其中に入るとき、我等は先づ眩惑を感じ、一種のカタストロヒーに打たれる。それは我等の心靈の全革命てある。弱く頑くなる意志は或は斯樣な革命に堪へないともあらう。然かし一たびその空氣に馴れて、新しい心理的變遷に適從しえた者があるならば、彼は最早その醉心地を忘れるとが能きない。て、その場合に初めて彼はベルグソン宗に歸依したものと謂へる。それほど彼の哲學は親しみ難いものてある。眞に彼の流動世界を體得するとは、禪の三昧郷に入るよりも猶ほ難事てある。然かし一旦其の境に突進した人は、一躍にして其學說の本體を把握した者てある。爾後彼はその福音書『創造進化論』の中に、滾々たる生命の流のさゝやきを聞き、『純粹記憶』の深い淵に浮び、果ては大自然の奏てる Cosmic Rhythm に心を溶かすやうになるてあらう。

斯樣に廣く自由なベルグソンの世界は洵に多樣多彩てある。彼は幾千の異つた創造の芽を蒔いた。況して彼の直觀世界はジエームスの『宗教意識』と同じく個々

獨立の心靈に特殊の活動を負はせる境地である。されば彼の哲學は直接自由に各個の心靈に訴へる。或者には彼は極端な個人主義の宣傳者に見える。また或者には神秘主義の無上な使徒と謂はれる。彼はニーチェの後繼者ともなり、『猶太のルナン』とも成ることが能きた。更に彼は新現實主義にも新理想主義にも其籍を置きうるであらう。アリストクラットもデモクラットも彼に於て有力な味方を發見するであらう。『崇高(サブライム)をはぐくむ戰』に於て唯だ『この死なんとする世界に目的、理想を與へんとする』新社會主義のシンディカリズム Syndicalism は實にベルグソンの生命說に其根柢を置いてゐる。また未來派の藝術は全く彼の純粹繼續の考に刺戟せられて興つたと謂はれる。なほ言ひ得べくんば、『荒削りの石から人間の形に浮び上るロダンの彫刻は、大理石に現はれたベルグソンの哲學である。』

げに、この廿世紀の開幕は今までの世紀とは全くその色彩を異にしてゐる。我等は混沌たるそが形の中に朧ろげながら新しい世界の構圖を見るであらう。社會的には民主主義の、精神的には？……。

我等の斯樣な疑問に最も好き解釋を與へてくれるものはベルグソンの哲學である。要するに彼は時代の豫言者である。丁度、彼と同じ位置に立つジェームスの哲學を讀んで、同じ豫言者のローマン、ロランが洩した言葉を私は茲に借りてみたい。

『我等の間には偉大な見えざる思想の流がある。それは總てのヒューマニチーを通ほして動き、全世界を通じて、互にその存在をも知らざる、全く異(ちが)つた心をさへ同じやうに高めて行く潮流である』と。

支那現下の政局

法學博士 末廣重雄

革命が起つて既に一年半どうやら中華民國政府確立の運びに向つて居つたのに俄かに宋教仁の暗殺事件が起つた、南北は之が爲めに再び甚しく抗爭するやうになつて、新聞紙の報道に依れば目下雙方の兵は睨み合ひの姿で罷かり間違へば戰端を開くかも知れぬと云ふことである、人々が言ふが如く結局南北の分離を來たすであらうか、若しさう云ふことにでもなるならば吾人が常に憂へて居る支那分割の端を惹起すものであつて、我が國に重大なる關係のあることと云はなければならぬ、一體どうなるだらうか、吾人は極東の平和の爲結局我が國の爲此際十分に事情を研究し愼重に我が國の態度を定めなければならぬ。

孫、黄を初め南方の者が袁世凱排斥に努め南方の獨立を唱ふるに至つたのは宋教仁暗殺事件が口實であるが支那分裂南北對抗と云ふ重大事を企つるに十分な理由てあるてあらうか、抑も孫、黄が曩きに南京政府を廢止して南北合體し袁世凱をして臨時大總統の任に當らしめたのは必しも己れを後にして國家を先きにすることが支那四億の利益てあり幸福てあると信じた許りてはないのてある、彼等の力即ち兵力も財力も袁世凱に及ばず、到底も何處までも袁世凱に楯突いて行くとが出來ぬから不平てはあるけれども一時讓歩したに過ぎない、機會があつたらば再び袁世凱に反對すべきことは識者の豫期して居つたところてある、それてあるから南北の反目、孫、黄等の袁世凱對抗は別に怪しむには足りない、怪しむには足りないが南北分離して支那の統一を破るまでのことをする口實としては宋教仁の暗殺事件は餘りに事が小てある、斯う云ふ所大事

を惹起するのには名が正しくないと思ふ、支那は清朝顚覆後内治の方面にても百事未だ緒に就かず大混亂を極むるところへ、宗社黨の反抗は油斷ならず、對外關係にては蒙古及西藏に關する露西亞英吉利の行動は甚だ危險のものである、孫、黃等が眞に支那四億の爲に憂へ共和政治を確立し支那の領土に對する列國の覬覦を絶たんには此際南北分離の騷ぎなどをする時ではない、之が爲めに戰爭を惹起すなどと云ふ時節ではない、支那新政治の舞臺の有力な役者である孫、黃等が四億の民を率ゐ協心同力百般の改革に努力し疲弊せる支那を盛り返へすことに最善の力を盡さなければならぬ時である、袁世凱が宋敎仁暗殺事件に深い關係あるものだとしても之を責むるには穩かな道がある、彼を排斥するには法律上の手段があるのに無暗に極端の手段に出て之が爲めに支那を再び大混亂に陷らしむることはどうしても思はざるの甚しきものである。

斯の如く孫、黃等の南北分離運動は正當なる口實がないがそればかりでなく無謀の擧を企つるものである

袁世凱は世人の批評するが如く隨分奸譎な人であるけれども、兎に角現在に於て支那第一等の人物である、之と對抗して孫黃等はどうであるかと云ふに、黃と云ふ人は未知數であるが、孫に至つては我輩の見る所では評判程に無い人物である、革命の如き破壞的のことは一通出來るけれども建設的の大手腕を到底彼に望むことは出來ない、勿論我輩は袁世凱を不世出の英雄とは言はぬけれども今日のところでは支那を切り盛りする手腕のある第一の人物である、孫黃等は到底袁世凱の敵でないが孫、黃等の味方になつて居る純革命黨の連中は今日支那に於て非常に勢力を持つて居るものであらうか、更に純革命黨の連中は何處までも孫、黃を助け袁世凱を共和政治の敵として排斥し反抗する勇氣があるであらうか、我輩は頗る此點に關して疑を持つて居るのである。

一體我輩は支那人が果して共和政治の民であるかを疑ふのである、或る英吉利人が支那の總領事に共和政治とはどんなものかと聞いたら其の男が清皇帝を廢し

又之に代ふるに袁皇帝を以てするものであると答へたと云ふ話がある、此話を引いて斯う云ふやうな人民では共和政治を行ふことは出來ない相談であると云ふ人が我が國にも隨分あるやうであるけれどもそれは餘りに酷な話である、何處の國でも例へば十八世紀の末に大革命をなし君主政治を倒して共和政治を興した佛蘭西でも當時の人民全體が卽ち馬丁走卒に至るまで共和政治の何物たるを十分に解して居つたものだと思つたらそれは大間違である、成程社會の多數たる下級の人民が當時隨分大革命に參加しブルボン王家を倒すのに與かつたには相違ないけれども彼等の多くは革命の何たるを解せず附和雷同したに過ぎないのであつて共和政治の民たるの資格を備へて居つたものでない、其の證據にはナポレオンが出るやうになると忽ちに彼を歡迎して皇帝として戴き大革命の趣意を全く沒却するとを平氣に遣つたてはないか、今日支那の下等社會のものが共和政治と云ふものを解しないからとて直ちに支那の共和政治は駄目だと云ふのはそれは無理である、

そこて支那人が共和政治の民たる資格あるかと云ふには中等以上の社會の者を調べて見なければならない、若し此等社會の者までが共和政治の民たる資格が無いならば以て共和政治の將來は卜するに足るべし、此の點に就いて我輩は遺憾ながら頗る支那を悲觀するのである、一昨年革命の起つた前後に我が國在留の留學生の多數は歸國して南方に赴き革命軍に加はつた、當時彼等と話をして見ると皆意氣軒昂悲歌慷慨革命の爲めに身命を犧牲にする決心のある樣子は一應は見えたが、段々話が進むと彼等の多くは實は自分達が今歸國する方が都合が善いから歸へるのである、革命の戰爭最中萬事混亂し何事も緒に就かない時に歸へると新政府に入つて官職に就くの道があるからだと云ふことを告白したのである、此等新らしい學問をし新知識を持つて居る者でさへ革命の爲に自由の爲に南軍に馳せ參じたのでは無くて多くは自己の利益の爲卽ち或は官職を得る爲或は金錢上の利益を得る爲に革命の味方をしたのである、左れ無くとも尚々清朝政府に反抗するが

爲に革命軍に加擔したに過ぎないのであつて、共和政治の爲めに生命財産を抛つてゞも遣ると云ふ大精神のあつたものは極めて乏しいのである、斯う云ふ人達が所謂革命黨の大部分を組織して居るのであるから、滿朝政府が全く沒落して滿人が政治上の勢力を失つた今日、それから兎も角も共和政治が出來た今日孫や黄の爲めに再び戰爭までしても眞の共和政治の爲めに奮鬪しやうと云ふ決心と勇氣のある者が果して幾人あるてあらうか、況や袁世凱は兵力に於て明かに南方に勝つて居るし五國借款の調印は既に終り前渡金は既に袁世凱の手に入ることになつたのであるからどう見ても南方の分離運動は無謀である、斯の如く孫黄等の連中は事を起すに十分なる口實を有たず而かも無謀の擧を爲さんとするものであるから成功する見込は無く結局の所は戰爭に至らず袁世凱が其辣腕を振つて妥協換言すれば南方の屈服と云ふことに歸着するだらうと思はれるのである、尤も支那のことは常識を以て判斷することが出來ないことが隨分ある、往々常規を逸することがあるから今日斷言する勇氣は無いが不幸にして一時南北戰端を開くことがあつても南北分離の實現せらると云ふやうなことは先づあるまいと思ふのてある。

此際我が國は支那に對して如何なる態度を執るべきものであらうか、先づ今日我が國の輿論はどうであるかと云ふのに南方に同情を寄せるものが少なくない樣に見受けらる、我輩も南方に對して同情を有つて居るけれども、我が國が南方に助力するとは宜しくない、南北の分離を促がす危險がある、これは政治上我が國に非常な不利となり我が國の十數年の對支那外交の根本方針に反する譯であるから、情には反するけれども寧ろ袁世凱の勝利を可なりとするのである、さりとて我輩は袁世凱に助力すべしと主張するのではない、助力なくとも彼の勝利の見込は十分であるし、我が國が敢て之を爲せば南方からボイコットを受ける危險があつて經濟上少なからぬ打撃を受ける計りでなく對列國關係上面白からぬ結果を生ずる虞があるから謹しまねば

ならぬ、そこで我が國の此際執るべき方針は支那の内部のことは南北分離とならざる範圍内にて成るべく支那人をして自ら處理せしむるのである、我が國は列國を結束し支那の内部の騷亂に乘じて各其の野心を恣まにするやうなことが無いやうに努力するにあるのである、斯くして支那人をして南北間の爭を成るべく平和に解決して一日も早く新憲法を作り大總統を選擧し新政府を確立して列國の承認を得るに至らしむることが我が國の爲、極東平和の爲肝要のことてある。

終りに臨んて一言したいことがある、加州問題と支那問題とは相關聯せざるが如くにして其の間に一種の關係があるのてある、我が國が支那に對して常に有力なる發言權を有し支那を指導して行くのには支那に對して我が國が從來有つて居る聲望を失はないやうにしなければならぬ、若し我が政府が支那問題に餘り力を注いて加州問題を閑却するやうなことがあると不測の禍を生ずる虞がある、何故かと云ふのに、加州問題は我が國の名譽に關する大問題である、若し此の問題に關して我國が米國に屈從するやうなとがあるならば支那人の眼に映ずる我が國の地位が非常に下落することになる、詰まり語を換へて言ふと日本人は結局白人よりは劣等のものである、日本は遂に米國に及ばないと云ふことを支那人に感ぜしむるやうになる、若し此の如きことあらば支那に於て今後米國と對等の地位を維持することが出來なくなり、我が國の對支那外交が非常に困難になつて來ることは避くべからざることてある、結局對米外交の失敗は對支那外交の困難と云ふことを惹起して來るのてあるから、我が當局者は支那問題が多忙てあるからとて決して加州問題を閑却することがあつてはならぬ、さりとて又加州問題が重大だからとて支那問題を忽がせにするやうなことがないことを望むのである。（五月十三日速記、校閲濟）

米國海軍の實力

某海軍將官

今日の如く日米兩國間に面白くない關係が有る時に當つて、米國海軍の實力などを並べ立てるのは、少しく不謹愼の譏を免れぬかも知れぬ。然しながら自分は豫ねて、日米兩國は太平洋上の平和を維持する爲めに最も重大なる關係を有する間柄で、若し此兩國の間によい感情（フィーリング）がなければ太平洋の平和は期し難く、延いて東亞方面、南洋方面の福利を増進することが出來ぬから、此兩國は如何なる事があつても、干戈を交ふることを避けなければならぬと信じて居るものである。が然し、國と國との交りは卽ち國民の間の交りであつて、若し國民の間に面白くない關係——輕蔑とか排斥とかいふ感情を含むといふと、平和を永遠に持續するといふ事はどう—しても六づかしくなつて來る。一體國と國との交際は、兩國の富力とか、文化とか、兵力とかいふものが餘り懸隔ない程度にあるにあらざれば圓滑に行きにくいものである。六尺の男子と三尺の兒童と提携することは出來ぬ。雙方互に相輕んぜぬといふ關係でなければ國交は永續せぬ。米國には金があり、日本には武力あるといふ丈けでも行かず。米人の人格は高く、日本人は低いといふのでも行かず。其他總ての關係に於て左程の相違がないといふのでなければ、十分の親交を永く續けるといふ譯には行かないのである。アレは金はあるが腕が弱いといふ事では尊敬されぬ。又アレは武力はあるが貧乏であるといふ事では輕蔑される。要するに總ての點に於て餘り大なる懸隔がないといふ事でなければ——殊に其中でも武力に於て大した懸隔がないといふ事でなければ、——强ち喧嘩腰といふ譯ではないが「來るなら來い」といふ位に武

力がなければ、どうしても兩國の平和を保つことが六づかしいと思ふ。自分はさういふ見地より觀察するのであるから、此日米兩國の平和は兎に角互に油斷がならぬといふ心持を以て相對するに始まつて、本當の了解が兩國民の間に行はるゝに至つて、完全に維持せらるべきものと信じて居る。從つて此際、米國海軍の實力を語つて、敢て之に畏縮せざるべからざる必要がないと同時に、決して之を侮ることが出來ぬといふ事を知らしむるのも、強ち無用の業ではないと思ふ。

米國海軍の事を悉しく話せばなか〳〵大變なことになるから、大要其實力に關することだけを述べようと思ふが、元來パナマ運河の竣工は今年内といふ希望であつたが、いろ〳〵の故障があつたので、若干後れることゝ思ふ。矢張豫定の如く來年一杯かゝるかもしれぬ。兵術上の點より見て重大なる關係を有する布哇及び比律賓の防備の如きは、比律賓の方は萬事順序よく進んで居るだらうが、布哇の方は豫期の如く進むかどうかよく分らぬ。多分若干後れるだらうと考へる。それで兵力上よりパナマ運河、比律賓、布哇の防備等を今日に於て論ずるのは面白くないかも知れんが、然し若し此等のものが出來上つた曉には、用兵上重大の關係を生ずるは勿論、或意味に於て、米國の武力を、最初に於て先づ倍に見積らなくてはならぬことになりはせぬかと思ふ。兎に角パナマの運河が竣工すれば太西洋艦隊と太平洋艦隊との連絡が頗る堅固なるものとなり、東西相呼應するの妙用があらはれて來るのである。從つて初めから太西洋艦隊の武力を考察の上に入れなくてはならぬ事になる。それで軍事上から見てもパナマ運河の竣工は一大事であるといはなくてはならぬ。誤報かも知らぬが、ルーズヴェルトが、排日問題の解決をパナマ運河の開通まで待てといつたと傳へらるゝのも極めて意味の深い事と思ふ。

現在に於ける米國海軍の實力は、同海軍の計畫が未だ完了せぬから左程恐るべき力を持つて居るとは認められぬのであるが、若し米國が愼重の態度をとつて其全力を集中し、然る後日本に向て行動を起したとすれ

ば、正に我兵力の二倍と見なくてはならぬ。此二倍の兵力に對して、我海軍が主客の利害、訓練の精粗、海戰に對する經驗の有無等を以て、確かなる勝利を望み得るてあらうか、之は大なる疑問てある。或意味からいへば、我に二倍する米國海軍は大いに恐るべきものてあつて戰はずして勝敗の數が分つて居るやうてある。然し前にいつた所の無形上の力は如何に之を算すべきものてあるかは銘々の心持によることとてある。米國とても、日清、日露の兩戰役に於ける我が手並を知つて居る以上は、餘程の決心なくして、又餘程の確實なる勝算なくして我國に向て暴力を加ふることは能はざるべしとの程度に於て、先づ極端に悲觀的なる境遇にあるものと認めずともよからうと思ふ。況んやパナマの運河は未だ出來ず、布哇、比律賓の防備も未だ出來ぬといふことてあるから、適當なる觀察としては、米國より攻勢に出づることは現在に於ては先づ六つかしからうと思ふ。て、二倍といふ聲には必らずしも懼れずともよいのてある。

人によつては米國の海軍は外形は美であるが、其内實は少しも恐るゝに足らぬといふものがある。其理由とする所を聞くに、米國海軍は先づ紀律が正しくない。各人種の寄り集りていはゞ烏合の衆てある。訓練も亦充分てない。第一愛國の觀念といふやうなことは我國とは到底も比べ物にならない。物質的勢力が如何に多くても少しも恐るゝに足らぬといふのてある。然し此等は非常の間違てある。我々は海軍々人として米國の海軍將校とも交つて居るが、少くとも彼等米國の海軍將校は世界何れの國の海軍將校に比しても決して劣らぬ立派な識見と學力と勇氣とを持つて居る。兵員は各種族の混合であるといふ事は、米國の弱點の如く見ゆるけれども、然し陸上作戰と同樣の意味合に於て海上作戰を見ることが出來ない。海上作戰に於ては一度港を出た以上は、敵に勝たなければ自分の艦の沈沒を免れないのである。從つて自己の生命を全うせんが爲めに大いなる奮鬪を要し、各人〱が戰爭の不利なる場合に戰場から遁れ歸ることが出來ない。此點から見れ

ば如何に人種が混淆して居つても一度砲火を交へた以上は、祖先以來同じ國に居たものと少しも變らぬ心を以て協力せざるを得ぬことになる。私がよく人にいふ話であるが、現に米國に於て此事を證明すべき一の適例があるのである。米國獨立戰爭の時にポール、ジョンスといふ米國の艦長が、ボーンオーム、リチャードといふ艦を指揮して英艦セラピスを捕獲した事がある。其際リチャードは澤山の英國の捕虜を乘せて居つたので、之を下甲板に繋いだ儘て英艦と戰爭をしたのてある。處が戰爭の半ばに、英の彈丸が水準線下に中つてリチャードは恐るべき浸水を見たのである。其時にポール、ジョンスは捕虜の繩を解いて、喞筒につかせた。捕虜は、自國の軍艦と自分の乘つて居る艦（即ち敵艦）と戰つて居るに拘らず、必死になつて喞筒を動かして沈沒を防いて居る。其際英艦は遂にリチャードに降服した。そこて、ポール・ジョンスは部下と英の捕虜とを連れて英艦に乘り移つた。其瞬間に勝つた船のリチャードは沈沒した。之はよく西洋に於ける海軍軍人の氣風を示して居る事件と思ふ。假令自分の乘つて居る艦が敵國の艦であつても斯くの如きことをするのである。況んや敵艦にあらずして自艦なるに於ては假令如何に人種が違つて居つても、其安全の爲めに死力を盡すべきは分り切つた事である。若し日本人であれば、捕虜の繩を解けば、喞筒を捨てゝ空拳であつても、却て乘船を打ち沈めることに骨を折るかも知らぬが、實際に於ては決してそんなものでない事が、此一例でも分る。だから米國の海軍々人は人種が違ふから非常に弱いなどいふのは餘程お芽出たい觀察と思ふ。且つ米國の海軍は未だ一遍も負けた歷史を持たぬ海軍である。此事は餘程注意しなくてはならぬ事である。殊に勇氣に富んだ將軍を歷史上見ることが多い。南北戰爭の際にファラガット將軍は水雷敷設面の上を「なニ糞ッ！水雷、全速力！」(Damn, the Torpedo! Go ahead, full speed!) といつて飛び超えたことがある。それから又此間の米西戰爭の時も現任今居る所のデュウエー將軍はマニラ灣に水雷敷設の疑あつたにも拘ら

ず、「水雷何物ぞ！」といつて突入したのである。斯くの如き勇敢なる將軍が事有るに當つて常に出て來るのであつて、米國の海軍は決して侮ることが出來ぬものである。其勇戰奮闘の有樣は南北戰爭中のミスシッピー河身の戰爭を見たら分るので敬すべき米國人といふ觀念が自ら起らざるを得ぬ。且つ海軍に他の國の國民の入ることを許したる結果として、老練なる英國の射手が米國海軍に入つて居ることが多いといふ事を考へなくてはならぬ。此等を以て見れば米國海軍に對して輕蔑の念などを起すのは飛んでもない話で、畏敬すべき海軍々人と考へなければならぬ。我々が若し萬一、止むを得ずして米國と戰はねばならぬやうな事がありとすれば米國海軍々人は實に我々の好敵手であらうと思ふ。

然し一方に於て、前の如く米國海軍を誤解して之を輕蔑するものがあると同時に、又一方の人は、米國の實力を過大視して、米國の如き富力の大なる國に於ては、一旦戰爭が開始さるれば、戰爭中に於ても盛んに軍艦を製つて、ドシ／＼海軍力の補充若くは擴張が出來るだらうなどゝいつて居るものがあるが、之も亦大いなる間違で、假令艦の建造が出來るとしても船員の補充は六つかしい。殊に米國海軍は傭兵制度であるんだから、國民皆兵主義の兵役制度を採る我國に比して船員の補充力が遙かに少い許りでなく、已に戰爭が初つて、罷り間違へば生命を失ふ危險がある時に際すれば平常に幾倍する給金を拂つてもなか／＼應募者がないのである。此事は先年の米西戰爭の時の有樣を觀ればよく分るのである。若し最初の一戰に於て米艦隊の優勝を示したなら格別、否らざれば假令軍艦の補充は出來ても船員の補充が出來ぬから、戰爭が開始すれば米國海軍が無限に強大になり得べしと想像するが如きも是れ亦大いなる誤解である。

米國艦隊は先年十六隻の戰闘艦より成る大艦隊を以て世界を一週したのである。そして遠距離航海の經驗を得たのみならず、又遠距離航海の左程困難でないといふことを證據立てゝ居る海軍であるから、此事も亦

大いに注意せなくてはならないと思ふ。人によつては遠方から來るのであるから、日本に屆く頃には勢力が大いに減ずるだらうなどゝいふて居るものもあるが、箇樣な素人の考は我々軍人の大に笑ふ所であつて、決して事實でない事を斷言し得るのである。日露戰役の當時、バルチック艦隊の回航が永く掛つたのは、いろいろの事情や、船員の訓練などいふ事があつたので、米國艦隊の太平洋航行とは趣を異にするのである。パナマ運河の開通を見ない今日に於てさへ、太西洋艦隊はケープホルンを迂回すれば東洋に來り得るのであつて、只日數が多くかゝるといふに過ぎぬのである。即ちパナマ運河が開通すれば僅かに三十日前後にて日本の近くまで達し得るのが約三ケ月の時日が掛るといふに過ぎぬのである。糧食、石炭其他の關係もあるけれども、そんな事は大局から見れば何でもない事であつて、戰爭をやる前には何れ布哇とか比律賓とかに一旦入るのであるから、パナマ運河が竣工せなくても只時日さへ掛ければ、太西洋艦隊は實戰に參加し得ることは勿論である。

更らに進んで近き將來に於ける米國海軍の實力を考へて見ると、米國海軍は進水後十年以內の戰鬪艦二十一隻を中堅とする大海軍を作ることになつて居る。其他十隻の巡洋戰艦を作るべき必要に迫られて居るが、然し其點はまだ明かに決めて居らぬ。今日に於ては同數の裝甲巡洋艦を以つて其任務に充てゝ居るのであるが、數年の後には之に代るべき新艦を作らなければなるまいと思ふ。何故なれば若し此種の艦を作らなければ、太西洋艦隊に必要なる所の巡洋戰艦の一隊と太平洋に現在する艦隊を悉く解かなければならぬからである。そんな事は實際有り得べからざることであるから疑もなく巡洋戰艦の新造を見るだらうと思ふ。近來の米國政界に於ては民主黨が勝利を得て、年々の造艦計畫に大なる縮少を見た。まだ確定といふ譯には行かぬが、先づ戰鬪艦一隻づゝ造ることになつたらしい。殊に本年も一隻の事に極つたから、今後も二三年の間は同數以上を造らぬかも知れぬ。然し注意しなくてなら

ぬ事は、米國は必らず驚くべき強く大いなる一隻――世界のレコードを遙かに凌ぐべき強く大いなる一隻を造ることになるだらうと思ふ。軍艦は陸軍に於ける如く、年々新鋭の兵を置いて實力を維持することが出來ず、寧ろ其反對に年と共に其勢力が減るのであるから、新艦を作らなければ、勢力の維持が出來ぬのである。今日の趨勢の儘で行けば、千九百二十年即ち大正九年になれば日本の海軍は米國海軍の三分の一に減ることになる。今日に於ては日本海軍の勢力三、一四四(進水後四ヶ年間は全力と見て、百噸を一單位とし、其以後年に百分の三づゝ勢力を減じ、二十ヶ年に至り海戰に堪へざるものと見做して計りたる勢力數也)に對して米國は六、〇七〇であるが、大正九年には日本の二、八六四に對して米國は一〇、一八九になる。もう斯うなつて了へば百の東郷あつても一寸六つかしからう。餘程よく覺悟して居らなければ、後來益々武力の懸隔を來たして、先にいつたやうに六尺の男子と三尺の兒童と遊んだやうな形になれば、如何に平和を望んでも之を得らるゝかどうか疑はしい。夫れ故に日米兩國の平和を維持せんと思はゞ、餘程米國の狀態に注意して、彼我實力の懸隔なきやうにせねばなるまいと思ふ。

大體の話は之で終つたのであるが、今參考の爲めに、米國海軍の艦數を表示すれば左の如くである。

	現在艦數	有力なるもの	建造中のもの
戰鬪艦	三〇	二〇	六
戰鬪巡洋艦	一二	一〇	〇

而して米國の海軍費用は年々約二億五千萬圓てある。又米艦隊を其分布によつて觀察すれば、

	戰鬪艦	戰鬪巡洋艦	巡洋艦
太西洋艦隊	二〇		
太西洋豫備艦隊	六	二	
太平洋艦隊		四	二
太平洋豫備艦隊	一	一	四
亞細亞艦隊		一	二

てある。而して布哇の防備は千九百十五年完成の見込てあつて凡そ二千萬圓以上を費し、比律賓には年々一

千萬圓乃至一千五百萬圓を支出し、全體に於て八千萬圓乃至一億圓をかける積りてある。

我國の如き四面環海の島帝國に於ては、國防上に於ける海軍の重要なることは今更ら言ふを俟たない事である。若し我海軍が劣弱にして、海上權を敵に掌握せられたとすれば、外國との通商貿易は其日から止って了ふてあらう。只穀物丈けについて見るも、我内地て産するものそは、内地人を養ふに足らないのであるから、外國との通商貿易の止つたといふ一事が巳にもう殆んど國の死活に關する大問題となるのである。若し又不幸にして敵艦隊が東京灣附近に襲撃して海岸線の鐵道が不通になつたと想像すれば、深川や何かの倉庫の米は幾日間東京二百萬の人の生命を支ふることが出來るか。こんな一寸した一例を以て見ても、我國の海軍——制海權の如何に重大なるかゞ分るのである。世間では米國も其造艦計畫の歩調を緩めたから、日本ても海軍擴張は不要であるなどいふものもある。然し之は元々同程度の力を備へたもの、いふ事である。兎と龜の駈けつ比べの昔譚ではないが、兎が晝寢をしたからとて龜も晝寢をし初めたら、どうして競走にならうぞ。兎の晝寢の時が即ち龜の一生懸命駈足をすべき時てはなからうか。況んや兎が晝寢所か、素敵な大きな一隻——イヤ思ひ切つた大幅飛をやらうとして居るんだから決して油斷がなるものでない。

資力さへ許せば、我々は勿論海軍の大擴張を希望するものであるけれども、日本も貧乏であつて、總ての方面に差閊へて居るのであるから、まア一二年の處は仕方がない。然し財政に少しく餘裕が出來たらば今の儘ては誠に國家の將來に對して痛心に堪へない。我々は餘り多きを望まぬ。米國海軍の八割——最も少く見て七割五分以上の實力はどうしても持つてゐなければならぬ。日本の如き訓練あり、經驗ある海軍に對しては、米國海軍は五割の優勢を有するにあらざれば、向ふから喧嘩を賣るの勇氣は出まいと思つて居る。

公債整理方針

松山忠二郎

（一）

日本の公債は日露戰爭迄は三十年乃至三十五年間に全部償還する計畫であつた。年々幾らかづゝ元金を返して行つて三十年乃至三十五年間に皆濟するといふ計畫であつた。其方針て以て明治初年以來やつて來たのてある。處が日露戰爭の時に急に公債が殖えたが爲めに別に公債償還の方法を定めた。さうして日露戰爭の爲めに起した公債を償還する爲めに、一般會計は每年一億一千萬圓づゝを特別會計に拂込むことにした。そして特別會計は先づ利息を支拂うて、殘つた金て元金を償還することにした。之が世間ていふ減債基金法てある。そこで初めの中は、此一億一千萬圓の中の大部分が利息の支拂にとられて、元金の支拂は極めて僅かしか出來ぬのてあるが、段々將來に行くに隨つて元金も次第に減つて行くのてあるから、利拂も追々に少くなり、從て元金を澤山づゝ償還出來ることになり、仕舞には一億一千萬圓の殆んど全部を元金の支拂に用ふることが出來る、斯ういふ計畫てある。そこで日露戰爭の爲めに起した公債は、此方法によつて三十七年間に皆濟が出來るといふ計算であつた。處が明治四十三年頃に元金の支拂が五千萬圓に達した時に、元金の支拂はその額て留めることにした。年々、五千萬圓より餘計に返さない事にして了つた。三十七年間に皆濟するといふ計畫は之が爲めに毀れたのである。現今内外兩方の公債は二十六億數千萬圓になつてあるから、五千萬圓づゝ元金を償還すれば五十三四年係る譯てある。尤も其後も新らしい公債を發行するから其れを加ふれば、公債の皆無となることは永久にないのてあるけれ

ども、今日限り新公債を發行しないとすれば五十二年の後には公債が悉皆無くなる計畫である。

（二）

それから明治四十三年に第二次桂内閣に於て公債の借換を計畫した。五分以上の公債を償還して四分利の公債を募るといふ事を企てた。最初は何年間かの極めて短時日の中に、日本の五分利附の公債を全部無くして了つて、四分利以下の公債とする積りであつた。此計畫の發表された時に、公債の價がどれ位てあるかといふのに、五分利附て漸く額面通りパーに賣買されたのてある。從つて之から割り出せば、四分利附は八十圓餘りにしかならぬ計算てある。五分利附を償還する爲めに四分利附公債を發行するならば、其發行價格は八十圓と少し上位てなければならぬ計算てあつた。然るに當時政府の企てたのは四分利附九十五圓の發行て借換へやうと思つた。之は元來無理な註文てある。八十圓餘りにしか賣れないものを强ひて九十五圓に賣らうとしたのてある。到底も成功の見込がなかつたのてある。而かも政府は飽くまでも遣るといふ、銀行家は之を引受けるといふ、雙方の間の約束が出來た。元來目的はよい事に違ひないから、傍から之を妨害するにも當らぬ。そこて我々は中々の大奮發だというて成行を傍觀してゐた。が果して失敗に歸した。之は元來桂公が自分の力量を過信した結果てある。先づ第一回の借換を發表した所が、四分利新公債に應ずる人は殆んど募集額の半額しかなかつた。そこて桂公は大分無理をした。そして强ひて此目的を達せんとした。例へば日本銀行、勸業銀行、其他政府の關係ある特殊銀行をして利息の引下げを斷行せしめた。貯金利子も引下げた。あらゆる勸誘も試みた。多少威壓も加へたに違ひない。そして第二回借換を引續いてやつた。處が其結果は僅かに三分一しか應募者はなかつた。桂公も大分失敗した。が剛情な桂公は飽くまで最初の目的を遂行せんとした。内地では到底行き相がないので、今度は外債を募集することにした。外國て低利の公債を借りて内地の五分利附公債を償還せんとした。元來外國て

新公債を發行して其金で內地の舊公債を償還するといふ事はいろ〳〵弊があることである。差詰め兌換券の人爲的膨脹を來し、物價を騰貴せしめ、或は金融を不自然に緩漫ならしめる。泡沫會社は濫りに興る。輸入が超過するといふやうな、いろ〳〵の弊があるのである。然るにも拘らず桂公は第三回の借換を外債を以てやつた。其結果以上の如き經濟界の變調を呈した。

（三）

元來高利公債を償却して低利公債に借換へるといふ目的は惡くはない。桂公の之を實行しようといふ動機は嘉すべしてある。然し其方法手段は本末を顚倒してゐた。公債の借換をやらうと思へば公債の供給を減ずるといふのが第一である。少くとも公債を增發しないといふ事が肝要な條件である。そして公債の値を釣り上げて借換の目的を達しなくてはならぬのである。然るに桂公は他の一方に於て公債支辨の事業を續々計畫した。從つて公債若くは借入金と稱する政府の借金は段々增加して來た。或は大藏證劵といひ或は鐵道證劵といふ、皆政府の借金に違ひない。詰り公債と同樣のものである。かく一方に於て公債を增發して公債の供給を增加した。從て公債の値の下るのは當然である。一方に公債の値の下るやうな政策を採りながら、他の一方で低利の公債と借換へようとした。詰り無理な事をしようと思つたのである。之が失敗の大原因である。而かも此無理を押し通さうとしたのは桂公が自分の力量を過信した結果である。元來が無理であるから外債を以て內債を償還することも永續きしなかつた。それてとう〳〵此目的を抛棄する外はなかつた。之は桂公の財政政策中の失敗の最も著しきものである。桂公は政治上に於て第三回の內閣組織の時に最も著しき失敗をしたが、財政上では公債借換が最も著しき失敗である。而して其失敗は公が積極的方針を採らうとした間違から來て居るのである。

（四）

然るに此桂公の財政上の失敗を天下に證明したものは現內閣である。桂公の公債借換失敗の事は其當時か

ら分つてあつたのであるが、今日までは成るべく其ボロを外に出さない企をして來た。それで一方では鐵道證券を出す。其證券の利廻りは六分位についたが四分利以上の公債は發行しなかつたのである。彌縫といへば彌縫を試みて來たのである。少くとも內地丈けで彌縫して來たのである。處が現內閣は成立後間もなく公然四分利公債の方針を拋棄し、そして四分利附借換の失敗を中外に發表したのである。それは何故かといふに先きに倫敦で二百萬磅の外債を起した。そして之に對して利子は五分五厘、利廻りは六分强に附いて居る。外國にまでも四分利附公債の失敗を示したと同じ事である。尤も之は短期であつて僅か一年間の償還のものである。恰度內地で大藏證券若くは鐵道證券に六分位の利息を拂つたのと同じやうな譯である。然るに現內閣は其後引續いて巴里で二億フランの公債を發行した。之は長期の立派な公債である。さうして其利子も五分、利廻りの計算は六分三厘强に附く。卽ち外國でも四分利公債の方針は失敗に歸したといふ事を事實の上に證據立てたのである。桂公は多分高橋はビドイ男だと思うて居るだらう。

（五）

但し高橋藏相が其ボロを中外に示すに至つたのは餘儀なき次第である。借換の失敗は到底包み切れないのである。之と同時に高橋藏相の遣り方にもよくない事がある。それは一時に巨額の外債を募つた事である。東洋拓殖會社の社債を二千萬圓外國で發行して引續いて政府が二回に一億圓の外債を發行した。僅かの間に合計一億二三千萬圓の外資を輸入した。之は又餘りに亂暴である。必要なれば借りてもよいが、一時にこんな巨額の公債を借りる必要はない。況んや其利子は六分三厘の高利につくに於ておやである。高橋藏相は一億二三千萬圓の外資輸入の爲めに內地の金融がだぶつく恐れがあるといふので之を調節する必要があるといふ。現に朝鮮の三千萬圓の公債の如きも、朝鮮の財政に於て必要であるには相違ないが、金融界の調節の目的も含まれてゐるのである。否、高橋藏相の自らいふ

所によれば、金融調節が主もなる目的だといふ。それから大阪市が今度電燈會社を買收したについて五千萬圓の公債を發行しなくてはならぬのを、金融調節の上に害があるといふので、外債は許さぬといふ事てある。然らば高橋藏相は何故金融のだぶつく程澤山の外資を輸入したのであるか、だぶつかない程度に外資を輸入するに止めて置けばよいではないか。已に調節の必要があるといふ。之は資本の過多を意味して居るのである。過多に輸入したのがわるいのである。況んや六分三厘の高利公債を無暗に澤山借りることは不經濟至極である。それて、桂公のボロを中外に發表するのは止むを得ないとしても、發表の仕方は餘りヒド過ぎたことは事實てある。今後はせめて公債支辨の事業を打切つて此上高利の公債を外國に募集せぬことにして貰ひたいと希望する。

（六）

處て四分利附公債の失敗に歸したのは止むを得ないが、現内閣が六分以上の利廻り高利公債を發行するが爲めに、公債整理方針について一問題が起るのである。即ち減債基金法を存續するか廢止するかの問題が起るのである。之は前から議論のあつた事であるが、現内閣が高利公債を發行するやうになれば一層適切な問題となる。即ち理論上減債基金法は維持することが出來まいと思ふ。即ち四分利公債は斷念したにした處て、減債基金法によつて償還する公債は五分利の公債てある。然るに政府が新たに借り入れる公債は六分てある。五分の安利息の公債を返して高い利息の金を借りる。之は不經濟至極てある。然らば五分利附の償還期限は切迫してゐるかといふのに決してさうてはない。當分五分利の公債を返す必要がないのである。五分利の公債を返さないで、そして六分の公債を發行しない方がよいのである。然るに今五千萬圓の五分利の公債を返して、そして六分の公債を借りるとすれば其利鞘丈けが一年に五十萬圓違ふ。翌年も同樣の事をやれば百萬圓違ふ。翌々年には百五十萬圓違ふ。十年目には五百萬圓損をする計算になる。かくて現在の狀態を繼

續して、强ひて減債基金を維持せんとすれば、毎年損害が大きくなる。勿論之れ切りて新公債を募集しない事になればさうはならんが、それは餘程覺束ないと思ふ。政府は公債募集を打切りだといふが、事實行はれないと思ふ。そこでこんな不經濟な減債基金法は打つ毀すがよいといふ議論が出るに極つてゐる。或は之を半減しろといふ位の議論は屹度出る。そこで一番最初にいうた五十年に償還するといふのが、八十年になるか百年になるか分らぬと思ふ。實を言ふといふと、減債基金を罷めれば、其金は陸海軍などの不生產的事業に取られる恐がある。又近頃の不利益な鐵道延長の費用に使はれるかも知れぬ。其他政治上の便宜の爲めに利用される恐がある。が、然し之を理由として減債基金を維持せんとするは理窟が立たぬのである。そんな不生產的な事業に投じなければよいぢやないかといふ事になる。經濟論としては減債基金の維持は頗る困難になる。

（七）

先きに話した通り桂公の四分利附借換の失敗は、借換方針其物がわるかつたでなくて、積極方針がわるかつたのである。片一方に公債の整理を計畫しながら、片一方に新公債を增發しやうとしたのがわるかつたのである。減債基金の維持が困難になるについても矢張り原因は同じ事である。新らしい公債を發行さへしなければ五分利附公債を償還するのは構はぬのである。新公債を發行せずして歲計剩餘の中から舊公債を返還するのなら、幾ら返還してもよいのである。多ければ多い程よいのである。それで公債整理の上からいへば積極的方針を罷めること、卽ち公債支辨事業を廢することが最も緊要である。四分利附借換ても其通りであつて、一方に公債支辨事業を企てず、新公債を發行しなかつたなれば、日本の公債を全部四分利附としようといふ目的は必らず達せられたのである。一時に出來ないまでも五年八年の間には必らず目的は達せられたのである。四十三年の公債借換の時に五分利公債は大部分償還されたのである。殘つたものは左程多くはな

かつたに違ひない。故に新たに公債を發行せずして此五分の舊公債を毎年五千萬圓づゝても償還すれば結局は五分公債はなくなるのである。そして四分利公債ばかりになる譯であつた。卽ち桂公の公債借換の目的は達せられたのである。然るに一方に公債を償還すると同時に他の一方で五分五厘乃至六分の公債を段々增發するのである。そこで何時まで經つても公債借換の目的は達しない事になる。元來積極的事業といふものは政治家の野心に利用されて大きくなりやすいものである。例へば地方に鐵道を布く、港灣を修築する、河川修築の補助をする、治水事業をやる、總て積極的事業であるが、何れも政治家が地方の人氣を取る爲めに利用するのであつて、此點は餘程抑へてかゝらないと段段積極的事業が多くなり易いものである。況んや日露戰爭後紊亂した財政を整理し、其公債を整理するについては暫らくは消極的方針で行かなくてはならぬのである。

（八）

四分利附公債の借換の爲めに大分迷惑をしてゐるものがある。第一は四分利公債を引受た銀行屋である。之を引受けて賣り出さないといふ約束をしたのである。尤も中には内々賣つて逃げてるものもあるが、多くはまだ持つてゐるだらうと思ふ。然るに四分利公債の價は其間に非常に暴落した。從つて之を引受けた銀行屋は非常に迷惑をして居る。其外公共團體や何かて、持合せた金て四分利附公債に代へることを勸誘されて大きに困つたものがある。殆んど到る處に其例がある。最も著しいのは名古屋の例である。名古屋ては熱田の築港其他の事業を遂行せんが爲めに外債を募集した。處が一時に澤山の外債は入らないのであるから銀行に預けた處が、銀行に預る位ならば四分利附公債を買へといふて壓迫せられて、巨額の四分利公債を持つた。其中に相場は下つて來た。一方には事業が進行するから金が要るやうになる。此公債を賣つて事業に投ぜんとすれば非常の損失を免れない。其後どう始末したか分らぬが、一時は非常に困つた樣子である。何れにし

ても經濟上の原理を無視した無理な事は旨く行き様筈がないのである。當局者たるもの深く此事を考へて、財政の運用に誤りなからんことを期せねばならぬと思ふ。

犬養木堂論

逸名氏

◎憲政擁護閥族打破の運動、一たび天下を震撼してより、頓に雷名を轟かすに至つたのは、木堂と愕堂とである。愕堂に就ては其半生の進退に是非の論を挾む者も少くないが、木堂に對しては、木堂を賣りたる政友會の某々等、木堂に惱まされたる官僚系の二三子の外、何等の非難を加ふる者がない。否官僚系と政友會との木堂の政敵と雖、彼を畏るべき男とこそ思へ、決して陋劣なる卑しい男と言ひ得る者はない。假令言之を言ふにしても、衷心爾く思ふ者はあるまいと察せらるゝ。全く木堂の名聲は今や頂點に達せんとしつゝある。彼れの赫々たる名聲は、桂公の人爵を以てするも勝つヿが出來ない。井上侯、松方侯の富を以てするも購ふヿが出來ない、山縣公の勢威を以てするも壓するヿが出來ない。況んや後藤男の金力、大浦子の僞善力、原敬君の辣腕、松田君の胡麻化しなどを以てするも到底及び得らるべきものでない。然らば木堂は政治家として夫れ丈の代償を拂はるべくエライかと言ふに、我輩は彼れに許すにエライと言ふ語句を以てするに躊躇するのである。併しエラクはないが天下に名望を得べく貴いと言ふヿは斷じて明言し得る所である。其貴いと言ふヿは力量手腕等の優秀なるが故てはなく、全く終始一貫して、如何なる困難激變に遇ふも、決して動かざ

る主義を懷抱して居るからてある。此主義の上を進み、此軌道より一歩外るれば、如何なる權勢の位置がありても、如何なる利益が目の前にブラツイても決して、之を手に執らないからてある。我輩は木堂の名聲が近時頓に揚つたのを見て、君子仁を去りて何くにか名を成さんの古語を想ひ起すのてある。主義政見によりて進退し、常軌の途の外に一歩も踏み出さないと云ふ丈、單に是れ丈なら政治家として當然の德義てあつて、決して尊ぶに當らない筈てある。併し悲しい哉、現今我國の政界に於て、相應の見識ある目星しい連中に、殆んど一として此の政治家普通の德義を守り來つた者がないのてある。或は改進黨の創立者、或は自由黨以來の豪傑と銘打つた人物等が、何れも何れも變節して、或は官僚の走狗となり、或は僞黨の旗持ちとなる世の中なのてある。是に於てか木堂の如く古い政治家て曾て一度も變節しない人物は、實に珍中の珍てある。其類ひ稀なるものは、原則として其價が尊いのに、木堂の如く義に居りて而して類稀なる者は、非常に珍重せられ、且又尊敬せらるゝは勿論當然なのてある。

◎單に政界の薬武者として、終生碌々として政黨本部に出入し、僅かに彼は律義者なりなど言はるゝ位の氣節なら、人間が正直てさへあれば守り終せらるゝのてあるが、政黨の卒伍より起りて領袖となり。或は顯はれて閥族征伐の大將となり、或は晦れて内閣組織者となり、多少の同志を誘掖して自己の勢力となし、而して終始逆境に居りて變節しないと言ふ一事に至りては、政治家普通の德義てはあるが、蓋し並大抵の律義者位ゐては出來ない事てある。否矢張り非常の資格がなくては出來にくい事てある。之を能くせし者獨り木堂あるのみてあるから、彼は非常に尊く、非常に尊重せらるゝのてある。言ふまでもなく木堂が氣を負ひ節を持して動かざるは、彼れが天稟然るものあると同時に、彼れが幼少からの修養によると思ふ。別して漢籍の修養に據ると思ふ。木堂の家は岡山縣下の豪士て、代々或は武術家、或は儒者を出した家て、木堂は幼少から餘り逞しい體てなかつたので、武を學ばずして、

文を修めたさうである。あの慧敏な頭であるから、未だ二十歳ならずして大に諸書を涉獵し、一家の見識を備ふるに至つたさうである。其頃洋學と言へば多く醫學、天文學位ゐに限られて居たので、木堂も初めから洋學は嫌ひときめてしまひ、專ら漢籍を修め、機會を得たら東都に遊學して、大に漢學の大家となり、治國平天下の學を講じてやらうと思ふたさうである。卽ち木堂最初の志は儒者たる事であつて、決して政治家たる事でない。人間は二十歳前後に叩き込んだ事は終生除けないさうであるが、木堂の骨組はちやんと其頃に固まつて、其頃彼れの社會に於ける地位は如何に變ずるにしても、其大體の本質は大義名分を經とし、治國平天下を緯とした儒士である。而して其の治國平天下なるものが彼の覇者の治國平天下に非ずして、王者の治國平天下であるから、彼れの政治思想には必ず道德思想が離れない。故に彼れの政治論には必ず德義論を加味して居る。仁を持して居るてなければ、必ず義に勇んで居る。例へば先年の支那の革命に際しても、如何なる手段によりても、滿洲を取つて日本の利益を計りさへすればよいと云ふ様な、外務省あたりの政略には彼は同意するとは出來ない。矢張り第一に四億の蒼生を思ひ、次に南方革命黨の苦衷を思ひ、之に同情し、之に力を藉して志を行はせたいと言ふとになる。而して日本國の利益に至りては、彼等を助け、彼等をして志を成さしめた必然の結果として得らるべきものと信じ、毫も掠奪的、脅迫的の態度を取り得ない、飽くまて仁に依り義に居るの遣り方である。會〻斯の如き見解が誤謬を來すとあるも彼は悔いないのである。利益を得れば國の爲だが、利益を失するも猶國の精神を發揮して國柄を世界に誇るに足ると信じて居る。萬事が彼様のやり口であるから、迚も變節などの出來る筈はないのである。

◎彼が斯くして突進しながら、普通一遍の道學的政治家として葬らるゝとなく、今日の如く敵に懼れられ、味方に敬はるゝに至つたのに就ては、斯の主義を支ふる骨力と、此主義を働かす智力との絶倫なるものがあ

ることを忘れてはならない。彼れの骨力と智力とは、天禀によりて人に勝れて居るとは勿論であるが、又後天的に修養した結果であるとは爭はれない。殊に其の千蹉撓まず、百折屈せざる骨力に至つては、其大半を境遇と修養との賜と見なければならぬ。

◎木堂は郷里にて漢學を修め、傍ら役所の書記か何かをして家計を助けて居た頃、不圖漢譯の萬國公法なるものを讀んだ。此萬國公法なるもの、彼の漢籍の抽象的治國天下說とは餘程異り、具體的の文字のみを以て滿たされて居り、謂はゞ木堂に取つては最初の眞の政治書であつたのである。そこで大に感激し、洋學とても馬鹿には出來ない、西洋文字を讀み習ひ、西洋の諸子百家の說を讀んだなら定めて愉快であらうと思ひ立ち、愈々東都に遊學する決心を起したのである。南宋の名臣文天祥は、辛苦に逢遭するは一經より起ると稱し、學問をして道を踏み行ふの困難であることを歎じ、且自ら心に問ひて愉快であることを自負して居るが、木堂の辛苦に逢遭するも又其の幼にして學び得たる一經より起り、其の愈々一身を磨くに至つたのは東都遊學以後である。然り辛苦に逢遭するは一經より起るが、一經より起つて辛苦に逢遭すれば、此間に人間の本質は益々磨かれ、不知不識の間、人として貴い所以を養ひ得るのである。木堂は東都に出て來たが勿論學資はない。賴るべき知己もない。負けぬ氣强き彼は、頭下げて他の食客となるなどは能くしない。そこで東京中の英漢學敎授所と看板揭げた有らゆる塾を叩き步き、漢文を敎へる代りに英學を敎へて貰ひたいとの交渉を試みた。然るに廣い東京中にもさすがに、當時の木堂の樣な瘦せ衰へた、破髮蓬々たる貧書生に漢學の敎授を依賴するものがなかつた。後に木堂は慶應義塾に入つてからも、矢張り衣食や學問の資に窮し、深夜人定まつて後、そつと起き上り、小さな燈火を點じ、之を身體にて蔽ひ隱しながら文章を草し、之を報知新聞其他に投じて、原稿料にしたのである。勿論就床時間に起きる事も、燈火を點ずることも校規に反するのであるから、此間に於ける心配は並大抵でなかつたのである。

木堂常に曰ふ、我輩の身體も幼少な頃は別に頑丈な作りてはなかつたが、今日の樣な蒼黑い瘦せ衰へたものてはなかつた、之は全く中年大に身體を培養すべき際に、苦學の爲營養不良と、過勞とに陷つた結果であると。然り此の或は英漢塾を訪ね歩き、或は營養不良に陷つた時が實に艱難汝を玉にするの時代であつて、一生の花である。彼は困難と戰ひて身體こそ營養不良に陷つたてあらうが、精神は之が爲め益々切磋琢磨せられたのである。通常の者は少し困難に遭遇すると、或は意氣沮喪し、或は性質卑屈に流るゝものであるが、尋常ならぬ彼は之によりて益々其骨力を固くし、其學問見識を進めたのである。我輩は其後木堂が政界に跳り出して以後、隨分常人の堪ふ可らざる貧困に遭遇した話も聞いて居る、獨り一家の貧困のみならず、其の所屬政黨が人物の貧困、物質の貧困等に陷り、木堂は手も足も出なかつた時代がある。然るに彼が平然として內外の困難と戰ひ、其の漢學主義にて作りたる人格を頽さずして進み行くのは、全く中年苦學の賜である。

彼は辛苦に逢遭して、身體を營養不良にまて陷れたが、之によりて又人として貴き所以を練り出したのである。世間は之を目して逆境と稱すべし、男を磨くを主眼とする吾人よりすれば、實に修養上の順境を經來つたのである。

◎木堂が主義節操を重んずるの觀念、困難に堪ふるの骨力は右の如くであるが、之に加ふるに彼は優秀なる智力を有して居る。動かす可らざる主義主張があり、曲ぐ可らざるの骨力あり、一寸の融通もつけないとすれば、單に之丈て押し行く者は餓死か窮死かの外に途はないのである。然るに木堂は貧しても槍一筋、馬一匹の格式を落さず、政界の逆境に居りても見すぼらしき始末とならず、矢張り小なりと雖も一城の主たる格式を持し、時ありてか奇兵突發、敵の膽を寒からしむるのは彼に優秀なる智力があるからである。世に木堂を是非する者あり、『何に木堂が貧乏々々を口にするか、其の邸宅と言ひ、其の生活と言ひ、まるて大名式てはないか、あれて淸貧と稱して名聲を博し、名と利

(リ)と共に得らるゝ位なら民黨の名士と言ふ者は中々仕合せな者である。閥族と稱する殿樣式の非國民的な奴等を征伐する民黨の御大將が、矢張り殿樣式の玄關を構へる樣では、甚だ心細いではないか。彼の脫黨五領袖の如き、隨分世間からは甕味噌に言はるゝが、其中には隨分氣の毒なのがある。大石は別として武富等に至つては、全く赤貧洗ふが如してあつた、夫れ等が何程か金作の仕方が惡いと言うて直ちに吠え立てるのは政友としては有るまじき事だ、自身ではちやんと水源を持つて居て、他人が水に窮して一寸隣家の田から水を融通したのを攻め立てるのは殘酷だ、五領袖に逃げられた木堂などは、自身が殿樣式にやつて居る丈け大に考へねばならぬ云々』之は一向條理の立たぬ俗人の愚癡であるが、木堂を喜ばざる者から、屢々聽かさるゝ所であるから、一應之に就て解釋を下し置くの必要があると思ふ。世の中に淸貧を樂むと云ふ君子があるが、何も貧乏夫れ自身が尊いものであるとは思はれない。孔夫子も貧而樂と云ひ樂貧とは云はない。貧にして而も猶ほ樂むと云ふ事と、貧を樂むと云ふ事とには大分意味の相違がある。況んや貧を自慢することをやてある。寒山詩に面白いものがある。曰く、

丈夫莫守困。無錢須經紀。養得一牸牛。
生得五犢子。犢子又生兒。積數無窮已。
寄語陶朱公。富與君相似。

と。坊主に說明さすると、牸牛は自己本具の自性だとか、何とか六ケしく云ふが、牛を養うて繁殖さする程の智慧があり、且又懶惰ならずして、面倒を厭はねば、左樣に困を守るの必要はないのである。且又天下の士は天下の財を以て養ひ得べしとすれば、木堂が冷飯を食ふのに困らぬことが、必ずしも彼れの不德を證するの材料とならない。脫黨五領袖の或者等は實際木堂以下に貧であつたらう。而し木堂とても彼等と同一の程度の貧乏に經驗がないてはない。畢竟貧乏すれば直ぐにそこらを迷ひ歩きて掃き溜めなどを搜し歩くから、遂に正義の士が之を陋として金を融通せぬ樣になるのだ。そこを一踏ん張り、武士は食はねど高楊枝をきめ

込むと、自ら其氣品に感服する信者も出來て、却つて衣食住には困らぬ樣になれる。木堂は能く堪へた、脱黨領袖は遂に堪へずして早くから手低くゝ出た、そこで前者には大きな借金も出來るが後者は變節料も澤山取れぬ樣な始末となつたのである。夫れから又前者は智勇辯力からしても、優に天下の人によりて養はれ、天下の爲に働くべき資格がある、後者に至つては天下が之を養ふべく餘り無能にして、且無氣力な腑甲斐ない連中である。そこで世間が彼等を遇することと木堂を遇するが如くならず、隨つて木堂程羽振りよく行かないと言つて、直ちに燒餅半分に惡口するのは大きな考へ違ひである。要するに木堂が健闘しながら餘り身なりを落さないで行くとは、丈夫莫守困の一句に曉る程の智慮があるからて、之を以て彼の品性を是非することを許さない。

◎然りと雖、彼の大名式の邸宅などには我輩と雖餘り贊成は致さない。尤も健康の工合もあるてあらうから、餘り蠻的な生活も出來まいが、矢張り民黨の領袖とも言はるゝ男は、大西郷の樣な純朴な生活及び態度が相應しい樣に思ふ。又彼の脱黨五領袖などに對して盡す所が足らなかつたと云ふ事に就ても、我輩は之を辯解するの辭を有しない。併し世話するとか盡力するとか云ふ事は、眞の同志たる後の事であつて、木堂の聰明なる、彼等の斯くなるべきは夙に見拔いて居たのて、始めから同志として遇しなかつたのであらう。其處を今少しく大きく出て、武富の財政の能は之を用ゆべし、河野の愚も亦用ゐる所なからず、能者は能を用ゐ、無能者は無能を憐みて、始から彼我の差別を設けず、腹心を披きて相語り、睚眦を撤して相謀る所があつたら、木堂のエライ所以は一層增したてあらう。然るに木堂は元來伯夷叔齊の徒であつて、彼に柳下惠たらんことを强ふるのは酷である。一寸でも臭い點を發見すると、そんな臭い樣な奴とは面を合はするも嫌や、席を同じうする事は益ゝ嫌や、況んや共に談じ、共に語るをやてある。之は潔癖であつて決して人に長たる所以てないが、此過は却つて以て其人の君子たるを證

明する次第てある。智者と稱せらるゝ木堂が此潔癖を抑へて寛厚の長者たるを得ないのは、實は其の眞の冷靜なる智者でなくして、半以上感情に制せらるゝ人であることを證明する。若し夫れ眞に無能を愍み、罪惡を愍むに至つたならば其人實に聖人に近しとも云ふべきであるが、世の中の所謂寛厚の長者なるものゝ大半は、大概正義の感念がなく、天下一切の事を自己の利益より打算し、此算盤勘定からして溫厚を學ぶ者と云うてもよい。そこで世の中の所謂長者なる者は大概狡猾者である。桂公も久しく喜怒色に現はれざる長者を以て鳴らしたものだが、其實胸中一誠なき機略家であつた。政友會の長老と稱せられた松田正久君の如きは、憲政擁護運動以來、まるで正義の感念なき、狡猾な、横着な、古狸の化物であつた事が證明せられた。木堂が感情に制せられて、他の不義不正を愍むの雅量なき事は、實に彼を小にする所以であるとは言へ、善惡邪正、愛憎好惡、覺るが儘に、感ずるが儘に、サッパサッパ捌いて行く所は、彼の古狸の寛大に比して遙かに貴いてはあるまいか。木堂は敵を惡み、臭い奴を惡み、惡い奴を排斥するは、彼が正邪の念より出づる感情の働きて、之が爲に思はざる敵を受くる事もあるが、之が反面には又大に人を愛するのである。一旦好いと信じた男に對しては、如何なる人が、如何なる讒誣中傷を試みても決して之を受け附けない。何處までも庇保し、何處までも辯護し、何處までも世話して行くのである。往々にして識者にも見當違ひがあり、とんでもない奴を信じ込んで、つまらぬ世話をする事もあるが、之も亦木堂の缺點てあり美點であるてあらう。彼は幾多の知己を愛するが又見ず知らずの書生でも、憐れつぽい者に遇へば　必ず何程かの援助を與へる。嘗て外出の歸途神樂坂から人力車に乘つたが、何としても車夫の腰つきが可笑しい、如何なる身分の者か問ひ質して見ると苦學生である、そこで『誰も困難に打勝つて後大成するものだ、折角奮發して勉强するがよい、一時の方便で車は挽くとも心までは車夫となるな、よいか確かり勉强するんだぞ』と大に勵まして何がしかの金を與

へたさうだ。すると其晩に木堂が矢鱈にウナされて寢言を繰り返す『嗚呼氣の毒な者だ、も少し餘計に呉れてやれば善かつた』と、彼は夢中にも苦學生の事を思ひ出して、金の呉れかたの少なかつたのを繰言して居るのである。君子善く人を惡み、又善く人を愛すとすれば、一方に此れ程の同情心ある木堂が、他の一方に於て悖德不義の徒を惡み、此等を叱責して遁逃の途なからしむるあるも、決して德に疚む所はないのである。余は深智ある木堂が、利害の打算を外にして、能く人を惡むを見て、之を短所の美點として數へざるを得ない。

◎佐藤一齋の言志錄であつたと思ふ、博聞强記は聰明の横なり、精義神に入るは聰明の竪なりと言ふ句がある。我輩曾て年少の頃、赫々の名聲を羅かして居る島田三郎氏の逸話と言ふのを讀んだ事がある。何でも島田三郎と云ふ人は餘程の勉强家で、毎日毎朝日本及び西洋の新聞雜誌は必ず之を精讀する、夫れて彼の人の知識は該博である。或時病氣で一週間程臥床したが、恢復の後島田先生は、之が爲に時世に後れたから世間に出られないと言ふので、今度は一週間書齋に籠つて新聞雜誌を勉强したと云ふ話がある。我輩子供心にも之は愚な事だと思つた、胸中方寸の鏡を研きて、其光を明らかにしたならば、眼前に現るゝ問題位は解決が下されさうなものだ、何ゝ書齋に籠つて新聞雜誌を勉强せねば、人に面が合はされぬことはなささうなものだと思つた。後に言志錄の句を得て甚だ我意を得たるに滿足した。要するに島田三郎君だとか、金子堅太郎君とか、あんな風に氣障な男として評判されて居る物識りは、只管一齋の所謂横の聰明をのみ學んで、心眼紙背に徹しないのである。精義神に入らないのである。竪の聰明を得る所以を知らないのである。此點に至ると木堂の聰明は確かに竪の聰明である。彼は博聞强記を勉めないが、彼の智は散漫でない、彼れの調ぶる所は甚だ簡約であるが、併し要領を得て居る。雜誌を勉强することは島田君に及ばず、洋書を讀むことは金子君の足元に及ばぬとしても、試みに駐米大使とし

て手腕を振はしめたら、木堂は不知案内の米國に於て、彼の亞米利加て生れた樣な口吻を用ふる島田、金子以上の働きをなし得るに相違ない。若し夫れ田舍者の前に西洋の地名や人名を並べ立て、、長談義をやらせたら木堂は金子、島田に及ばぬは勿論、望小太にも追附かぬてあらう。是れ實に竪の聰明と横の聰明との異る所以てある。此種の竪の聰明に至つては、木堂は恐らくは當代政黨界の第一人てあらう。尾崎行雄氏なども、西洋の學問や見聞に至つては木堂以上てあるが、兩人を並べて何となく木堂が兄哥に見ゆるのは、此の竪の聰明に於て木堂の方が勝つて居るからてある。書生の書を讀む者、胸中方寸の鏡を研くことを思はず、大隈式の演說などを理想とし、演說の種にせんが爲に濫讀する樣ては、何年しても竪の聰明は養はれず、遂に氣障な物識りに終るのてあらう。我輩は聰明に就て屢々木堂を思ひ出し、同時に當世の氣障式の博聞家を想ひ起すのてある。

◎木堂は是れ位智もあり識見もあるが、彼れは同時に前述の如き正義の感念を持つて居るから、決して策略などは用ひない。此の策略などを用ゐないことは、一面には正義の感念より出づるてあらうが、又今日となりては小策などを用ゐては損てあるから、彼の聰明は之を用ゐるを許さないのかも知れぬ。併し彼は一旦政治運動ても何ても思ひ立つと、縱橫東西に奔走して、往々にして常人の企て及ばない功をなすのてある。そこて世人は之を目して、或は奇才だと言ひ、或は奇策縱橫だと言ふが、我輩を以て之を見れば何等の才もなく、何等の策もなく、寧ろ向ふ見ずの一本調子てある。唯自ら一旦決する以上は、其目的を欲求するの痛切なるものがあるから、常人以上の活動をなし、往々にして豫想外の功を收めるのてある。勿論智者と言はれ、聰明と言はれて居る程の男てあるから、初めから見當のつかぬ樣なことに熱中はしない、又活動を始めても、平常に於て親密なる交友もあるから、事は割合に捗取るのてある。又活動の方針も決して拙なくないのてある。是れ彼れの奇策縱橫なる名を得る所以てあ

る。今度の憲政擁護、閥族打破の運動の如きも、寧ろ其の起つの甚だ遲かつた位てある。木堂にして眞に奇策縱横の士てあつたなら、昨年桂公の宮中入り以來、隨分閥族の横暴は國民の公憤を招いたのてあるから、手に唾して起ち、民衆を指導して閥族の堅壘に薄る機會は有つたのてある。然るに聰明なる木堂は善く言へば斯の如き事に輕擧妄動しない、惡く言へば自發的に積極的に挑戰する勇氣がない。漸く西園寺内閣の瓦解、桂公の詔勅濫請と云ふ段になり、憲政擁護會が活動するに至つて、始めて大に活動し始めたのてある。偖て愈々乘り出すに至りては、向ふ見ずの捨身てある。若い者を引廻しはするとも、引き立てらるゝ程愚圖々々はしない。實に昨年末以來の木堂の活動は小氣味よい程てある。政友會をして一時國民黨と提携せしめたことに就ては、例の消息通は之も又木堂の奇策だなどゝ噂するが、實際の所木堂は無策てある。唯一本調子に進んだのてある。豫て打合せて居た岡崎君などの手を經て原敬君にも面會し、松田正久君にも面會したのてあるが、併し其の説く所は憲政の大義と閥族の打破とより外何ものもないのてある。表にも裏にも一切駈引なしてある。斯うなると欺かるゝから危ないと忠告する者があつても決して聽き入れぬ。所謂成敗利鈍に至りては臣が知る所に非ざるなりの遣り口てある。獨り政友會の領袖に對してのみならず、學者に對しても實業家に對しても、新聞記者に對しても、書生に對しても、熱心に其の所信を説くのてある。そこて彼れの平生を知つて居る者の中には、大に憤慨して馳驅の勞に任ぜんとする者も出來る。之を一方の詐略家は惡口して、又々木堂が學者を誘ひ出したり、實業家を煽動したり、新聞記者を籠絡したり、書生を使嗾したりなど評し、總て策略から出たものゝ如く思ふのてある。併し木堂に於ては策略てない、唯熱心の結果てある。事に專一なるの賜てある。

◎先日の閥族打破の運動が、原敬氏等政友會領袖の變節によつて一蹉跌を來した時、木堂等が悖信不義の徒を痛罵するのは當然てある。然るに可哀相に政友會の

俗物等は木堂程眞ッ正直に突進して、頸の骨衝き折つた男を捉へて、惡口するのにも程がある。あれは全く内閣に列し得なかつた意趣返しに、捨鉢の惡口をして居るのである、現に最初は山本内閣を承認して置きながら、自己の入閣が出來なかつたから不平を言ひ出したのだ。夫れだから高島鞆之助子などには早くから款を通じて、後繼内閣の事までも私議して居た云々と。之は全く讒誣の言である。木堂は實際山本内閣を否認しなかつた、併しそれは内閣を現在政黨員のみを以て組織するを條件としてである。然るに山本伯の之を難んずるや、彼れは松田内閣をすら承認した。此間に何等の偏見も策略もない。又高島子とは豫て親交もあり長閥を叩き伏するには、斯くすればよい、あゝすれば早い位の話は屢々茶のみながらも交換したてあらう。そこて山本内閣も見込なし、松田内閣も困難とすれば、之に代るべく高島子を引出し、子の蠻勇を借りて長州閥族を根柢より破壞せんとする位の考は持つて居たてあらう。之も公明正大な白日の話てあつて、決して原氏などが山本伯と天下の事を私議したのと同一てない。又木堂自身は山本内閣が出來ても、松田内閣が出來ても、乃至高島内閣が出來ても最初から入閣の希望を有して居なかつたのてある。之は彼れの意見を叩いた者等の等しく知る所である。木堂は政治上の徳義として他人を入閣せしめて、自身は政黨の方に專ら力を盡すかと言へば決して左樣ばかりてない。彼れ程の男に取りては、大臣になる位が夫れ程の榮譽てない。夫れよりはあの大勢に乘じて地方を遊説し、聯合民黨の地盤を開拓する事が、彼自身に取りてより大なる名譽てもあり、同時に聯合民黨内に重きを爲す所以てある。正義論は暫らく措き、彼れの聰明なる見識からして大臣となるが如きは甚だ愚な事てあつた。木堂を惡口するなら、今少し考へてせねばものにならぬ。大臣に成り損うたからなど云ふのは、餘り政友會根性を露骨に現はして聽き苦しい次第てある。木堂の貴ぶべき第一點は斯の如き出處進退を苟くもせぬ事にあるのだ、之を除きて木堂なく、之を誤る位なら木堂が今日迄の歷史は出來ぬ筈てある。

◎人間は儒士風に高尚に出來て居り、骨力は天稟に加ふるに境遇と學問とによりて非常に固く、而して聰明なる頭腦を持つて居る木堂の缺點と云ふものを擧ぐれば、前述せるが如く明察々にして不正の士を寛假する能はざるの一事にあるが、其代り之が缺點の長所とし

て、士君子に喜ばるゝ所以ともなる。今一つ政治家として木堂の缺點は、動もすれば隱君子風となりて、歸去來を歌ひかねない一事である。現に昨年政變の起る以前にも、大に前途を憂慮して、一敗せば一介の書生となつて直接政界と絶つなど言うて居つた。之は政戰場裏に在る男子の覺悟として健氣と言へば健氣だが、夫れては大に成すあるに足らぬ。木堂が動もすれば此種の言動をなすのは、餘り前途が見え過ぎて、惡戰苦鬪するも畢竟徒勞に屬するとか、ちやんと解るからてあらう。然れども限りある人間の聰明を以て、悉くの事理を觀測し、自己の有り丈の力を用ゐぬのは、決して譽めた事てない。功名勳業は往々にして意外の邊に生じ、惡戰苦鬪せし者自ら、其の豫測せざりし成功に驚くとがある。木堂をして今少しく愚ならしめ、今少しく分限不相應の輕擧妄動を自信して行はしめ、而して桂公一派の如く執拗不斷ならしめたならば、其功を收めしむる事は豫想以上てあらうと思はるゝ。今の木堂では抑へて之を撓ませば必ず跳ね反り、塞ぎて之を激せしむれば必ず決潰橫流するが、之を遠卷きにして兵粮攻めにすると、必ず自ら政爭の馬鹿々々しきを言ひ、歸去來を歌ふに至るてあらう。而し天下の大經綸もなくして、政權を爭ふ事以外に、人間に高尙なる樂みのある事すらも知らぬ當代の政治家に比すれば、歸去來趣味の木堂は遙かに氣高い者である。又木堂は政治界を退いても立派な一個の國士として世に立ち、人に敬はるゝ丈の資格がある。此點に於て當今の政治家には比類稀なる者である。政治的小技能の巧拙や、黨勢の振不振などに就て、爾餘の拇指食指の輩と競爭さするのは、木堂に取つて甚だ氣の毒である。氣の毒ではあるが、氣の毒な位の人間が一人二人は我政界に居らぬと、空氣が全く濁つてしまふのである。凡そ專制は人の天性であり、常人は之を行はんが爲に有らゆる術策を用ゐて、勢力を張る事を志すものとすれば、之に對抗すべき正義の在野黨の必要なると、苟しくも火ある以上、之を消すべき水の必要あるが如きものである。然らば木堂なる人は前途に於て政權を握らずとするも、出て代り立ち代りて現はるゝ、非道の專制家に對抗すべき、在野黨の好個の首領たるべき人てある。(完)

婦人界の新思潮に對する官憲の取締

△婦人の正當なる主張と猥褻文字

法學博士　浮田和民

最近に於ける婦人界の新傾向は、是れ時勢の然らしむる所であつて、早晩どうしても避くべからざる現象であらうと思ふ。之れを撲滅せんとするが如きは害有りて益の無い事である。

惟ふに男子は明治維新以來發展向上して、今日の進歩を見るに至つたのであるが、婦人は其男子の發展に伴つて進むとが出來なかつた。そこで男子の進むに從つて女子も同じく發展向上を欲するといふのが此新傾向の起つた所以である、而してそれは從來政府並に民間の方針が誤つて居つたが爲めに、謂はゞ其反動として斯樣な奇激な婦人界の新傾向を作り出したものと見て良からうと思ふ。

何故ならば、男子は近來西洋の新らしい學問又は新らしい事業に携はるとを得たけれども、女子は尙依然として、維新前に於けると同じく女大學の教へを受けて、只家庭の人として男子の命に服從さへすれば可いといふやうな教育方針の下に養はれて來た。然しながらそれは女子が男子の內助として働いてゆく上にも不適當であるとは明白な事である。男子が外に出でて、種々の事業に携はるに當つても、女子は只家庭の女房としてのみ取扱はるゝといふとは實際は正當なる女房としての働きをも成すとは出來ない。家庭の飾物、男子の玩弄物としてならば兎も角、苟も眞の內助として、良妻賢母としての實を舉げるには、どうしても婦人の高等教育が必要になつて來る。

今日中流以上の家庭に於いて、婦人に教育の無い爲め、又は教育の無い婦人を妻とし母とする爲めに醸す家庭の紊亂は實に甚だしいものであつて、新婦人の傾向が著しくなつて困るといふよりも、古き婦人の人格を保つ能はざるより生ずる處の社會の弊害は更に一層甚だしきものがある。我國に於ける新婦人と言つても、未だ指を屈する程しか無い。その爲す所或は常識を缺いたり、或は奇激に流れたりするとがあらうけれども、之を古き道德を有つ無教育な家庭の婦人に較べたならば殆ど數ふるに足らないと思ふ。故に此婦人界の新傾向は婦人の自尊心を啓發し、社會の各方面に於ける虛僞又は偏頗なる習慣を打破するに與つて力有りと言ふとが出來る。新しい婦人の現出は、婦人が男子の束縛――舊い習慣

の束縛——に堪へないことを世間に對つて號叫してをるのである。其の聲を聞いて漫りに笑ふことなく、能く婦人の苦みのある所を察し、暖き同情の心を以てそれに耳を傾くべき筈のものである。女子と雖も男子と同じく功名心を有つてもをれば欲望をも有つてをる。只彼等は女子であるが爲めに敎育の方法が備つてをらず、又爲すあるの地位が與へられてないばかりに、空しく衣食や身邊の虛飾をのみ事とするより外なきの生活を送つてゐるのである。男子が彼等に着實な健全な發展を爲すべき機會を與へないが爲めに、只僅に虛榮に依つて自己の欲望を滿足せしむることになるのである。男子が婦人の權威、婦人の威嚴、婦人の人格といふものを無視して我儘を働くといふ現在の狀態では、婦人は自ら只虛榮虛飾にでも流れざるを得ないのであつて、男子が之れを咎むる權利はない譯である。

であるから今日の女子をして其才能有る者は男子と同樣に充分其才能を發揮せしむる機會を與へたならば、女子も國家社會の爲めに盡す處あつて、自ら突飛な事を行ふ傾向は消滅するであらうと思ふ。今日の如く社會が不公平である間は、婦人の不平不滿は絕ゆることなく必ずや勃發する時が來るであらう。既に今日歐米一般の此種の傾向は、婦人が男子の壓迫を甘んぜざることを世界的に標榜したものであると言ふことが出來る。實に十九世紀は平民の貴族に對する反抗であり、二十世紀は婦人が男子に對して其權威と人格の承認を要求する時代である。世界の交通が行はるゝ以上、我國のみ此世界の大勢に觸れないでゐることは出來ない。之を撲滅するといふが如きは到底不可能である。洪水の時の如くに、その水を自然に誘導して、之を善い方面に流るゝやうに心懸けねばならぬ。而して此婦人の新傾向を善導するは實に新敎育の奬勵、機關の設備、及社會の法律習慣の上に婦人の人格を認めて之を尊敬することにある。家庭に於ける夫婦は主從の關係で無く、朋友の關係を保つて、互に尊敬し合ふことに努めねばならぬ。妄りに官憲の力に依つて是れが撲滅を圖るが如きは只内攻せしむる虞あるのみであつて毫も其效力は認められない。

只然しながら玆に新婦人の傾向を口に藉りて、妄りに猥褻な事を筆にして恥ぢざるは實に新婦人の傾向を誤解せしむる所以であつて、苟も猥褻事項に亙る時は遠慮なく發賣の禁止を命ずることが當然なる處置であらうと思ふ。今日立憲政治の時代に在つても猥褻は之を許すことは出來ない。實は日本の官憲は猥褻の文字に對しては甚だしく寬大である。恐らく日本の新聞雜誌程猥褻な記事を掲載して憚らない國は他の文明諸國には尠いであらうと思ふ。政府は思想の自由を壓迫する。例へば南北朝問題の如きは强に之を抑壓しておきながら、新聞の猥褻文字を取締ることをしない。所謂今日の三面記事の如きは他國語に飜譯することの出來ない種類の物が多い。それといふのも朝野の貴顯紳士が均しく之を實行して憚らないに因るのであらう。國民としても之を恥づることを知らず、國體としても亦之を恥ぢとせず、而も其間に忠君愛國の思想が成つてをつたが故に、有爲の婦人は此間の矛盾を默過することが出來ず、馬鹿々々しさの感に打たれざるを得なかつたのは當然であらうと考へられる。

故に此新傾向をして眞に意義有らしめんとするには、先づ第一に男子は醜惡なる行爲を謹み、女子は節操を重んじ、新傾向に對しては能く之を理解し同情して只弊害の有る所をのみ取締るとに注意せねばならぬ。苟も婦人を侮蔑する如き文字は政府の干渉によりて之を禁止するとは、之を立憲政治の本義に照して毫も差支なきことである、只思想言論の自由は之を尊重すべし。猥褻の文字に至つては何處までも之を取締らねばならぬ。世人は此正當なる婦人界の新傾向と、此種の惡傾向とを混同してはならぬと思ふのである。

△所謂新しい女と官憲の抑壓

文學博士 谷本富

○近頃都下發行の一二婦人雜誌に相踵いで發賣禁止の事ありたるより、圖らず一問題となつた樣だが、それが果して所謂新しい女の發展を抑壓せんとする爲めにしたとかどうか、實は太だ不明の樣にも想はれる。當局者の說明ともいふべきものが其の後何かの新聞紙に揭げられてあつた樣だが、それに依つて觀ると、どうも當局者には別段に所謂新しい女てふ思想を抑壓せんなどいふ考はなくて、寧ろ右被禁止の雜誌が文字用語の頗る鄙俚にして淫猥なるものあるより、風紀取締の爲めに發賣を差留めたといふとが重に成つて居る樣に見受けられる。若し果してさうであるならば、論點は自ら二つに分けて見ねばならぬ。其の一は所謂風俗壞亂の如きはいつ迄も政府の取締を要する事であるかどうかといふとで、他の一は又所謂新しい女は勢、淫猥にして風俗壞亂と成りがちのものであるかどうかといふとである。

○第一の風俗壞亂に就いては自分は遺憾ながら當分の所相應の取締は或は不得已事であらうかと考へて居る。教育の力に由り社會一般に恥を知り禮を重んずる樣になる迄は、政府の干渉も亦幾分の必要があらう。但し何をか眞に風俗壞亂と謂ふべきかと云ふとは、當局者の毎に充分注意せらるべき筈のものであつて、然かも實際は或は判斷に手落が出來ぬとは限らぬ。一方に過嚴にして而して他方に失寬といふともあるかも知れぬ。孑々たる小魚に酷にして而して却つて呑舟の大魚を漏らすの譏を受くるともあつてはなるまい。それは猶ほ夫の危險思想と謂ふ如きものでも同樣で、新思想の取締に綿密なると共に舊思想にも隨分奇妙な者のあるとを看過する樣などがあつてはならぬ。先般も或る婦人雜誌に有名な女子教育家の意見として「我儕女子たる者は故大將夫人の貞烈に傚ひ今後は須らく常に匕首の用意あるべし」といふ風な事が書いてあつた樣に覺えて居る。尙ほ又近日の新聞紙には凡そ男子戶主たる者は皆帶刀御免あるべしとの意見を提出した人もあるやに見えて居た。こんな事も堂々たる武士道といふ上からは當然の議論かも知れぬが、果して縱令鼓吹して差支ないかどうか、當局者も一考を煩はす値打はあらう。

○自分は曾て獨逸留學中にライプチツヒで政府が遂にトルストイの一關

の力』の興行を禁止したのに際會した。然し同書は我が國には現に一二種の翻譯があつて、別に何等の干渉をも受けぬ樣だ。興行せぬからと云へば一應の理はあらうが、どんなものであらう。否特に自分等の平素片腹痛く思ふ事は紳士淑女の話頭にも數々下がゝりの事が露骨に言はれて何等恥づる色なく、花柳病に關する藥劑の廣告は麗々と新聞紙上に大書せられ、剩へ一種避姙用具などの名稱さへ些も憚る所なく店頭に掲示せられたるを見ても誰人も別に怪しむ模樣のないとである。斯樣の事こそ實は先づ速に取締らるべきものではなからうか。活動寫眞にも數々言語道斷のものがある。

○次ぎに所謂新しい女は本來風俗壞亂と親密の關係あるかどうかと云ふに、自分は一言の下に斷じて是れなしと謂はんとする。眞の所謂新らしい女は固より決してお轉婆や蓮葉女と同意義語ではあるまい。彼等は頻に解放を希求して居る、併し解放したからとて一切無禮講の不行儀な生活を行うて可なりといふ筈はない。所謂新しい女とは層一層向上進歩した者の義なりとせば、野蠻卑猥の言行は屹度愼むべき筈かと思ふ。或は又所謂新しい女は舊社會の繁文縟禮を喜ばず、萬事可成自然に立脚らんとするにて、自然主義はやがて彼等の本領なりと辯ずる者もあらうが、如何程自然主義の崇拜者ぢやからとて、折角人間と生れながら下等動物同樣の振舞をするは決して譽めた話ではあるまい。これを要するに所謂新しい女の眞に新しい女たる者は、固より決して病的の女や、頽廢の女や、異常の女や乃至犯罪性の女などと同一視すべき者ではあるまいと云ふ事を、乍憚似而非新女子諸君に忠告致して置きたい。

○自分の見る所にては眞の新しい女は何はさて措き先づ眞摯な人でなくてはならぬ。既に眞摯である以上は多少個人主義の臭味を帶びたとて、それを直に危險扱ひするにも及ぶまい。夫の『女大學』一派の三從七去の教などは時勢の變遷に伴ひ其の儘に永く嚴守する事は恐らく出來難からう、現に福澤先生の『新女大學』があつて夙に行はれ出して居るではないか。今後の新女子が同等とか同權とか言つたからとて、それを直ぐ危險扱しては困る。自分とても女子の天職は概して良妻賢母であると考へて居るが、併し今日の良妻賢母は自ら昔の良妻賢母とは一大相違のあるべき筈で、或は眞の良妻賢母たる者は夫眞に同等者たり同權者たる上で始めて出來ると云へるかも知れぬ。今からは復たどうも夫の常盤御前などを良妻賢母として子女に教へ示すとは困難であらう。家族家庭の依然大切な事は勿論だが、それは寧ろ男女間のソリダリテーで出來るのではなからうか。尙ほ婦女子の中にも天性獨立して學問藝術で身を立て樣とする者があつても、一概に貶すとは出來ぬ。英國の女子參政運動でさへも、其の所行の過と亂暴と成るとは固より戒むべきであるが、根本の主義とする所に就いては輕々に非難すべきものではなからう。自分は我が國當局者の賢明なる、漫に新思想ぢや新運動ぢやからとて、それを頭から壓抑し去らうとするなど云ふとはなからうと信じて居る。乃ち今度發賣禁止の雜誌は遂に一讀するに及ばなかつたが、自分にはどうも風紀取締上から來た事であらうかと思はれる。因に自分の意見は『女子教育』なる一

書を明治四十四年の暮に出版してあるから参照なりたい。尚ほ目下別に新に執筆中の『所謂新しい女』と題するものをも不遠公にしたいと思つて居る。又新刊の『洋行土産談』中には本問題關係の記事は太だ豐富な積ぢや、是非共一讀を煩したい。要する所は善良なる家庭教育、社會教育に由つて時弊を救濟せんとするにある。

△教育家として見たる婦人界の新傾向

成女高等女學校長　宮田修

成程世間では、婦人界の新傾向に對して官憲の抑壓がひどいと言つて居る。けれど今日官憲の抑壓が如何程まで、此問題に加はつてをるか、僕は能く知らない。新聞などを見ると文部省は此新傾向を憂へて學校當事者へ何か注意を與へたやうに書いてゐるが、そんな事はなささうだ。少くとも僕の方ではそんな注意を受けない。思ふに若しそんな噂があるとすれば、是れは近頃新しい女の問題が起つて來たので、文部省其ものは何も云はなくても、一部の教育者自身が官憲の意嚮を慮つて、さながら注意でも受けたかのやうに、周章して居るのではあるまいか。尤も婦人雜誌の發賣禁止といふとは、事實チヨイ〱行はれる。是れは僕等にも隨分いかゞはしいものだなと感ずる材料が多いのであるから、之を官憲の手で適度に發行の禁止なり又は其他の方法なりを採るのは至極時宜に適した處置と思ふ。

今日一般の青年子弟が好んで讀む雜誌の種類と、學校の教師が讀むで爲になるとか、讀むでよいとか云つて、生徒に勸める種類とは、其間に甚だしい懸隔がある。又――女學校では未ださういふとは殆ど無いやうだが――中學校の生徒などが其教師に隱してやつてゐる一種の秘密回覽雜誌や、一般雜誌の投書欄に現れて來る男女青年の文章などに就いてみると、斯うも生徒と教師との間に距離があるかと驚かれる。是等を以て見ると今日の文學雜誌や小說書の類は、青年子弟を誤る事がひどいとも思はれる。然しながら僕の觀察は彼等一般子弟の受ける惡影響感化が單に淫猥な小說類を耽讀する爲めとのみは思へない。即ち他の方面から受ける所の影響も尠くなからうと思ふのである。僕は此間初めて淺草の活動寫眞を觀いて見た。映寫してゐる寫眞其物は何方かと言へば勸善懲惡を主意としたやうなものが多かつた。がそれを說明する辯士の態度や口吻は、往々純粹に生ひ立つた青年子女の頭を攪亂しはしないかと思はれる場合があつた。勿論當局者は映寫の寫眞に就いては嚴密な取締りを勵行してゐるのであらうが、辯士にまでは其取締が及はぬらしい。然しながらそのやうな弊害が有るからと言つて活動寫眞を絕滅さすべきかといふに決してさうではない。有益な知識を與ふる場合も非常に多いのであつて、吾々は之を教化の機關として利用したいと思ふのである。さうして此種の事は教育者の任務であつて、官憲の手で行はるべき性質のも

のではなからうと思ふ。

かの新しい女といふものに對しても決して頭から壓迫を加ふべきでは無い。斯ういふ氣分が萌したにはそれ相應の理由も有るのであつて、それを察せずして頭から抑壓せうとしても決して抑へきれるものではないのである。殊に彼等の主張する處にも正當な點が有る。例へば自覺といふが如き事は今日一般に最も望ましい所であつて、教育の側から言つても女子の自覺といふとは教育の目的として養成すべき大切な事柄の一である。然しながら何と言つても日本に於ける此種の運動はまだ幼稚で、淺く狹い。之を代表する者の知識の程度も最も高いもので女子大學の卒業生低い者は女學校程度である。語學の力に至つても極めて覺束ない。平易な小説を讀み得る位の程度で、深く込入つた哲學書を讀みこなす力があるか何うかは疑はしい。であるから之を抑壓するにしては餘りに反抗が少い。自然に放任しておいても、飲んだ分量が知れてゐるのであるから何時かは吐出して了ふに違ひない。良い氣になつて彼等が何時まで騷いでゐた所で、お客の方では倦きて了つてさう〳〵は買手が附くまい。自ら消滅するより外はないであらうと思ふ。

然しながら此際吾々教育者の採るべき任務は、斯うして一且萌して來た氣運をいかに善導するかといふとである。正當な理解者ともなり、同情ある味方ともなつて、さうした氣運の中から良い分子を取り出して之を他に導いて行かなければならない。例令面白くない芽でも、出た芽をよくのばして美しい花を咲かすのが、巧な園藝師の腕だ。夫を官憲と共に氣に入らないと云つて踏みつぶさうとするは、餘り不忠實な態度だと思ふ。僕は寧ろ見識のある多くの教育家と共に、先づ今日の若い人々の心理作用を了解される氣分になつて、夫れから共間の是非を判斷しつゝ彼等をして眞に踏むべき途を拓かせて往きたいと思つて居る。

△今日の婦人に對する希望

法學博士　高田早苗

婦人問題は今日何れの邦國に於いても多少起つて來つゝある、所謂新しい女の主張は必ずや何等かの意味も有り根柢も有るに相違ないと信ずるが、然しながら現在我國に於てこの問題が果して如何なる意味を有し、又如何なる程度にまで發達してをるかは、親しくそれに接してゐない私には能く解らない。從つて官憲の取締に就いても、如何なる雜誌が如何なる記事に依つて發行を停止されたのかといふ事もよく注意しないから、是れに對して論議を挾むとは出來ない。只男と女、夫と妻といふ關係に就て何か云へといふことならば少し計り述べて見よう。

元來婦人側の申分が今迄女は男に對して愛と敬とを捧げつゝ來て居るのに男が女に與ふる所のものは愛のみであつて、敬が無い。是れは不公平な事である。女が男を愛し敬すると同時に、女も男から愛されるのみでなく敬せられ度いといふ要求であるならば頗る至當の事であつて毫も

異議を挾むべき餘地は無い。然しながらさうであるからといつて、其要求を滿足さす爲めに過激な言論を振廻して、空騒ぎをしてみた處で始まらない。そんな事で其目的は達せられやう筈が無いのである。そこで私の婦人に對する希望は此際そのやうな空論を廢して實力を養ふといふとである。男から愛されるのみでなく敬せられん爲めには、敬せられるだけの實力を女の方に養つておかねばならぬ。女は男が稼いで來たところのものを只消費してゆくといふ事より外に能力の無いといふ有様では、このせち辛い世の中に到底女は男から敬せられる資格を有さないと言つてよからうと思ふ。夫が辛苦艱難して貯へた財産も夫の死後其妻が、他人に欺かれて蕩盡して了ふのが往々にして世間の狀態である。妻は夫の遺産を護るだけの手腕さへも有たないのが多い。只夫の生きてゐる間は夫の手から喰はせて貰つて、夫の死んだ後は其殘された財産をすら守護することの出來ないやうな婦人の狀態であつて、男から敬せられんとするが如き要求をするのは抑誤れるものと謂はねばならぬ。

　であるから今日の婦人が其の要求を本當に貫徹せしめやうとするならば、少くとも消極的に家庭の經濟を處理する手腕を養つて、夫を助ける力を有つやうにせねばならぬ。尚一層積極的には、實際手を下して働かないまでも、働けば働くとの出來る生產的能力を養ふべきであると思ふ。この能力が發達すれば女の地位は自然と高まる、其證據には都下に澤山在る女髪結といふものゝ家庭を見ると概ね亭主より以上の權力を妻君が有つてをるものである。生絲を盛んに産出する上州地方の名物は「嬶天下に空ッ風」といふくらゐであつて、女が生產的事業に從へば從ふ程女の權力が增して來るのは此等の事實に見ても解るだらうと思ふ。さうかと言つて總ての女が男と同じやうに實際生產的事業に從ふといふ事は自ら問題であらうと思ふが、少くとも是れからの女は、何時でも働き得るといふ能力と心がけとは之れを養つておかねばならぬと思ふのである。

　それから今一つは、女も社會的知識を養ふ必要があるといふとである。今言つたやうに、夫の死後、妻は財產を欺きとられて、空しく孤兒を抱いて路頭に迷ふといふやうな羽目に陷るのも皆此知識の缺けてゐるとから生ずる結果である。一兩年前文藝協會に依つて演ぜられた「人形の家」の芝居を觀ても解るやうに、ノラといふ女があのやうな間違を仕出かしたといふのも、今言つたやうに第一生產的能力が無く、夫に轉地療養をさせる金を稼ぎ出すことが出來ないのと、社會的知識が無かつたが爲めに父の僞筆は差支ないと考へて謀署謀判といふやうな罪を犯すに至つたためである。そこで彼女は人形をやめて人間となる爲に修養す可く發奮した譯である、要するに今後一般の婦人は徒らに空論を唱ふることを廢めて、徐かに其實力を養ふことに力めたならば、求めずして自ら男子と對等の地位に進み相互平等に敬と愛とを捧げ合ふ樣な關係に成るであらうと思ふのである。

△當局者を戒む

岩野泡鳴

危險だから取り締まる、不健全だから發賣禁止をすると云へば、それで一應の理由にはなるやうだが、さう云ふ人々の頭腦に立ち入つて考へて見ると、あんまり馬鹿々々しいとがあるのに驚かされないこともない。新らしい女と云ふことが評判だからツて、それを利用して、新らしい女その物から見れば、別に新らしくもなく、また思つても贊成してもゐないことを、何かの手段の爲めに、誇張し廣告してゐるものがある。女郎が告白をすれば、淑女がざツくばらんに墮落すれば、女優や女記者が待合か何かを開らけば、それで新らしい女になつてしまう。そんな記事の潤色や誇張に、現今の取締法に牴觸するところがあらば、その法がある以上、官憲の手は職務上ぼんやりしてはゐられまい。然し猫も杓子も一切に平等視するやうな官憲の、つまり、實際の事情に迂い手は、往々婦人界に對しても、新時代の傾向を表する眞面目な思想や發表をまでも、誤解的に、若しくは誤解でなくとも舊式的に、壓迫する結果を生ぜしめないとは云へまい。

かう〳〵云ふことはいいことだ——惡くはない——若しくは、止むを得ないことだ——が、既定の取締法に面じてだまつてゐるわけに行かない。こんな、比較的に理解深い場合が若し官憲がはにあるとしたら、この場合、僕等の望むところは、そこまで理解が進んだついでに、その不都合若しくは不便利な法を早く改正するやう、努めて貰ひたい。と同時に、改正までは、十分注意深い（乃ち、新らしい方へ爲めになるやうに注意深い）手加減を施して貰ひたいものだ。けれども、さうよく分つた人物は內務省にも、文部省にもゐないやうだ。

唯壓迫することにのみ骨折るのは得策でないと云ふ考へは持つてゐやうだ。また、成るべくさし控へた取締りをしてやらうと云ふ同情はあるやうだ。が、その考へや同情が實際の違法者、實際の犯罪人に對すると同じ物であるならば、官憲がはに於ては、矢つ張り、何等の進歩も了解もないのである。この點を僕等は先づ爲政者等に注意したいのだ。

從來の習慣や道徳に反對するものであるとして、それを直ちに違法もしくは社會紊亂の行爲だと見做すのは、決して當を得て居ない。俗惡な賢母良妻主義の俗惡な基礎を危うくするやうな文字や議論があるからつて、それを忽ち無教育、無道徳の鼓吹と思ひ爲すのは、同じく正當ではない。今日少しも疑ひのはさまれない地動說は、ガリレオ以前の信仰の習慣を全く破壞してしまつたものだ。お轉婆仕込み、男のやうな女を出した教育に對して出來た賢母良妻主義はよかつたが、現代の同主義は教育界に於て理想のみはたとへいいとしても、その實際は、俗惡劣等の情態に落ちてゐる。これに反對するのは、中世紀の頑迷な耶蘇坊主のやうな形式的、僞善的、教育家連には困り物かも知れないが、新時代のわが國民の爲めには、ガリレオの地動說である。

今の官憲の多くは、おのれ等の正調と無理解との爲めに、眞實な地動說を危險とし、地動說に伴つて起つた新らしい思想や道德を不健全だと見るやうな傾向で持ち切つてゐる。で、僕等は官憲側に注意して、僕等の得意さうに云ふ危險とか不健全とかは、新らしい國民には必ずしも危險でも不健全でもないことを十分に悟つて貰ひたい。國家思想は改つても、立君憲政の基ゐは益々堅くなるのだ。家族制に對する觀念は變つても、居候の少くなる家族は國家の單位としてもつと國家を鞏固にする。そして、官憲がはがおのれ等の時代後れの思想や見識を以つて、直ちに僕等青年の全然採用すべき標準だと思ふことをやめて貰ひたい。今の青年には、四十歲前後から以下に至るまで、新時代に相當する新思想、新道德の基礎が固りつつあるのである。それに對して、老年に傾いた若しくは老年の機嫌を取る役人達は、左ほど心配や老婆心を起すには及ばないのである。

ただ僕等にも困ることは、新らしいことが評判になると、何にでも新らしいを利用し、新らしいに雷同するものがあることだ。然しさう云ふ方面のことは、たとへ眞に新らしいものが出來た爲めの一結果とは云ひ條、――何にでも多少の弊害は伴ふものだ――新らしいこととその事には直接の關係がない。同じ治安妨害、同じ風俗壞亂の廉で一般的な取締法を施行せられたとしても、たとへば、女子文壇の記事と青鞜の記事とは眞面目と眞摯との態度に於て全く物が違つてゐる。

こんなけぢめが官憲側にも分つて來たら、婦人間の新思潮の眞相も亦官憲によく分るやうになるだらうし、取締りその物の精神もおのづから正當な(今では、正當でないのが多い)手加減にあるのも分るだらう。そして外國に對しても不體裁なほど無見識な、ぶつきら棒な干渉などをわが思想界や文藝界にもしなくなるだらう。(大正二年五月十三日)

△婦人問題の前驅

金子筑水

今日までの文明を假りに智慧の文明又は力の文明であるとすれば、在來の文明は主として男性的文明であつて女性的文明で無いと言へやう。女性の間にも勿論無數の卓越した人々が今日まで存在したわけであるが、大體から見て知識と力とに於いては、女性は男性に劣つてゐたと言つて差支ない。此點に關して殊に婦人運動論者の中に誤解が有る。婦人の力が今日男子に劣つてゐる所以は、主として在來の歷史の結果で、今後若し女子を男子と同じ境遇に立たせてゆけば、女子と雖も男子と同じ地位に上る事が出來ると、こんな風に考へられてゐる。多數の婦人運動論者の間には此の議論は既に決定されてゐる事實であるかの如く考へられてゐる。私は之れに對してまだ一種の疑を有つてゐる。理論上女子が男子と同じ可能性を有つてゐるといふ主張に對しては勿論異存は無いのであるが、女子が果して男子と同等な可能性を有つてゐるや否やは事實の上

の證明を俟たなければならない。事實の上ではまだ此問題が解決されてゐない、今日までの歴史に於いては兎も角男性と女性との間に大なる懸隔が有つたとすれば、女子は果して今後男子の進歩に事實上追ひついて行く事が出來るであらうか。勿論男子も全速力を以て進歩して行く。永い間不利の地位に立つてゐた女性が果して僅かの年代の間に此進化の結果を顚倒することが出來るであらうか。これはまだ容易ならない疑問が有る。加之男性と女性と生理的に違つてゐることが、知識や力の成功に何等の差を及ぼすものでないといふ精確な理論上の根據に至つては今日まだ表れてゐない。そこにもまだ深い研究の餘地が有ると思ふ。

若し理想的に言へば、男女の地位の關係は結局相互的對等的のものでなければならない。今日までの兩性の關係は一方が主位に立ちて他方が之れに從屬してゐた。將來進んだ社會に於いては、理想として斯かる從來の關係は次第に廢れてゆくに違ひない。女性も男性と同じく人間である限り、人間としてはいかにしても同等でなければならない。同等であつて始めて眞實の意味に於ける相互的補翼が成就される。將來の婦人の位置が今後益々高められて行く事には最早何等の疑も無い。此點から觀て婦人運動は到底免れない必然の勢である。歐羅巴に於いては勿論の事、日本に於ける婦人の境遇は男子から見てさへも眞に同情に値する程劣等である。言葉通り彼等は奴隷視され虐待されてゐる。所謂賢妻良母は彼等を奴隷として取扱ふに最も恰好な口實に過ぎない。但し日本の婦人狀態と西洋に於けるそれとを比較して見ると其間には殆ど雲泥の相違が有る。いかに贔屓目に見ても、全體の日本の婦人が西洋の婦人ほどの地位まで進んでゐるとは思はれない。極端に言へば日本ではまだ婦人運動を起すには早過ぎるかの觀さへ有る。婦人運動は結局の意味に於いては單に机の上や雜誌の上の議論ではなくして、事實上の主張でなければならない。男子に對して宣戰を布告するだけの實力が女性に伴つての上の事實上の主張でなければならない。さもなければ彼等の主張は徒らに冷笑や嘲笑の的と成つて了ふ。勿論斯かる實際運動が始まるに先立つて、さま〴〵理論上や新聞雜誌の上の議論が戰はされる事は、眞實の婦人運動の前驅として到底免れない必然の傾向であらう。此點から見て、今日一部の女性が新しい女を絶叫してゐる事實に對しては寧ろ同情すべき點がある。然しながら大體に於いて今日の所謂婦人運動は到底まだ本物でない、恐らく後に來るべき眞實の運動の前驅や又は犠牲となるものであらうと思ふ。

私は眞實の婦人運動が現れるに先立つて、今日の女性に對つて二つの註文を提出する。其の第一は經濟上の獨立である。此點は最早充分世間に理解されてゐることであるから詳しく述べる必要がない。言ふ迄もなく、西洋に於いては、女子は假令彼等が人の妻と成つても夫と同等な經濟上の獨立的基礎を有つてゐる。女子が經濟上獨立する結果は今日の家族制度に大變化を與へるかも知れないが、結局そこまで行かなければ婦人運動は無意味に終つて了ふ。先づ此點に於いて或程度までの準備が具はらなければ眞實の運動は始まらない。

第二、是れも已に明白な點ではあるが、女子は先づ男子に對抗し得べき實力を養はなければならない。今日の儘で男子と競爭しようと夢想するが如きは結局徒爾の業に終つて了ふ。どうしても實力の養成が大切である。女性が今日の如く男子に對つて自分の位置を高める事を哀願するやうな態度を採らず、男子をして女性の實力を認めざるを得ないやうにさせるが第一の急務である。此點を看過して漫然婦人運動を叫ぶが如きは、女子の地位をして益々不安ならしめる所以である。

大體以上のやうな譯であるから、世間は今日所謂新しい女若しくは之れに類似の運動に對して猥りに之れを冷笑するとか、抑壓するとか、壓迫するやうな態度を取らないが良いと思ふ。始めから根柢の有るものであれば益々發展させて行かなければならぬ。官憲にしたところで、ひとへに風俗を壞亂するとか、一國の秩序をその根柢から破壞するといふもので無い限り、寧ろ之れに對して寛大な態度を取つて行くがよいと思ふ。最近に現れた取締りの如きは少くとも私が聞いた部分だけでは當りまへなものゝやうに考へられる。只從來の賢母良妻主義と違つてゐるといふ理由で猥りに婦人運動を壓迫しやうとするが如きは却つて眞實の婦人運動を邪道に追ひ遣る結果を招くものだと思ふ。

△婦人雜誌の惡傾向と家庭の取締

文部次官　福原鐐二郎

近頃の新しい女といふのは青鞜社とか新眞婦人會とかいふものを指して言ふのであらうが、彼等の主義主張を明に知らない私は之に對して何とも論評を下すことは出來ない。之を論評せんとする以上は其主義主張を研究した上で無ければならぬと思ふ。只然しながら近頃の婦人雜誌といふものは、之を教育者と言ふ側から見ても、又單に親といふ立場から見ても、安心して子女に讀ませておけない種類の物が多い。大體從來から婦人を對手にする雜誌にはさういふ傾向が有つて必ずしも今に始まつた譯ではない。例へば婦人の虛榮心に附込んだりすることは今迄からの雜誌に見る弊害であつた。ところが近頃の婦人雜誌にはそれどころでなく、實に女としてあるまじき事を紙にして喜んでゐるやうな傾向が見受けられる。野卑な淫猥な、殆ど口にすべからざるやうな事を書いて得意でゐるやうである。それから今一つは此日本在來の家族制度を全然破壞するやうな記事が有る。夫婦といふものも一種の淫賣であるなどと言ふやうな、極めてつまらない事を言つて夫婦關係を呪ふやうな、家族制度を根本から破壞するやうな事を言ふ惡風潮が有る。

であるから此種の出版物を適度に禁止するといふ事は、決して不良い

とではなく寧ろ當を得たるものであらうと思ふ。然しながら官憲の手で取締まられるもののみが社會風敎の上に害の有るもので、然らざるものは差支ないと言ふ譯ではない。敎育者としての側から言へばまだ／＼禁止されない物の中にも、純粋な子女をして讀ましてならぬと思ふ物も澤山に有る。此等の取締りは官憲の手に委せておくといふのみでなく、又學校當事者に其責を負はすといふのでなく、各自家庭に於いて嚴重に取締らねばならぬことと思ふ。まだ日本では自分の娘達が何か讀んでゐると、其親は娘の讀んでゐる物の性質を質さないで、「本を讀んでゐるのだから、まあ宜からう」ぐらゐに放任しておく風習がある。これは宜くないことで、此際各自に注意して此惡風潮に染まないやうに努めなければならぬと思ふのである。

△精神的救濟

宮崎虎之助

官憲の取締りに就いて私の最も感ずる所のものは、當に取締るべき物を逸して、取締らなくてもよい、つまらない事に力を入れてゐるといふ事である。是れは恐らく取締る官憲の側に其人を得ないが爲めであらうと思ふ。願はくは豐富な思想家、見識有る學者、即ち文學哲學に通じた各専門家が熟議研究の結果によつて取締を行つて貰ひ度い。之を人間に例へると、良心が自分の行爲を律する程重大なものでなければならぬ。全然完全なものでないまでも、良心が自己を制すると同じ意味に於いて人生上の一制裁として存在しなくてはならぬ。一個人に於ける良心のやうな意味を有つたものでないならば取締る權能が有らう筈が無い。であるから取締る側の當局者は社會の良心としての自覺を以て、餘程愼重な態度で處置を誤らないやうに心懸けねばならぬ。

私は此立場から見て、近頃の婦人の自覺とか覺醒とかいふものに對しての取締りには贊成することが出來ぬ。只然しながらさういふ運動、さういふ試みから出て來る結果――例へば文章演説の形をとつて社會に表れて來る上に於いて、世道人心に惡影響惡感化を及ぼすものと認めたならば、勿論之を取締るとは適當の處置である。其意味に於いて最近女學世界のやうな物の發賣禁止は至當の處置であると思ふ。淫猥野卑な肉的文藝は只人間を墮落せしむるものであつて、藝術の眞義に觸れたものと言ふことが出來ない。之を書いた人も素より人生の根本義に徹底してゐない、中途半端な人間であつて、之を發賣する雜誌の當事者も同じく人生の意義に徹しない、惡く言へば未熟な人間を對手に賣らうとする商賣的な目的に外ならない。人生を浮いたものと考へ、自分で自分を誤魔化した氣分の人に相違ない。若し私の言ふ所に首肯出來ないならば、それを書いた人、若しくはそれを載せた人は自分自身を能く突き留めて詮議したなら、決して其の誤つてゐないことを知るであらう。

又第三者として之を見ると、それが本當のものでありさへすれば、官

憲の壓迫が有らうと、社會の制裁が有らうと、破壞される氣遣ひは無いのみならず、益々光輝を放つて人心の奥深い處に突入する力を生ずるものである。であるから、それが本物であるか、僞物であるかを知るには、却つて間違つた壓迫でも加へてみた方が宜いかも知れぬとも言へる。根柢の無い者は壞れて了つて更に頭を擡げる事が出來ない。

故に兎に角非論理的肉的な淫猥な文字は、唯に官憲のみで無く、各自嚴密に自己を省察して、自分自身の中に自己を取締るやうにすると同時に、家庭に於いても親や兄や姉は宜しく子女の前途を保護しなければならぬ。此等の取締が行屆かない爲めに淫猥な小説を書いたり讀んだり、或は遂ひに不良少年の群に投じて墮落したりするに至るのである。要は自分で自分を取締るにある。それが出來ない爲めに憫れにも人の取締りを受け、總て官憲の手を累すやうな事になるのである。故に此際官憲たる者は此等の惡傾向を取締ると同時に、彼等を救濟するの方法を講じなくてはならない。印刷物の發賣禁止は抑ゝ末である。須らく根本に溯つて精神的に救濟するの道を採らなければならぬ。

△男子と官憲に望む

田川大吉郎

◎先づ新思潮と申さるゝ意味が一個の疑題であらうと思はれるが、こゝには、婦人の獨身生活の主張若くは理想の意味に解して置きませう。自餘の事は、要するにそれよりも低いもの、淺いもの、前方のもの、この高くて、深くて、進んだ極地の問題を解すれば、その餘は、解くに足らんかと思はれる。

◎婦人の獨身生活の理想は、必らずしも所謂生活難に淵源を發したものでは無い、それも掛り合の一因ではあらうけれど、太した原因とは思はれぬ、それだけ、小生は生活難の見地より之が解釋を試むるのを徒爾だと思ふ、然るに世間の多數は、之を主としてその邊から觀察し、研究して居る、遺憾に堪へない。

◎僕の視る所、獨身生活の要求は、我家庭生活の枯淡、無趣味より來る、これが一因である、男兒の生活の放縱不規律より來る、これが二因である、離婚制度の男兒の放埒を保障するに厚くして、女子は、男子の無禮の仕向けに屈從せねばならぬ實際の事情より來る、これが三因である、約めて言へば、女子の生活が、只管に束縛され、制抑され、窮屈一點張なるに反して、男子の生活の餘りに放埒不羈なる對照激變の事情に胚胎して居る、僕は始終を通觀して、此くと確信する、それだけ、僕は婦人の新運動を、無理も無いことゝ思ひ、たとへ、進んで贊成せぬ迄も、その行動を、同情を以て注視して居る。

◎然も、その議論は長くなるから省くとし、ところで、その女子達が、果して獨身生活を成し遂げ得るだらうかと思ふに、迚も駄目、僕は、日本に、そんな健氣な、理想に克つた、而して意地の強い女は、藥にした

くも醜人も嫌いと思ふものである、そんな氣合の女は、若し有りとすれば、國の寶だ、僕はそれを歡迎するけれど、どうしても、今日の我日本には、そんな女は、鐵の草鞋で探した所で、幾人をも得難いと、僕は、見切をつけて、失望致して居るのである。

◎曾て米國の二姉妹で、日本の教育府に雇はれた獨身の老孃があつた、その老孃が、一夕、僕の知れる獨身女に向つて、「自分が此くして獨身生活を守つて來たことを、貴孃は、自分のために願はしかつた事と思ふか、不幸な身上だと思つて居るか」と問うたことがある、その時、獨身女は、稍や暫時思案して「貴孃の今の境遇を多幸で無いと謂ふのでは無いけれど、若し結婚されたら、倘幸福であつたらうと思ふ」と答へたことがある、然るにその二老孃は、如何にも厳粛なる態度で「さう思はるゝか、然し乍ら自分等は決してさう思は無い、獨身なるが故に今日の境遇なりと信じ感謝に堪へぬ」と語つた相な、その二老孃は僕も知つて居た、當時僕は此答へがその赤心より出たことを信じた、而して日本の獨身女の感想は、矢張日本の獨身女の感想である、彼女は、晩年、その獨身生活を悔いて居た、因て此說があつたのである、僕は、有らゆる日本の獨身生活の女に、此感じがあることを思ふ。

◎此感じの有ると否とは、必らずしも問題で無いが、どうも、日本の社會は、婦人の獨身生活を滿足に遂げさせぬ、何かとケチをつけたがる、而して婦人その人も、固より一代に反抗して立つ氣力が乏しいから、それに屈したくなる、屈せらるゝやうになる、而してその生活を變ふべき十分の報酬の無い所から、動もすれば、會談の奧さん達に、肩身の狹さを感ずるやうになる、即ち、日本の社會は、斷じてかゝる流儀の婦人を容れまいとするが、左り乍ら、婦人の嫁すること即ち幸福とは限られ無い、普通の人はさうである、百人の九十人はさうである、九十九人まではさうである、その一人に對しては、必らずしもさうとは謂へない、その一人の爲にも、所を得させねばならぬ、その人が、獨身生活を以て理想に適すと謂ふなら、又、その所を擇ばするがいゝでは無いか、正則あり、變則あり、大道あり、小路あり、一概には往かぬのである、僕は此自由を婦人にも保たせたいと思ふのである。

◎そこで、所謂官憲の取締は、即ち束縛であらう、僕は、此取締を無駄な事だと思ふ、人の思想は人の自由である、その自由の範圍に立ち入つて取締らうとするのは無理である、そんな取締が出來ると思ふのが無理である、そんな事の取締は到底出來ないものだ、自然に放任するが宜しい、その有の儘に流れしむるが宜しい、それを制せんとし、防がんとし、塞がんとするから、波瀾が起るのだ、これは官憲の間違ひである、親切過ぎて反つて人情に暗い動作である、僕は、一切その取締を望まない、一切その取締の廢棄を希望する。

◎英國は珍らしい所だ、その公園には、政府顚覆の說及び無政府主義思想が、無數の群集の間に、寛容的微笑を以て迎へられて居る、それで大陸からの見物人は只驚いて目を見張つて居る、驚くのは、此の如く言論の自由なる所に、どうして秩序が維持され、宗教が活存するだらうかと

許るのである、然し乍ら、事實は、我等の間の秩序なり宗敎なりの、安全なる所以の要諦はこゝに在る、吾等は自由の歸依者である、吾等は自由の存する所に、總てのものが正くせらるゝとの本能的確信を有して居るのである、と、英國人自ら誇つて居る、敢て英國を眞似したいでは無いけれど、自由だ、自由だ、自由を與へよ、總ての事は即ち正くせらるるのである。

○僕は、非原則生活者が、十人や、百人や、千人や、一萬人あらうが、あるまいが、構ふ事は無い、どこに風が吹くかといふ大きな態度で、呑氣に處して貰ひたい、それを我官憲に望むのである、但、男子に對しては、今一段の緊嚴、眞正の生活を望む、立憲の政治は、非放縦の政治である、放縦なること今の我男子の生活の如きは、確に我立憲政治の賊である、立憲主義の敵である、さうさへすれば、貴問の如き現象は、今の我社會には、自然にして消えるのである。

△風俗壞亂以外にも取締れ

精華學校長　寺田勇吉

近來の新聞雜誌等に、新らしき婦人とか、大正婦人とかの名義で我々敎育家の眼から見ると隨分激烈な意見が發表せられ、又讀者もかゝる不穩の文字を揭げたる雜誌を歡迎する傾向があるのは、實に歎息の至りである。斯くの如き大膽なる女子の思潮の由つて來りたる原因は蓋し英國に於ける一部分のハイカラ婦人の男子的擧動等が我が日本の婦人の腦裏に感染した結果ではあるまいか。兎に角溫順を以て世界に類なき美德とせる我國の婦女界に斯くの如き過激な思想が擴がつて行くは極めて危險であつて、甚だ憂ふべきことである。近頃官憲が「女子文壇」や「女學世界」の發賣禁止を命じたのは我國の文運發展の爲めに實に止むを得ぬことゝ思ふ。

或新婦人の主張を聞くに「日本の女は妻や下女となり、子を產んだり之を育てたり、飯を炊いたり、雪隱の掃除をしたりして居る。其上に服從だの、貞淑だのと勝手な事ばかり男から言はれては堪つたものか」と。隨分思ひ切つた事をいふものと思ふ。かゝる驚くべき破壞的の言語を婦人が發するに至つたのは、或は今日の敎育の仕方にも缺點がありはしないかとも考へる。之は當局者に於て大いに硏究して貰ひたいのである。

獨り新婦人界の過激なる文字のみでなく、風俗壞亂以外に隨分非敎育的なることを揭げる新聞雜誌などが澤山にあつて、我々敎育者は隨分困つて居る。我國にては子供の讀む雜誌などについては一般に家庭では餘り干涉せずして、只其子供の選擇に任せてある。從つて市役所にても何等世話を燒かないが、獨逸では市役所に於て特別の取締委員があつて、諸雜誌中子供に讀まして有益なるもの、若くは差支ないもの等を充分檢査して一々之を通知するのである。それ故に兒童は先生の許可したものでなければ讀むことが出來ないやうになつて居る。又獨逸の極く小さい

町村にては町村長は本屋と交渉して子供に讀ましてわるい雜誌等は其の町村内で之を賣らせぬやうに取計つて置くから、父兄も大いに安心して居られるが。日本ではまださういふ用意がしてないから、今の處當局者が不都合と認める雜誌等は之が發賣を禁止するより仕方がないであらうか？然しながら此發賣禁止が果して有效であるかどうか甚だ疑問である。何となれば例へば五月號の女學世界は四月二十三日に内務省に納本して直ちに内外の書店にも發賣濟となり、それ／＼讀者の手に渡つて了つた時分即ち二十八九日の頃發賣禁止となつた、凡そ發賣禁止となつたといへば何か面白い事でも書いてあるに相違ないといふ好奇心から、書店に殘つて居たものも定價以上の價で皆賣れて了ふやうな始末で、且つ雜誌は時々發賣禁止をやられると、それが面白い雜誌といふことの廣告となつて、却つて其雜誌の賣捌がよくなるのが通例である。して見れば此取締法は餘り效能がないと思ふ。何か他にもう少しよい制裁の仕方がないものであらうか。

婦人問題は歐米文明國にても隨分難問題として研究せられつゝあるが、殊に幼稚なる我國にては取締方につき未だ當局者の態度も判然せず、只風俗壞亂といふやうなものは之を取締るが、驕奢心を奬勵するとか、虛榮心を增長せしむるとか、男子に對して反抗心を挑發せしむるとかいふやうな事に對しても——即ち風俗壞亂以外に對しても何取締をなす必要ありと思ふが、此等は内務省や文部省の當局者はどう考へて居るか。定めて研究して居るだらうと思ふ。我輩は婦人問題については此等の事までも研究するの價値があると思ふ。又近來の新聞雜誌中には、女子の主張ばかりでなく、堂々たる男子の論として教育者から見ると、意志の鞏固ならざる婦女子が見ては學校教育を破壞するといふやうな事が載せてあるから　此等も取締る必要があると思ふ。

或一種の新婦人の說を聞くに「男でも女でも別に人間に違ひはないのであるから、男子ばかりよがつて、女子を奴隷の如く扱ふのは抑々野蠻である。文明國では男女は同權である」といふて漸次男子と競爭して、男子の位置を奪はんとする傾があるが、之が抑々根本的の誤である。何故なれば世の中は分業によつて榮えるものである。其分業は天性に基いてよく行くものである。女子が天性に背いて男子と競爭しようとするのは實に不自然である。眞の文明とは男女各々特性を發揮して世の中を進歩せしむるにあるのである。今男女の體格及び精神について見れば、生理學及び心理學上から非常の差異がある。即ち男子は社會に活動して激しき勞働に堪ふるも、女子は然らず。其譯は體力及び能力共遙く男子に及ばぬからである。其代り又女子は男子の出來ざる分娩等の能力を有して居るのである。

尙少しく男女の差異について述べて見ようならば、先づ第一に女子は身長體量共男子に劣つて居る。女子の體格は大體やさしく、頭も顏も鼻も口も小さい。頸は長いが細い。胸には乳房があつて胸圍が狹く、且つ呼吸が弱くて急である。又女子は胸で呼吸するが男子は腹で呼吸する。食物は男子より少いが饑渴に堪ふることが強い。内臓機官も少さく、殊に心

識は狹少にして薄弱である。女子は脂肪に富み、血液は稀薄である。一〇〇〇の血液中男子の方は水分七八四、女子の方は八〇八の水分がある。男のは一立方ミリメートル中血球の數五百萬個あるが、女には四百萬個しかない。又腦髓も之れ男に比べれば數オンス輕い。それ丈け腦の働が鈍いのである。又男の考慮は深くして廣いが、女子の考慮は狹くして淺い。從つて考慮が男子の如く緻密でなく且つ整然と連續せぬ。但し男子に比して勝つて居るのは感情の强い事である。其外女子には三つの大役がある。即ち一が月經、二が姙娠、三が分娩だ。之を要するに女子は男子に及ばぬ點が以上の如く澤山あり、生理學、心理學、解剖學上、男子は原動的の生活を營むに適して居る。女子は之に對して受動的の生活に適して居る。斯くの如く男女の天性に於て差異ある以上は、女子は其本性を發展せしむるが第一であつて、且つ其幸福である。今日一部の女子が其本性を忘れて徒らに男子と同等也、男子の爲す所女子も亦爲し得べしといふが如きことは、實に誤れるの甚しきものであるから、官憲たるものは獨り風俗壞亂といふ意味に於てのみ取締をなさず、女子の天性に背く行爲即ち不自然なる行爲に關して直接及び間接に充分なる取締、否誘導せられんことを我輩は偏へに希望するのである。

△行爲を放任して思想を取締るとは何事ぞ

安部磯雄

大體に於て私は思想の取締りといふやうな事は政府の遣るべきものぢやあるまいと思ふ。今日の文明國に於ては思想の自由は一般に許されて居ることで、又日本に於ても言論の自由といふ事が憲法に於て保障せられて居るのである。全體に於て思想を取締るといふことが根本的に誤であると思ふ。尤も或る特別の場合——例へば國家の基礎を危くするとか、一國の安危に關するとかいふ特別の場合には、例外として之を取締る事もなくてならんかも知れぬが、今日の日本の政府は、思想の取締りの權利を濫用して居らぬかと考へて居る。

元來取締るべきものは外にあらはれたる行爲であるべき筈である。行爲ならば危險な時には取締らなくてはならぬ。然し思想は其人の心の中にあるべきもので、未だ實際の行にあらはれぬものであるのに、それをも取締るといふやうの事になつては、非常に國民の元氣を消耗せしむることになつて、私は甚だ殘念の事と思ふ。今日のやうに國民の意氣の銷沈したといふ事も、一つには政府が餘りに取締や干渉を濫用することにありと見受ける。

昔は歐羅巴の中世紀時代に於て、思想取締の著しき實例が大分澤山ある。最も著しきは宗敎上の思想を取締ることであつて、其當時に行はれて居つた宗敎思想に少しでも反對するものがあれば直ちに之を異端邪說として排斥した。其排斥した有樣を、今日から我々が見ると實に極端と思ふことがいくらもある。行爲を取締らずして思想丈けを取締つた例を擧げていへば、どんなに不品行な人間でも又惡人と稱すべきものでも、

其者が只思想の上に當時の宗教に從つて居れば、社會は之を責めない。之に反してどの位高尙なる品性を備へて居る人であり、又どの位立派な學者でも、若し思想の上に於て當時の宗教意見に反對すれば、其人は直ちに異端者として邪說を唱ふるものとして排斥した。遂に首を切られ、火に焚かれたものも澤山にある。之は確かに今日から見れば不都合な話であつて、物の順序を取り間違へた話ではないかと思ふ。私共は思想といふものは決して危險なものでないと思ふ。危險な行爲を取締ることは固より正當であるが、單に思想として存するものを取締ることは本末を誤れるものだらうと私は信じて居る。日本の今日は餘程歐羅巴の中世紀時代に似て居る所があるかと思ふ。昔の羅馬法王が權力を以て異端邪說を壓迫した氣風が日本の思想界に殘つて居らぬかと考へる。之は決して私は政府丈けについていふのでない。政府も確かに壓迫して居るが民間にも矢張り同じ思想があると思ふ、思想の壓迫は官民を通じての今日の弊だと思ふ。

之を具體的に話して見れば、幸德事件のあつた以後、危險思想といふ新らしい文字が出來た。處が今日は其危險思想といふ字は昔の羅馬法皇が異端邪說といつたと同じ意味に使はれて居る。敵も味方も互に危險思想呼ばはりをして反對黨の言論を壓迫せんとする。之が最も言論を重んずべき議會の壇上に於てすら往々見らるゝ所であつて、日本は未だ如何にも幼稚にして、歐洲中世紀の眞似をして居るやうに思はれる。處が又一方に於ては、日本人は好んで曲學阿世といふやうな言葉を使ふ。之は多く民間の人々が官僚のものに對して壓迫を試みる所の言葉であるが、之にしても私は甚だ快く思はない。人の思想といふものは誰もかも銘々責任を持つて吐いて居る言葉であるから、若し其思想がわるいならば、此方も之に對する思想を以てせなければならぬ。危險なる思想があるならば之を倒すものは警察力にあらずして健全なる思想でなくてはならぬ。若し官僚派の提灯持をする人があるとしても、其れにも相當の理由があるんだらうから之を打破る議論がなくてはならぬ。濫りに曲學阿世などいつて一も二もなく之を壓迫するのは不健全の思想と思ふ。

要するに私は、思想の如きは大したものぢやないと思ふ。私の大したものでないといふ意味は社會に及ぼす弊害より見ていふのである。私は世の中に危險思想などいふものゝあるのを信じない。若し取締や干渉を嚴酷にするなら之こそ危險である。思想の自由は何等危險と考へない。

以上が私の此問題に對する前提であるが、進んで今日の新らしき婦人の思想を取締るのは如何といふに、之は實に下らぬ話であると思ふ。私は思想の點に於て男女の別を認めぬのだから、男子に許せば婦人にも許すべき筈のものと考へる。殊に日本などに於ては今迄男尊女卑といふ風があつたのが此頃漸やく婦人が自覺して、新らしき思想に眼が醒めて來たのであるから、其間に多少の弊害を生ずるのは寧ろ止むを得ざることゝして大目に見る必要がある。其人の行爲にして危險ならば之を取締るのも攻擊するのもよいが、思想其物を取締つたり、攻擊したりするのは甚だ不都合な話で、害があつても益のあることゝは信じられない。

私は内務省や或は文部省の當局者に充分に訊して見たいと思ふ事は、何故行爲を取締らずして思想丈けを取締るか。若し論理的にいへば、政府の方で充分婦人の行爲を取締つた上で、其上に思想をも取締るといふなら、まだ筋道は立つて居る。處が我々の見る所では、今日の婦人の行爲にこそ甚だ危險にして取締らなくてはならぬものがあるのに、之を取締ることをせずして、却て危險ならざる思想を取締るといふ事は、政府當局の遣り方に撞着があると思ふ。私は青鞜社などに於ける婦人がどういふ行爲をして居るかといふ事を一向に知らない。けれども縱令んば其行爲に於て非難すべき點があつたにしても、其人々を取締る以上は其行を取締るべきであらうと考へる。して行爲を取締るならば青鞜社の婦人よりも五倍も十倍も酷い婦人が横行して居ると思はれる。今日社會に害毒を流すものは待合などに出入する婦人に過ぎたるはない。已に一方には密賣を禁じながら、待合に入つて所謂紳士紳商に接する婦人の行爲をば少しも取締らぬ。何故さういふ風の行爲を取締らぬか。日々の新聞紙に上る待合話の如き社會風教に及ぼす害毒は、新らしき婦人の思想などに幾倍するか分らぬと思ふ。我内務省や文部省の取締などは全く事物の大小輕重を誤つたやり方と考へる。

私は次に一二の實例を擧げて政府當局の遣り口の甚だ矛盾して居ることとを述べようと思ふ。一つは私の友人から聞いた話であるが、其友人が先般下の關で以て先帝祭といふものを見た。先帝祭とは明治天皇のお祭りの事かと考へたら、それは安德天皇のお祭であつた。そして其祭りの主催者となつて居るものは娼妓である。張店に張つて居ると同じ服裝をした娼妓が、市中を練り歩いて踊つて居る。何故に娼妓が安德天皇の祭に重要な位置を占むるかといふに、平家の落人が壇の浦で落ぶれた時に官女の連中が遊女となつた。それであの邊の近邊の遊女は安德帝に奉仕した官女であるからだといふ。此事は公々然とやつて居ることであるが、之などは我内務及び文部の當局が何と見るのであるか。日本の天皇の御一人なる安德帝を祭る主もなる位置を占むるものが娼妓であるといふ事は、日本の國體の上からも教育上からも由々しき事と思ふ。それに第一此事は内務省の娼妓取締規則に違反して居る。娼妓は遊廓から外に出ることが出來ぬのを破つて知らん顔をして居る。自由廢業などの爲めに一寸でも外に出れば直ちに罰金を科せらるゝではないか。下の關の先帝祭の如きは如何なる方面から見ても、之こそ取締るべきものと考へる。

又今一つの例は新潟市にある事であるが、新潟市に神武天皇の紀念碑がある。之は多分日露戰爭の彰忠碑であらうと思ふ。像は確か地球儀を足に踏まへてお出になるので、實に莊嚴なものであるが、其の紀念碑に入る門の扉は新潟の遊廓の寄附したもので其事をちやんと扉に彫りつけてある。かういふ事が世間の問題にならないのを私は寧ろ不思議と思ふ。監督官廳たる内務省が之を知らずに居るとすれば迂濶の話と思ふ。

之を概括して言へば、普通りの思想さへ持つて居れば女郎でも藝者でも、又どんな不品行な事をしても、政府は些つとも壓迫を加へない。昔の儘の習慣でさへあれば取締らない。處が比較的に行爲が立派であつて

も、昔風と違つた事をいへば壓迫の手を伸ばすのは、全く古の羅馬法王のやつた事で、中世紀の事を、大正の今日に再現すると外、私共には考へ様がないのである。若しかゝいふ事を政府が續けてやつて居れば、實際日本の思想界は荒れ果てゝ、一も二もなく女は昔通りの型に嵌められて、少しも新らしい事をやることが出來ず、又婦人のみならず男子も同様となる。内務省や文部省のいふ通りにばかりなつたら、社會の進歩は阻害せられ、活動の源たる思想が一つの型以外にしか出ることが出來なくなり、それこそ國家の由々しき大事となると思ふ。私共は政府がも少し廣い立場――世界的眼光から見て、思想を取締るが如き方針をやめて貰ひたいと思ふ。

△罪の一半は女子にもあり

日本女子大學校長　成瀬仁藏

世界の文明は常に新しい運動に依つてあらゆる方面に進化し發展してゐるのである。新しい運動そのものは決して之を排斥すべきものでないのみならず、大に歡迎すべきものであらうと思ふ。その意味に於いて今日日本に起れる新しい女の運動を一概に排斥するのではないが。只彼等は餘りに極端に奔り常軌を逸してをるの嫌ひがある。極端なものと言つても、それが眞摯愨實な、衷心からの主張である限り、亦素より其の孰れの點にか一部の眞理が有るものである。彼の自然主義の如きも解し様に出ては絶對に排斥し去るヿの出來ない一部の眞理を有してをる。然しながら極端に奔るものは、概ね一時の反動的激情に基くもので、病的傾向と相伴ひ、若くは之が結果たり、或は之が原因となるものが多い。從つて運動の中心と成り、社會を導く要素とはなるヿが出來ない。今日日本の所謂新しい女の主張や行動に就いてはまだ詳しく知る機を得なかつたが、新聞や雜誌に散見する限りに於ては、矢張り病的現象の性質を多分に持つて居るものであつて新運動の中心と認めるヿが出來まいと思ふ。成程彼等の言ふ所にもそれ相應の主張は有らう。然しながら其主張は餘り多く西洋の感化を受けてゐるではなからうか。又其の行動はあまり一時の激情に馳せてゐるところがなからうか。日本と西洋とでは必ずしも事情が等しいとは謂へぬ。我國現下の狀態に就いて見るに、成程女子は男子から尊敬され優遇されてはゐない。然しながらそれは必ずしも男子の專橫に因るのではなくて、其罪の一半は女子も之を負はなければならぬ。日本の女子の一面には如何にも幾多の美點長所はあつたけれども、亦その無教育、無知なるがために、其の職分を自覺せず、爲すべき所を十分に爲し得なかつた一面もあるヿを考へなければならぬ。現に相當の高等教育を受けて、今日他に嫁してゐる女性に就いて見ると、彼等は相當の尊敬を拂はれつゝ平和に家庭を治めて、自分も滿足してゐる。私は新しい運動を起さうとする婦人に對して、他を動かさんとする前に、先づ女としての自己の品格實力を養はんヿを勸告し度い。狀態の改善は

決して冷め易い一時の興奮によつて出來るものではない。濫りに突飛な極端な運動を起して、之が爲めに却つて不良な影響を社會に殘すやうなことをする前に、顧みて徐かに自己を養つて、人として婦人として眞に尊敬すべき品格を造り、而して後十分の實力と道理とを以て起つたならば、必ず彼等が要求する女子の地位は自ら與へられ、充實した生活、自由な人格的活動をすることも出來るやうになるであらうと思ふ。であるから私の立場から言つて、社會に惡影響を與へる樣な極端な病的現象と認むべきところをば、官憲の手で適度に取締るといふことは、之は社會の風紀維持上素より必要なことであつて、不當な處置では無いと思ふのである。而して之と同時に、其の中の眞に志ある婦人を指導し、その意見希望の採るべきところを善く啓發して、眞に意義あり、價値ある、健全な生活改善運動たらしめることも、亦必要なことである。教化政策上この兩面は缺くべからざることであると思ふ。

△婦人覺醒の意義を誤解する勿れ

文學博士　井上哲次郎

近頃婦人界の思想の傾向について、當局者が大分取締を嚴重にして來たやうな有樣であるが、其可否如何については隨分異論のある處でありませう。我々の私かに觀察して居る所では、特に日露戰爭後、婦人の思想が段々と新傾向を生じて、さうして昨年以來最も著しい特徴をあらはして來たやうに思はれる。其原因はなか〳〵複雜であるやうに思はれる。一つは一體に女子といふものが封建時代に餘程壓迫されてあつた其反動である。封建制度より前にも勿論さういふ事はあつたのであるけれども、最も甚しかつたのは封建制度の時代であつたと思はれる。徳川時代などにあつては學問は比較的開けたといふものゝ、女子の教育といふものは極めて程度の低いもので、男子に比ぶれば非常な相違であつて、まア漸く少し手紙を書く位のがよい方で、無筆のもなか〳〵多かつたやうに思はれる。それに從來支那流の男尊女卑の思想が普及して居つた爲めに、女子といふものは奴隸の如く男子に使役さるべきものといふやうの考であつたし、又然らざれば男子の娛樂の道具であるかの如くに低く見たやうな次第である。其餘習が明治年間までいくらか殘つて居つた。いくらか所でない、隨分惰力が强かつたやうに思はれる。さういふ譯であるからどうしても一度は從來の弊習に對して反動が起らなければならん。一體に女子といふものはさういふものであるかどうかはなか〳〵大きな問題である。女子を男子より低いものと見て來たのは抑々之は永い間の習慣の結果であつて、理窟上よりいへば果してさういふものであるかどうか、そこに大いなる疑問が生じて來なければならん。處が明治年間以來段々女子教育は進んで居る。そして近年に至つては女子の中に大分高等教育を受けて眼の醒めたやうな感じを抱いて居るものもチラホラ出來て

居るに相違ない。已に今年は東北大學に二名の婦人が入學するといふやうな事などもあつて、以前とは大分違つて來た徴候が見える。又米國などに留學して專門學科を修めて來たやうな女子もないではない。それで段々女子の中に自覺を生じて來たものが、一體に女子の地位について疑惑の念を抱くやうになつて來たと思はれる。即ち從來の女子の地位に甘んずべきであるかどうか。必らずしもさういふ譯のものでなからう。女子も人間としては男子と變つた事はないと。そこで次第にさういふ自覺を生じて來た結果、新らしい思想の傾向がチラホラ見えて來たに相違ないのである。

然しそれ許りではなからう。も一つの遠因は日露戰爭後社會一般に生活難に襲はれて來て其結果女子が結婚するといふ事も餘程考へなければならぬやうになつて來た。結婚しても生活が困難で一生涯臺所の用ばかりして發展の途が別にないといふやうな事では餘り面白くない。それに女子にも多少自活の出來るやうな途も拓け、或は教員となり或は遞信省の判任官となつたり、大分女子の需要の途も多くなつた。そこで以前ならば結婚より外殆んど他の途なき有樣であつたが、今日では教育も進んだ結果、其等の點に多少の考慮を廻らして輕々しく結婚せぬやうなものも見える。之と相伴うて一層極端なものもいくらか出來て居る。それは獨立生活を希望する女子である。結婚をすれば單に生活難に困らねばならぬ許りでなく姑の爲めにいぢめられたりするやうな不愉快な事があるからして、さういふ事よりは一層獨立した方がよい。男子の爲めに使役せらるゝことを嫌つて男子の向ふを張る考で以て獨立主義を抱いて起つやうなものもないではない。それはまア極めて少數であらうが無い事はないのである。それからして又斯ういふ原因もあるのである。小說などを耽讀するものゝ中に殊に猥褻なる文字を喜び且つ芝居に出入して俳優と交際するものなどもあるし、さういふ種類のもので今日の思想に接觸して居るが爲めに妙に生開けに開けたやうな風であつて、總て道德的形式などいふものを脫却して放縱生活をやらうとする連中があるのである。さういふ放縱生活をなすものは何時の時代にも居つたのであるが、今日では多少文字の才もあり、多少ハイカラ思想も了解して居るやうな事で、昔のゝとは大分そこに又違がつた所がある。さういふ女子に至ると又家庭破壞などいふ事も敢て論じないといふ譯でもない。中には一度結婚して出て來たやうなものもある。家庭が嫌ひでさういふ煩さい事を離れて自由な放浪生活をやる。或者は結婚して居つても氣隨氣儘な女文士の生活をやるといふやうな有樣である。さういふ種類の女子の氣風、思想、情調等が相合して現今の婦人の流行をなして居るやうである。尤もまだ外にも種々なる種類の女子もあるが、今擧げたやうなものが主もなるものと考へられる。殊に今問題となつて居る女は主としてそんな種類のものである。

そこで當局者が之を取締るといふ事は或程度までは確かに必要と考へられる。といふのはどうも、新らしい女などいふものが講演などを聞くといふと、清淨無垢の妻君とか娘とかいふものも好奇心からして矢張り

聽衆の中に入り交つて聽いて居る。其言ふ事が悉くわるいとはいはぬ。其中に極く大きな所から觀察すれば固より意味のある事もある。然しながら中には本當に有害な事をいつたものもある樣子である。其有害な事といふのも聽く人が充分理解力もあり、又よく批評して取捨する力を持つて居れば何等の弊害も起らぬであらうが、兎角さういふ事に感染し易き若き婦人には如何なる弊害を來さぬとも限らんのである。此前の講演會の時にも肉の解放などゝいふ事をいつたさうであるが、さういふ言葉は非常に汚ない聯想を惹起すばかりでなく、淫猥な方の自由思想を誘發する恐が充分にある。其結果は次第に婦人社會の風俗頽廢となつて國家の不利を來すこと此上なく甚しい。まアさういふ事が無くつても隨分いろ／＼な氣遣はしい惡習も新たに起つて來る有樣であるのに、さういふ甚しき醜き主義を鼓吹するといふ事は良家の家庭に傳染病を誘うて來ると同じやうな事になる。それによくない考を持つて居るものが使用して居る半獸主義などいふ實に馬鹿／＼しい肉慾主義を唱へて居るものが尻押しをして居る。さういふ事からして新らしき女の會合なども開かれたやうに思はれるが、さういふ處を見るも、當局者の取締も一概にわるいといふ事はいはれぬ。寧ろ其當を得たと信ずるのである。其外二三の婦人雜誌が發賣禁止を喰らつたのであるが、どうも女學世界の如き雜誌には怪しな事を書いてそして讀者を釣るやうな惡弊が餘程以前からあつた。又女子文壇などにも隨分田舍の女子などを誤まらせさうな事がある。アレの餘りに雜誌の交換だとかいふ事を書いて、そして男子は假名を出して、考のない女子との通信をし初めて、段々女子を釣り出して貞操を汚したやうな事もあるのである。固よりさういうても女學世界や女子文壇のすべてがわるいといふ程に非難する次第でないいけれども、さういふ事も往々あつた所に隨分世道人心に害毒を流すやうな文章も掲載せられたから、婦人思想の餘りに淫猥險惡に流るゝのを恐れて、當局者が之を制止することも止むを得ぬ事であらうと思はれる。

然しながら又今日の高等教育を受けた婦人の中には眞面目に、一體の婦人問題について考へて居るものもないではない。今日の處未だ大したものではないが、いくらかさういふものゝ出て來たのは時勢の進んだ結果であると思はれる。德川時代に一體に女子が甚しく壓迫されて居つたに引き較べて見れば、どうしても自覺の結果さういふものゝ出て來るのは當然と見なくてはならぬ。出て來なければ却つて不思議である。一體に婦人の地位は高まつて來なければならぬ。そして又婦人が男子に遲れて進まなければならぬ。男子の方が先へ先へと進んで行くのに女子が後れて居つては、社會の進歩も片々になつて決して思はしき結果を得られぬ。故に婦人の中にさういふ眞面目な考を起して來たと云ふのは、極めて少數であつても、大いなる立場より見れば寧ろ喜ぶべき事である。けれども其爲めに妙な誤解を惹起してはいかぬのである。多數の婦人はまだそこまでは至つて居らぬのである。それを誤解して家庭の破壞、男子への反抗、放縱生活の奬勵などを婦人の自覺の本色と考へるならは非常の間違で危險此上ない。どうかするとさういふ風に崩れて行きたがるもの

であるから、之を教育の目的と一致させる爲めには厳しい制止策も效能もない事はなからうと思ふ。然し今後の方針としては寧ろ婦人の地位を次第々々に高めて行くこと、婦人の自覺を輕蔑することなく、寧ろ自覺を誘ふやうにせなくてはならぬ。さうして男子に反抗せしむるにあらずして、よく男子と調和せしめて、健全なる發達を遂げしむるにある。婦人の或程度或意味の獨立は時勢に伴つて次第に必要になつて來る。漫りに結婚すれば漫りに離婚することになり、いろ／＼の不幸を見るのであるから、自活自營の道も講じて置かなければならぬ。餘り婦人を檢束するといふ事は昔に立還る恐もある。そこで歸する所は婦人として發展を遂げしめ、そして誤つた軌道に陷らぬやうに導いて行くにありと考へる。

△婦人問題研究の時代

島村抱月

婦人雜誌などが發賣禁止になる其理由は、今まで大抵風俗壞亂といふのであつたから別に怪しみもしなかつた。風俗壞亂といふのには、複雜な現代藝術などだと問題も起るが、普通の雜誌類に、而も投書や斷片的な記事の上でちよい／＼見える風俗壞亂は概ね當局者の判斷が正しい。あゝいふ種類の物が禁ぜられるのは仕方の無いことと想ふ。然し思想の上殊に最近の婦人運動の思想に關して政府がそれに壓迫の手を加へるといふことは私は事實と信じない。何かの記者に政府が警告を與へたとか聞いたが、それは當局者の話の序にうつかり口を辷らしてそんな事を言つたくらゐのものではないかと思ふ。眞面目にそんな事を考へられては大變だと思ふ。我々から見れば、何の問題に限らず、言論思想の政權的壓迫といふ事程惡むべき所業は無いと信ずる。元來思想といふものは、思想それ自らとして世に表れてをる限りは、その反對の思想もそこに現はれて來る。それが重大な思想であればある程、そこに思想と思想との爭が生じて自らの間に正邪眞僞の區別がついてゆく、決して一部の人の考へる如く、さう簡單に何でも彼でも實行に移つてゆくものではない。殊にあらゆる思想發表の機關が備り、それに關係する程度の人々の省察力も發達して居るのが今日の文明の長所であるからして、チヤンとそこに思想練磨の方法が備つてをる。此方法にかけて人々が信ずる所のあらゆる思想を試驗して行く。そこに今日の文明の難有さが存しなくてはならない。日本だつて同じ事である。然るに此社會狀態と心理作用を無視して、思想其物に政權力の壓迫を加へようとするのは自ら自分の國を野蠻にするものである。是非善惡の爭などといふものは、形式を離れて言へば、要するに個人と個人との爭である。一方は政府、一方は民間の一個人と、形式上には別れてゐるけれども、其實そんなものでは無い。民間の個人の思想にでも味方も贊成者も有るし、政府といふものゝ其事實を見れば當局の一個人、局長とか、大臣とかいふ何の某が要するに一個人としての頭の中から考へ出す方針に過ぎない。その個人と個人との爭

といふ眞相に對して吾々の要求する所は、其爭が必ず對等で無くてならないといふ事である。一方が思想で來る限りは一方も必ず思想で之に對するのが紳士の道である。先きへ手を出す奴が亂暴者に決まつてゐる。然るに一方が何等の腕力的便宜を有つてゐないのに對して、劍と銃とを後ろに控へた政權を以て之れを推し潰さうとするのは暴虐たるを免れない。一體思想上の問題は本當に信じてかゝる限り、誰だつて自分の方を眞實と思ふに極つてゐるから、只政權の側に立つた者のみが他の一方を間違つた事と獨斷して、何等其間違つた所以を論證するだけの順序を示さないのは僭越な話である。こんな事は聰明な當局者が知らない譯はないのである。

所謂新しい女の運動といふのは、今の處日本では、まだ參政權運動に迄は行つてゐない。職業解放、教育解放、政治解放、法律解放、いづれの方面に於いても、まだ日本には殆ど一つも歐羅巴の程度まで行はれてゐるのは無いのであるが、よしんばそれが歐羅巴程度まで行はれたとしても、それが日本の國家的存在を危くするものであるといふやうな事が、果して常識ですら想像せられるであらうか。社會狀態が變ずる事は有り得よう。けれども日本の國家秩序がそれに因つて亂れ、若しくは滅びるものになるといふ事は眞面目に考へられる事で無いと思ふ。無論夫等の事柄が日本の社會に起るとしても、そこに色々な日本相應の特殊な條件が必要に成る事はあらう。卽ち研究は必要である。けれども之れを壓迫しようとするのは、まるで間違つた話である。寧ろ大に自由に今のうち研究させておく必要がある。此等の問題こそ社會の自由研究に任すに最も適當な社會問題であらう。殊に此問題の根本は婦人の個人性問題である。新しい女と舊い女といふ事は、要するに個人性の自覺以後と以前といふ區別に外ならない。凡そ今日の社會に、下等動物で無い限り、個人性の自覺を國家存立に危險なものだなどと言ひ得るものがあるだらうか。あらゆる犧牲も沒我も個人性の自覺以後の事卽ち個人の自由意志に基いたものでない限り、それに何の價値が有らう。良妻賢母などいふ事も、問題はその良といひ賢といふ言葉の內容に在るのであつて、それを詮索もしないで、只無暗に無自覺的奴隸的に婦人の劣等性服從性を獎勵するなどは人道に對しても濟まない譯である。男と女に結合性の有る限り、女が妻と成り母と成る、男が夫と成り父と成るのは少しも違つた事は無い。此等は寧ろ男女の自然性であつて、ほつておいても自然と妻に成り母に成る。又それを壞さうと言つても、他人の力で壞す事の出來るものではない。いかなる母と成るかといふ問題であるけれども、凡そ世の中に自分から信じて愚母愚妻と成るといふ者は無い筈である。問題はその賢愚良惡の內容に在るのである。其研究をしないでどうして此問題が解釋せられるか。

それから今一つ能く斯ういふ問題に伴ふ誤解は、日本特有の社會制度國家制度といふ事である。どう考へて見ても、今日の形勢から推して行けば、世界の文明は統一せられなくてはならない。統一の中に變化は勿論有つてよいが、其變化は例へば今日の歐羅巴に於いて、英吉利と獨逸

と佛蘭西と皆夫々國民性が違ふとか、乃至は同じ獨逸人の中でも南と北は違ふとか、更に下つては同じ北獨逸の人でも南獨逸の人でも、個人個人で性格の違ひがあるといふやうなものである。此個人性の相違まで來て初めてそこに社會の變化的方面の基礎が立つ。けれども今日本で漫然唱へられる日本特有の社會組織といふものは、さういふ基礎に立つた相違では無い。何か日本には他の國民と違つた不思議な性質が天から賦與せられてゐて、他の諸國民の進化の歷史に逆行するやうな事も平氣で日本國民は維持して行く事が出來る。世界の論理的信仰の中に獨り非論理的地位を占め得る天の寵兒であるかの如く言ひ做すのが最も嗤ふべき誤謬である。今日の吾々には最早そんな事は眞面目で考へられない。支那の人が自分を中華と呼んで、他の國を總て夷狄と言つたあの迷夢と少しも違ひない事を今日の日本人が形を變へて考へてゐるとすれば、いかにも馬鹿々々しい次第である。婦人問題の西洋に於ける歷史を考へて見ても、日本は確かにこれからあの同じ途を辿るべき運命を有つてゐる。事實の解決は其後に在るのであつて、今日はまだ婦人問題研究の時代である。壓迫などいふとは思ひも寄らぬ事で無くてはならない。

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

最新刊の二大名著

早稲田大學教授 五十嵐力先生著 ◉ 中判上製無類美製本 挿畫三十餘圖全一冊 定價金一圓二十錢 小包料八錢

趣味の傳說

著者我國傳說の蒐集に從事する事多年、材料積んで幾千種の多きに上れり、本書は其山なせる材料の內より、最も興味ある二十が一を精選したる者、それ〴〵に各地方の人に質して記述したる名篇にして、既存の書籍に取りて添削補綴せる者とは全く其選を異にす。加ふるに文章の妙挿繪の巧と相待つて、神韻縹渺讀者をして神秘華麗なる趣味の別天地に神遊せしむるものあり。著者自ら稱して其著述中最も愛すべきものなりといひ過去の傳說集中最も面白き者ならんといふ。要、家庭の讀物として、作文の模範として、小中學に於ける敎材として、旅行者の伴侶として、當今無比の好著たらずんばあらず。今や讀書旅行の好季節特に之を江湖に推薦す。

前田默鳳先生編書

眞行草字鑑 附錄 假名字彙

菊半截判 紙數五百四十餘頁上製 定價一圓廿錢 特價金九十五錢 郵稅八錢

書道の衰退今日より甚だしきはなく、今人の筆にする所を見るに誤字極めて多し是れ文明人の恥辱にあらずや、書は或意味に於て處世の秘訣なり。是を以て弊堂見るあり書道界に名聲嘖々たる默鳳前田先生に請ひ實用文字一萬五千餘字を選び眞行草の三體に分ち、其正確なる書體を字典の部門により編書せるもの。假名字彙を附錄として、いろはのあらゆる書體を示し卷末に索引を附したれば如何なる文字も引用自在なるべし、故に苟も書道に志す者は勿論中小學校の習字參考書として缺くべからざる良書なり。

發行所 東京市神田區錦町一丁目 振替口座東京三四〇九番 一松堂書店 電話本局三七一七

（中付一の一）

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

伯爵大隈重信序　森鷗外題言

肉彈著者　櫻井忠温著

銃後

定價壹圓五拾錢　郵送料十二錢

元英國大使マクドナルド氏の所謂日本軍が戰捷の最大動力は銃後の人にありてふ點よりして兵の勝敗は器にあらずして人にあることを書きしものなり露國側のことについては十分搜索し騾馬を追ふ支那人の私語にも耳を傾け特に露軍に學ぶべき點を詳記したるものにて吾人の耳にせざる逸事奇談頗る多く思はず潸然として卷を掩はしむ

（大阪朝日評）

櫻井大尉著

肉彈

定價七十錢　送料八錢

東京麹町二丁目　丁未出版社　振替東京七八四七

（中付一の二）

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

堀江歸一先生著

經濟財政横議

博士曰く余の言論を爲すや如何なる人如何なる團體の掣肘檢束をも許さず、獨立の見地に據りて自由の判斷を下すことを期すと。本書は實に斯の如き主義の下に博士が其精到なる研究と卓拔なる識見とを傾け我が國を中心として起れる最近幾多の活問題を論じたるもの。財政問題あり物價問題あり金融問題あり勞働問題あり國際問題あり或は内現内閣の財政策に論及し外日米條約改正と移民問題を説く悉く是經世的大文字也蓋し博士が最近心血を濺げる堂々たる大論策也。

定價 一圓廿錢 郵稅 八錢

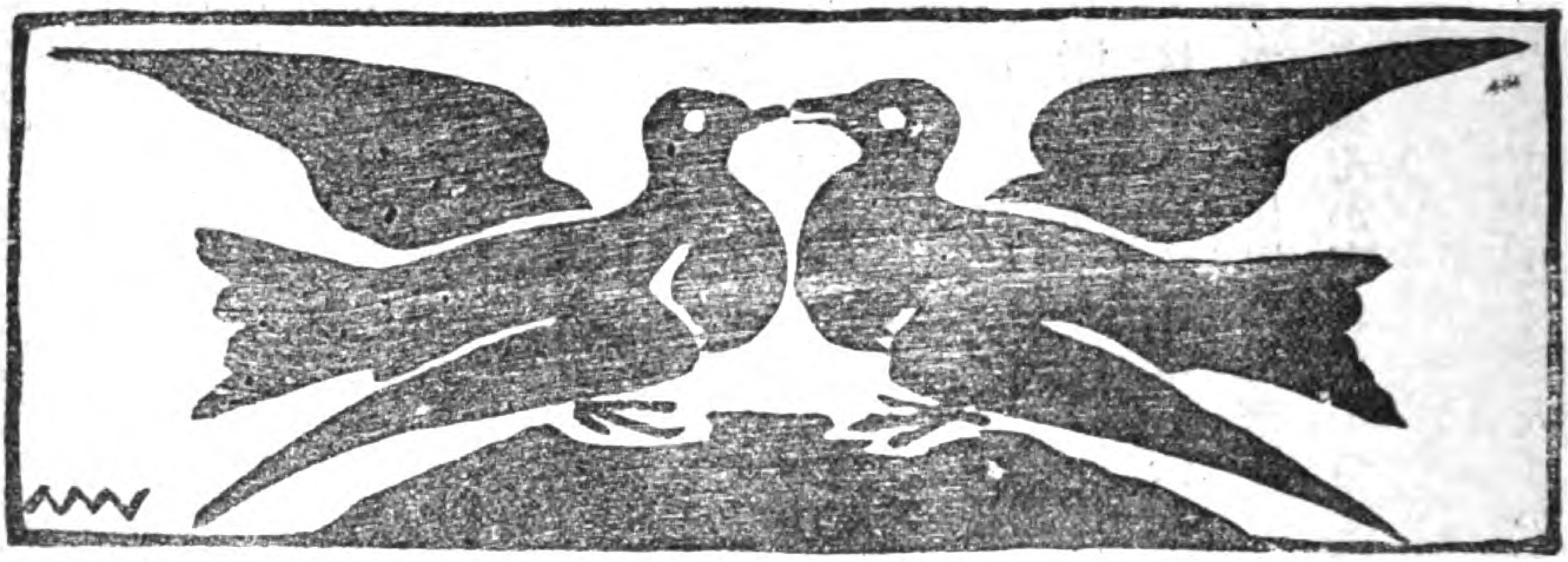
菊判 四二二頁

上製 總布美本

發行所 東京京橋南紺屋町 實業之日本社 振替貯金口座東京參貳六番

(中村一〇三)

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絕す



女八人

松崎天民

中年の藝妓を描いて、これを「板新道の一隅」と云ひ、可憐の妾を記して、これを「最後の牛肉鍋」と云ひ、凄艶の女將と飲んで、これを「稲舟の四疊半」と云ひ、豐頰の娼妓を書いて、これを「名代部屋の客」と云つた。以上が既に掲げた「女八人」の前半で、其の後半は老婢を題材とせる「紫の風呂敷包」、狂婦人を主人公とせる「十萬圓の奥様」、看護婦を捉へた「廊下の曲り角」、新女優を觀察した「荒物屋の二階」等、凡て八篇より成る。大阪、京都、東京に於て、過去十年間の記者生活中に得た副産物で、小説でもなく、雜報でもなく、事實と空想の中間を辿つて觀た、人生の一報告書たるに過ぎない。

五、紫の風呂敷包

上、其の夜の思ひ出

五月十三日は雨に暮れて、柳の青葉に初夏の風薫ると云ふ昨日今日も、何となく秋の初らしい冷たさを覺える一夜。私は同じ社の小説家T氏を誘つて、曾て國木田獨歩が「號外」の題材にしたと云ふ、銀座二丁目の居酒屋「加六」に入つた。

八疊敷位の板の室に、大きな卓を二つ置いて、堅くて小い腰掛を七八個列べ

てあるばかり。十燭光の電燈は陰氣に暗いけれど、此處で飲む「菊正宗」には、攝州灘の匂が强いとあつて、左の方でも豪を以て聞える人々は、大概こゝに入つて飲む。法學博士のW氏、洋畫家のK氏、新聞記者の某某々、會社銀行の某々々と云へば、加六でも定連の雄なる者に數へられて、一種の羽振を利かして居る。

倦怠の幾日かを過した私は、全く酒でも飲んで、强烈な刺戟を受けねば、今日此の頃が遣り切れない樣な氣持がして居た。其の日も社の倶樂部で、終日玉を突いて暮したが、百、百五十の人と突いても負ければ、六十、七十の人と突いても敗ける。其の玉突さへも、單純な勝負だけでは興が乘らぬとて、蕒を賭けたり鰻飯を賭けたりしたが、一度勝つては二度負け、二度勝つては、三度負けると云ふ風で、終には大きな聲で怒鳴りたい樣に燥つて來る。こんな時には、仕かけた仕事の事なんか忘れて了つて、酒を飲むに限ると思つて……。

加六には、既に三人ばかりの先客が居た。私等は卓の一隅に腰掛けて、二人で六本を豫定の分量として、そら豆の茹たのや蕗の辛煮を肴にして、チビリチビリと飲み初めたが、何うしても醉ふことが出來ぬ。頭が重いと云つて居た小說家T氏は、それでも氣持好さ相に醉つて、今、書いて居る小說が飜譯物であることや、作中の人物の性格などに就いて、愉快さうに語り出した。一所に酒を飲んで居ながら、相手の次第に醉つて來るのが、如何にも面白さうに見えて、それが羨ましい樣な腹立しい樣な氣分で眺められるのは、一所に飲んで居る者の不幸である。私も醉ひたい、T氏の樣に醉つて、低唱微吟の心持になりたいと思つて、努めて杯を手にしたけれど、何う云ふものか、酒精分のみが强く鼻について、例の樣に輕い頓興な氣分になれない。

讀まねばならぬ新しい書籍は、十餘冊も書架に列べてあるし、書かねばならぬ原稿は、限りなく私を攻め立るのに、何うしてもしんみりとした、考察的の心持になる事が出來ない。そんな時には、大に酒でゞも飲ん

て、高興を盡して見るか、二三日旅行てもして來れば、心持が變つて好いものだが、私にはそんな金もなくそんな時間も無い。斯うして知り合つた友人と一所に、加六の樣な所て酒ても飲んて、僅に生活の平凡を打破ると云ふ事が、私等に相應しい心機轉換法てある。願くは酒の醉に依つて、總ての物を忘却し去るの境地に踏み込て見たい。妻も、子も、家も、社も、仕事も、現在も、未來も、空々たり寂々たりの三昧に入つて、唯、この生の歡樂を心ゆくまて味つて見たい。私は斯うした心持て、其の夜も加六の硝子戶を開けたものを、先に醉ふべかりし私が醉損ねて、T氏の心憎い醉心地を見せ付けられては、益々悄氣返る一方てある。

「今日は君、何うも醉はん樣てすね」

「何うしても醉へない、自分ても不思議に思つて居るのてす、酒は惡くないのに……」

「そんな時がありますよ、醉ふも醉はぬも酒次第よりは、其の時々の心持てすなア」

「全く今日は、酒を飮むべき日てない――」

同じ位に飮める人が、一所に飮て居る時、先を越されて醉はれて了うと、相手の方は醉ふべきチャンスを失つて、何時も第二者の保護役になるのが例てある。

「今日は俺が醉ふから、介抱係は君に賴む。今度は俺が介抱役て、十二分に君の醉態を發揮させる」、こんな相談なんかせずとも、時と場合に依つて、T氏が私てあり、私がT氏てある事は、決して珍しくない。然し其の夜の加六ては、相手の醉ふと否とは問題外にして、先づ自分から醉はうとして、努めて杯の數を重ねたけれど、私の心は依然として侘しく淋しかつた。

さすがのT氏も、氣の毒に思つたのか、そこ〳〵に勘定を濟ませて、雨の銀座通りに出た。新宿に歸るインバネスの人と、青山に歸る海外套の人とは、尾張町の四辻に立つて、往來の電車を眺めて居たが、二人の足は自然に吸込まれる樣に、カフエー、ライオンの扉明けた。十燭光の煤ぼけた加六から、電燈や瓦斯の光眩ゆいライオンに入ると、同じ東京の銀座てありながら、斯うも世界が違ふものかと驚かれる。私は默つて

T氏の背後に從いて、一隅の丸い卓子に腰掛けながら、先づ捲莨の煙を吹いた。

階下のバーは一時、寺院に似た靜寂に襲はれて居たが、押へ付けられる樣に頭重い雨の一夜を、異つた國國の五色の酒で霽さうとするのか。××公使館の通譯官、法科大學生の某々、××新聞の劇評家、外交記者××會社の支配人と云つた風の人々は、何處からともなく次第に落合つた。大きなビールのコップとコップとが、カチリと景氣好く觸れ合ふ音が聞え出すと、室内には莨の煙が渦卷き、酒の香が漲り渡つて、四邊の空氣までが何となく陽氣に、華やかに搖めいて來た。日本酒に好い加六の四角な卓子には、人の心を地の底深く引込む樣な、一種の重くろしい沈鬱な氣があつたけれど、五色の酒に好いライオレのバーには、人の心を陽氣に浮き立せる樣な、一種の輕い華やかな調子が流れて居た。

私はこゝて、赤いチエリー、ブランデーを飲み、青いペパーミントを飲み、琥珀色したビールを飲んだけれど、遂に醉ふことが出來ない雨の夜てある。ヂッと斯うして丸い卓子に倚つて、人々が面白さうに飲んて醉つて、騷ぎ廻つて居るのを眺めるのみてある。折柄の話題は加州問題、支那事件、飛行家の死、小學生の水死から、新橋赤坂の品評、新女優の是非などを、口角泡を飛して語るがあれば、てかんしよ節、義太夫、追分節、奈良丸くづしと、バーを擧げて歡樂の夢を追うて居るのに、私は今宵に限つて、其のサークルの一員たること能はず、斯うした空氣の中に囚はれながら獨り味氣ない氣持になつて、淋しい思ひ出に耽るのみてある。醉ふまいとしても醉ふ事のある以上、醉ひたいと思つても、醉ひ得ぬ夜の侘しい氣持は、酒の味を解する人にのみ、初めて會得し合點して貰へやう。いろ〳〵の酒の誘惑を以てしても、醉ひ得ない時折のある事を、私は私自身の其の夜に經驗して、「醉ひ得ぬ强さ」を誇るよりも「醉ひ得ぬ淋しさ」に泣きたい樣な氣持になつた。

こんな時に、人は遠い昔の思ひ出に捕虜となつて、

現在の忙しさを過去の夢に追はうとするものである。

醉はんとして醉ひ得ぬ哀れな男は、相應に醉つて居るらしい小說家のT氏と、通譯官のA氏とを引張つて、無理に三階の小さな部屋に入つた。そして、「私は、何うしても醉へない。醉はうとしても醉ふことが出來ないのは、實に哀れなものだと思ふ。忘れて居た昔の事が、走馬燈の樣にグル〱浮んで出て、起つても居ても堪らない樣な氣持になつた。何うしたら宜いのか、自分で自分の心持が判らない。

と云つた。三人の前には、白いエプロン掛けた女給仕が、紅茶を注いで行つた。

「別れた女の面影を、思ひ出の其處此處に尋ねて、此の所、人生不如意の一幕と云ふ段取てすかね。何うてすA君、酒に醉ひ得ぬ哀れな男のために、其の昔話を聽いて遣るのも、何かの功德になりますぜ」

小說家が斯う云ふと、通譯官も、

「僕等も最う醉ざめの水が欲しい頃だ。M君の小說的追懷談を聽いた上て、更に大に杯を擧げ樣ぢやありませんか」

と云つた。私は紅茶を一氣に飮み乾して、

「何うか聞いて下さい、そして別に讀て貰はねばならぬ物も持つて居る。私はこれだけの事を兩君に打明けて了へば、屹度、愉快に飮めもし、醉へもするだらうと思ふ」。

ランオンの夜はさんざめきに更けて、階下のバーも大分靜になつたらしい。銀座通りに降る雨は容易に歇まず、五月の中旬と云ふのに、何となく薄ら寒い。電車の響のみが、絶えては又續いて、三階まて强く響く。

醉はうとしても醉ひ得ない今夜の思ひ出は、十年前の明治三十七年、私が未だ大阪の××新聞社て、三十圓足らずの安月給を貰つて居た時の夏てある。輕い脚氣を病て、轉地療法をする事になつたが、遠方へ旅行するにも、鄕里の美作に歸るにも、先立つものは金と

あつて、意の如くにならない。

　新聞社の方は、二週間の豫定で暇を貰ひ、其の上三十圓ばかり借金したが、さて何處へ行つたものかと、私はいろ／＼思ひ煩つた。當時、私の尊敬する新體詩人のS氏は、大阪で發行して居た文藝雜誌×××が廢刊になつた後、居を京都岡崎の里に移して、簡易な生活を送つて居たので、私は取敢ずS氏の許を訪ねた。其の頃、京都にはS氏を中心として、若い文學者の群が居たし、平尾不孤、兒玉花外、齋藤弔花、小川煙村など云ふ、友人の來往も頻繁だつたので、私は京都と云ふ土地が、脚氣の療養に適して居るか何うか、そんな事には頓着せず、喜んで上京した。

　京都と云へば、私にとつては忘れ難い少年の記憶がある。明治二十八年の春から夏にかけて、第何回かの内國勸業博覽會が開けた時、私は岡山の藥種商××の丁稚奉公を廢めて、遠縁に當る×氏の許に寄食した。これが私の京都に於ける最初のペーヂで、十八歳から二十三歳になるまで、私は東京、大阪、美作と轉々したけれども、何時も休息の場所として、京都を懷しみ、京都で暮す機會が多かつた。食客をしたり、寫眞屋の丁稚見たいな事をしたり、牛乳配達をしたり、會社の臨時雇などを勤めた、謂はば苦勞の多かつた京都でありながら、私は常に京都を懷しむで居た。二十三歳にして、大阪で初めて新聞記者に爲つてからも、京都と云へば戀人の樣に、常に私の心を波立たせて居た。脚氣療養を名として、取るものも取敢ず京都に上つた時、私はこゝで數日を暮し得る幸福と愉快とに、人知れず微笑まずには居られなんだ。

　京都に於ける其の十日間は、實にのん氣な樂しい月日であつた。生活の渦卷きから脫れ出て、夜は岡崎に二階借して居るS氏の室に、蚊帳を同じうして眠り、晝は寺町に箏曲の樂堂を有するK氏の許で暮して、大阪に於ける探訪記者生活の苦勞などは、遠い昔の夢でも見る氣で眺めて居た。其の頃の京都は、電車も今の樣に通つて居らず、都の大路小路から隅々の何處へ行つても、未だ舊都の名殘が濃く匂つて居た。室町、烏丸

の軒々に見る昔風の商家、祇園、先斗町に見る色香の漾ひ、御苑の周圍に見る維新時代の色彩、さては東山の翠なる、鴨川の白き、仰げば高い比叡の雲、岡崎、吉田に漲る野趣など、少年の生活を託した第二の故郷て、私は其の夏の幾日を愉悦の情を以て過した。初めて戀を知つた所、無二の親友と死別した所、學問に憧憬れた所、空想を恣にした所にしても、それからそれへの思ひ出盡きぬ京都の夏て、二十七歳の探訪記者は、貧しいけれども淸い幾日かを過した。S氏から泰西文藝の梗概を聞いたり、K氏の妙なる琴の音に、戀を戀する氣持になつたり、新京極て食つたり、疏水に泳いだり、若王寺畔に凉んだりして、身も世も忘れて、十日餘を現の間に過した。

私が今話さうとするのは、其の十日間に逢つた一人の女性てある。何處の何と云ふ人か、姓も知らねば名も知らず、生きて居るのか、死んて居るのか、それさへ今は判らない一人の女に對して、私は忘れ得ぬ思ひ出を有つて居る。今から十年前と云へば、短い樣ても隨分遠い昔てある。互に相許した戀仲ても、西と東と遠く隔つて居れば、其の日〱の眼前に遮る事件のために、忘れ果てて了ふが世の常てあるに、私は何う云ふものか、緣も因もない其の女を、十年後の今日に至るも、忘れることが出來ない。今は嫁して人妻になつて居るか、或は老孃の孤獨を守つて居るか、アメリカ邊に學んで居るか、或は死して既に此の世の人てないか、夫さへ杳として知るに由ない女の上を思ふ毎に、私は何とも云へぬ果敢さを覺える。骨肉、戀愛、交友、同業など云ふ因緣があるてなく、唯、路傍相關せざる人てありながら、不圖した遭逢に絕ち難い感銘を繫がれて、隨時隨所に、思ひ出の姿を懷しみ、忘れ得ぬ面影に憧憬れると云ふ樣な事は、お互の日常にも稀に經驗する事てある。何人てあるやら相語り相知るに至らず、刹那の遭逢は永遠の別離となつて、個々別々の道を辿りながら、同じ墓場の土に化し行くのかと思ふと、この生の侘しさ淋しさを、今此の樣に感ぜずには居られぬ。

其の女性と云ふのは、齢の頃二十七八、面長の背の高い、痩せて色の黑い女であつた。兩鬢をギユツト詰めた廂髮に結つて、小い井の字飛白の浴衣に、黑繻子らしい帶を締めて居ることもあれば、茶色がかつた帶をして、雪駄を穿いて居ることもあつた。何時も夕暮の六時頃から七時までの間に、寺町道を上つて丸太町を西へ曲り、府立圖書館前を御苑の中に入つて行くのを、四五日間毎日續いて見受けた。齢が齢なり、容貌も十人並劣つた方であるし、男の心を引くに足る樣な何ものも持つて居ないのに、私は妙に其の女性が氣になつた。右の手には何時も鐵色の洋傘を携へ、左の手には紫色モスリンか何かの風呂敷包を抱へて、少し前屈みの、女にしては外輪な足とりで、御苑の中を西へ堺町御門から、北へ北へと消えて了ふ姿を、私は四五日の間、同じ時刻に同じ場所で見た。若し女の方でも私の樣な男と、毎日同じ場所で同じ時刻に逢ふと云ふ事に氣付いたなら、終には目禮の一つもして別れる樣になつたかも知れないが、女は終に氣が付かなかつたらしい。何か斯う一方をのみ見詰めて、深い考へ事でもしながら、傍目もふらずに歩くと云ふ風があつた。

この氏も素性も判らない女を、私は何うして今日まで忘れずに居たのか、自分でも不思議で堪らない。斯うして女の上を思ひ起して見ると、顏も姿も朧ろ氣には判るけれど、最も強い印象は、其の「紫の風呂敷包」である。菊版の書籍を五六冊重ねて、それを包んだらしい大きさのある彼の包の中に、何んな物が入つて居たのか、女一代の幸不幸の運命は、彼の包の中にあつたに違ひ無い。私は當時この事を、新體詩人のS氏にも話し、箏曲家のK氏にも語つたが、二人は、同志社女學校の女敎師か、平安女學院の先生か、何れにしても文學や音樂の趣味は知らぬ、理科か數學の先生だらうと云つて笑つて居た。固より此の女性の過ぎ來し方や行末に就いて、二人は何の興味も有たない、傍觀者て、「そんな類の女は、京都でも上の方には澤山居るよ」と云つた、其の言葉にも冷たさがあつた。

其の女が若し、私の知つて居る女に似て居るとか、

何處かで逢つた事のある女と云ふのなら、別に不思議でも何でも無いが、私には其の女の容貌や態度に依つて、他の女を思ひ出すだけの似寄つた知合がなかつた。全く初めて逢つた女――御苑の夏の夕暮に、袖擦り合つたに過ぎぬ女――でありながら、私は不思議に其の女の上を忘れることが出來ない。少年の六年間に、其の折々の生を託した京都の自然と人事とには、より淺からぬ思ひ出もあれば、より絶ち難い因緣も有るのに、私は何ういふものか、十年後の今日に至るまで、何の緣も因もない其の女の上を忘れることが出來ない。

こんな事は、大抵の人が其の一生の間に、一度か二度は必ず經驗する事だと思ふ。――

通譯官のS氏も、小說家のT氏も、私の此の長い物語を、默つて聞いて居たが、

「小說の樣な話ですね、小說でも謎に似た發端だと思ふ。紫の風呂敷包！獨り其の女のみでなく、人間の運命と云ふものは、さうした風呂敷の中に、人知れず包まれて居るのかも知れませんね」

と云つて、小說家は金口の捲莨を吹いた。

「醉はうとしても醉へない雨の夜に、君が何處の何人とも知れない女の上を、さうして夢の樣に思ひ起して居ると同じ樣に、其の女も亦何處かの二階で、十年前の御苑の夕暮に逢つた男の事を、古い日記でも見る樣に、思ひ起して居るかも知れない」

と云つて、通譯官は葉卷に火を點けた。

これだけの思ひ出、これだけの感慨ならば、何でも無い斷片に過ぎぬけれど、私は此の女を思ふに適い一女性を、それから數年の後、京都の××女學校の女敎師に見た。紫の風呂敷包を持つた女とは、似ても似付かぬ別の人ではあるが、十年後の今日、斯うして思ひ起して見ると、「紫の風呂敷包」と其の「女敎師」とが、同じ人の樣に見えて仕方がない。同じ人の樣に結ばれて、彼れが此れか、此れが彼れかの差別さへ、確と判らなくなつて了ふのが例である。

私は斯う云つて、其の女敎師に就いて書いた一篇を、兩氏の前で朗讀した。手紙風に書いてはあるが、別に

其の女教師に逢つた譯ではなく、何かの材料にしようとて、五年前から本箱の抽斗に、人知れず藏つて置いたものである。

雨はいよ〳〵降りしきる。卓上のコーヒーは、何時の間にか水の様に冷えて居た。

私は、其の一篇を讀み初めた。

中、失戀に泣く老孃（オールドミス）

齢は三十三だと云ふけれど、二十七か八にしか見えない安村國子さん。張り切れる様な筋肉を有つて居ながら、人に嫁して子を生まうとはせず。今出川の寺院の一室に、尼僧に似た孤獨の月日を送つて、淋しさうな顏もせぬ安村先生。私は今、貴孃（あなた）に宛て此の長い手紙を長くに際し、萬感胸に溢れる様な、何とも云へぬ一種の哀愁を覺えます。京都××女學校の先生たる貴孃を呼ぶに、「國子さん」と云つては不相應だけれど、暫く「國子さん」と呼ぶを許して頂きたい。私にはそれが、最も容易（らく）で、最も心易くて宜い名である。

國子さん、思へば貴孃と逢つたのは、ツイ三四日前だと思つて居たに、秋は秋でも最う去年の紅葉ではない。寺町のK氏の樂堂で、S氏の新作を初めて彈奏した夜、私は彼の夜の光景を忘れる事が出來ない。其の席上には、美しく着飾つたK氏の門下生が、花ならば盛を競ふ櫻の様にズラリと列んだ艶麗（あでやか）さ。文藝の道に造詣深い詩人、作家の群に隣しては、丸髷、廂髪の夫人達が、燭臺の雅びた光に横顏を照されながら、衣摺れの音も輕う坐つて居た。庭に唧く蟲の音絶え〳〵に衣簪の香室内に漂ひ渡つた頃、K氏は平家時代に見る衣冠の姿で、一禮して琴の前に坐つた。彈じ出す新曲の音は冴えて、妙なる調（しらべ）に人我の境を忘れた時、女達の間には人知れず、袖や袂で涙を拭ふのを見受けました。

其の時、國子さんは、私の隣に坐つて、一心にK氏の調を聽いて居たが、曲半にして、或は緩く或は急に、或は咽ぶが如く或は泣く様な、間（あひ）の手に入つた時、ああ其の時であつた。貴孃はハンカチーフを顏に掩うて、

最う堪へられないと云つた風に、ヨ、とばかり啜唏いた。三十前後の肥り肉な、丸顔の血色の好い、何處となく取澄した婦人とのみ見て居た方が、俄に咽び泣くのを見て、私は一方ならず驚いた。

「何處かお惡いのぢや無いてすか」

と低聲で、貴孃の顏を覗き込んだ時、貴孃はちよいとハンカチーフを放して、私をチラと見て、

「えゝ、胸が痛くなりまして・・・・」

と云つたのを、今でもお忘れてはないと思ふ。國子さん、貴孃は其の時、他の人に氣取られぬ様に座を立つて、表の玄關の方へ立て行つた。私も亦人知れず玄關に出て、貴孃の後を追ふ様にして、樂堂の裏庭に入り、折柄の月光を浴びながら、初對面の貴孃と種々のお話をした事を、私は昨日の様に思つて居ます。

知らぬ男と女とが、さうして逢ひ、さうして物語をするには、實に相應しい秋の月夜てあつた。樂堂ては一曲終つたと見えて、拍手の響に次いて、主人のK氏がカラ〳〵と笑ふ太い聲が、手に取る様に聞えた。其の時は最う、貴孃が京都××女學校の理科教師であり、私が大阪××新聞の社會記者である事を、お互に了解して居たので、私も無遠慮にいろ〳〵の事を話せば、貴孃も過ぎ來し方の雨や風を、包まずに話された。そして、

「妾、先刻泣いて居たでせう、胸が痛いと云つて!。Kさんの琴の音、秋の新曲の哀れに誘はれて、ツイ泣かされて了つたのです。宜い齡をして、お恥しい・・・・」

と云はれた時、私は最う貴孃の總體を知り盡した様な氣持がした。僅に二三十分の間、人目を忍ぶ様な裏庭て、お話をしたに過ぎぬけれど、私は彼の夜の様を忘れることが出來ない。あれから後、今日までの間、國子さんの姿と聲は、幻の様に私の眼前に浮んて出る。幾度か書かうとして書き得なかつた此の手紙を、遂に思ひ切つて書く様になつたのも、其の夜の光景を偲ばうとする切無い思に外ならぬのです。

斯う云へば、如何にも國子さんに戀して居る男の口

吻らしいけれど、私は貴孃と云ふ異性に對して、戀愛若しくは戀愛に似た感情を、毫も有つて居ない事を告白して置きます。初めてお目に掛つた時が時なり、所が所なり、場合が場合てあつた上に、語りもし聞きもした其の事が、餘りに小說的の色彩に富んて居た爲め、それて貴孃を忘れる事が出來ないのかも知れない。私は彼の夜K氏の宅に泊つて、K氏から寢物語に、「安村國子」と云ふ一女性の過ぎ來し方を聞いて、非常に心を動かされた。裏庭の月下て聞いた貴孃の話と、K氏の寢物語とを一所にして、私は私自身の「安村國子」と云ふ小說を作つて、それを自分一人て眺めて暮さねばならぬと思つた時、唯、私の心には淋しさ、味氣なさに似た氣持が充ちて居た。

私はこゝて、私の知つた「安村國子」て、貴孃の前に展開げて見たい。初めて逢つた其の夜から一年後の今日まて、遂に相逢ふ機會も無く、心を籠めた手紙の往復もして居ないけれど、私は國子さんの總體を知つて居る。廣島縣の農家に生れて、高等女子師範學校に學び、今は京都××女學校の先生てあると云ふ、其の無事平穩な過ぎ來し月日の中にも、貴孃の半生を彩つたものは、遂げざりし戀の哀思てあつたに違ひない。女の肉體に流れて居る血汐を矯めて、嚴しい道德と冷たい知識とて、これを養ひ育てるより他に、教育の大道を知らぬ氣に見える高等女學校て、女の道を敎へられた女にしては、貴孃は餘りに感情的てある。女の心の底に巢ふ情性を破つてまても、賢妻たれ良母たれと敎へる高等女學校の先生としては、貴孃は餘りに戲曲的の人てある。數學の先生を勤めて居ながら、貴孃は小說を讀て悲しみ、音樂を聽いて泣き、芝居を看て咽ぶ類の女てある。

私は今日までに、多くの老孃を見た、多くの獨身婦人を見た。殊に女學校の敎師、舍監と云ふ類の女に、勤らぬ老孃の群が居る事を知つて居る。それ等の多くは齡三十を過ぎても、娶らず嫁がぬ理由として、樣々な事を云つて居る。男女同權を唱へ、婦人の獨立自覺を說き、甚だしきに至つては、結婚を目して異性に對す

る一種の屈從となし、妻となり子を生むことを以て、人としての女の辿るべき唯一の道で無いとまで、極論して居る輩を見る。國子さんも亦、時と場合に依つては、色香の衰頽を見る中年でありながら、孤獨の生活を送つて居る申譯の理由として、

「家庭を持つて、種々の面倒を見るよりは、斯うして獨身で居る方が、何の位氣樂だか知れません。男なんか、厭ですねえ……」

と云ふかも知れないが、それは嘘である、己れを欺き人を欺く虚言である。女學校の教師を勤めて居れば、自分にも衰へ行く老孃の果敢さを思ふ暇がなく、世間も亦別に怪しまないけれども、私は老孃が大嫌である。嫁して人の妻となり、子を生み子を育て、其の一生を終ると云ふ事と、女學校の先生になつて、女子教育に一身を捧げて、孤獨の生涯を送ると云ふ事の、衡の輕重を知らない様な女が、世に謂ふ老孃の群である。

國子さん、私は貴孃がそんな世間體の好い理由の爲めに、三十三歳の孤獨を送つて居る人とは思ひません。

貴孃の様な色香の衰へ切らぬ老孃には、如何に修養があり學殖があつても、一種の老孃氣質と云ふものが出來て、それが日常の事毎に顯れるものである。男に對する冷たい投げ遣りな態度、兎もすれば男を凌がうとする出過ぎた努力、公平無私を衒ふ物事の理解など、思つただけでも厭である。殊に若い女に對する老孃は、嫉妬とも何とも云ひ様のない、一種の偏執れた態度をするもので、凡て自分の心持を標準にして、萬事を極め付けて行かうとする様が、男の眼にも心憎く見える事が多い。私は常にこれ等の老たる孤獨の女を見る毎に、女としての榮ある天分を捨て、生れた儘の幸福に浴し得ない哀れな人として、其の影の淡く薄いのを氣の毒に思つて居る。嫁すべき時を失つて、孤獨そのものに、種々の理窟を附けて、僅に自ら慰めて居る女ほど、世に哀れなるはない。

多くの老孃は異性に對する時、常に一種の强味を有つて、男性化した其の言動と、肉感的な厭らしい調子とて以て、相手を屈伏し様とするものですが、貴孃に

はそれが無い。三十三歳の長きを尼僧に似た月日の下に送りながら、貴孃は矢張り女である。弱々しい、涙脆い、感受性の強い、多恨の一女性である。寺院の一室に起臥して、冷たい講堂で、何の趣もない算數を敎へて居ながら、貴孃の肉體に流れる血潮は、常に或る者の爲めに燃えて居た。世の常の老孃に見ない優しさを、初めて逢つた秋の月下に見出した時、私は謂ひ知れず嬉しかつた。

貴孃がさうして、厭な老孃氣質にも囚はれず、涙に霑ふ胸を抱いて、穩かな京都の月日を送つて居られのは、戀の思ひ出が有る爲めだと思ふ。遂げざりし戀の思ひ出、悲しく痛ましき戀の思ひ出は、枯れ勝な貴孃の老孃生活に、何れほど慰藉ある色彩となつたか知れない。貴孃もさう思ひさう信じて、此の日頃を過して居られることだと思ふ。

國子さん、貴孃の老孃生活の裏面に、悲しい戀の思ひ出がある事は、初めて逢つた其の月夜に、何も彼も承知しました。琴の音を聽いて咽び、月明の下に歔欷いた老孃の涙を見て、私は初めて女の心の眞實を知つた樣な氣がした。貴孃と云ふ一人の女に、さうまで思ひ慕はれて居る男の幸福を思つて、私も思はず落涙した事を、よもや忘れてはありますまい。

貴孃は其の男の何人であるかを、何うしても語らなかつたけれど、私には一人の心當りがある。果して其の男が、國子さんと相許し相契りながら、世路の風波に妨げられて、遂げざりし戀の悶えを抱いて、肺に死んだ村井芳次郎であつたか何うか。死者言はず、貴孃も語らず、それと明ら樣に言ふを憚れども、私は其の男が、私に唯一人の親友であつた、村井芳次郎の樣に思へて仕方がない。たとへ貴孃の思ひ出に浮ぶ人は村井でなく、村井の死ぬるまで戀慕つた女は貴孃で無かつたにしても、私にとつては涙なくして見ることの出來ない戀物語である。幽明境を隔つる村井と國子さんとを一所にして、其處に痛烈な戀の一齣を眺める時、

私は初めて戀に、「永遠の力」ある事を知ります。

國子さん、相思五年の春秋は、村井の上にも長閑であつた。或る年の櫻花も最う散つて、若葉青葉の眺め好い嵐山に、村井と共に一夜を語り明した時、私は初めて一人の若い友人が、切ない戀に悶えて居る事を知つた。其の頃から酒を飲むことを覺えて居た私は、餘り嗜まぬ村井に勸めて、無理に杯の數を重ねさした。美しい酌する女が、其の席に待つて居ると云ふでなく、時々其の家の幼い女中が、銚子のお代りを持つて出るに過ぎなかつたが、それでも二人は相應に量を過した。心に何の隔もない親しい友達が二人、都離れた小さな宿屋の二階で、夜更けるまで人生を論じ、戀を語つた其の時の光景を、私は今も尚明瞭に覺えて居る。私は色の黒い丸々と肥滿した方だが、村井は白い痩せた背の高い男で、酒を飲むと白い顏が一面に上氣して紅くなり、眼に何とも云へぬ人を惹付ける力を持つて來る。華やかな浮いた戀をする男ではないが、沈んだ煩悶の多い戀をする男としては、誂へ向に出來て居る方であつた。

其の夜、村井は相手の女に就いても、又自分が戀する樣になつた始終に就いても、何も彼も包み隱さず打ち明けて話した。其の女は今、東京の高等女學校で學んで居るが、卒業後は四五年の間、地方の女學校に先生とならねばならぬ約束がある。其の女からは、何うして女子教育家にならうなどゝ志望たか、自分の過ぎ去つた愚さに泣いて居る、と云ふ樣な手紙が、月に三四回は來たさうである。弱い女の身に生れて居ながら學問の桎梏に縛られて、戀の甘酒酌み交すことさへ儘ならぬ運命を、歎き悲しむ樣な文句を列ねた手紙が、月に三四度は來たさうである。其の女は備後尾の道の生れて、村井は備中高梁の生れであることや、岡山から大阪に出る汽車中で、初めて其の女に逢つた事や、その偶然の遭逢が淺からぬ緣となつて、互に取止めもない、文通をして居る内、遂に絶ち難い熱烈な戀に落ちた事や、互に五年の後を堅く約して、家を持つべき用意をして居た事まで、村井は落着いた風情のある口

調て、それからそれへと物語つた。小説でも讀む樣な、空想的の句に充ちた北の話を聞きながら、私は戀する男女の希望多い前途を祝福して、思はず杯の數を過した。羨ましい樣な、頼りない樣な、夢見る樣な戀物語を聞きながら、私は戀する人達の氣分を、しみ〲と味ふことが出來ました。

村井の樣な多感性の男と、相思の戀に落ちた女の上を思つて、私は何となく懐しかつた。

「友達と云ふ友達は澤山あるけれど、僕の此の心持を話して、同情してくれる者は、君の他にはない」と云ひながら、村井は其の女の寫眞を見せることも、其の女の手紙を示すことも、斷じて許さなかつた。寫眞を出して見せたり、手紙を讀て聞かせたりするのは、世に有り觸れた浮華の戀である。二人の思は唯二人の胸深く秘めて、此の戀遂げた春の日に、晴れて笑つて物語らうとのみ、村井は淋し氣に微笑むだ。

國子さん、村井は其の時分から、左の肺を病むで居たのです。家の都合で文科大學を二年で退き、其の頃は京都の黑谷で、淋しいが氣樂な月日を送つて居た。翻譯物をしたり、評論を書いたりして、村井白夢と云ふ名は、若い人々の間にも、相應に渇仰されて居た。文藝講演會に出て、フランチエスカの戀を論じたり、叡山の頂上に登つて、默禱の幾日を過したりして、思索的の春秋を送つて居る間にも、村井の生活を彩つたものは、唯相思の戀人であつた。其の肺に巣ふた毒蟲の爲めに、肉體の衰へを感ずる樣になつてからも、村井の心は、唯、戀に生きて、遣る瀬ない現在から、樂しい未來に繋がれて居ました。

それから後の事は、實に語るも涙の種である。大學醫院で二期の肺結核と診斷されてから、村井は須磨に轉地したり、琵琶湖畔に室借したりして、專ら療養に手を盡したけれど、遂に大學醫院の隔離室に入つて、其處で起臥せねばならぬ秋の日が來た。咳嗽に續くに咯血と云ふ惡性で、見る影もなく衰へた或る日の夕暮れ、親しい友人三五名は、村井の枕頭に集つて、黯然として聲を呑んだ。其の時、村井は仰向けに寢たまゝ、

友達の手を順次に握りしめて、涙をホロ〳〵零しながら、ヂッと天井を見詰めて、長い力ない吐息をした。親友村井芳次郎の若い生命は、今まさに終焉の床に横はつて居るかと思ふと、私は堪へられなくなつて、眼を窓の方へ外らした。

やがて村井は、枕の下から端書位の大きさある一個の紙包を取出して、默つてそれを私の手に渡した。

「僕が死んだら、これを一所にね……」

と云つたかと思ふと、また力ない吐息をして、ハラハラと落涙した。病院の秋の夕は、何と云ふ寂しさであらう、窓外には風寒う吹いて、外科室に通ふ長い廊下を、音もなく往く看護婦の白服まで、何となく陰氣に冷たく見える。斯る夕、人は死の神は導かれて、靜に……靜に、遠い冥土の旅路に行くのか。國子さん、村井は其の夜九時三十分と云ふに、終に永久に還らぬ天國の人となつて了ひました。

村井の死後、私は其の机の抽斗や、本箱の中、行李の底を殘る隈なく捜したけれど、彼が生前戀慕つた女の姓名も住所も、遂に發見することが出來なかつた。思ふに村井は、死期の近いたのを自覺して、戀人と往復した信書は勿論、戀人に關するものは、日記も紙片も、悉く破るか燒くかして、捨たのでは無いでせうか。村井が臨終の夕、「これを一所にね……」と云つた紙包の中には、戀人の寫眞と姓名とを入れてあるに違ひないと思つたけれど、私はそれを披き見るとを遠慮した。村井の戀は、村井の死と共に現世を去つた大なる謎であり、また大なる祕密として、其の儘に葬るべきものである。何處の如何なる女性と、如何なる戀に落ちて居たか、私はそれを知らなくても宜い。戀ゝ悶えも、死は凡ての終局であると思つた時、私は友の形骸に對して、其の短く淋しかつた生涯に泣いた。

安村國子さん、貴孃の戀した男が、此の村井芳次郎であつたか、村井の戀した女が、貴孃であつたか、私は種々に思ひ悩んで居る。貴孃の失はれたる戀と、村井の遂げざりし戀と、たとへ何の關る所無いにしても、私はこれを一所にして眺める時、今更の樣に人生の切

ない哀調を感ずる。空しく死んだ薄倖の男と、徒に悶える孤獨の女と、悲痛の戀を同じうして、幽明境を隔て居ると云ふことは、眞に意味の深いフヰルムである。私は、村井の慕つた女が國子さんであり、貴孃の戀した男が村井であることを事實として信じたい。事實としてこれを認める時、私は第三者としての滿足に、初めて微笑むことが出來ます。

私は最う、貴孃の戀人が何人であるかを貴孃に向つて聞かなくても宜い。色香の衰褪も遠からぬ三十三歳まて、孤獨の月日を送つて居る仔細も、私には明瞭に讀むことが出來た。遂げざりし戀の怨を抱いて、肺に死んだ村井芳次郎も、貴孃がさうして何時までも、淋しい老孃の生活を送つて居ると知つたなら、何んなに喜ぶことてせう。かりそめの遭逢は久遠の緣を結んて、死者の怨や去らず、生者の惱や消えぬ所に、強く烈しい「戀する人の力」を見る。願くは、貴孃の戀した男が村井てあれ、村井の戀した女が貴孃てあれ。

私は今、この長い手紙を書きつゝ、K氏樂堂裏庭の秋、月光を浴びて立つた國子さんの姿を思ふ。世に見る老孃は厭だけれど、弱い、涙脆い、女らしい、安村國子さんは好きである。其の全生涯を舉げて、童貞の淸きを守るも、或は嫁して人妻となるも、これを運命の神に委ねて、貴孃は何ごとも思はずに、行ける所まて行くが宜い。

女の辿る道筋は、昔から一つてある。——

下、醉ひ得ぬ淋しさ

カフエー、ライオンの二階て、私が此の長い文章を讀み終るまて、雨は小歇みなく降り續いた。

通譯官のS氏も、小說家のT氏も、相應の醉心地て居ながら、私の長い話と長い朗讀に對しては、同情ある聽者てあつた。醉はうとしても醉ひ得なかつた私は、これて何だか晴々しい氣持になつたとて、更に三杯のウヰスキーを命じた。服部の時計臺に十一時が鳴つて、最う醉つても好い初更になつた。

「紫の風呂敷包に對する淡い思ひ出から、老孃と云

ふ女の一サークルを抽象し、更に一度逢つた限りの女に依つて、戀に死んだ亡友の面影を偲んで、此の三者を一つにまとめた小説を讀まうとするのですね。發端もなく、中心もなく、大詰もない、夢の様な話だけれど、M君と云ふ此の事件の話術者と朗讀家を、舞臺の一員として見物すると、其處に何とも云へぬ興味がある……」

小説家は斯う云つて、ウヰスキーを飲んだ。

「村井芳次郎と云ふ人の戀した相手は、其の國子とか云ふ女でなくて、今頃は誰かの細君になつて、子供を三四人生んで居る者かも知れない。安村國子とか云ふ人の忘れ得ない男は、其の死んだ村井ではなくて、今頃は美しい女房を持つて、脂下(やにさが)つて居る人物かも知れない。それを紫の風呂敷包に引付けて、空想的に眺め様とするのが、M君の興味であつて、また一種の道樂である……」

通譯官も斯う云つて、ウヰスキーを飲んだ。

「斯うして話をしたり、また數年前に書いた舊稿を讀で見ると、私の思ひ出は先づ親友村井に出發して、それから一度逢うて談話をした事のある國子に及び、最後に何の縁(ゆかり)もない紫の風呂敷包に到着するのが、當然の様に思へるのに、何う云ふ譯か村井も國子も浮かばずに、紫の風呂敷包だけが、過ぎ去つた京都の中に色濃く浮んで見える」

私も斯う云つて、ウヰスキーを飲んだ。

紫の風呂敷包を抱へて、淋しさうな足どりで、御苑の夕暮を歩いた女は、其の後何うしたであらう。斯うして何も彼も話した後、眼を閉ぢて、過ぎ去つた京都を思ひ起して居ると、何人よりも明瞭に、何者よりも色濃く浮んで見えるのは、其の「紫の風呂敷包」である。戀に悶える安村國子とは、似ても似付かぬ別人でありながら、老孃(オールドミス)の淋しい孤獨を行く其の人は、紫の風呂敷包を抱へた女らしく思へて仕方がない。御苑の夕暮に見た彼の影の薄い人にも、さうした戀物語があつたか何うか、――最う十年の月日が經つた。

私にとつては、「紫の風呂敷包」は、老孃(オールドミス)の一表徴(シンボル)で

ある。女學校や小學校の女教師、さては銀行會社の事務員、女工監督、女子判任官などの群に、齡老いた淋し味深い女の影を見る毎に、私は何時でも老嬢の世に幸福薄きを思ふ。嫁して人妻になり、子を生み子を育てるのが、女の辿る唯一の道てありながら、運なればこそ娶らず嫁かず、獨り學び、獨り勤め、獨り食ふ月日の下に、老い行く姿を哀れに見る。新しい女と云ふが出來て、思想の自由を叫び、生活の獨立を說き、行くべき道の新しきを拓かうとする曲り角に、赤色も鮮明な旗幟の飜るを見る世の中ても、これ等の群の落ち行く先は、唯「紫の風呂敷包」てある。女の主張が是認せられ、女の自由が保證せられ、女の獨立が確實になつた時、世に老嬢の群を見ることは、より多くなるに違ひない。――最う十年の後てある。

初めてウヰスキーに醉心地の私は、T氏とS氏とを捉へて、種々の事を饒舌つた。

「新しい女の出現が、やがて老嬢の增加を意味することは、疑ふ餘地の無い事實だと思ふ。女の自覺も結構だし、女の覺醒も喜ぶべきだが、女ばかりが覺めた所て、男の方が晝寢の夢ては、張合の無いこと甚だしい。新しい男が出て、新しい女と握手しない以上、結婚不能の女が出來るばかりて、甚だ以て困つた事になりはすまいか……」

と云つて、通譯官は大きな聲て笑つた。

「左様、新婦人の出現に依つて、世間が賑かになるのは結構ですが、新しい女は厭だとあつて、お嫁さんの口が無くなる。遂には老嬢ばかりが殖えて、隨時隨所に紫の風呂敷包を見ると云ふ事になつては、何だか斯う心細くなりますね。新しい女も若いのは宜いけれども、老嬢と來ては、全く以て遣り切れない、願下げたくなりますね」

と云つて、小說家は小さな聲て笑つた。

「多少の修養ある老嬢と、今の新しい女には、生理的にも心理的にも、大分共通の點がある様に思ふ。新しい女は、考へて居る事を書いたり、公に演說したり、また大びらに實行するが、老嬢の群は何事も

云はず、何事も爲ない振をして、唯それを對世間の場合に、斷片的に現はすだけの相違てある。何れにしても厭なことぢやないか」

と云つて、私は聲を立ずに笑つた。

笑つた三人の顏には、芳烈なウヰスキーの醉が、大分、紅く浮いて居た。殊にT氏とS氏とは、二重に發した醉の爲めに、「唄ふに適い醉心地になつて、バーの方へ降りて行つたが、微醉の私の眼前には、未だ「紫の風呂敷包」がチラ付いて居た。夢か現か幻の樣に、御苑の夕暮の其の姿を、彷彿として眺める時、私の心は依然として、十年の昔に暗かつた。

醉はうとしても醉ひ得ない男の淋しさを、自分自身の其の夜に經驗しながら、賑かな群に引入れられる樣な心地て、私は階下のバーに降りて見た。肌寒い雨の夜だと云ふに、强烈な酒の刺戟に依つて、胸の悶えを忘れ樣とするらしい若人が、此處にも彼處にも群をなして居た。中には見知り越しの古い新聞記者や、カフエーばかりを飲み歩いて居る洋畫家や、エプロンの胸白い女給仕に懸想して、毎夜の樣にぞめきに來る近所の商店員なども居た。それ等の人々が、何の屈託もなく、何の煩ひもなく、何の惱みもなささうな、華やかな陽氣な調子て、話たり飲んだりして居る樣を、私は羨む樣な心地て眺めて居た。

過ぎ來し方に對する執着もなく、行末に眺める野心もなくて、唯、現在の春や秋に、晨の花に戯れ、夕の月に醉ひ得る人は、眞に幸福であると思ふ。一身一家の煩ひも、人事世事の不平不滿も、凡てを刹那の醉に忘れて、唄ひつ狂ひつ日々夜々を過し得る人は、眞に幸福であると思ふ。燈火の巷に歡樂を追ひながら、人々と同じ樣に、歡樂そのものを正面に受入れる心地になれず、華やかな燈火の影に、暗い思を抱くとは、何と云ふ不幸な私てあらう。泣くに泣かれぬ思ひ出に、輕い哀愁を覺える樣な事は、私の月日にも繁くはないが、不圖した事から悄氣返つて、淋しく暗い心になるのは、稀しからぬ例である。今日も亦醉はうとして、努めて飲み努めて語つたのに、心は十年の彼方にのみ

馳せて、人々の如くに醉ひ、人々の如くに浮かれ、人人の如くに唄へぬとは、何と云ふ不幸なことてあらう。

勸められる儘に、いろ〳〵の酒を飲んだけれど、遂に醉ふことが出來なんだ。青い酒やら赤い酒やら、卵色したのや、紫色したのや、白いのや黒いのや、樣々の酒を飲んだけれど、遂に醉ふことが出來なんだ。通譯官は大學生の群に入つて、英語や獨逸語で盛に女の噂をして居るし、小說家は新聞記者の仲間に入つて、盛に洒落を云つて居るに、私の心は依然として暗く、依然として淋しかつた。

「今晩は、徹頭徹尾、遂に眞面目てすね」

小說家に斯う云はれた時、私は默つて頷くより他に、何とも云ふべき言葉がなかつた。

「祟られたんだよ、紫の風呂敷包に……」

通譯官が笑ひながら、大きな聲で斯う云つた時、新聞記者や大學生が三五人、ドヤ〳〵と私を取卷いて、ビールのコップを擧げた。

「何が入つてるんだい、其の風呂敷には……」

「怪談紫の風呂敷包なら、泉鏡花の檜場だ……」

「燒芋か、煎餅か、大福か、金つばか……」

「紫の風呂敷ッて、全體、何處にあるのだ……」

「飲め、飲め、紫の風呂敷包、萬歲……」

口々に斯んな事を云つて、私にも一つのコップを持たせた。その時、背の高い通譯官は、

「諸君、このM君と因緣淺からざる一人の女性、姓も名も判らない老孃(オールドミス)のために、乾杯をして頂きたい。その老孃は、一名を紫の風呂敷包と云つて、所在、生死共に不明てはあるが、兎に角健康を祈つて頂きたい。M君のために、其の老孃のために……」

と演說口調て云ふと、居合せた者七八名は、大醉して何が何やら判らぬ中にも、ビールやウヰスキーや、葡萄酒のコップを高く上げて、

「萬歲……萬歲……萬歲……」

と、バーの中は隅から隅まて、賑かに陽氣に動搖き渡つた。——見ず知らずの人達から、斯うした乾杯を受

けたことを、私は「紫の風呂敷包」に知らせて遣りたい。生きて居やうが、死んで居やうが、そんな事は最う問題でない。——

斯うまでされても、私の心は仲間に引入れられる程に浮き立たず、遂に醉ひ得ぬ淋しい足どりで、雨に更けた銀座の町に出た。十二時に近い大通りは、最う人の往來が絶えて、夏の初にしては冷たい風が、電信柱に氣味惡く吹いて居た。

「紫の風呂敷包」が、又しても眼前にちらつく。

附記、本號には「十萬圓の奧樣」を書く豫定でしたが、材料の都合で次號に廻しました。

浪人組論

鷺城學人

一

○支那に游俠傳ありて浪人傳なきも浪人のありし證據には柳々州の李赤傳に、李赤江湖の浪人也とありて浪人の語の出處となれり。或は聊浪于宇內といひ、或は獨浪煙霞、高臥風月といひ、總て浪の語は羈絆を脫して志を縱まにするを言ひ顯はすに使用せられ來れり。

○日本には昔より世間普通に知行に離れしを浪人といひ、別に浪々の身の語さへあるが、今日は無祿なる外に尙ほ特殊の性質を帶ぶると見るべく、又た實際範圍を狹く限らずして廣き意味に解するに如かず。

○今日より看れば支那の季次・原憲も浪人なり延陵・孟嘗・春申・平原・信陵も浪人の頭目なり。前の二人者は終身閭巷に在て書を讀み、獨行君子の徳を懷き、義苟も當世に合はず當世亦之を笑へり。即ち浪人の消極的なるものなり。後の四人者は皆な王者の親屬に因り有土卿相の富厚に藉りしも、士に驕らずして天下の賢傑を傾け、食客常に堂に滿ちにき。所謂る浪人趣味を解したる者なり。

○日本には豊臣氏の末造に著しく浪人の輩出し、眞田幸村、後藤又兵衛、塙團右衛門の如き蓋し浪人の尤なる者と見るべし。徳川氏に入りて一層浪人の多くなりしも、唯だ箇々別々に存在するのみにして、其云爲多く世と沒交渉なりき。纔に赤穗に四十七士ありて浪人なるもの丶一致の活動を天下に示し丶のみ。

○幕末に至りて浪人の所在に崛起するもの相亞ぎ、而も總て團體的勢力を以て活動せり。常陸に水戸浪士あり、大和に十津川浪士あり、京都に壬生浪士あり、其他討幕の業に從ひたる薩長土肥の士は多く當時の浪人なりき。

○明治に入て壯士なるもの丶現はれしが、浪人を廣き意味に解すれば、政黨の壯士も浪人の中に入る丶を得べし。されど嚴格にいへば壯士と浪人の間には其心術及び行動の上に異同の甚だしきあり。壯士の中にも時として有道有徳の士なきにあらざるも、概ね衣食の爲めに動く喰詰者のみ。其目的とする所一に或る政黨若くは首領の爲めにするを以て、多くの場合正義に不軌たるを免れず。

○浪人に眞浪と僞浪とあり。眞浪は自ら聞達を求めず空室蓬戸、褐衣疏食の境に沈淪するも、人格具はり正義人道に愜ひ胸に天下の經綸を蓄へ、一たび事に當れば人に負けを取らぬだけの素養と力量を有し、所謂る布衣の權將軍を恐れしむるの强點なかるべからず。『浪人しても大星力彌』といひし如く、昔の浪人も上乘なるものは武士の心を失はざりき。

○言ひ換ふれば眞の浪人は國士の心術と志士の風格となかるべからず。單に弊衣を身にし人の懷ろを狙ひ、

怒顏鳶肩、大言壯語して自ら快とするが如きは、決して浪人道に合するものと謂ふべからず。

○然るに世には陰に金を胼繰りながら、顯はに貧乏を賣物にして己れを利せんとする喰はせ者あり、之と同じく浪人の心なくして浪人顏しつゝ市井の無賴ぬ尙且之を恥づるの行を爲すものは、浪人の最も下なる者にして、所謂る僞浪の屬とす。

○世に判官贔屓といふ語あり、義經は終歳攻戰のことに從ひて殆ど虛日なかりしも、弟の故を以て天下を取る能はず、一に兄朝賴を利せしに同情するの謂にして、專ら强者を惡み弱者を憐むの場合に用ゆ。

○貧乏と判官贔屓は浪人の共通精神なり。之を古に觀るに豐家の末路を憐みて大阪陣に加はりしは積を厚うし癡を餘すの侯伯にあらずして當世に遇はざる浪人なりき。後の浪人の爲す所も亦概ね强者に對する反抗に外ならざりしなり。

○今の浪人の多くが國民黨に味方し、又た從來支那・朝鮮の志士に同情し一臂の力を藉すを吝まざりしは半ば判官贔屓に出づ。

○故に藩閥側に眞の浪人あるを見ず。自ら浪人を以て居る者なきにあらざるも、彼等は浪人の實なくして其名を借する者のみ。言ひ換ふれば私利を目的として或る勢力の下に聚れる走狗のみ。猶ほ維新の際、近藤勇等の率ゆる新選組は、浪人の名を冠しつゝ天下の爲めにすと揚言したるも、幕府の雇ひ壯士たりしと相選ばず。

○政友會に高田露なるものあり。元と大阪の青年學舍に學び長谷川好道・大島義昌等と同窗たり。若し軍職にあらば今日少くも大將の位置に進めるならんも、十年の役熊本の一隊を率ゐて西鄕を援け、今日に至るまで官に仕へず、故に政友會中浪人の資格ある者は乃公一人なりと言ひ居れり。されど彼が如きは野武士といひ得べきも未だ浪人といふべからず。恐らく事大主義の政友會にも一人の浪人と目すべきものなからん。

○昔は韓非子、儒は文を以て法を亂り、俠は武を以て禁を犯すといへりしが、我邦にても博徒を排擯すると同時に、浪人を重んぜざるの甚だしき、猶ほ當時の文

那の儒と俠とに於けるが如し。市井の俠にも尊ぶべきありて一概に律すべからず。世人の浪人に於ける眞浪の尊ぶべきを見ずして、僞浪の卑しむべき者のみを看ればなり。

二

○日本の浪人に內地浪人と支那浪人とあるも、支那關係のもの多きを以て、浪人といへば支那浪人を意味するもの丶如し。

○支那浪人とて系統の一ならず、北方系統のものは宗社黨の最員をなし、南方系統のものは孫文・黃興の肩を持ち互ひに反目の狀なからず、蓋し自然の人情ならん。されど孫・黃中心のもの浪人の八九分を占む。

○其南方黨たると北方黨たるとを問はず仰いで以て宗とするは三浦觀樹・頭山雲翁・犬養木堂の三人とす。此三人は始めより彼等と關係深く、世間よりも浪人の頭目と認めらる。

○三浦は浪人を愛すといふよりも、浪人的に出來あがりたる人なり。嘗て陸軍省の要局に立ちし時、藩閥破壞を企て丶薩長人士の惡む所となりたる、朝鮮に公使たりし時王妃殺害事件といふ大芝居を打ちて日韓兩國の弱蟲を驚かしたる、非增租運動の起りし時、進步黨の客分となり後鉢卷にて騷ぎ廻りたる、今次の憲政運動についても國民黨に同情し、閥族及び政友會をトッチメるの策を授けたる、總て浪人的性格よりす。

○彼は木戶系に屬す。當時木戶は職員錄を見て薩長人士の官場を獨占せるに驚き、切に改革の止むべからざるを感ぜしといふが、三浦の藩閥嫌ひなるは夙に木戶より意見を注入せられたればなり。

○初めて浪人と關係の附きしは朝鮮時代とし、浪人を中心として王妃殺害事件を演出せしなり。一昨年樞密顧問官に任ぜらる丶や、其不可を鳴らすものもありしが、彼は唯だ小遣取りの爲めにするのみとて、其心事を辯じたり。

○然り彼は樞密顧問官たるも浪人の心を喪はず、浪人會に缺かさず出席し、時として演說を試み、憚らず山縣・桂・寺內等を惡口し、身の顧問官たるを知らざるも

の丶如し。

○蓋し彼は天性のヤジリ屋なり。日比谷事件の時野次心勃々として禁ずる能はず、飄然家を出て丶群民の警察・交番所を焼打するを見物し、其足にて目白の椿山莊に至り玄關先に於て、元帥ともあるべき者が、文官の輩に倣ひて兵士に護衞さる丶の卑怯なるを怒罵して歸れり。

○過ぐる年朝鮮刺客の彼を狙へりとて警視廳は刑事をして日夕其邸宅及び身邊を衞らしむるや、彼は朝鮮の首取りよりも此方が煩さしとて辭退したりたるが、遂に何事もなかりき。

○當時家人は萬一を慮りて外出を止む。「されど彼の性として尙更斯かる場合に家に居るを欲せず、乃ち成田不動の護符を手に入れ、これさへあれば災ひの身に及ぶ憂ひなしと家人の意を安んぜしめ、斯くして行かんと欲する處に行けり。

○將軍老いるも尙ほ武を試むるに堪へ、時として風流の罪過なきにあらず。熱海の別墅に一少姐あり、一枝濃艶の麗花に比すべからざるも、十人並以上の姿色を具ふ。

○往に小間使たりし時、將軍之を愛し終に花蕾を破る。かくと知らぬ父母は、過のなき中に身を定めしめんとて、女の爲めに好壻を得たり。されど女は舊主の情を忘る丶能はず、婚禮の夜竊に脫して將軍の家に走る。將軍益々之を寵して小星とし、過ぐる春、玉の如き一男兒を擧げにき。將軍戲れて曰く、放生會に鰻を放ちたるに忽ち化して人間となれりと。

○知人の來り訪ふあれば、少姐必ず座に出て丶茶を侑む。將軍客の膝を突て「オイこれが問題の女だぜ、惡くなからうが」と私語し、面上喜色あり。

○山縣・井上・桂は彼を敵に廻はすを恐れて意に忤はず木戸御免とせり。今日元老に對して言はんと欲する處を言ひ得るもの恐らく彼れ以外になかるべく、山縣を以て大正の大御所とせば、彼は大正の大久保彥左衞門にあらざるか。

○頭山は浪人生活を以て始終するもの、彼の眞價も亦

大浪人たるに存し、何物の力も彼を左右する能はず。是れ尋常一樣の浪人にあらずして所謂る浪人道に協ふの士なればなり。

○未だ嘗て彼の國家經綸を談ぜしを聞かず、事あるに當りて陣頭に立ちつゝ活躍せしを見ず、されど無言の中に雄辯あり、無爲の間に大活動あり、是れ彼の偉なる所以。

○嘗て浪人會の議員候補者を出すに當り、頭山をして之を指名せしむ。彼は唯だ一言「古島一雄君に御苦勞を願ふ」といひしのみ。而も此一言は他の千萬語よりも重味あり。

○今春孫逸仙の在野の名士を招きて宴を張るや、彼れ衆を代表して謝辭を述べて曰く『今夕は有難う』と。此簡單なる挨拶も彼の口を通じて初めて大演説以上の力あるなり。

○一昨秋革命、浪人の南清に行くもの多かりしが、中には火事場泥棒に類するあり、革命黨の懷を荒らすあり、猜疑嫉妬の念を以て互ひに排擠するあり、概して浪人の評判惡しく、却て支那人の反情を挑發し、國人の體面を傷くること少からず。頭山は之を憂ひ、浪人取締の目的を以て南清に赴く。

○支那に停るの間、彼は唯だ默々として客棧の一室に起臥するのみ、時として南方の名士を往問するも、談論を上下するにあらず。而も雲翁來れりと聞きしのみにて僞浪の徒は恐れを爲し、革命の志士に好感を與へ、國交の上に益する大なりしなり。

○頭山をいふもの必ず玄洋社に及ぶを常とす。今日の玄洋社は昔日の盛なく、社中民權家もあれば官權論者もありて頗る雜駁なるが如し。されど頭山の是等を包容せる流石に其器局の大なるを看るべきにあらずや。

○犬養の浪人間に重望あるは、獨り自ら浪人たるがためならず、頭山と同じく親分の情誼を以て彼等を指導し救恤すればなり。

○支那の紳董及び志士と交ある彼を以て最も古しとし康有爲・梁啓超にせよ、孫逸仙・黃興にせよ、嘗て我邦に亡命客たりし時、彼の助けを蒙りしこと尋常一樣な

らず南方の士、知ると知らざると犬養大人を欽慕して措かず。日本の浪人にして支那に干繋するもの始め概ね彼の紹介に出づ。

○孟嘗君嘗て趙に過る。趙人孟の賢を聞き出て丶之を觀、皆笑て曰く、始め薛公を以て魁然たりとせしに、今之を視れば乃ち眇たる小丈夫のみと。

○近時木堂の名海内に喧し。余の知れる一婦人一たび彼を見んことを望み、關西遊説より歸るの日、行きて新橋驛に迎ふ。後ち余に語て曰く、初め壯大雄偉の形貌を具ふるならんと思惟せしに、短軀痩身恰も貧乏老書生の如きを視て有難味を減じたりと。

○然り木堂の狀貌中人に及ばず、されど天下賢と不肖と知ると知らざるとなく、其聲を慕ひ、憲政をいふもの皆目して以て神と爲す。蓋し初めより國士的浪人の心を以て政界に處すればなり。

三

○支那浪人の古きものに　宮崎寅藏・末永節・平山周・中西正樹・内田良平あり、中古なるものに萱野長知・島田經一・伊東知也あり、中に就き宮崎最も古し。

○宮崎の一門皆な凡鱗常介にあらず。長兄八郎は西南の變、賊に投じて殪れ、中兄民藏は土地復權を唱へ民權家として知らる。寅藏は其末弟なり。

○初め基督教徒たりし寅藏は、一たび罪を大帝に得るや聖書と讃美歌を棄て丶暹羅に遠征す。是れ浪人生活に入るの首途とす。

○名は殖民事業を營むといふにあるも、其實同志を糾合して謀叛を成さんとしたるなり。されど志徒に大にして計之に協はず、失敗して日本に歸り、それより支那に轉ず。孫黄と相知れるは其時よりなり。

○從來孫・黄一派の活動には必ず彼の加はり、何事を差措きても二人者の爲めに盡すを以て、彼を喜ばざる者は支那人の草鞋取りと貶す。されど關係の久しければ勢ひ斯く傾かざるを得ず。

○孫黄も亦彼に許し、友人交際といふよりも親類附合といふに近く、過ぐる革命騷動の時も、用ゐて帷幕に置きたれば、自然他の浪人の妬む處となりにき。

○嘗て革命に失敗して日本に歸り、各處に放浪せし末、桃中軒雲右衛門に從ひ、牛右衛門の名を以て浪花節語りとなりしこともあり。聲量豐かにして節語りもさまで拙ならざれど、言葉使ひの熊本辯丸出しなるより滑稽に陷る。

○彼は米鹽の資を得る爲め此に出てしも、士魂あるもの丶長く藝人風情と相伍する能はざるは初めより明かなる處、終に雲を見限りて元の支那浪人に歸れり。

○彼は一通りの學問あり、文章を好くし、人格卑しからず。浪人の上なるものなり。多年不養生の結果近頃肺を患ひて、屢〻咯血し、當年の元氣なし。

○末永も孫黃系の一人にして、宮崎に亞ぐの位置にあり。阿兄純一郎は一時操觚界に名ありしが、其後浪人の仲間入りし、亦專ら支那問題に關係す。

○嘗て熊本に一木齋太郎なるものあり、壯士の豪暴なる者なり。一木の車夫某酒を被れば芝居の身振りをなし、其臺辭は始めより終まで語を爲さず、唯だカニマニカニマニといふのみ、其滑稽なる觀るものをして笑倒せしむ。

○末永節は大に車夫の科白を喜び、酒宴に臨みて興臻れば自ら之を試むるを常としたり。木堂乃ちカニマニ將軍と命名し、爾來同人の間に傳はる。

○彼はカニマニ踊の外に花火線香踊と呼ぶ隱藝を有す其手を動かして跳躍するの狀、花火線香に似たればなり。觀るもの皆な天下一品と稱す。

○彼れ文學の才あり、單に文章を以て立つも優に名を爲すに足るべし。飄逸の二字彼の人と爲りを悉くす。

○平山も初め暹羅行に加はりたる一人にして、孫逸仙との關係久しく、一時宮崎以上に信ぜられ、前年孫の東京に客たる、平山の家庭教師の名に於てしたる位なりしが、後ち軍用金調達のことより衝突して以來漸次疎遠となれり。

○英語に長じ西班牙語を好くし、文章亦拙ならず人物溫和にして一見游閑公子の如し。蓋し浪人中稍やハイカラ趣味を帶ぶる者か。

○中西の始めて支那へ行きしは外務省留學生としてな

りしが、二年にして脱し支那人の姿に扮して各處に遊歴す。當時荒尾精の上海に對清事業を起すあり、彼れ林の名を以て之を訪ふや、何人も其變裝日本人たるを知らざりしといふ。

○其後幾度となく支那に往復し、日露戰爭の際間接に盡す處あり。兩三年前北滿洲旅行中吉林の山奥に於て馬賊に襲はれ、死に垂んとするまでに負傷せしが、漸く蘇生して故國に歸るを得たり。爾來腦を病み好物の酒を絶てり。

○浪人相會するや年長の故を以て必ず彼を座長に推す性情恬淡にして談笑を好み江戸ッ兒の風あり。

○支那浪人中他と行徑を異にして除者にさるゝものを內田とす。故平岡浩太郎の甥にして、元と甲といひ、後ち良平に改む。玄洋社の出なり。

○甲午の夏、東學黨の南韓五十六州を騒がすや、天佑俠の一團之に投じて驚天動地の活劇を演じ日清戰爭の導火線となる。內田も天佑俠に加はりし年少豪傑の一人とす。

○初め朝鮮浪人たりし彼は眼を支那に轉じて先づ滿洲に入り、それより西伯利亞を經て遠く露都に行き、三十三年まで浦鹽にありしが、會ゝ孫逸仙の廣東に兵を擧げんとするあり、乃ち孫の幄中に入り宮崎・平山・末永等と事を與にせり。

○されど幾くもなく彼等と衝突して朝鮮浪人に復歸し日露戰爭後統監府に入れり、名は囑託といふも初め統監伊藤の護衛壯士に過ぎざりき。

○唯だ李容九・宋秉畯等と相知るを以て、伊藤は一進會を操縱する必要より彼を優遇したり。

○伊藤の統監職を罷むると共にお拂ひ箱となり、もとの浪人に立戻りたるも、官權派に接近し、今や後藤新平・杉山茂丸等に頼て衣食す。

○齢十六にして福岡に道場を開きて柔術を指南したりといふだけに、膂力の強きを以て浪人の間に鳴る。

○萱野の初めて南方志士と交はるに至りしは『革命評論』時代なり。日露戰爭前佐世保邊に放浪せしが、同戰後支那浪人の滿洲義軍を編制するに及びて之に投ず。

滿洲義軍とは日本軍の爲めに特別任務を有する馬賊の別名にして、花田中佐之が隊長たり。

○四十一年南清に赴き爾來黃興と最も親善なり。武漢の亂には常に黃興と共に戰線に立ち、南京政府時代にも孫黃の幕中にありしを看れば、支那浪人中相應の位置にあるらし。一見不得要領の如くにして案外要領を得、革命的事業に趣味を有するだけに熱心なり、一概に火事場泥棒的にあらず。

○朝鮮浪人より支那浪人に轉じたる他の一人を島田とす。福岡の宿屋の子にして末永と友とし善く、可なりの財產ありしも、支那の革命事業に投じ、今日は無一物となれり。

○嘗て炭坑家某に革命資金の調達を依賴し、意の如くならざりしとて『此大馬鹿野郎』の電報を發したりといふ。蓋し直情徑行の士なり。

四

○從來浪人の活動したる慨ね外交問題に關してなるも其初めて內政問題に關係したるは、去る四十四年秋、鳩山歿後に於ける東京市補缺選擧とす。

○彼等は浪人會の名を以て古島一雄を候補者に推薦し理想選擧の試金石とせり。或者は貧乏浪人の空威張なりとて目するに輕侮の念を以てし、或者は今までになき事なりとて好奇心を以て見、而して或者は浪人の意氣甚だ愛すべしとて聲援を與へたり。

○政戰に於ける浪人の武器は固より一に言論なりき。言論を以て黃金に對す、事の困難なるは初めより明かなるも、浪人の奮鬪振りを看て輕侮の念は同情心に變じ、意外にも江戶ッ兒の人氣に投じたれば、二三金力を以て立ちし候補者を一蹴し去りて物の美事に功を奏しき。

○理想選擧同盟會は此結果に依て造られ、昨年五月の總選擧に際し大隈伯・三宅雪嶺・黑岩淚香等を詮衡委員として理想候補者を選定し、全國に亙りて大活動を試み、再び東京市より古島の出て、浪人の力の侮るべからざるを示したり。

○更に過ぐる政變に於て浪人會は天下に率先して閥族

打破・憲政擁護を決議し、政・國兩黨の士及び同志記者と提携しつゝ、此目的の爲めに活動したり。

○常時官僚派の新聞は、憲政運動を以て破浪人・三文記者の愚民を煽揚するものとし、其價値なきを罵りしが、破浪人・三文記者の活動は桂内閣を倒すに與つて力ありしにあらずや。

○最初の旗擧げたる理想選擧運動の發頭人は佐々木照山・田中舍身・伊東知也・萱野長知にして、就中前二者の功勞最も多きに依る。

○古島は從來隱れたる人なり。隱れたるは虚名を求むを欲せざるに出づ。されど無爲に隱れたるにあらずして、裏面に活動したり。卽ち策を案じて人に授くるの役廻りを勤めたり。

○陸羯南時代の「日本新聞」は從來古島の關係したる事業中最も心血を注ぎたるもの、隨て新聞記者としての手腕の最も顯はれたるを看る。

○今日筆を執るに懶きの狀あるも、日本時代は論説に雜報に議會筆記に大文章を草し、而も椽を揮ふこと飛ぶが如く、時として職工の活字を拾ふと其速力を爭ひたりき。

○編輯者としては總ての原稿を校閲し、殆んど文を成さゞるものも彼の加筆を經れば名文となりて紙面に顯はる。日本新聞記者にして誤て文名を成せしもの少からず。

○彼の文章は犀利にして明快、議論よりも敍事に長じ、殊に辯難攻擊に長ず。一たび日本及日本人の「雲間寸觀」を讀むものは、忽ちにして彼の文才を認めん。

○議員たるを欲せば、今日に至るまで幾度となく其機會なきにあらざりしも、彼の性質として選擧を爭ふの馬鹿らしく感ぜられ、總て議員たるものを重視せざりき。一昨秋起ちしは佐々木・田中・伊東等の强制的要望に餘儀なくされしのみ。浪人會の推したるが故に餘儀なくされつゝも、何程か興味を持ちしのみ。

○彼れ選擧人に演説して曰く、我輩は貧乏なれども貧乏を賣り物にせずと、選擧人中其意の存する所を解せず、貧乏ならざるの反語なりと直觀したるものあり。

○僅に古島に投票したる某々等自働車を驅て彼を訪ふや、其餘りに茅屋たるに驚き『これが先生のお宅ですかい』と思はず口走りたれば、古島が貧乏浪人なるを知らずして今日に及びし彼等の不明を笑ひたり。是に於て某々等も初めて前の演説の意を眞解して去れり。

○浪人及び新聞記者として既成品なれども、政治家としては未成品なり。されど國民黨の廓清憲政擁護運動には彼の功大なるなり。

○佐々木は同じく支那浪人といふも北方の色彩を帯び蒙古王と綽名さるゝだけ蒙古の事情に通ず。長州人なれども長州人に反抗し、唯だ一人故乃木に推服するのみ。

○今の浪人中彼が如く青年間に人氣あるはなし。啻に東京に於てのみならず、地方到る處に歡迎さる。殊に政變以來犬養・尾崎に亞て政界の寵兒となれり。

○彼の人氣あるは戰國時代の英雄にありさうなる相貌聽者を醉はしむるの辯力及び奇警なる彌次りを以て議會の名物たりしことに原因するものゝ如し。然り此三つのものは確に彼の生命なり、而して健康無比なることも武器の一ならん。

○文章を好くし詩を作り、字も畫も一寸書きゝ、近頃到る處に揮毫を所望せらる。新聞記者として適し黨人として最も適し、氣合の面白き才物たるを失はず。

○田中は弘之よりも舍身居士の名を以て聞ゆ。東亞女學校といへば其名頗る堂々たるも生徒よりも敎師の數多しと聞きては流石に浪人の經營せるだけに、算盤勘定に合はざることゝ察せらる。

○彼の政治を談じ、政治運動に携はるは總て佛敎の上よりし、國利民福を講ずるを以て衆生濟度なりとせり。

○彼も言論の雄なり。『茶の木畑に二十年』『睾丸は男子の勳章』『胴テッ腹を蹴破るぞ』『身方外にある此舍身菩薩』言ふ處頗る奇拔、其面貌に至ては更に奇拔。

○伊東は號を鳳南といひ、支那浪人をして孫よりも黃の系統に屬し、革命の時支那に押渡りて相應に活動したるらし。

○昨年山形に選擧を爭ふや、當選の曉は歲費全部を提

供するの約を以て當選したり、而も第一の多數なりしは人の意外に感じたる處、恐らく本人も夢の如く感じたらん。

○當時東京の選擧本部にては。伊東の當選を喜ぶと同時に、彼が歡喜の餘り、精神に異狀を呈せざるかを憂ひたりといふ。

○運動者は當選後直に四年間生命保險に入らんとを要請し來れりといふが、开は彼の身に萬一のことありて抵當の歲費を押ふる能はざる場合を慮りたればなり。保險議員とて一時同人間の談柄となりにき。

○彼は過ぐる議會に支那問題に關する質問演說を試み『我々浪人は……』といひて笑ひ種を殘せり。浪人界の元氣者だけに時々失敗を演じ、而も滑稽なるの多く、人物愛すべくして惡むべきを見ず。

五

○內地浪人にして傳ふべきもの松村准之進・中村六藏・本多晉あり。いづれも活動せし舞臺の主として內地なるも其半世の傳奇的なるは支那浪人に讓らず。

○松村は維新の志士にして、歲十七郷關を出てゝ交を四方に求め、危難屢次身に及ぶ。當時大樂源太郎の長州を脫して難を久留米に避くるあり、累の藩主に及ばんとしたれば、有志の士大樂に自殺を勸めたるも、肯んぜざるより、終に斬て殺すの止むを得ざるに至る。

○松村は大樂殺しの一人として明治三年より十一年まで廣島の獄に繫がれしが、初め捕はれて審問せらるる際、釘板の上を素足にて步ましむるなど拷問具さに至れり。今日步行の自由ならざるは之が爲めなり。

○其後大阪府の警部となり、日清戰爭の際臺灣に行きて雲林支廳長となり、松・隈內閣の時北海道宗谷支廳長となりしが、三十三年罷めて浪人界に入り今日に及ぶ。佐々木照山が臺灣に浪遊し、暫く雲林の小吏たりし時の長官は松村なりき。當時照山は廳內に於て肉筆の新聞を發行するを日課とし、毫も吏務を顧みず。されど松村は其才を愛して怠慢を咎めず、時として其獻策を用ゐたり。照山亦之を德とし、松村の雲林陷落事件に關して誡らるゝや、上に殉じて罷む。

○三十五年代議士に選ばれしも、上京の途中河野の奏答文事件にて議會解散に會したり。爾來意を議會に絕ち、專ら院外に在て國民黨の爲めに盡せり。

○彼は過ぐる國民黨大會に於て片岡直溫の除名を叫び憲政運動の際は殆んど、每日の如く擁護會に出席し、二十四硬派の政友會を脫するに際し、三多摩壯士の彼等を脅威すべく精養軒に押寄すとの報傳はるや、直に自宅より部下の士を呼びて之に備へたり。

○當時自宅に電話を懸けんとしたるに、會話中なりしを以て彼は交換手を一喝して曰く、此雄之進の電話に限りて話中といふ筈なしと。

○彼は事ある每に『强かこつならナンてんカンてんやる』といひ、『此雄之進老いたりといへども、國家の爲め鐵砲玉となり爆裂彈となるも敢て辭せず』といひ、硬骨を以て知らる。彼の木堂を尊崇して初めより聲援を吝まざるは『强かこつ』を好むよりす。

○世人は最近に至り中村の今尙ほ生存せるを知りし程に久しく忘れられしも、彼は廣澤參議暗殺の嫌疑を以て永く獄に投ぜられ、一時志士の間に名を知られき。

○彼は米澤の雲井龍雄と友とし善く、嘗て京師に上るに際し一人越しに主從となりつゝ東海道を旅行したりといふ。

○出獄後鄕國熊本に隱栖して東洋純正哲學・大圓心理を著し、或は文學精舍を起して一時佐々友房の濟々校に對抗したり。

○初めて浪人會に臨みしは憲政運動の初期にあり。當時彼は我鄕里より德富某の如き腰拔けを出せしを恥づとて、慷慨激越なる演說を試みたり。七十の老齡ながら頭髮黑く腰曲らず、五十左右に見え矍鑠驚くべきあり。

○本多は舊幕臣にして、上野彰義隊に加はり一部將たり。林學博士本多靜六の養父にして、樂隱居ながら缺かさず浪人會に出席し、時として演說を試む。或時演說中入齒を落したる奇談あり。其最も振へるは彼の名刺なり、記して曰く『東京帝國大學農科大學教授林學博士從何位勳何等本多靜六父晉』。

○此外支那浪人に鈴木天眼・小川運平・中村海田あり、日本浪人に本城安太郎・村松恆一郎・福田和五郎あり。頭山門下の豪を以て聞ゆる者に的野半介・大原義剛・美和作二郎あり。玄洋社の先輩進藤喜平太は頭山外にあれば自分内を守り、人格の人として九州浪人の間に重きを成す。

○政界腐敗し士道衰ふる甚だし。浪人の高風氣節を以て立ち、世の鹽となり、清涼劑となり、時として輿論の先驅とならば、社會の一勢力たるを失はず。此意味に於て浪人の大に自覺し自重せんことを望まざる能はざるが、古聖も紫の朱を奪ひ鄭聲の雅樂を亂るを歎じにき。知らず我浪人には眞人多きか僞人多きか。

最近人物の動靜

覆面冠者

△東郷大將は四月二十日を以ていよ〳〵元帥に列せられたが、此の昇任は至當の事て有るから、何人も異議を唱へる者がない。

△是れ迄東郷大將と同じ歩調て進んて來た海軍の軍人は山本權兵衞伯一人て有ッたが、伯は內閣總理大臣となッた爲めに、此の元帥の方は東郷大將よりも一期遲くれることとなッた樣て有る。

△記錄に依ると、山本伯と東郷伯とは共に明治三年を以て、帝國海軍へ入ッたのて、山本伯は同年十一月二十八日を以て兵學寮生徒となり、東郷伯は十二月十一日を以て見習士官となり、爾來殆んど同じ歩調て、大將に至る迄進級して來た。

△兩人が海軍少將になッたのは、日清戰爭が終局に近づいた頃の事だ、明治二十八年二月十六日に東郷伯が

少將になると山本伯はそれから三週間ばかり遲くれて同じく少將となッた。

△それから明治三十一年五月十四日には、兩人同時に中將に進み、日露戰爭が始まッてから間もなく兩人同時に大將となッた、卽ち三十七年六月六日で有ッた。

△海軍の軍人等は、山本伯も良い加減に政治の足を洗うて海軍へ歸らないと、桂公が元帥にならない内に年期が無くなッた樣に、山本伯も亦元帥にならざる前に、後備に編入されて仕舞ふかも知れぬと言ッて居る。

△陸軍次官岡市之助君は退任して、敎育總監部本部長本郷房太郎君が之に代ッて次官となッた、岡次官は長閥に屬する人だから、薩閥の內閣に受けが惡るいので罷められたと云ふ說も有れば、上原、田中兩氏と進退を共にする筈で有ッたのが、事務の都合上今日迄居殘ッて居たけれど、議會も閉會となり、一段落が附いたので岡君自ら辭表を出したとの說も有る。

△本郷中將は永く人事局長を務めた人で、陸軍の情實に精通して居る上に、至て公平な人で人望が有るから、本人さへ不平を起す樣なことが無ければ、良い次官が出來るだらうと云ふことだ。

△加州の排日問題が矢釜しくなッて來たので、政友會から江原素六翁、國民黨から服部綾雄君、日米同志會から添田壽一君を特派したが、三君共に米國の大陸を踏んだことは有る人だ。

△江原翁は明治の初年に靜岡藩から洋行したことが有る、今回は二度目で四十年振りだ、服部君はシャトルで日本人會長をやッて居たことが有る、添田君は度々洋行の途中、米國を通過したことが有る。

△江原、服部兩君は日本語の演說は巧妙であるが、英語は怪しい者だ、然かし米國人の話しかける大意を諒解すること位は出來るかも知れない、英語の一段になれば、添田君は英國に留學した人だから、一番正確なる英語を十分に話すことが出來て、英語演說でも差支なく出來る。

△五月になッて名士の洋行が、大分多かッた、慶應義塾長で貴族院議員たる鎌田榮吉君が、歐州へ出かけた、

西比利亞鐵道に依て往ッた、それから小崎弘道、井深梶之助兩君が歐洲へ往ッた、之れは歐洲て開く日曜學校の大會へ參列する爲めて有る、政友會の前代議士なる山口熊野君も亦排日問題の視察として米國へ出かけた。

△小崎、井深兩君の洋行費は、大部分は山本首相の機密費から支出し、又一部分は先般來朝したる米國の鑵詰王ハインツ氏が厚意を以て寄附したと云ふことだ。

△名士の支那行きも亦記すべきことだ、加藤高明男が往ッた、四月三十日に上海へ着し、孫逸仙氏や黄興氏と會見したが、五月二日には上海出發、南京に赴き、それより揚子江を遡て漢口に出て、湖南の長沙を一見し、漢口へ歸て、北京に往ッた、貴族院議員の視察團は之に次て出發し、五月七日には上海へ着したが、一行には德川慶久公、蜂須賀茂韶侯、曾我祐準子、尾崎三良男、古市公威、加藤恆忠の諸君が居る、此の一行中て、支那の最近の事情に通じて居るのは古市君ばかりて、彼れは一昨年歐洲よりの歸途、北京から漢口へ出て、一應の視察をなし、尙東亞興業會社長として、種々の調査をもして居る。

△中華民國の國務總理趙秉鈞君は、警察官から身を起し、袁世凱君が直隸總督時代に拔擢した男て有る、袁君を桂公とすれば趙君は大浦子に比すべき人だが、其の執る所の手段は支那一流て、其の目的を達するが爲めにはドンな事てもやる男だ。

△宋敎仁を暗殺せしめた位は、趙君に取ては何てもない事だ、前清の皇太后の死も怪しいと云ふ評判が有るが、怪しむ方が無理はない。

△全體袁世凱君からして支那式て有て、ドンな事ても平氣て行ふ方だから、其の股肱たる人々は、何れも大膽にして機略に富める連中だ。

△趙君の後任として國務總理の代理となッた段祺瑞君の如きも其の膽力に於ては趙君に劣らぬ人だから、議會がグヅ〳〵言ふならば、クーデタ位は何とも思はずに斷行するて有らう。

△松田司法大臣は從二位となッた、政黨出身の人て從

二位になッたのは、之れを以て嚆矢とす。

△彼れは不得要領を以て、能く要領を得る人て、其の融和力に至ては、驚くべき者が有る、此程も政友會の一代議士が總會に於て、大分激烈なる論鋒を向けて、幹部を攻撃した、サウすると其の翌日、松田法相がヌーと其の私邸を訪問し、「君は碁が强いと云ふことだから、一番打ちに來た」と言ッて、平氣な顔をして二三番も碁を圍み、何も言はずに歸ッて往ッたが、唯ソレだけて彼れの感情はスッかり一變し、マア松田君が幹部に居る間は、面白くない事も默過することにしようと云ふ樣になッたさうだ。

△地方の政戰は、段々盛になり、先づ新政黨の方面て後藤男は福島、茨城、神奈川から山形へ轉戰し、大浦子は若槻禮次郎、箕浦勝人の諸君と山陰道を遊說した、其外坂本金彌君を四國中國へ派し、江木翼君を九州へ派するなど、新政黨もなか〱活動して居る。

△ソレから憲政擁護會の方ては犬養毅君は岡山から歸て來ると、直ぐに青森から秋田に入り、尾崎行雄君は和歌山から京都、滋賀を遊說し、何れも憲政擁護の大旆て押し廻はして居る。

△政友會に至ては大岡育造君が福島から中國へ向ひ、廣島、山口て戰うたが、山陰道へ新政黨が現はれたと云ふので、大岡君を筆頭に井上角五郎、小久保喜七、吉植庄一郎の面々が向ッた。

△奥田文相や山本農相も、政友會員としては新米て有るから、大に働かねばならぬと考へたと見えて、奥田君は神奈川支部發會式などへ臨席し、山本君も亦長野へ出かけて、南信北信兩支部の大會へ臨席した。

△豐川良平君は新政黨へ力瘤を入れた爲めに、三菱から隱退を迫まられ、退隱料として二十五萬圓を受取ッたが、彼れの子息は之を犬養君の憲政擁護運動へ寄附せよと云ふさうだ。

△加藤高明男も既に新政黨へ加入して居るのに、三菱は何故に豐川君の政治運動を排斥したかと云へば、一は其の會社の規律を保つ爲めても有るけれど、又一は之れが爲めに山本首相の感情を害する時は、三菱造船

所の軍艦請負ひにも影響するからだと云ふ説がある。

△三宅雪嶺君慶應義塾に於て演説して曰く、昔には慶應義塾の塾風と云へば、外の士族の學生が肩を怒らして歩るく時に、塾生ばかりは綺麗な衣服を着て、平民的に歩行し、外の學生が金錢に注意せず、買物をしてもツリは入らぬと云ふ所を、塾生は計算をしてツリ錢を取ッた、之れは士族の弊風を矯正するが爲めに、福澤先生が特に一派の塾風を作ッた者だが、今日は滔々たる世間の學風が、皆福澤流となり、綺麗な衣服を着て、金錢の計算をする樣になッたから、今日に於ては却て少しく肩を怒らす士族の風が欲しくなッて來た、金錢ばかりを崇拜せず、意氣を尊重する風が欲しくなッて來た。

△新渡戸稲造君は第一高等學校長を罷めたが、之れは永い間の希望て有ッた樣だ、彼れは過ぐる日、人に語て曰く、不規律なる日本の社會に於ては、靜思の餘暇に乏しいので、思想が混亂を免がれない、靜かに何か考へて、佳興に入て居る時に、突然の來客が有る、電話が頻々とかゝる、豫約せざる事件が起る、歐米に在ては日曜日には會堂へ往て牧師の説教を聞くと、精神がスガ／＼しくなる、牧師が常に偉大なる眞理を説くと云ふワケてはないが、自分が平生考へて居る樣なことを、彼れも考へて居るかと思へば、誠に心强くなる者だ、然るに日本人は多く會堂へ往かず、年中忙がしく暮らして居る、自分などは此の營々役々として餘裕のない社會生活に堪へない樣な感が有る、第一高等學校長などは罷めて、少し靜かに修養したいと思うて居る。

△山川健次郎君が東京大學へ歸ッて來た、山川君は明治三十四年の六月に菊地大麓男の後任として、總長に任ぜられ、爾來數年間其の地位に居た人て、大學總長としては學問、識見、經歴共に申分のない人だ。

支那から歸つて

澁川玄耳

▲醉つて臥て

是迄屢〻旅行をしたが、毎時(いつも)自分の氣儘には爲らない、行きたくない處にも廻はり見たくない物も看なければならず、書きたいと否とに拘らず報告や紀行を捏ね上げねばならなかつたので、傍から羨む程當人面白くはなかつた。

去年の冬東京朝日を退いて、二十年來始めて無職の浪人と爲つた、いづれ又何か飯の蔓を捉へねばならぬが、此處半歳か一年ノンキに遊びたいと思つて、先づ支那を目ざして出立した。勿論何を書かう下心も無い、何處の依賴も囑託も受けず、僅か許りの旅費、是て行ける丈行き居られる丈居て見よう、金が盡きたら何時ても切上げる積てあつた。今迄に無い、自分勝手の氣任かせ氣散じの一人旅てある。

さて上海に上陸して見ると、誰からも、何の視察に來た、何の目的だといふ事を第一に訊かれた、或は例の『見物』をお書きに爲るのでせう其ならば何某君が案內者に好いなどゝ敎へて吳れる人があつた、或は孫黄兩先生に紹介しようと世話燒く人も有つた、無職無業の小生が漫然と此處まで出掛けて來る筈は無いと彼方に居る人は極めをつける。

處が此方は旅程も日程も定まつたものは無い、何處までもノンキに構へて格別見物もせず、老酒(ラオチユウ)が旨いとばかりて醉つては臥て日を暮らして居た。どうやら斯うやら揚子江を溯つて漢口武昌邊まで行つたが、ヒヨイと歸らねばならぬ事が起つたので、まだ少しの金は殘つて居たのに旅行は中止となつて了つた。

▲故郷と東京

故郷に一時居て見たが、到底長くは居られないものだ。功成り名遂けた某將軍が曾て話された事が有つた、『乃公も老後を故郷に送る積で一寸した邸も構へて見たが、五日十日は好いが、やつぱり寂しくて長くは居られぬ、つまり東京、其も便利の好い處に西洋風で簡單な生活をやる方が安氣だ、新聞も見ずに居られるならば格別だが、今の世の中に老を山林に養ふなどゝいふ事は出來ないものだ』と言はれた。都會と村落との生活が餘り懸け離れた爲め、都會生活に慣れたものは村落の不自由さが堪へられないといふ理由も有らう。

今日に於て、少し金のある人ならば、簡單に生活するには村落より却つて都會が都合が好い、都會ならば萬事に人手が費らぬので、家も小さくて好し召使ひも少くて濟む、出入にも雜作が無い、大概のエライ人でも都會てならば誰れ某さんと知れないで通る。之が田舍だと大變だ、瓦斯が無い、電燈が無いだけでも餘程臺所の手數が要る、何か一つ食べて見ようといふ場合には幾里も遠方に態使ひを立てるか、或は小包で取寄せるといふ騷ぎになる、まア衣食住の欲は抑へるとしても、知識欲の渇を忍ぶのは更に苦痛である、若い者が都會にあこがれると共に老いた者も亦村落には落付かれない。

▲ノンキは却て都會

ノンキを求めて東京を出た小生は再び東京に入つて來た、遊んで居てもつまらないぢやないかと友人の勸むるに任かせ、毎夕新聞の客員とか特別寄書家とか言つた樣なものになつて毎日一段ばかりの原稿を送ることゝなつた、社員にも爲らず社にも出ず、社の人とは何等の交渉も無い、小生は唯小生の勝手な熱を吹けば濟む、それで『我儘』と題して書き續けて居る。

日比谷に近年頻りに建つ貸事務所の二室を借りて、一室に給仕や助手を置き、自分は一室を書齋應接間兼寢室として、まるで陣營生活の樣な具合で居る、元來

外出が嫌ひだから、此一室に蟄居して、好きな本を書架から抽き出して見るのが唯一の樂みてある、ても讀み耽けるなど丶言ふことは最早吾等の年輩には出來難いことて、やたら讀み蒐るに過ぎない。朝なり晩なり氣の向いた時に例の「我儘」を一段書けば飯の種は心配がない、十分ノンキてある、そして村落生活の不自由は除かれてあるから、まづ當分是て滿足して居られると喜んてる處に、中央公論の瀧田兄が來て、是非共支那漫遊の記事を書けと責められた。

前にある通り、書かねのが面白さの旅行てあつたから書く種は探して無い、唯だ酔つて臥て來ただけの事と斷ると、ては其丈を書けと言はるゝから、如上書いた。此て終として好いのだが、折角筆を握つた序に今少し書いて見よう、あながち先頃の見物中に獲たものとも限らぬ。

▲揚子江と無識

何と取立てゝ話すものは無いのに、支那の旅行は面白かつた。揚子江の大きい事は教科書て教はつた通りに違ひなからうが、數字のまゝて這入つてる觀念は實際に來て見る感じとは沒交渉なものだ。日本の「かは」といふ觀念ては可けない、まづ湖の長いのだと言つた方が實景を想像せしめ易い。此の湖が九州から青森まて位の長さは汽船が通ふ、而かも増水期には一萬噸の軍艦が上下し得る。

樺太から臺灣の端までと言へば可成りに長い、其の長さより揚子江はまだ長い、一雨ざつと來れば小家の軒の樋ても彼程凄まじい勢て迸しるのだもの、大日本帝國を十個駢べたよりも尙ほ廣い大面積から落ち集つた樋だから揚子江の水嵩の多いことは推し測られる。減水期ても茫として一方の岸から對岸を望めば湖の樣だ、增水となると四十尺乃至六十尺も水面が高くなる、幅は地形に依つて十浬ても廿浬ても廣がる。假に品川灣が六十尺增水したとして考へて見るとニコライの塔がドレ丈水面に露れて居るてあらう、無論帝國劇場も新橋も烏森も鰻の住家と爲るに違ひない、其んな激變

が支那では毎歳繰返されて居るのだ。河口の外數百哩の海上まで此の大量の濁水の爲めに染められて居ることは渡航者の第一に驚く所である。黄河と言へば其名の如く濁つたものと兼て承知して居たが、揚子江は巴蜀や瀟湘乃至江南の詩的聯想からして清かりさうな氣が爲られるゝが、實際は四時の別なく日本ならば五月雨頃の河水である。

此の大江に就いて予はまだ無識な事が色々あつた、其の一は、楊子江か揚子江か、即ち上のヤウの字は手扁か木扁か確かなことは知らないで其時々の出鱈目に書いて居たのであるが、本當は手扁に書くのださうだ、又支那の有名な欲張りの昔噺しに、客に各其の志を言はしめた所が一人は揚州の刺史に爲りたいと言ひ、一人は錢がウンと欲しいと言ひ、一人は鶴に騎つて飛行したいと言つた、すると最後の一人は、僕は怎麽か腰に十萬貫を纏けて鶴に騎つて揚州に上りたいと言つたといふ話がある、彼の揚州の字も手扁のが本當ださうだ、さう言はれてから字引など調べて見ると日本出版のは揚子江、揚州共に木扁の楊が多いが、彼土のは流石に手扁の揚の字を使つてある。

▲神仙思想

話は岐れるが、今引いた例の「揚州の鶴」の話が如何にも好く支那人の思想を表はして居る。支那の拜金主義は猶太人と兩横綱として世界に公認されて居る、一昨年來の革命騷ぎの央にも附いて離れぬのは金の話で一國の運命も千歳の名譽も此に對しては第二第三の問題に過ぎないのである。

其から揚州の地は此の昔噺の時代に於て支那一等の風流華奢な都會であつたのだ、風流といへば支那では普通いきごとを意味するのである、其處の刺史になれば名譽は勿論の事いきごとも出來れば其より第一の金が儲かる、支那人の官といふは名譽、尊嚴、上等、特別といふ様な意味を有して居るほど難有いものだから理想の一に算へられたのは當然である。

第三の鶴に騎るといふのは秦漢以來幾千年を通じて

是亦支那人の一般に有する志望で、つまり仙人に爲るといふことである。歷代の帝王中佛教に溺れたのは梁の武帝、明の太祖等其他にも有るけれ共、神仙を求めて道士に馬鹿にされたのは更に多い、彼の六ヶ敷屋の秦の始皇を始め漢では武帝唐では玄宗其他に澤山喜劇を演じて居る。學者文人も道教の信徒は甚だ多い。民間信仰としても儒佛に比して更に有力で無いかと思はれる、其れに就いては色々滑稽な話もあれば醜猥な話もある。何にしろ道教の本だけでも何萬卷と有つて佛教の一切經よりも多いといふのだから其の盛んな事も想ひやられる。

▲民族思想の超脫

今日の支那人は獨善主義だ、個人主義だ、自我主義で現金主義の猫糞主義だ、何時の世頃から斯ういふ風が始つたか知らないが、彼の神仙思想といふ奴がつまり此の支那人の主義と合致して居る、元來此の神仙を理想とする道教は老莊を祖述したもので、其老子莊子は如何なる世に在つたかといふと周末の社會の秩序が最も混亂を極めた時代の人である、修羅、餓鬼、畜生、を一處にした樣な危險な世の中に在つては、功名も富貴も何一つ賴むに足らない、望むにも足りない。殘る所は唯生命の安全を保つといふ一事である、そこで此の醜惡世界を脫して、風を御し雲に駕し血潮吹のかゝらぬ蒼空に翔り、矢叫びの聞えぬ山の奥に棲んで、麋鹿を友として天地と共に生きようといふ樣な希望は、當時に於て多くの人の胸に浮ぶ所であつたらう。老莊及び其徒は此の思想を主として豐富な文學的小說的詭辯的の潤色をなして幽遠縹渺たる神仙思想を大成したのである、其の厭世的、孤立的、萎縮的、隱退的、非共同非社會的、非活動的、冷的靜的、無爲無欲的の獨善主義は正に亂世に身を全うするの最良法に違ひない。

獨り亂世に於てのみならず支那の歷史を通じて富貴の賴む可からざる例證は甚だ多い、秦が天下を一統した功臣といふ者は誰一人終を全うした者は無い、寬厚の長者と稱せられた漢高祖の世にも狡兎死して良狗烹

らるの數は免れなかつた、廿四史中王侯將相の列傳は殆んど總て邯鄲一炊の夢を事實化したるものである。族滅、籍沒といふ如き慘毒の文字は歷史のどのページにも眼を刺すばかり露はれて居る、是にも懲りない冒險家も續出するが、氣の弱い者は殆からウンザリして委縮する、天下も國家も有つたものぢや無い、生命あつての物種だといふ氣に爲る、秦が强ければ秦に謳歌し、漢が勝てば漢に謳歌する、奇渥溫に萬歲を唱へた支那人は愛親覺羅氏をも歡迎した、兎角世間に事勿れ自分に難儀のかゝらぬ限り此から後も袁が帝に爲らうと、孫が大統領に爲らうと、將又露西亞に略せられうが、英吉利に領せられうが一向お構ひない、民族的思想などいふ者は疾くの昔しに超脱して居るのである。

支那人に排外思想が强いといふ事は僕は信じ無い、子供は始め他の見知らぬ子供が來た時は一寸排斥の姿勢を取るものだが、五分と經たぬ間に仲好く一處に遊ぶものだ、支那人の排外思想は丁度其んな類ではあるまいか、今の北京人が外國人に對する態度を見て、此が十數年前義和團の血を流した土地だとは誰も信ぜられまい。

▲支那の家屋

支那人の邸宅は恐ろしく高い嚴重な牆壁に圍まれて居る、皇居の門に九重といふことが有るが、中產以上の家は少くも二重の門を構へて居る、ケチな田舍家でも大概垣根を遶ぐらしてある。貴賤共に室內の部屋部屋は必ず門があり門扉が有つて各々閉塞すべき設備が有る。要するに、家と家とは牆壁に依つて隔離せられ、部屋と部屋とは扉に依つて隔離せられ、何處までも孤立的であり又た自衛的である。玆に自由の天地が有る。政府が何時も當にならぬ、官吏は常に虎より畏ろしい、警官や兵隊は保護どころか動もすれば掠奪をする、訴訟は賄賂で決し、曲直は貧富と同義語に爲つて了つてる支那では、自分の生命財產は自分で保護するより外に賴む所は無い、牆壁や門戶は此の必要を充たす爲に愈々高くなり愈々嚴になつたのであらう。西洋の王宮が

公道に面して窓に王后のお顔が拜まれるといふ樣な事は東洋には無い、其でも日本の家屋は支那から見るとずつと開放的である。部屋々々に門鑰が無い。

支那家屋の閉塞的なのは一面に於て淫猥な風俗を助長するものである、いや淫猥な風俗が斯樣な密室制を發達せしめたのかも知れぬ。

▲料理と秘密問題

支那人の好色は到底日本人の企及すべき所でない、第二妻第三妻は當然として誰も怪しまない、傳記の中に侍婢に手を附けなかつたのをエライ立派な事として書いてある位だから、普道の場合には餘程の手の廻るものだと想ひやられる、書牘文例などの中には妾を納れたお祝の文が、結婚を賀する文の近處には必ず載せてある。好色といふと語弊があるが支那人は非常に子の多いのを名譽とするのである、で支那人の繁殖力は世界の各人種に超越して居る。

支那料理は世界の一番發達した料理で有る相だ、併の口にも左樣感ぜられる、此の如く料理の發達したのは生殖力を養ふ必要から起つたものだと支那で某學者先生の説明を承つた。要するに支那料理の材料選擇は一に補腎の目的より起つて居るのだ相だ。左樣言はれて見ると嘗て讀んだ支那の醫書に思ひ當る節が有る、料理に禽獸の臟腑を用ゐることが多いのは、西洋で近年流行りかけた臟器療法の説にも暗合して居る樣だ。

道教が民間に勢力の有るのも此の秘密問題に觸れて居るからである、正しい道教では勿論排斥するけれども實際の處道士の內識に此の秘法傳授が行はれて居るといふ、喇嘛教も亦此の人氣問題を見逃さず色々の秘説秘法を立てゝ居るらしい、元の順帝などは大に之を信奉して、ルイ十五世以上の奇拔な裸體活人畫を演じたものだと傳へられる。

▲婦人の勢力

男尊女卑の本家の樣に思はれて居る支那が、事實は反對で、恐ろしく婦人の權力が强いさうである、夫が

妾を有つこと丈は妻が文句をいふ權利が無いけれども如何に妾が多く有つても夫の寵を得て居ても、正妻に對しては頭が上らない、上げさせない、習慣上全然召使の取扱ひて妻が如何に使ひ廻はさうと鞭たうと夫は之を制するとすら出來ない。其他家政の全權は妻の手に掌握せられて支那の宿六たるものは甚だ振はない。肝癪を起して若し打ち毆きても爲ようものなら原因の如何に拘らず夫が非に陷るので、女房には詬罵せらるるは勿論時にビシャリト頰邊を參らるゝものと覺悟して居なければならぬといふ、まさか左樣ばかりでも有るまいが、數へて見れば昔から隨分エライ女が支那の史上には濶歩して居る、現に上海あたりの混雜な支那街の往來で女に對しては苦力號ですら道を避けて、觸らぬ神に祟りなしとして居る。電車賃も婦人には半額の優遇を與へてある。

小說て見ると支那の女は餘程攻勢を取つて來るものの樣だ、脚を小さくさせたのも其の運動を妨げる爲なるが如く解した人もある、併し今は非常に纏足は減じて居る、都會て學校に行く女兒には全く此の弊風を絕つて居る。

女子法政學校といふ廣告を上海ても蘇州ても見た、實際入學者が何れ位あるかは調べなかつたが、日本の若い婦人よりも更にお轉婆性の高度なのが有る相だ。

▲儒教の衰頹の危險

二十世紀流行の舊慣打破の聲は後れ馳せに支那にも叫ばれて一足飛びに夫妻關係の廢止、共同婚の實行などに掛つた者が有る。突飛な事さへ言へば革命家急進家新思想家といふ虛名を獲られるので競うて過激な說を唱へて彼も打破是も打破と騷いでる連中がある樣に彼地の新聞は傳へて居た。是まで何より威力があつた丈に儒教を、此號はくさして居るが、此は支那に取つてゆゝしい問題であらう。

日本の維新の後に、儒教が勢力を失つたのは左迄の害は無かつた、日本には皇室といふ中心が有つて我が民族を收束して行くことが出來たのであるけれども、

支那には一國の活動力の基點となるべき何物も無い、公私を通ずる道德の權威として唯た孔子敎が有るばかりだから歷朝の爲政者は皆之に着眼し、革命の後には何より先に孔廟に對する敬意を發表したものだ、つまり儒敎を以て統一の要具と爲し來つたものである、然るに今後若し此の大事な權威が無くなつては、さらぬだに民族的觀念の薄弱な支那人を如何にして引きまとむる事の出來るやら。

小學中學と殆ど總て日本丸寫しの敎育が行はれつゝある、新學てなければ此から先幅を利かすことは出來ない、其の修得に急がしくなると、從前の如く四書五經を讀んて居られない、其の暇も無いし必要も無い、飯の種にもならないから、日本と同樣儒學は漸次廢れて了ふより外は無い。强ち詭激者が儒敎撲滅を叫ばなくとも自然さうなる勢てある。

▲書法も衰微

支那人は一體に字が旨い、道傍て書いてる仕入物の幅や聯ても日本なら堂々たる書家の字だ。日本ては楊守敬の字をエライ崇めて居る樣て、而かも日本の一流と叫ばるゝ書家先生が三拜九拜して楊守敬に書訣を授かりたいと願つたことがある相だが、楊氏は金石など調べて居て學者の部には或は算しても好いが、書家といふべきものては無い、彼の書は見るに足らぬと言ふ方が適評だ、又、書法に秘訣も何も有るものて無い、書いてる處を一目すれば其人の書法は瞭然て、秘するに秘し樣も無い筈だ、と蘇州て或る人の話てあつた、僕も之に同意する。

支那人の字のうまいのも淸朝限りてあらう。以前の試驗には筆蹟の美否も大に關係する所が有つから、受驗者は答案に要する小楷を、力を費して習つておかねばならなかつた、つまり習字は立身出世の一條件てあつた。併しながら今後の學生は日本と同じ事情の下に修學するので別段筆蹟に力を入れる必要が無い、だから旣に今の二十四五歲以下の少年は、十年前の同年輩の者に比して著しく筆蹟が拙くなつて居る。

▲混沌たる將來

支那の將來が怎麽なるか誰にも分るまい。黎元洪が今日副總統に爲つたのが當人にも夢の樣な話である、何時何處から阿瞞、朱三が飛んで出るか知れぬ。

まだ十年位では支那の秩序は、日本の三十年前ほどにも統一しまいと思はれる、日本の其頃には就學兒童が最早百分の約七十にも達して居た、常備軍は既に徵兵のみで編成されて居た、内亂の患は全く絶えて居た、司法權は確かに獨立して居た、戸籍も地券も疾くに整頓して居たのである。

此の中の徵兵制度の一なりとも支那が實行されたらば、今日の禍根の一は除かれるだらう、傭兵制度の繼續する限りは斷えず謀反が起される、兵卒の廉恥心は郷黨父兄に對する面目といふ點より激勵せられるのである、然るに苦力や乞食を驅り集めて來たのでは何處の誰かも分らないのだもの、義理も恥も有りは爲ない、金の多く貰へる方、掠奪强姦の出來る方には何時でも附くに極つてる。曾國藩が湘軍を編成した如く、良家の子弟を以てしなくては廉恥ある精兵は得られない、賴みに爲る兵であれば其の數は少くても管はぬ、否少い方が却つて好い位だ。併しさうするには教育が普及し、戸籍が完成されねば可かん。

浮浪人の多い支那に、教育を普及さすることは非常に困難だらう。文字を教へ込むことは出來るとしても廉恥心の養成は殆ど絶望だ、支那人の貨財の爲めに廉恥を顧みぬのは讀書人も行商人も丁稚も乳母も同じだから困る。攻城野戰共に金を以て誘ふといふのは戰術の一となつて居る、何時の媾和談判にも買收談が伴うて居る、想へば日本に武士といふ階級の有つたのは仕合せて、此の廉恥心の維持に非常の助を爲して居る樣だ。

▲支那通の見込外れ

支那通といふ人が澤山ある、其支那通の豫言めいたものが革命前後に隨分發表された、今も何か一問題起

ると新聞雜誌は爭つて支那通の意見を聽かうとする。其も惡い事ては無い、併し先生方の見込が當になるものと思ふと當が外れる、支那通は支那の事情に通じて居るといふ事だ、事情といふものは無限である、其通じて居るといふのは其ホンの一部分に過ぎぬ。日本人て日本の事情に通じた者が滅多に無い位だもの、支那の事情に通じたと言つた所て多寡の知れたものだ。

又、其通じて居るといふのは過去の事だ、少くとも今日唯今より以前の事情に通じて居るのだ。支那通に意見を聽くのは多く將來に關する事だらう、左すれば其過去に知つて居ない事情と、現在にも無い事情とが如何なる關係を爲して、將來を如何に變化せしめるや人智の到底測り知るべき所て無いてはないか。支那通の意見が當らぬ爲に支那通の價値が減ずるものてない僕はやはり其の知識を尊重傾聽して參考とするのてある。

▲革命と商民

支那人の現金主義今日主義は何事にも根本的解決が付かない、患部を切開して腐肉を抉剔する手取り早い大手術より膏藥張りて緩漫なる經過を待つのが彼等の好む所てある。

前年の革命も其て出來た、此度の南北睽離も結局其んな事てグツ／＼に治つて了ふてあらう、治るといふ程に治らないて治るのが例の支那流てある、又ドンな突飛な奴が出るか分らぬから見當は付かぬ、日本なんかはドチラに爲つても好い幾樣もの準備が必要だ。

孫黃が第二の革命を決行し得ないのを以て、南方に於ける商人共が亂を厭うて居るから軍資の調達が困難なからだと噂されて居る、何時の世にも金持は亂を喜ぶものてない、現在の生活に不滿足の無い中産以上の輩は現狀維持が便てある。奇貨居く可しと張り込んて命と金との二つ玉に打つ付かつて見ようといふ奴は窮乏不平の徒てある、軍資金を先に積み重ねて置いてから起すといふ革命は今往古來有るものて無い、だから南方の商人共の反對が有るから第二革命が起らないな

ど、樂觀するは迂濶な話だ。

▲お手輕な革命國

兵器の進歩せぬ者ならば、苦力の千人も唆かし得る奴なら何時ても亂は起せた、先づ一二の縣城を掠めれば一寸した軍資は出來る、浮浪無賴の徒の多い支那の事だから忽ちにして三萬五萬の衆は集る、寛厚士に下るといふ大將て少し人氣取りが巧ければ平生志を得ざる讀書人が附從して參謀と爲り軍師となつて組織立つたものに仕上げる、一省二省を風靡するのは譯も無い事だ、形勢次第て城を以て降り衆を率ゐて來るといふのは支那の地方官の常例だ、トン〳〵拍子に王と稱し帝と稱するは半歲か一年て出來る。續くか續かぬは外の事情て支配される、秦末漢末、宋元明末の群雄皆同じ經過て有つた。

今日は棒千切ては戰爭が出來ない、人數ばかりありても銃砲が無くては最初の旗上が一寸六ヶ敷樣に見える、併し、既成の師旅團の孰れかを一つ踏み臺にすれば其から先の順序は昔と違つたことはない、亂を喜ばないのは少數の紳士紳商て、多數の人民は誰が天子に爲つたつて影響は無い、喜んでも喜ばんでも其日が安穩に送られれば其時其地方の權勢ある者に從順てあるのは上下を通じた支那人氣質てある。

支那人は從來革命に依つて何物をも獲て居ない、衣冠の變る位が大いなる變革て有つて、其外何等の社會的變革を來して居ない、全國に亙つて二十幾度、地方地方て言へば幾百度も革命に遭遇したのであるが常に同一の經驗に慣れて了つて居る、一般人民が革命に與味を有たぬのは當然て、忠誠の念などいふ者は極度に薄められて了つた。

▲禍根たる苦力

併し支那には常に苦力階級の多數が有る、此輩は平時饑寒と戰うて纔に生きて居るといふ迄の輩てある、現狀の變更に依つて損をする氣遣の無い連中だから、翌日は怎麽ならうと眼前一杯の酒が飲まるれば誰の命

ても聞く正邪忠姦を論ずる暇もなければ其の必要も無い、アハよくば美しい女の子も抱かれ、場合に依つたら一廉の功名も立てられようと言ふのは、天下太平ては可かぬ。秩序が紊亂しなくては好い目は出ない、何がな變の有れがしと祈る筈である、厄介な奴等だ。支那の爲政家が此の奴原の始末に苦心した形跡は史上に散見して居る、西洋よりズット早く支那では痛切な社會問題に逢着してるのである。

所謂革命家の中には此點に着目してる者がある様に思ふ、若し支那の商人間に於て好成績を擧げてる會館組織と西洋風の勞働組合の組織とを參酌して新たなる仕組を設け、此の苦力階級の大部分に脈絡を通ぜしめたならば偉大な勢力を成すてあらう。其の統御の法宜しきを得たならば確かに支那から噴火口の一を除いたことに爲るのである。

▲新聞の勢力範圍

上海に十數の新聞がある、支那字の新聞も體裁上からは堂々たる十二ページ新聞で、外國及び內地各省の電報も載せ、日本電報の如きも可成り精しいのを取つて居る、大部分は政治問題に費されて社會的報道には粗てある、內地の處々にも發行されて居るが、全國て發行紙數の最大なのも二三萬を越えず、大抵は千位だといふ事だ。

支那では普通教育が普及せぬ、下等社會の者は全く字を識らない、少數の音標文字で用を足すわけに行かぬから新聞を讀むことは容易でない、日本ならば傍訓が有るので漢字を知らぬ勞働社會の者でも大抵假名だけは知つて居るから新聞が讀める。今では新聞の販路は中以下に向つて開拓されつゝある、此の階級が人數が多くて動かし易くて便利なお客である。併し此の階級が主なるお客と爲つて來た結果、新聞の品位は漸次に降下する。支那では此の二三十年內に日本の様な讀書階級を得る見込は無い、どうしても中以上の階級を相手にせねばならぬ。從つて日本ほど直段を競り下げる必要も有るまい。又、國が廣過ぎるから一都市の新

聞が全國に勢力を張ることも困難だらう。總じて新聞經營には日本と餘程事情を異にする。

▲風景と誇張文學

支那の風景、と言へば日本人の頭には一種の型が有る、文學、圖畫に依つて養はれたものだが、彼の種の風景は蜀に入るか、楚に遊ぶかで無ければ接せられぬ。江南の景色などは一向感心したもので無い、「天に天堂あり地に蘇州あり」とまで讃せられる蘇州附近の何處が好いか僕は分らずに了つた。山水の美では無くて、金屋阿嬌の方から名を取つたものであるなら當否は知らぬ。

市中を一日ぶらついて四五家の書籍と古玩とを看、一壺の酒と一皿の醉蟹とを味ひ、雪を冒して楓橋に驢馬を驅つたといふ丈では、蘇州は唯寒い所といふ印象より外何も殘る筈が無い。

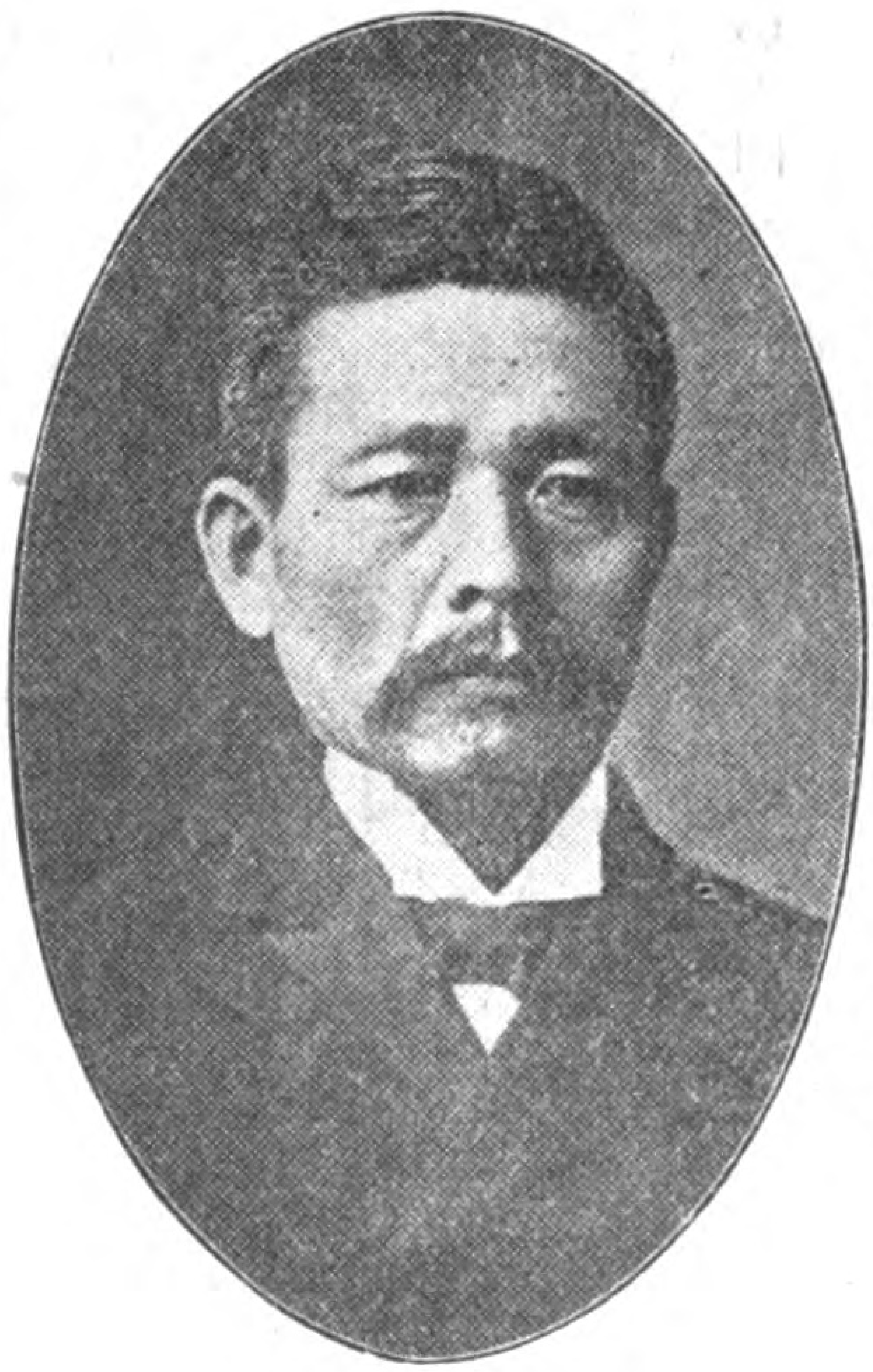
寒山寺の詩を吟じて何だか山寺らしい氣がして居たが、實地は田圃の中を小川が通つて居るのに、石橋が架つてあつて、橋の側に鐵柵赤煉瓦の居留地風の塀が繞らしてある、碌に樹木も無い境内に重修新葢の小寺が有るのだ。「江楓漁火對愁眠」の楓の字は昔から難問の一に爲つて居るが、其近所には桑畠が少し有つて、多くは菜畠麥畠だ、而かも上流も下流も人家續きである。文徵明が書いた夜泊の詩を刻した石碑の壞れたのを繼ぎ合せて壁に塗り嵌めてある。其傍に新しい詩碑が一つ建てゝある、多分楡曲園の筆だつた、其碑陰に楓橋夜泊詩の考證が刻してあつた、全文寫して置いたが、其の手帖が今見當らぬ、記憶する所では、「江楓漁火」は「江村漁火」と古刻本に在る相だ。

名所古蹟は面白いけれども、大抵支那人の筆に任かせた法螺細工である、文章で人を採つた國だけに文章は實に巧妙を極めたものだ、つまらない江南の天地をさも〳〵めでたい詩境仙界の如く吾等にまで想はしめたほど支那の文學は嘘吐き術が發達して居るのだ。支那人が風景を誇稱するのは、平素茫漠たる殺風景な地理に目慣れて居るから、偶に山水の明媚に逢うとビックリしてしまふのかも知れぬ。

此んな事やたらに書いて居たら限がない。(完)

人物評論（三十八）

奥田文相論



△奥田文相

文學博士　三宅雪嶺

一時新聞紙で官吏を評するに、官海游泳術に巧みであるとか拙であるとか云ふを以てしたが、其頃奥田氏を頗る巧みな者とした。官海游泳術といへば氏が一の標本となつて居つた。長にも薩にも受けがよい。伊藤伊東にも用ゐらるれば樺山高島にも用ゐられる。どちらに轉んでも損をせぬ。動揺ある毎に何程かよい位置を占める。實に游泳術の達人と見られたが、其中風向きが變つて官界より遠ざかり、同窓及びそれ以下の人

で立身に於て氏を追ひ越すのがいろ／＼出來てきた。左程游泳術の上手相でもないのが大臣になつたり爵位を得たりした。阪谷氏が大臣で男爵、林氏が男爵、內田氏が大臣で子爵、もつと後で、而かも同縣の若槻氏が大臣になつたりした。

奥田氏の官海游泳術は一ト昔前の事になり、最早向きを變へて中央大學の經營に從事することになつたと見えたが、恰かも山本伯が俄かに政治舞臺に打つて出て首相となつたやうに、奥田氏も脇道から飛び出して入閣した。既に樣々な人達が大臣になつたり大臣を罷めたりして居るので、入閣といふは何でもない事であるにしても、隨分大臣になりたがつて居るものがあり、政友會にも熱心なのがあるに拘らず、突如として入閣したのは手際と云はねばならぬ。嘗て游泳術に巧みと云はれた丈けの事はある。

氏は先きに官を罷めたものゝ、後絕えず引つかゝりを附けて居る。入閣前には宮中顧問官の名前であつた。官僚ともなれゝば、政黨員ともなれる柄である。動物でいへば水陸兩棲のやうなもの、本來孰れが本色かと問へば人は答ふることが出來ず、氏自らも答ふるに困難であらう。氏は政黨員として入閣したのでなく、入閣してから政黨員となつたのであつて、政黨に籍を置くのは大臣の位置を保つ手段に過ぎぬ。大臣たるに要がなければ政黨は如何樣でも構はぬが、それといつて露骨に政黨を道具に使ふやうに思はれぬ所が巧みである。所謂游泳術に於て祕訣を得たとすべきである。同窓及び後進に追ひ越されたやうでも、實は游泳術に於て確かに其上に出でゝ居る。成程早く入閣したり、爵を得たりして居るのはあるが、官に居つて左までの勢力なく、罷めれば何處に居るか分らなくなる。內田子爵は比較的最も立身したが、現に何をなしつゝあるか。位倒れでないか。それから見れば奥田氏は如何なる事があつても相當の位置を保つことが出來る。

文相といへば伴食と思はれるが、氏は伴食でない。政黨に根據があつて管轄範圍の廣い遞信省の元田氏より幅が利くといふのは首相山本伯に喰ひ入り、此と離れぬからである。前に何處へでも都合よくしてゐながら陸に結ぶ所が多く、剰へ餘り人の接近しなかつた山本に接近したのは、初めから見込を附けた事かどうかは別とし、旨く當てたのである。何でも急所を抑へるに限る、入閣しては首相に喰ひ入るが一番である。政黨を基礎とするとて、さういふ言葉に囚へらるゝのは眼の明いた仕方でない。

氏は何省に最も適當であるかは明白でなく、何處に居つても相當の働が出來る。嘗て頻りに游泳して居つた頃、何か高官の候補を求める時必らず氏の名が出た。何處へでも當て嵌められる。調法に出來て居る。が、文相となつて一つ仕合せなのは小松原氏から長谷場氏、次いで柴田氏と如何にも結構でないやうに見受けられた後を引受けた事とて、一段色彩の引立つ所がある。どんなに踏み附けて見ても是れ以上である。文部は案外六つかしいとかいふが、それは餘りに値打のないものが當るからであつて、ナニもさう六づかしい事はない。小松原氏とて何かかにか働き

續け、長谷場氏も無難であり、奧田氏も無難であり得べきであつたとすれば、奧田氏が際立つて腕の揮へさうなのは當り前でないか。然し詰り此等よりも卓越である丈けで、將來を如何にするかといふ所に定つた見識なく、自らもさる見識の必要を認めず、之を以て餘計な事とするであらう。テキパキ事を捌いても概ね眼前の事に限つて居る。實業學務局を專門學務局に合はすのは、經費節減の爲めに一時的にするのか、又は何時でも之を合はして置くを當然とするか、其邊に極まつた考があるかどうか。四校帝大總長の更迭は頗る面白い遣り方であつて、關係者は誰も餘り不滿を抱きさうもない。即ち榮轉の順序になつて居る。誰も彼も榮轉したやうな氣持がする。眞野氏は都落ちのやうであつても、實業學務局が廢せられる上、東大工科の敎授たらずとも差支ないとあつては、一帝大の總長となり、剩へ工學に最も關係ある福岡に行くのは、充分の滿足といへぬにしても先づ滿足の筈である。而して廣島高師校長を北大總長としたなど些か奇拔とすべく、前任三大臣の到底爲し得さうもない所である。然し皆一時の事であつて、一向總長問題を解決して居らぬ。總長は天降りすべきものか、又は自治的に大學内で選定すべきものか、大學令の一部改正を必要とする議論は其儘になつて居る。今は穩やかに收つても今後更迭の場合に面倒が起る。此等の事を充分に定めやうとするには樞密院とか、法制局とか、いろ〳〵と手數が掛る、其間に餘計な引つ掛りが出來たりする。流石奧田氏は其邊の消息に通じて居り、餘り手數の掛らぬ仕方で人の滿足するやうな事をする。然し困難なる問題を解決し、後任者に便利を與へるのでない。今の樣では後任者は愈ゝ總長問題なんかに困るであらう。其處を知らぬ顏して眼の前を旨く遣つて往くのが游泳術に巧みなもの、慣手段である。何でも無理をせず、都合よく遣つて除ける方である。眞に大學の爲めを思へば今度の更迭の仕方はよくない。一方を諦めさせて一方へ引き廻すなど、知事の更迭と同じやうであつて人を愚にした話であるが、世間には愚にせられて喜ぶものが多い。山川氏が中央に來たとて喜ぶものがある。奧田氏は其邊の呼吸を看て取つて居る。普通の事務官上りの爲さうと思つて爲し得ぬことを遣つて除ける技倆は確かである。

要するに氏は游泳術に巧みなのであるが、其點からいへば今の大臣は悉くさうである。政黨を基礎とするといふ原、松田、元田等諸氏は本來さういふ趣意であるかどうか。政黨を以て入閣の手段とするに過ぎぬではないか。而して奧田氏の入閣してから政友會に入會したのを彼是いふ官僚連中も、内實かゝることを敢てするを厭はず、只厭はないでも、それ丈けの事を爲し得ぬのではないか。奧田氏は游泳術に巧みで、昨日は東、今日は西、方針が分らぬとしても、其割りに辻褄の合ふ所がある。學才に於て同窓の江木氏と比べ物にならぬが、小松原長谷場二文相に比ぶれば比較にならぬほど學識に富んで居る。而して兎も角絶えず官私立學校に關係して居つて、文相となつたのは閣員遣り繰りの上の事にしても、強ち紛れ當りといはれぬ。紛れ當りは前任三文相である。三文相は藪から棒であつた。奧田氏はさうでない。然し氏は學校に關係して居つ

て、經營者であつて敎育家でない。帝大でいへば最初の總長渡邊洪基氏といふ所である。之を敎育家とするのは敎育界が進まぬのである。時代からいへば氏は寧ろ之を代表して居つて、適者生存ともいへやうが、時代が今より進まなくては物足らぬのである。進まぬ今の時代では氏は頗る適當である。然し何が一番適任であるか。文相か、農相か、遞相か、將た內相か、抑ゝ法制局長官か、まだ分らぬ。恐らく永く分るまい。但だ首相が力ありさへすれば氏は隨分腕を揮ふ事が出來る。山本伯がどれ程力あるかは直ちに氏の力に影響する。伯が衰ければ氏も衰くなる。而して氏の力が伯に影響することも少くない。長く原氏なんかと相棒になつて行けるかは疑はしい。山本伯の働ける間充分に働いて働き拔くべきである。此處が運命の決まる所である。

△山本內閣の智囊

鵜崎鷺城

文部大臣は伴食でなければならぬといふ規則のある譯でもないが、これまで伴食といふことに相場の定まり、中には小松原英太郎のやうに伴食に見られまいとて平地に波瀾を起したのもあるが、歷代とも無能無勢力であつた。處が伴食であるべき筈の奧田義人が、山本の參謀長として內閣の樞機に與つて居るのは奇といふべきである。山本內閣がレコードを破つたといへば此一事であらう。

奧田の役人生活は可なり長い。辭令書積んで其身と相等しといふべきである。明治十七年大學を出て直に太政官御用係になつてから、文部大臣に爲るまでに歷仕した重もなる職は、農商務省特許局長・官報局長・衆議院書記官長・拓殖務次官・農商務次官・文部次官・法制局長官・宮中顧問官等で、其間に屢次法典調査のことに從ひ、日本の法律制度の上に功勞が少くない。初めて役人としての力量を認められたのは農商務參事官時代で、當時總務局長であつた武井守正に見込まれ其女婿となつた。

政治系統は伊藤といふよりも伊東巳代治の方の關係が深い。巳代治を通じて大伊藤に知られた。巳代治と關係のついたのは何日頃からであるかハッキリ分らぬが、多分內閣官報局長時代からであらう。兩人の關係は巳代治が官を罷めて後も繼續し、最近宮中顧問官になつたのは無論彼の推薦である。今度奧田が權兵衛に用ゐられたのは何ういふ譯であるか、系統からいへば緣遠いやうに惟はれるが、實は薩派にも初めから惡くない。高橋健三の如きは奧田を引立てた一人で、彼が官報局長を罷める時其後任に推薦した。三十年初めて拓殖務省が置かれた時、其次官となつたのは高島鞆之助の下に於てし、三十二年歐羅巴から歸つて文部次官になつたのも樺山の下に於てし、山縣や桂などよりも薩派の方に緣故があつた。

第三伊藤內閣の時であつたと思ふ、臺灣彩票發行のことが閣議に上つた。これは臺灣の財政を救濟する目的から民政長官の後藤が總督の兒玉

に獻策したもので、伊藤は無論これを許可するの意志であつたらしい。當時奥田は法制局長官といふ立場から反對意見を述べると、他の大臣は伊藤や兒玉を憚つて盲從の態度をとつたが、海軍大臣であつた權兵衞は奥田の意見を道理ありとして彩票に反對したから、折角の計畫も遂にオヂャンになつた。次の内閣即ち第一桂内閣にも彩票問題が現はれた。兒玉と後藤は内閣會議に出て彩票發行の必要を說き通過を迫つたから、奥田も絕對に反對することも出來ず、さういふ譯なら法律と牴觸しない範圍に於て發行する方法を講ずるの外ないと折衷說を持出した。スルト今まで鷹のやうな目を光らしつゝ默つて聽て居た權兵衞は、イキナリ卓を叩いて奥田の豹變を責め、飽まで前說を執つて動かぬので再び彩票を否決するに至つた。當時奥田は權兵衞の勢力の偉大なるに驚き、事を共にするなら彼のやうな人物でなければならぬと深く意を囑し。權兵衞も奥田の意見に贊成しただけあつて、彼の用ゆるに足るべきを認めたらしい。十年後の今日奥田が權兵衞に許して志を得たのも決して怪しむべきでない。

世間では奥田を官海游泳術に長じた俗吏・俗才子のやうに看て居るが、これは非常な誤解である。元來山陰道の人間は槪して女性的であるが、其中で鳥取は昔から武張つた處だけに奥田も何程かさういつたやうな氣質がある。大學時代は隨分亂暴で賄征伐といへばいつも奥田が張本人で、これが爲め退學處分を受けたことさへある。大學を出た當時は盛んに下谷邊の待合を荒らし、酔ッ拂うと彈丸を擲げて熱い酒をつがせ、藝妓をキャッ〳〵いはせて嬉しがつた程の惡戯者で、奥田の彈丸酒とて有名な話柄になつて居る。尤も年を經るにつれ自然粗暴の氣が失せるし、本人もそれでは不可ぬと自覺して愼んだから、近年は殆んど別人の如き圓滿家になつたが、默すべき時は默し、其代り言ふべき場合には言ひ、圓滿の中に強い處がある。

第一桂内閣の時、奥田の手許で行政整理案を立て實行の運びになつて居ると、曾禰荒助であつたか別に擴張案を持出し、桂も之に贊成したから、彼は自分の意見の用ゐられぬ内閣に留まるを好まぬといつて決然辭職した。前の彩票問題といひ是れといひ、たとひ一身の爲めに不利と思つても理を非に曲げぬ學者的態度がある。悧巧者には相違ないが、卑屈の意味の悧巧者でないらしく思はれる。若し己れを殺して世渡りを巧みにする男なら今までに大臣になつて居るだらう。又た第一に巳代治のやうな不人氣な人間を棄てゝ居るべきである。

奥田には吏臭がない、洒脫した風がある。今日は何うしたか知らぬが、つい近年まで字形の分らなくなつた古い門標を出して居た。或時巡査がこれは餘りヒドイ新しいのに換へたら好からうと注意すると、アレは六囘の家賃時代に作つた記念の門札であるから、いつまでも保存して置くのだといつたさうだ。妻君が虛榮家である爲め借金が多いといふが、身を入れて人の世話をするし、書生に學資を貢いだりするから、貧乏しても金は殘らぬ。中央大學は法學院時代から關係し、今日のやうになるまでに隨分骨を折つた、隨つて生徒の間に人望がある。

今まで二度鳥取市から議員に選ばれ、三十六年の時は横濱に於ても當選したので加藤高明に讓つた。お餘りを頂戴した加藤は新政黨に入つて奥田の敵になつて居る。代議士としての奥田は少しも振はなかつた、何うしても野武士になれぬと見える。役人を長く勤めると誰しも思ひ切つて變れる勇氣が出ぬらしい。

山本内閣の行政整理は何人よりも奥田が中心の働役者に相違ない。又た實際彼は法律の知識も具つて居るし、行政整理といふことに就ては長い間調査をして居るし、權兵衞の相談對手としては誂へ向きに出來て居る。政友會の政務調査會委員長としても恐らくこれ程適任者はなからう。文部の方も次官をして事情が分つて居るから、盲判を押して屬僚任せにするやうなことはすまい。

奥田が惡いことをしないのは誰しも認める、牧野も無能であるが人間は綺麗である。此二人が居る爲めに少くも内閣の品位を保つことが出來る。山本の智嚢にして且つ大政黨の後援ある奥田は、此内閣に於て何程手腕を發揮し得るか、蓋し彼に取つて好試金石であるまいか。

△奥田文相のために

田川大吉郎

○現内閣には二人の立物がある、之を立物といふが讃美に過ぐるなら、二人の復活者がある、多年、社會の一隅より、その存在活動を期待されて而して得ず、最早歳月人を待たず、其の中には無爲にして空しく老ゆるであらうかと危ぶまれて、而して此度、俄にその位地を得たる人、即ち復活の人である、一は山本首相、二は本文の主人公たる奥田文相で、彼等は共に復活の人である、僕は、その復活を喜ぶ一人である。

◎始めて奥田君の名を知つたのは、明治十六七年、彼が大學から退校處分を受けた時である、當時、僕は、中學の中年生であつた、當時の中學生は、今日の中學生とは違つて、滅多に新聞を讀まなかつた、僕の如きは、較ゝ讀む方であつた、然し乍ら隱して讀んで居た、その時、彼の名は、僕に、眞骨頭なる青年の代表者の如く閃いた、叛骨は人間の脊髓と見える、彼が放逐された、元氣に抵抗したといふだけで、僕は、即ち彼をえらく認めたのである。

◎その後、東京市役所で始めて彼を識つた、彼は市參事會員で、僕は市の一屬僚であつた、一日、市參事會に、水道問題が起つた、道路に埃が高い、下水溝の汲み揚で、之を鎭めるのは、反つて惡病の蔓延を助けるものである、故に、淨水を撒け、速に撒けと、公正の意見を、有力なる政治家の一員から唱へられた、僕の意見を聞かねばといふ事に爲り、說を求められた、僕は、それは結構の主張であるけれど、現時の水道規則では之を許さない、吾等は、水道規則に遵據して、今日の撒水をやつて居るのであると答へた、然るに最の提議者、有力なる政治家は、勃然として聲を荒らげ、何だ、一屬僚から三百代言的理窟は聞かぬぞと叫んだ、

僕は、苦笑して過した、此會の終りの時、奥田氏は僕を側方に招いて、君の説明は善く出來た、善く出來たけれど、彼の時若し「現在は此の如しとするも、何か改正を爲さるゝなら、其上は其改正の通りにやりませう」と結べば、更に好かつたのだ」と注意をしてくれられた、僕は此時、さて〳〵親切の人だ、着眼も亦細かい、用意の周密な、練れた所のある人だと思つた、而して往年叛骨の人、今日此細心の用意ある修養の進歩に敬服した、東京市に於る彼は、獨り僕に對してのみならず、概して總ての關係者に、此好印象を遺して居る。

◎四月二十日の夜であつた、僕は、仙臺一日の遊を終へて、歸途に就いた、その汽車に於て文相たる奥田氏と同乘した、當日の仙臺に、二醫學博士の二十五年記念の頌會があつた、彼はこの爲に臨席したとの評判であつた、然も、事實はさうらしく無かつた、僕は、何の用事の仙臺行かと疑うて見たが問ひもせなんだ、今日から思へば、彼は、澤柳總長を、北より西へ移すべく、その內協議に馳せ參じたのであつたらう、道理で停車場の澤柳總長の額には光澤が輝いて居た、五月に於ての總長の更迭は、彼が、四月頃から、或はその以前から、苦心し、計畫し居たのであつたらう、その更迭に就ては、概して讚譽に充ちて居る、けれども僕は別說がある、けれども今それは說かない。

◎その汽車の中で、僕は、貴下は山本伯の總顧問役だ、施政方針演說當日の態度は、確に眼ある者に左樣な感じを與へた、僕は、その時直ぐ隣人に左樣にさゝやいたと告げたら、彼は、微笑して、さうでも無いと答へて居た、けれども一種の誇りを感じたらしい樣子でもあつた、現內閣は行政整理の內閣と稱せらるゝ、果して然らば、滿閣の閣僚中、彼は一頭地を拔いて居る、その理由に就ても、沿革に於ても、實狀に就ても、彼ほど精通して居る者は無い、原君ありといへども、松田君ありといへども、遂に之を如何せんやだ、彼は、行政整理にかけて、今正に天下稀有の地步を占めて居る者である、只一語を加へしめよ、惜むらくは常識に偏す、突飛、大膽、猛烈の離れ業が無い、而して今の時は、そのやうな作用の必要な時である。

◎話は、幾分か敎育の現狀にも觸れた、彼は、子供の玩具の贅澤に爲つたことを慨した、彼樣な家庭に、不良少年の起るのは、當然の結果であらうと論じて居た、又一隻眼である、僕は、此點に於て、彼と略ぼ同調の言路に立つて居る、僕は言うた、父親が惡い、おくれて歸つて、子供の復習の間にも合はず、從つて朝起もおそくなつて、子供の出校の間にも合はず、當世の紳士は、動もすれば子供の顏を見ず勝である、況んやその指導、奬勵、訓育をや、昔の士は、善く子供を育てた、今の紳士は、一切學校任せである、不良少年安んぞ起らざるを得んやと、要するに家庭が惡いのである、彼は僕の說にも首肯して居た。

◎僕は更に、宗敎と敎育の關係をも話し出した、汽車の中である、無論、太した話は出來ない、然し乍ら溫和なる彼は、善く僕の躁狂の態度を容れてくれて居た、僕は謂ふ、明治の敎育は精神の無き敎育である、たゞ形式のみ、技術、智識、學說、それが敎育の總てゞある、然し乍ら西洋

の連中は、さうは考へて居ない、日く「大學の計畫は道德的指導を最高の目的とせざるべからず、道德は宗教の光り、格別に基督教の感化の外、滿足には指授されざるべし」「大學教育は智慧を進め理性を開發す、去り乍ら智慧及び理性の用は、その純潔、高尙、醇雅なる生活の目的のための手段に過ぎず」「先生の道德的性格は、その智力よりも殊に必要なり、善き品性は、疑ひも無く、その大部分は遺傳、少年時代の境遇より來る、學校は此境遇の大部分を爲すものなり、若し學校、特に高等學校に於て、天を畏れ、人を愛し、名譽を重んじ、公義、眞理、社會的禮節、國民的義務等を善く敎へ込まるれば、其人は幸なり」「責任の觀念は學說よりも、道德に於ての要素を成しつゝあることは疑ひなき道理なり」などといふ先達の所說を、僕は背景として、當節の、宗敎なき敎育の非を說いた。

◎何にせよ、技術を敎へたのである、智慧を授けたのである、品性、道義、人情の美は、曾て敎へなんだのである、大正の青年は、その明治敎育の弊を裏面に感受しつゝあるのである、青年を咎むるを休めよ、これ敎育家の責である、文部當局者の責である、而して奥田文相は、今、その革新を施すべき最好の機會に乘じて居るのである、爲すであらう、爲さねばならぬ、爲さなければ彼の破產、而して國家の破產である、爲してどうなるかは、多難にして多疑、彼が畢生の經綸を揮ふべき所である、而して如何、吾等は幾分の望みを抱いて、心靜にその爲す所を待たねばならぬ。

◎最後に尙申す、宮中顧問官より、文部大臣に、彼が乘移れる時の出方に對し、島田氏より宮中府中の別を紊るものとしての難詰は、僕は、島田氏が之を摘發したのを太だ喜ばなんだに拘はらず、理由ある攻擊と思うた、而して島田氏に對する奥田氏の答辯及びその態度は、當時の彼の苦境を十分に想ひやつたに拘らず、太だ不出來と思ふた、少くとも僕の彼に期待した所に頗ろ背いて居た、隨分、六かしい答へである、答への場合である、然し乍ら何とか、モ少し氣の利いた、若くは押の强ひ、圖太い、男らしい答へは無つたであらうか、僕は、當時の彼の答へを、當年の叛骨男、意氣を以て勝つた看板男の彼に、ふさはしい態度とは思ひ得なかつた、後に、彼の生涯を若し評論する人あらば、必らずあの場合の彼を太く貶するであらう。

○何にせよ、評判男である、文部の屬僚も喜んで居る相である、折角に復活して、その復活の辭命を伸べて、一度は二度、文部は兎もあれ、內務あたりにその才腕を試みる迄に勉めたら可からう、彼の親友の一人は、十年以前に、彼は內務の適才である、遠からずして內相に爲るであらうと豫言して居た。

△奥田義人君

法學博士　江木衷

學生時代の奥田君と言つても別に取立てゝお話する程の事も無い。そ

れに私は人物評といふものは爲ないことにしてゐる。爲てもその人の長所を擧げることはするが、短所や缺點は成るべく見ないことにしてゐる。大體人物評はさうした痛い處を突ッつくので面白いのだから、私の人物評は一向面白くないつまらぬ物に成つて了ふ。であるからこれは御免蒙り度いと思ふ。

只、今日から思へば、あの身軀の虚弱であつた奥田君が、能く今日まで丈夫で働いてゐることだと思ふ。尤も學生時代から攝生家で、勉强もしたが運動も能く行つた。暇が有つたら棍棒とかいふもので體操を遣つたものだ。二三度それを廻しては、もう腕が太くなつたかと思つて捲つて見るといふ風な性の人だ。どつちかと言へば神經質で、穩健な、物事を圓滑に納めてゆく事の上手な人である。文部大臣としては無論適任だと思ふ。外の內閣員に譯の解つた連中が居ないのだから、彼の人などが最も遣り手に違ひ無い。勿論相當に抱負も有つてゐるとだらう、今後大に働くだらうとは思ふが、私のやうに何でも進歩的積極的に改革して行かうとする方の人では無いから、さう思ひ切つた大改革を敢て遣るか何うか。外の閣員とも折合も良く、大した波瀾も起さずに、其中に在つて徐ろに效を收めて行く人だらうと思ふ。

大體私の考から言へば、現在の日本の政治でも教育でも根本的改革を行はなくつては駄目である。枝葉の弊害を見て、それに姑息的な改良手段を採つてゐたつて、弊害の起る所以を察して根本的に改革を施さなくつては到底駄目である。尤も枝葉の弊害にでも氣が附いて來たのは一大進歩であるけれども、概ね日本には、近代思想界の潮流が何處に在つて、西洋の現在の狀態が何うであるかを知つて理想を實現しやうとする根本觀念を有つた政治家が無い。教育家は詰込主義を以て無暗に學生を苦しめてゐるのみで、法律家は法文の字句に拘泥して、それ以外の知識を有せない。そんなことで教育の實が擧がり、眞の立憲政治が行はれやう筈が無いではないか。日本人は世界の文明に貢獻したことが無いと言はれてゐるが、それもその筈である。今のやうな教育方針では、教師から教へ込まれた以上に學生の知識が働かない。今のやうな狀態では總ての方面に於いて進歩するどころか退歩してゆくばかりである。此際思ひ切つた根本的改革を施さなくてはならぬ。此邊の考が奥田君に有るか無いかは知らぬが、私の希望としては斯うありたいものだと思つてゐる。

△近來出色の文相

大森兜山

何う見ても作食と相場の決まれる大臣のみを迎へて、歷代の不作に數ち顔の文部省も、今回山本內閣には奥田新文相を得て一息吐いたやうである。近い所で申せば、小松原英太郎は魯直なる役人の古手で、別にこれといふ程の行政的能力も手腕も無い。唯細君が椿山莊老公の奥方の御機嫌を取る事が上手だから、こゝ迄出世したのだとさへ噂された位であ

る。次に迎へた長谷場純孝は政友會の古參議員で、中々世才には長けて居るが、一個の文盲漢で敎育行政の何たるかは到底理解する能力が無い。彼は一に古參議員たるの故を以て文部大臣の椅子に倚る事が出來たのである。長谷場の後釜に据わつた柴田家門は官僚式の標本と迄惡口さるゝ程の變屈な男で、評判も甚だ惡かつた。昨年から今春にかけての政變で、屬僚共は又しても元田肇でも來はせぬかと内々心配して居たのであるが豫想は幸にも外れて奥田義人が文敎の主宰者となつた。彼は恐らく井上毅以來の良文相であらう。兩者が法制上の知識を有して、共に故伊藤公の知遇を受けて居つた點抔もよく似て居る。

山本伯が奥田を文部大臣としたのは大出來である。然しこれには色々な意味が含まれて居る。山本伯は身政友會に入らず、思ふ儘に政友會を率ひて都合の良いやうに使ふ考であるから、股肱の參謀長は政友會以外から抜擢する必要がある。而して此意味に於て奥田は見出されたので、言はゞ現内閣の參謀長である。現に政友會側から持ち出す條件などは、奥田が承知せねば閣議を通過せぬ有様である。彼は今名目だけは政友會の黨員に列して居るが、心は至極公平で原敬の如く偏した黨人根性は抄ない。これは彼の美質である。そこで彼を參謀長として官制改革や行政整理の相談相手とすれば、成るべく閑散な地位において自省所管の劇務に忙殺せられぬやうにする必要が有る。文部省には譜代の役人なる現次官福原鐐二郎が居るから大抵の事は次官任せで充分遣つて行ける。特に奥田文相の手腕に俟つ程の事はまづ無いと見て差支無い。故に奥田は手腕を充分他の方面で揮ひ得る餘裕が有る。次に山本伯は閣僚選叙に關し、従來の惡弊から脱して伴食の異名の如く思はれた文相には有爲の人材を据ゑ、以て文敎を重んずるの意を示したが、これも人心收攬上の工風であると思ふ。殊に國體に關する論議の漸く旺ならんとする今日に於て、宮中に信用ある彼を文相としたなどは中々抜け目が無い。奥田は決して歴代の凡文相の後に來たから良く見ゆるのみでは無い。現内閣の大臣の中では人格手腕共に優れた有數の人物と言ふても過言では無いのである。

奥田文相も五十四歳の今日では、大分鹿爪らしい顔をして畏まつて居るが、若い時分には中々の暴れ者で、屢ゝ奇行を敢てしたものである。彼が最初に其骨力を示したのは未だ學生中の事である。明治十六年帝國大學の卒業式の當日に敎員の遣り口が氣に食はぬとあつて、法科大學生が二百餘名聯盟して式場に出なかつた珍事が有る。彼等燕趙悲歌の士は日暮里に本陣を据ゑ、飛鳥山に集合して痛飲し、夜に至り大學寄宿舍に歸つて大々的賄征伐を爲し、終に酒力を藉りて、塀や硝子障子を手當り次第に打ち壊した。其結果時の大學總長加藤弘之は辭職するといふ騷ぎとなつた。文部省も其儘にする譯にゆかず、首魁を處分して事を落着せしめやうとしたが、元より多數の意見が初めから一致して居つたので、取り立てゝ首魁抔の有る可き筈は無い。此時敢然として自ら首謀者と名乘つて出たのが奥田義人である。彼は此れが爲めに即日退校處分を受けた。併し後に至つて全く關係の無い事が分つて退校は取り消され騷動も其儘で済んだ。此時から奥田義人の名は普ねく學校中に知れ渡つたので

ある。

其後學校を出て官途に就いてからも大分毛色の變つた役人で、酔へば必ず奥田一流の珍藝を演じたものである。これは「奥田の睾丸洒」といつて有名のものである。彼は興に乗ずると必ず自ら睾丸を拈つて之に酒を注ぎ、並み居る藝妓共に飲ませねば承知しなかつたものである。而して廿八九年下院翰長の時代迄も此珍藝を繼續して居たさうである。臆面なく此種の藝を衆人稠座の中で敢てし得た者は、まづ彼と中江兆民位のものであらうといふ事だ。

奥田は鳥取の產で所謂閥族の徒では無かつたので、從來政變每に大臣候補者として噂さを立てられたに係はらず、今日迄なり得なかつた。故に現在の彼は頗る得意の境遇に在ると謂はねばならぬ。奥田は現在迄大學では親族法の講義を遣つて居つたが頭腦が明晰で且つ雄辯であるから學生間の評判は良い方である。

彼の恩人といふ可き者は故伊藤公である。公は奥田の行政的手腕並びに人格に信頼する所が厚かつたので、井上毅の歿後は彼を後繼者として待遇した。かの皇室典範の編纂の如き奥田の力に俟つ所頗る多きは萬人の認むる所である。伊藤公の第一次政友會内閣の時には法政局長官として世に所謂奥田案なる行政整理案を立てたが實行せられずに終つた。其後宮中顧問官となつたのも皆伊藤公の推挽によるのである。

山本伯はどちらかと言へば伊藤公に好意を有し、山縣公を深く嫉視して居たものであるが、伯と奥田との間は彼が下院翰長たりし時代から親密であつた。殊に伊藤内閣に於て立案した行政整理は實行せられずに止んだのであるが、今回山本内閣の參謀長として、直接行政整理に關し、自己年來の抱負を實行し得るとすれば、彼の所期も聊か酬いられたと謂はねばならぬ。

山本伯は就任早々政友會の代議士總會に出席して、自己には政治上何等の抱負も經驗も無いから政友會の從來の主義方針に則つて萬事を處理すると言うて居る。此言を眞面目に解釋すれば、伯は甘んじて政友會の爲めに其お手先きとなるといふことゝなる。併し親しく昵近者に言明した所によると全く正反對で、彼は自ら政友會を率ゆる者である。故に政友會は彼の意の儘に行動せねばならぬといふ牢固なる意志を認むる事が出來る。而して山本伯の人格に省みるも、後者の解釋の方が寧ろ正當であるやうに思はるゝのである。果して然らば伯の智嚢として高級參謀たる彼は、少くとも現内閣の存續する間は、得意の時代を持續し得らるゝ事であらう。併し政友會の意志が將來山本伯の所期と反して、此兩者が互に隔離絶縁する場合には、奥田の政治的地位も自ら動搖せぬわけには行くまいと思ふ。殊に公平な思想を懐いて居る彼は、到底政友會の如き極端なる黨派的偏見から割り出した政策を是認し得まいと思ふ。故に事玆に至れば彼も亦或は政友會と絶縁するかも知れぬ。吾々は彼の入黨すらも眞に政友會の主義政策を是なりとした上の行動であるかどうか疑はざるを得ぬのである。即ち政友會に於ける彼の地位は未だ全く安定の狀態には置かれて居ないのである。

奥田は曾て明治卅四年伊藤大隈が聯合して桂内閣に肉迫した當時、加藤高明と共に横濱市から衆議院議院の候補者として打つて出た事がある。此時島田三郎は兩人を向ふへ廻して防戰頗る力め、大多數を以て當選し、奥田は次點者で、加藤は落選した。併し奥田は鄕里の鳥取でも當選したので横濱の方は辭職して加藤に讓つた事が有る。此頃金權も勢權も無い弱者と見做された島田に同情した多數者は、奥田を呼ぶに不義人を以てし、加藤を呼ぶに不高明を以てしたが、十餘年後の今日、兩者が共に別箇の政黨に入りて相對峙するに至つたのは頗る奇妙なる廻り合せと謂ふべきである。奥田は單に文相として適任者であるのみならず、行政的の手腕能力に於ても、優に國務大臣たるに足るの力量がある。加藤も一外交家たるに止まらず、財政にも精通して居るから、外交專門の人物では無い。等しく國務大臣として立ち得る人である。奥田は善き意味に於ける才人で、加藤のやうに頑固でないから黨人としては却て事效を擧ぐるに適するかも知れぬ。加藤は識見高邁、容易に人に下らぬ風が有るから、斗筲の輩と合議して遣るやうな手緩い事には堪へられぬであらう。併し憲法國の本場たる英國で鍛へ上げて來たから、或る程度迄は自家を抑遜して他に讓るかも知れぬが、大體に於て黨人たるには適せぬやうである。併し此種の適不適は黨其物の性質にも由る事であるから政友會の如き黨に奥田の適する程度と立憲同志會に加藤の適する程度との相違は容易に判斷し得ぬ事である。兎も角も此種の眞面目なる人物が熱心に黨人として活動するやうになる事は吾々の切望して措かざる所である。故に奥田が永く政友會に在るのは、政友會の漸次に改善せらるゝ證左と見て其然らん事を欲するのである。

長い間政權が私閥私黨に壟斷せられて居た結果として、情實的の關係の選叙が自ら毎に伴食大臣の一二若くは二三を出して來た。今頃になつて吾々が奥田を近來出色の文相である抔と言はねばならぬ事は實に國家の不祥事である。山本内閣が斯る不祥事の跡を根絶するにどれ程努力するかは頗る疑問であるが、牧野奥田の兩高級參謀以外に、床次山之内安樂抔の純薩州身の低級策士のみが幅を利かして居る現狀では、前途が甚だ案じられる次第である。

現内閣の寵兒である以上、奥田は何事も爲すに好都合ではあるに相違ないが、長谷場文相時代から難問題として手の付けきれなかつた大學總長の如きも、悉く人選を了し、近時の文部省の遣り口は一寸官僚離れがして中々小氣味よく感ずる節が尠くない。文盲大臣と評された長谷場や、變屈の三日大臣たる柴田と奥田とは確かに段違ひであるから、今後も猶文教刷新の上に於て着々見るべき施設を遣るに違ひ無い。吾々は政友會の行動には秋毫も滿足しては居らぬが、奥田の人物には聊か敬意を表し、猶將來の有る事を斷言するを躊躇せぬ者である。

△前途有望なる奥田氏

仙朶谿隱士

奥田氏は今度初めて新たに大臣になつたのであるが、然し之までも幾度も大臣に擬せられた人である。其年齢からいつても、其經歴からいつても、充分大臣になる資格のある人で、又大臣學については、他人の失敗も見、成功も見て、心密かに研究が附いて居ることゝ思ふ。又就任以來やることを見るとなか〱老功であつて一寸新大臣とは見られぬ手際と私は思ふ。例へば大學總長問題の解決なども頗るよい思附で世間でも感心して居る。又多分近い中に學制研究會の如きものを作つて、稍ゝ世間を滿足さすに足るべき仕組を以て教育界の各種の研究をやるだらうと思ふ。

今の内閣は幾年續くか分らぬが、近來の文部大臣中では確かに出色である。そこで今奥田氏の成功の所以を考ふるに、私の見る所では極めて事務的の人であつて決して空想的の人間でない。之が氏の成功の第一の原因である。餘り理想が高過ぎて、いろ〱自分がしたい事を持つて居れば、つい世の中と背馳するといふやうな事が往々ある。又餘り平凡にして時勢も解せず、世の中の註文も分らぬといふ事であれば、是れ亦到底何事も出來ない。詰り今日の時勢をよく理解する知識があつて、其思想が餘り世間よりも進んで居らず又遲れても居らず、水平線を少し拔く位の人が、仕事をするに恰度よい具合の所であらうと思ふ。私などの註文をいへばもう少し進歩した考を以て仕事をして貰ひたいのであるが、今の日本では望んでも得るに六つかしいかも知れぬ。例へば奥田氏は、日本は家族主義の國である、然るに民法の規定は往々個人主義的になつて居る。それで民法をもう少し家族主義的に作り直さなければならぬといふやうの意見を一二年前の法學會が何かで演說し又同樣の事を貴族院でも演說したやうである。之などは頗る保守的の考で私共は贊成は出來ぬ。今後の日本は矢張り民法の規定通り個人主義的に進むより外仕方がないので、個人主義になつても不道德、無倫理にならないやうにするのが教育の本旨であると考へる。然し今日の世間一般はどうかといふに、家族主義といへば道德的で、個人主義といへば不道德といふやうに誤解して居る。殊に貴族院の連中などは七分通りまで其考である。又樞密院や宮內省などは勿論それ以上の頑迷不靈な人が多いから、奥田のやうな人が仕事をすれば世の中の疑を受けず、安全な人と見らるゝので仕事をし易い。學制を改革する時などは最も都合よからう。前の小松原氏などは善良な人であるけれども、或元老の頑迷な思想を其儘に受け繼いで反動的の政策を採つた。奥田は今の家族主義の說は保守的であるけれども大體は進歩主義の人であり、又よく世の中の事の分る人だから、新らしい人と舊い人の兩方の註文の間を行つて、先づ文相として成功するだらうと思ふ。

今日何れの政黨がよいかわるいかは別として今後政治界に立つて仕事

をするには、政黨を基礎としなくてはならぬ事は天下異論のない所であつて、氏が今度政友會に入つたのも、外觀は大臣になる爲めに入黨したやうな形式であるが、元來政友會に近い人で、貴族院に居つても交友會員として重もなる問題については政友會と行動を共にし、又系統も伊藤公の門下で常に其指導に服して來た人であるから、今度も恐らく義理一遍で入つた譯でなく、眞面目に政友會の一首領として奮闘する積であらうと思ふ。さうすれば一度丈け文部大臣をしたといふ事に限らず、今度文部大臣として成功すれば、政治界に於ける氏の位置もいよ／＼堅固になり、此次の入閣に於ては文相よりも政治上重要なる椅子を占むることにも必らずなるだらうと思ふ。內務大臣にしても立派な內務大臣であらうと信ずる。すれば奥田の前途は頗る多望なりといつてもよからう。人間の運命は實に不思議なもので、第二次西園寺內閣の時も奥田は新聞紙によつて文相に任命されたが、實際西園寺の頭腦にはそんな事がなかつたらしいが、今度偶然にも山本內閣が出來ることになつて、俄に氏は文相となり、そして頗る世間の聲望を博するやうになつた。折角奮發して世間の期待に背かず、益々前途の光明ならんことを希望する。

△奥田文相に望む

曲肱政客

奥田の特長は邊幅を飾らざるにある。又貧賤の交を忘れざるにある。自ら奉ずること極めて薄くして部下に對することは案外に厚い。又見掛けより以上に剛毅である。奥田は因幡の人であるが、因幡は一寸いつて見れば奥羽の會津といふやうな所で、人間に氣骨のあることは中國一である、奥田はその因幡の最もよい所を代表して居る人だ。

短所の方をいへば人物が極めて小さい。從つて小心翼々である。それで今日の如く、學制が紊れて、唐か日本か西洋か譯の分らぬやうな狀態に處して、毅然として百世を律すべき學制を立つるやうな事は此人にはどうかと思ふ。

元來從來の文相といふものは總て大臣中の伴食のみで、之に氣骨や抱負を求めるのは抑々木に緣つて魚を求むるやうなものであつた。只學生共の機嫌をとつたり、教授連の氣受けをよくするに汲々たりといふ有樣で、其結果大學以下總ての教師の講義振りは寄席の落語家や講釋師の態度と少しも變らず、講義を切賣して、途中で時間が來ればサッサと切上げるといふ風で、ペンキ屋がペンキを塗ると少しも異ならなかつた。人物の訓練とか品性の陶冶とかいふ事はそれで出來るものでない。從て學生共も教師を講釋師、落語家扱ひして少しも畏敬の念を持たない。面白ければ講義を聞くが厭ならば聞かぬ。又甚しきはあの教師は何となく氣に喰はぬというて立所に喧嘩盲動をやつて動ともすれば教師の排斥などをやる。此時に當つて上、文相たるものが如何なる事をするかといふと、進んで之を威壓せんか翕然として學生の反抗するを奈何せん。退いて之

に從はんか、文部當局の威嚴を保つ能はざるを奈何せん。寧ろ威嚴を損ずるも反抗を大ならしむるに勝るとして、先づ其場を曖昧にし、遂に學生に迎合して其機嫌氣褄を取ることになる。是れ今日の敎育の墮落を來したる大原因にして、憂國の士が敎育亡國論を唱ふる所以である。思うて玆に至れば文部の當局として伴食を戴くのは危險千萬であつて、文部には寧ろ最も氣骨あり抱負ある人物を以て充てねばならぬと思ふ。奧田氏は伴食でない許りか現内閣に最も重きをなす人であるから、此際因循人の特色を充分に發揮して、從來の弊風を一掃せんことを希望する。奧田氏就任以來學生のストライキなどに對しても一歩も假借せず、汝等何事でも爲せ、學生として敎師の進退を議するなどゝは其分を踰越せるもの也、全校擧げて放校の處分をするも敢て辭せぬといふやうな言語と態度とを以て臨まんとするが如く見えるのは甚だ心强い事と思ふ。此態度を持續して進めば、或は學界積年の弊風も稍ゝ矯正するを得べく、我々は暗夜對岸の渡場に微かに一點の燈を認め得たるが如き心地がする。

又今日の敎育といふものは外國語の學習などに向つて殆んど全力を注ぎ、外國語の巧みなるものにあらざれば官吏にもせぬといふやうな遣り口である。其結果敎師以下學生も一種の通辯になつて了つて、眞に識見あり、氣力ある人物が曉天の星よりも稀ならんとする有樣である。日本も最早や西歐崇拜の夢から醒めて、日本人たるの本色特色を發揮すべき時機に際會して居る。バイブル的敎育はどうしても日本人に適せぬ。矢張り古來の孔孟の旨ある敎義を本とし、日本の歷史を國體的に知らしめ、運動の如きも單なる遊戯的よりも矢張り柔道とか擊劍とかいふ運動と共に精神の修養に資するやうなものを奬勵する方がよいと思ふ。人或は我輩の議論を以て保守的といふかも知れないが、眞正なる日本人の立場に立つて日本人の特徴を發揮するのが却て世界の文明に貢獻する積極的進步的の方針であると思ふ。

從來の文相と違ひ、奧田は伴食にあらざるのみか、非常の重要の地位を占めて居るから、爲さうと思へば爲されない事はあるまいと思ふ。依て自分の平常懷抱する所を以て、氏の一考を煩さんとするのである。

△現内閣の參謀長

早川鐵冶

何といつても奧田は現内閣の參謀長だ。山本權兵衞が肺肝を吐露して相談する唯一の謀將だ。今日の内閣に重きをなすものは原にあらず松田にあらず即ち奧田なんだ。奧田は明治十七年の大學法科の出身で江木衷と同級だつた。又阪谷芳郎や私なども幼年の頃一所になつた事がある。奧田は早くから儕輩に擢んでゝ居つた爲めに、伊藤に知られて制度取調局の屬官になり、續いて農商務省に入つた。農商務に於ける奧田の聲望は素晴らしいもので、農商務の奧田か、奧田の農商務か分らぬといはれた。それといふのも彼の部下には大學出の錚々たる人物が居つたからだ

田中隣三、原嘉道、太田貪時の如き純然たる彼の部下として働き、又外様としては林田龜太郎、木内重四郎、梅謙次郎などが居つた。奥田は初め秘書官となり、後に特許局長で參事官を兼ねて居つた。そして參事官の職に上る重大なるものは奥田の意の儘ならざるはなかつた。原敬の如きも今は政友會の大立物として威張つて居るが、嘗て岩村大臣の下に農商務省に居つた時は、何の仕事も出來ず、毎日新聞を見て日を暮らすやうな有様て、少しも勢力を振へなかつた。其後陸奥の信用を受けて次第に名を知らるゝに至つたが、倘且つ奥田の勢力には及ばなかつた。明治廿五年に後藤象次郎が大臣になつた時に井上系であつた齋藤修一郎、藤田四郎や又私などが農商務省に入つた時に、奥田は農商務省を見限つて官報局長になつた。彼の乾兒も此時大抵辭職した。其後奥田は衆議院書記官長となり、文部次官、拓殖務次官にもなり、法制局長官にもなつた。私は二十年前には無論原よりも早く大臣になるだらうと思つてゐた。然るに事我々の豫期と違ひ、今日に至つて初めて光彩を放つ機會を得た。法制局長官の時桂と合はず去つて職を辭し、其後衆議院議員に二回出たが、政友會には入らず、猶興會か何かに居つて、薩張り名が出なかつた。それで政界は駄目として宮中に入り、制度取調委員と顧問官を兼ねた。我等は心窃かにあれ丈けの技量を持つてゐながら惜しいものだ、帝大の人は俗人と俗界に立つ念慮が薄くていかん、奥田の如き人が早くも政界に見切りをつけるなどゝは如何にも意氣地がなさ過ぎると、私は大學生の無氣力なる一例として奥田を引合に出して罵つたこともあつた。去年久し振りて拓殖博覧會の時に政友會一部の人に推されて其會長となつたを見、又此春熱海に於て一所になり、君の如き人が政界に働く機會を自ら作らぬとは殘念であるといふて別れた。處が偶然にも其機會が廻つて來て、山本伯の起つと共に、氏も再び政界の晴の舞臺で働くことになつた。山本伯は表面に立つて居るけれども海軍の事は分つても一般行政や財政や外交などは分らない。其事は今度の議會の答辯振りを見ても分る。そこで奥田君を推して參謀長とした。薩摩人の事であるから一旦信用したら何でも任せてやらせるだらう。どうか此機會を捉んで今度の行政整理なども思ふ存分にやつて貰ひたいと思ふ。

文相としての奥田も、久々で伴食でない文相を見たのであるから、一段と引立つて見える。近頃の大學總長の更迭なども普通の人より面白い遣り方であつて、あの流儀でドシ／＼文政の實を擧げることに骨折つて貰ひたい。政友會の有象無象共を操縦して仕事をするには隨分汚ない様な事もあらうが、ソコをよく辛抱して、折角來た機會を逃さぬやうにせられたい。我々もイヤナ所を我慢して、進んで自ら機會を作つて政界に奮闘しやうと思つて居る。

△奥田義人君

十三生

奥田は鳥取の人であるが、名古屋の學校に於て英語を學んだ事があると聞て居る。よくは覺えて居らんが、名古屋には諸所からいろ／＼な人が集つて敎育を受けたものだ。其中には三宅雄二郎も居つたやうに記憶して居る。小川忠武や京都大學の書記官の松永なども居つたやうである。其仲間では奥田などは餘り先覺でなかつたやうに聞いて居る。それから後に東京に出て、明治十七年に大學を卒業した人で、江木衷、石渡敏一などゝ同年であつた。其中で江木は學才を以て聞えて居つたのであつて、學才の點に於ては奥田は江木に及ばなかつたと云ふのは一般の評である然し奥田は人物の點に於て人の爲めに推されて居つた。氣力も盛んであり、兼て又物事を擔當する丈けの才幹があつた。それから卒業後早く武井守正の爲めに見込まれて、其娘が今の妻君となつた。

奥田が初めて仕官したのは確か農商務省であつた。奥田が農商務に入つてから間もなく藤田四郎が入つた。藤田は十八年の卒業で奥田よりも一年遲いのであるが、井上の女婿であるが爲めに羽振りがよかつた。奥田は藤田の爲めに隨分いぢめられたといふ事である。併是は本當か嘘か私は知らぬ。けれども奥田は元來事務の才に富んで、如何なる役所に居つても長官の爲めに用ゐられ、一方に捨てられても必らず他方に拾はれる。官界の起上小法師ともいはれ、官海游泳術の達人ともいはれた、然し奥田が誰にでも用ひられたのは、我等から見れば游泳術の巧みなるによるよりも、寧ろ事務の才に長じて實際役に立つたからと思ふ。

今日の中央大學の前身が東京法學院で、其又前身が英吉利法律學校である。奥田は其英吉利法律學校の創立當時より之に關係し、増島六一郎と事を共にした。中央大學に於ても奥田は矢張り人の氣受けがよかつた。人に秀たる學才もあり、講義をしても言ふ所肯綮に中り、又辯舌も人の下に立たず寧ろ上にあつて、才幹があるんだから、一般の氣受けのよいのも當然である。後に増島が直接に關係せなくなり、菊池武夫が校長となつてから後は奥田が專ら學校事務に當り、追ゝ學校も盛んになつて多くの人材を出したことは人の知る所である。而して中央大學の中心人物は全く奥田であつたのである。

要するに奥田は官界に於ても重寶がられ、又私立學校に於ても人の注目を惹く丈けの仕事をした人である。即ち奥田は何れの場所に仕事をさしても成功した人である。官界に於ては奥田は最近までは宮中顧問官になつて居つたが、あの地位を得たのは疑もなく伊東巳代治の爲めに引立てられたのである。けれども宮中顧問官は實は隱居役で、奥田の政治生命は玆に止つたかと人に考へられた。然るに今回は測らずも山本伯の引立てに與つて文部大臣となり、のみならず山本伯が仕事をするに當つて其參謀役の奥田氏なることは疑ない事實である。奥田を贔屓する人は現內閣の副總理であるといふ。然し之は少しく過當である。政友會に於ても松田も居るし、原も居るし、あゝいふのは奥田の下に立つて居る譯でない。又他の大臣だつて奥田の下に立つことは想像出來ない。然しながら奥田は山本總理の爲めに確かに參謀として用ゐられて居るのであつて其參謀の注意の仕方によつて、山本總理も善政も出來れば、出來なくも

なるのである。奥田の責任も亦大である。

奥田は自ら總理大臣になつて居る譯でないけれども、自ら總理大臣を動かす力を持つて居るから、如何なる大なる抱負を持つてゐても之を實行するの途があると思ふ。此事に關しては大いに奥田氏の爲めに賀すべきである。然しながら私の憂ふる所が一つあるのである。奥田は氣力も盛んであつて才もある。若い時には萬事の裁決流るゝが如しであつた。然し近頃は少しく圓熟に過ぎた觀がある。さうなるといふと或は昔日の如き果斷力を失つたのぢやないかとも危まれる。奥田自身も此事を悟つて、今回山本總理を助けて行政整理を行ふに當つては、奮勵努力して昔日の如き果斷力を用ふる方がよからうと思ふ。

今月は記事輻湊の爲め、本號に掲載し能はざりし原稿少からざる外、殊に

和歌、俳句の全部

及び新刊批評數十項を悉く組置として次號に廻はすの止むなきに至れり。此事選者寄贈者及び讀者に謝す。

（編者しるす）

俳句課題
夏山（十五句）紙魚（十五句）……六月五日締切
土用（十五句）氷室（十五句）……七月五日締切

注意　各題別紙、淡路國釜口村高田蝶衣宛

評論

吁嗟亡國の歎

（亞細亞土耳其の自治獨立熱）

一

悲風蕭々、亡國の歎無き能はざるは、土耳其帝國昨今の運命とす、六百年前の雄姿何れの處ぞ、恨長きもの何ぞ獨り詩人のみなりとせん哉。

アルバニヤ割かれ、マセドニヤ奪はれ、君斯丹丁堡附近を除きて歐洲土耳其領空しからんこと、旦夕にあり、其一轉亞細亞的帝國化するの機、切迫せるに當り、何事ぞ、亞細亞土耳其も亦た續々獨立自治の聲を聞かんとは。

傳ふるもの曰く、ベイルート州の人民、先づ中央政府の衰勢に乘じ、完全なる自治若くは獨立を得んと欲し、アレポ、エルサレム、ダマスカスの三州また此熱の蔓延を見、シリヤの人民同じく自治運動をなすに至れり、僅かに此熱を見ざるものはメソポタミヤ在るのみと。

抑もベイルート、アレポ、エルサレム、ダマスカスの四州には約二百五十萬の住民を含む、其内基督敎徒三十五萬、猶太敎徒十二萬あり、他は悉く回々敎徒に外ならず、從つて住民の多數は本來土耳其政府を厭ふものにあらずと雖も、最近秕政に繼ぐに秕政を以てし、民庶其堵に安んずることを得ず、遂に此狀勢を發生するに至れるや知る可き也、次にシリヤに至ては或意味に於て佛國の勢力範圍たり、就中同地基督敎徒が佛國との合併とを希望するや一日にあらず、唯だ回々敎民等、佛領アルゼリアの回々敎徒待遇に不滿を抱き、爲めに佛國よりも英國に接近し埃及と合併せんことを希望せるあり、未だ其運命を決定するに至らざるのみ、而して最近英國、遂にシリヤに於ける佛國利權を承認せりと聞く、果して眞ならん乎、シリヤも亦た危險なりと言はざる可からず。

二

思うて茲に至る、吾人は竊かに涕涙の横流するを支ふる能はず。

然かも君斯丹丁堡の政府にして、今日に於て一時の安を偸むの策を執らんと欲せん乎、敢て其策無きを憂へず、他無し、一方に於ては獨英佛の利害交錯し、相嫉視せるを利用して其活動を檢制せしめ、他方に於てはせめて今日以上の自治を亞細亞各民族に許して、之を慰撫せんこと是也。

顧みるに地方分權は、六百年來土其耳其の政治的特色なり、一八六七年の法律亦此主義を宣明し、一九〇九年革命の後と雖も、明かに此主義を放棄したること無し、一九一一年新法案議會に提出せられたれどもサイドパーシャ内閣瓦解して、事決定せず、キャミル、パーシャの内閣も之が處置を企てゝ成らず、昨年三月二十八日始めて新地方行政法の成立を見たりき、今にして更らに同法を修正し、以てベイルート以下諸地の民族と協和せんことを謀らば、誰か其效大に見る可きものなきを知らん哉、況んや青年土耳其黨中一派の所謂中央集權若くは帝國統一は理想として美なるに係らず、今日に於て實行し難き所なるに於てをや。

然かも頑固なるシェブケット、パーシャ元帥の政府が、能く行つて斯くの如くなるを得るや否や、吾人は固より豫言する能はざるを悲む、而して亞細亞土耳其の將來や、遂に雲烟茫漠の觀あるを免れず。

排日案通過

一

米國加利福尼亞州の排日的外人土地所有權禁止法案は五月二日、二對三十六の多數を以て同州上院を通過し、翌三日、三對七十二の多數を以て同州下院を通過したりき、而して同州知事ハイラム、ジョンソン氏は、國務卿ブライアン氏より同法裁可を差控へんことを勸告せられたるに對し、十五日回答して曰く吾人の措置は國際條約に牴觸せず、予にして萬一自ら同案を是とせずとするも、之が裁可を拒む能はずと。

是に於て乎排日法は確定したるものと見る可き也。

然らば則ち其内容は如何、曰く

一　市民となるを得る外人は、市民同樣土地を所有するを許す

二　市民たるを得ざる外人はその本國と米國との條約が許與せる範圍に於て土地其他の權利を有す

三　市民たるを得ざる外人が過半數の勢力を占むる會社は(二)と同様とす

四　現在の所有者には何等の影響なし

五　市民たるを得ざる外人の借地權を三箇年とす

吾人は以上の規定につき多くの言を費さゞる可し、唯だ一言し置く可きは、同法は表面に於て條約違反と言ふ能はざるに至れることゝ是也、何ぞや、日本人の土地所有權如何を日米條約に準據すと規定したるを以て也、從つて今日の問題は日米條約が果して日本人に土地所有權を保障すと言ふ可きや否やの解釋問題に轉じたるを以て也、果然、加州政治家の巧妙なることゝ、我が霞ヶ關外交の及ぶ所にあらざる也。

二

然かも名目は如何にもあれ、在米同胞の土地所有は禁止せられんとす、我政府たるもの宜しく(一)日本人歸化權獲得、若くは(二)日本人土地所有權を確保する條約改正を斷行せざる可からざる也。

世上或は一般投票に依りて同法を廢棄せしむ可しと說くものあり、吾人以爲らく、斯くの如きは愚策のみ、却て排日熱勃興を促すものに外ならずと。

抑ゝも一般投票とは何ぞや、是れ久しく瑞西民主政治の特色たりしもの、最近米國に蔓延す、即ち一八九八年サウス、ダコタ州先づ其憲法を修正して州全體に亙る立法事項につき同制度を採用し、一九〇一年イリノイ州、一九〇二年オレゴン州之を採用し、爾後ネヴタ、モンタナ、ミヅリ、メーン、コロラド諸州其跡を追ひたりき、而して加州議會亦た該案を建て一九一一年十一月總選擧に同制採用如何を人民に問ひ、其結果大多數を以て可決せられたる所なり、然らば則ち其制度の性質は如何、曰く已に法案一旦上下兩院を通過し、知事の裁可を得たる後と雖も、一定の有權者より之を不當とし、請願するに於ては、一時同法の執行を中止し、次回の總選擧(今回なれば來年十一月)に際し人民に同法の可否を問ひ、之が運命を其裁定に委するを得ること是也。

然かも吾人は深く今回の場合に於ける同制度適用を不可とせざるを得ず、何ぞや、加州の有權者の多數は日本人問題に冷淡なるが故に、其日本人に對する判斷は、所謂野次的政治家、白人勞働同盟員の運動次第に如何やうとも成り行く可きを以て也、況んや加州の一般投票が公平に行はれんとは思惟せられざるに於てをや、試みに下に記する支那人問題の處分の事實を見

よ。

三十三年前加州々會の決議せる支那移民問題を人民の一般投票に問ひたることありたるに、支那移民歡迎八百八十三票に對し十六萬一千四百〇五票に上りたり、是れ他無し、是非支那人を排斥せんとする加州政治家は其投票用紙に加州知事以下州官吏四十五名の候補を列擧し最終に「支那人反對」なる文字を印刷して之を有權者に配附せり、而して支那人問題に興味無く且つ冷淡なる有權者は此「反對」なる文字を塗沫し「贊成」なる文字に書き改むる勞を吝みて、之を其儘となしたるを以て、斯くの如き結果を見るに至れりき。

日本人問題は、斯くの如き明白なる偏頗的措置を受くることと萬々あらざる可しと雖も、又た到底眞成なる公平を望み得可きにあらず、而して一朝敗北せん乎、排日黨は人民の公然たる許可を得たりと誇稱して、益在米同胞を苦しめずんば止まざる可し、是れ豈策の得たるものならんや。

濠州の新首府

濠太利聯邦成りてより玆に十三年、始めて首都創建の運に至る、濠州人民の欣喜如何許りぞや。

是より先き、シドニー、メルボオンの兩市、互ひに首都たらんことを希望したりしが、濠州の賢明なる政事家も、兩競爭者の壓迫に會して之が取捨に苦しみ、遂に米國がワシントン府を新造せる實例に倣ひ、別に首府を創建するに決定したりき、而して最近濠州總督デンマン卿は新首府の命名式を行ひ、盛大なる祝祭を擧行しぬ。

新首府をカンベラと稱す、山丘之を環り、宛然我か京都を南方に移したるの觀あり、之が創建に要する日子は八箇年にして、支出費用下記の如し。

第一年	二十一萬五千圓	第二年	百六十七萬圓
第三年	三百四十四萬圓	第四年	四百六十六萬圓
第五年	三百九十五萬圓	第六年	三百四十五萬圓
第七年	二百六十萬圓	第八年	一萬五千圓

以上合計二千萬圓

而して吾人が同市の計畫に關して、羨慕に堪へざるは之を理想的都市とせんとすること是也、即ち煙り無き都、裏長屋、貧民窟なき都とし、人口五萬以内に止め、優美と閑雅とを之が特色とせんとすること是也、成否は固より豫知し難し、濠州人は由來優美と閑雅とに缺如たることあれば也、然かも吾人は竊かに彼等が斯くの如き希望を抱懷するに至りたるを見て、「衣食足つて禮節を知る」の諺を想起せずんばあらず。

狡猾なるもの、迂濶なるもの

愈〻出て〻愈〻老巧に、人をして其行ふ所を端睨する能はしむるものは、中華民國臨時大總統袁世凱なるかな彼れや、五月中旬其國內基督敎諸團體に訓令して曰く、願くは新開會の國民議會の爲めに祈禱せよ、新政府の爲め、大總統の爲め、列國をして中華政府を承認せしむる爲め祈禱せよと。

是れ巧みに基督敎徒の同情を博して、一日も早く政府承認を見せしめんとするもの也、然るに英米諸國新聞忽ち感涙に咽びて曰く支那の基督敎迫害は昨の如くなるに、今や態度一變、救ひを同敎に求めんとす、偉大の進歩と言ふ可き也と、遂に狡計の在る所を觀破すること能はず。

吁嗟世に狡猾なるものあり、而して又迂濶なるものあり。

獨逸民間飛行家養成

我國が獨逸に學ぶ可き所や尠少にあらず、就中飛行家養成の如き最も重きに居らん、伯林に飛行資金委員會あり、自ら資金を供し、十九箇の飛行會社と約して民間飛行志願者の敎育に當らしむ、其說明に曰く一朝有事の時、海陸軍の飛行家のみを以て、其用を充たすに足る可からず、飛行防備の根柢は、民間の飛行術進歩にあるを知らざる乎と。

飜つて見よ、一武石浩玻長逝して、民間航空界寂寞たる我國の現狀を、是れ果して東方新進文明邦と誇稱するもの〻面目なる乎。

新刊批評と紹介

△開國大勢史

大隈重信著
早稲田大學出版部發行

西歐文明の潮がひた〱として我島帝國の岸邊に打ち寄せ初めたるは已に四百年の昔に屬す。而かも一度堰がれて其流を杜絶せらるや、再び澎湃として滔天の勢を以て逆卷き來り、隻手空拳遂に此大潮流に抵抗ふこと能はず、三百年鎖國の禁を解いて、開國進取の國是を定め、以て今日世界一等國の班に列するの基礎を作り得たるは、僅かに五十年にも滿たざる近時の出來事たり。此編即ち其三百五十年間に於ける西歐文明と我國との接觸を說き、開國とは畢竟世界の大勢に順應せる結果に外ならずして、今後と雖も、國を列强の間に建て、雄を世界に爭はんとするものは、よく大勢を洞察し、巧みに大勢に順應するの外あるべからざることを論述せり。一編の論斷結構總て大隈伯の發案にかゝり、有賀長雄博士主として材料の供給按排に當り、松平康國氏等文飾の責に任ぜりといふ。惟ふに個々事件の詳密と、史筆の科學的精嚴とを誇り得べき學者は他に必らず其人あらん。然れども眼を大處より着け、論を大局より立て、大鉈を揮つて大木を一擊にして伐り倒すが如き、堂々たる大史論は之れ殆んど大隈伯の獨擅場にして、此意味に於て此書は殆んど世界にユニークのものたるべし。殊に其材料も亦西歐に殘存せりし珍品秘書等を引用せしもの多く、假令其論斷に至つては多少議論の餘地あるものあるにしても、國民の識見と心胸とを擴大せしむるの大效あるべきを疑はず。之を伯の前著「開國五十年史」「國民讀本」等に比して固より數段上の出來榮にして、伯の本色は最も此一書にあらはれたりといふも過言にあらざるゝ也。

(定價金五圓)

△人形の家

島村抱月譯
早稲田大學出版部發行

此譯本は嘗て文藝協會の手に依つて帝國劇場に公演せられ、我沈滯せる劇壇に近代藝術の新味と、幾多の意味に於ける問題とを提供して世の賞讃と喝采とを博した「人形の家」の臺本となつたものであつて、此度それに尙一層の修正と洗練とを加へて出版せられた處のものである。此譯文が飜譯脚本として未だ類を見ないくらゐ傑出したものである事は、上場された當時殆ど空前の舞臺上の效果を收めたことに依つても均しく認められてゐる處である。要するにあらゆる點に於いて成功したる飜譯として記者は此貴重なる我文壇の收穫を江湖に推薦するとを得るを喜ぶものである。(定價金九拾錢)

△椿

田山花袋著
忠誠堂發行

最近五六年間の同氏の小品、女峰の谷、北伊豆等の隨筆廿餘篇を集む流石に皆それ〱に面白い。製本として餘りに紙質の粗惡なるはどうした譯だらう。(定價金三十五錢)

△後の新片町より

島崎藤村著
新潮社發行

藤村氏が渡歐の途に上られてから殆ど二ケ月に成らうとする。其間に花は散つて、世は青葉の茂りに深い省察の時代は廻つて來た。このやうな時に徐かに此書を開いて、さゝやかな新片町の寓居に深い沈默の底から人生と藝術の眞髓に喰ひ入らうとして開いた、氏の鋭い眼光のあとを辿るは何といふ我々にとつての喜びであらう。(定價六拾錢)

△？之人

堀口熊治譯
東亞堂發行

原書は英國のエッチ・ヂー・ウエルスの作"The Invisible Man"を翻譯したものである。原作は科學的立場から現代社會に對する諷刺と警告と未來の人類に對する暗示とを目的とした小說である。此種の小說が有るといふを知らしめるとだけでも意味はある。況して今の日本に此種の小說が決して不必要なものではないと云ふとに於いて。(定價八拾錢)

△日米敎育時言

菊池大麓著
弘道館發行

本書載する所は著者が米國より歸朝後諸所に於て爲したる講演である敎育の趣旨より說起して、初等敎育中等敎育の所感、米國に於ける敎育所感より不良少年感化の一特例に及び、諄々として著者平生の敎育に關する抱負を開くを得。我國現下の敎育方針には幾多改革の餘地あり、以て好參考たるべき書である。(定價金壹圓五拾錢)

△和漢英對照文法

田森長次郎著
早稻田大學出版部發行

和漢英の文法を比較對照して其異同を明にし、以て語學硏究の便宜を與へんとしたものである。是れ各國語の特質と原理とを知るに此上なき方法である。語學硏究者に取つて大なる福音を與へるものであらう。(定價金壹圓)

△陸文學講話

横山又次郎著
早稻田大學出版部發行

陸文學は地學の一部科であつて、地球面に於ける陸地の硏究である。本書七章に分れ、地球の裏面、地殼の構造、地殼の運動、地球面の變形に與かる天然力、陸面の形態、湖と河、海岸と島の諸項の下に眞面目なる硏究の結果を載す。(定價金壹圓九拾錢)

△日本短歌史

山内素行著
敬文館發行

和歌の發生和歌の勃興より平安朝鎌倉室町と年代を追うて其盛衰を叙して明治に至るまで短歌の歷史を綴つたのが本書である。短歌の歷史としては最初の系統立てられたものである。(定價金壹圓)

△戰場二ケ年

山岡子爵家追武會編者
盛文社發行

本書は日露戰爭當時陸軍支那語通譯官として野戰部隊に屬し親しく戰場を馳驅せし子爵山岡直記氏の從軍日記を基礎としたるものにして、可成忌憚なく當時の實狀を發表するに努めたるもの、蓋し靑少年の好讀物たるべし。(定價金壹圓廿錢)

△クロムエル傳

畔上賢造譯述
警醒社發行

本書はカーライルの「クロムエルの書翰と演說」から其精神の有る處に着目して抄譯したるものである。クロムウエルは一代の英傑、而も文豪カーライルの心血を灑いでものしたるもの。譯筆亦簡潔。(定價金六拾錢)

△聖地パレスチナ

小西增太郎著
警醒社發行

「神の子基督が人類にとつて永劫恩寵と眞理の泉であらん限り、人の子耶蘇が其上に生れ、葬られて其處の土になつた所謂聖地は、彼を信愛する者にとつて限りなき興味とインスピレーションの源であらねばならぬとは蘆花氏が本書の初めに序せる所である。其聖地を親しく踏査し觀察した結果が本書である。基督敎徒は勿論、苟も宗敎的敬虔の心ある者には最も歡迎せらるゝであらう。(定價金壹圓)

現代傑作叢書

新刊

第三編 島村抱月著

影と影

著者が輓近七八年間に於ける小說と脚本との全集で在る

内容

（脚本）◎平清盛 ◎運命の丘 ◎海濱の一幕

（小說）◎復讐 ◎競爭 ◎山戀ひ ◎柏峠 ◎斷片 ◎小品五篇

橋口五葉装幀　袖珍極美本　定價金五十錢　郵稅金六錢

第一編 正宗白鳥著（既刊）

心中未遂

現文壇の一大權威で在る著者が最近に於ける代表的二傑作

内容 心中未遂　脚本 白壁

第二編 岩野泡鳴著（近刊）

ぼんち

文壇の彗星泡鳴氏の四代表作

内容 ぼんち　非常時　巡査日記　脚本 閻魔の眼玉

● 歷史小說 楢の一葉（執筆中） 幸田露伴 近刊!!

（中付二の一）

發行所 東京神田佐久間町四丁目廿三番地 植竹書院（振替東京一二九五三 電話下谷三四一九）

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

近代人の渇望せる新讀物

近代脚本叢書

袖珍本美装 毎冊凡三百頁　定價毎冊 金四拾錢 送料四錢　毎冊寫眞版數葉入 原作者及舞臺面

一編　**戀愛三昧**　好評忽再版　シユニツラー作　森鷗外譯

二編　**運命の人**　好評忽再版　シヨー作　楠山正雄譯

三編　**ペレアスとメリサント**　新刊發賣　マーテルリング作　島村抱月譯

四編　**サロメ**　新刊發賣　ワイルド作　若月紫蘭譯

五編　**海の夫人**　近刊印刷中　イブゼン作　草野柴二譯

本書世評の一斑

『時事』近代脚本叢書は小説より劇に赴いた今の文壇に新しい劇本よとの叫びが高ひのでこの要求に應じて泰西名家の傑作に文壇知名の士が移植したのや又諸家の創作にして好評の嘖々たるものを鉛槧に附し以て一般同好に頒つ目的で生れたもので心地よい装幀と内容とは共に讀書子をして滿足せしむるに充分であつて實に愛すべき叢書である。第一編シユニツラー作『戀愛三昧』第二編シヨー作『運命ノ人』第三編メーテルリング作『ペレアストメリサンド』第四編ワイルド作『サロメ』第五編イブセン作『海の夫人』と發賣せり

『大坂朝日』近代泰西名家の手に成れる脚本を飜譯刊行するを目的として生れたる近代脚本叢書は第一編『戀愛三昧』より第五編『海の夫人』を刊行せり譯者は何れも現代一派の劇作家

東京神田南神保町田町　現代社發行　電話本局一四二五番　振替口座東京二三八三六番

(中付二の二)

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

正價 廿五錢 郵税二錢 五厘

六月號

東京本町 博文館

文藝倶樂部

〔小説〕 **縺紅** 後藤宙外

〔小説〕 **おさと** 國木田治子

〔脚本〕 **トスカ** 松居松葉

◆姓名判斷と問題の女

◆花柳界覺え帳 みはる

□北越別譜 小波

□本町誌 思案

□相撲好の藝妓 淸秋庵

□寄席まはり 閻太郎

□殺し文句 大愚生

□活動寫眞の女 谷人生

□杜宇數聲 買阿彌

□演藝鰓狩 曉紅

□有樂座の鴫 一白生

□都下の陳列窓 蕉雨

◆五月の新富座……

◆演藝當座帳 吳太郎

・横濱居留地のチャブ屋探檢 小壽江

・收入くらべ……吉原と千束 春霞

〔新講談〕 **三人權三** 一立齋文車

〔落語〕 **新作色懺悔** 朝寐坊むらく

〔募集落語〕 **出產保險** 雲國山人

（中付二の三）

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

■東雲堂新刊■

らいてう
平塚明子著

新らしき女の名今や化して卑俗なる世の流行語となれり
かゝる輕浮なる風潮に堪へずして著者が從來『青鞜』及其他に執筆したる婦人問題人生問題に就ての隨筆感想一卷を乞ひ得たるもの即ち本書也。本書出て、始めて『新らしき女』に對する眞の批判は加へらるべく、また婦人問題最初の導火線たるべき也。敢て自己の問題に思ひを潜むる篤實なる女性及教育家識者の一讀を望む。

圓窓より

右發賣禁止となれり

四六判ギルトトップ
新式裝幀箱入
定價九拾錢
小包料十二錢

石井柏亭著

歐洲美術遍路

畫架を負ふて外遊二年足跡歐洲各國に及びたる著者の紀行評論隨筆作畫を收む。美術の歐洲は一眸の下に集り來る！！！
（埃及、土耳古、佛蘭西、伊太利亞の部）

本書一卷は實に卓拔なる西歐美術觀にして、古美術の新鑑賞、最新書派の消息、著者の書論、又詩趣ある紀行小品。これらの記事に滿つ。

泰西新古美術品寫眞版……
著者自筆水彩、素描畫……
（計八十餘葉入）
四六版三百五十頁箱入
定價貳圓
小包料十二錢

(中付二〇四)

移轉仕候　東京市日本橋區檜物町九番地（振替東京五六一四）
……東雲堂出版目錄進呈……　電話本局一八七一）

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す



四人目

眞山青果

お捨の腹には四人目が出來て居た。七月だ、最う目も鼻もある生物だとハッキリ感じられる頃には、意地の惡るい亢奮もやんで、解けるやうに眠られた。その代り腹に耐性がなくて、夜中に煩さく起きた。て、そんな時偶ッとてもお肚の事を考へると、何時か風邪藥にあつた時のやうに兩方の指の腹がかすかに痺れて、甘酸ッぱい唾液が口の中に溜つた。今度こそ本當に死にさうて口惜しかつた。瘦せた腕を目の上に投げて、蚊帳の裾を蹈んで寢てる男の裸體な肩が、晝間見るやうなものではなかつた。尖つた耳朶でも引張り廻して、思ふまゝにいびつて見たいやうな氣もするが、目を覺した後も又氣遣はれる。お捨は、この頃不思議にハッキリ思出されて來た過去の生活なぞを

心に描きつゝ、昂り立つ氣を鎭めて居た。

お捨は卯の歳の三十二だ。

街道には未だポツ〳〵旅人の姿が見られる時分で。白金巾に墨繪の蘭などを描いた蝙蝠傘が、青く澄んだ夏空を、上方(かみ)の方から入つて來た。——それから二十何年か過ぎたとは思はれないほど、お捨はハッキリ思出した。

お捨は、雀が檐の下へ降りて來る早朝から往還へ出て、山越しの旅人を待つて居たものだ。

「道祖神(さいのかみ)のお代參、お神酒(みき)錢草鞋錢、お神酒錢。」と、何處までも跟いて行つた。ほかの兒どもは飽きて石でも投げるか、惡態でも浴せるところでも、お捨は思切り惡るく袂を離さなかつた。眸が細ッこく縮(ちぢ)んで、足元の土が遠く見えるやうな夏の日盛りを、終ひには自分も泣き吸りながら、村境になる長い木橋の方まで跟いて行つた。その頃河原は開墾されて、痩せた桑畠になつてゐた。

赭い石河原は痂皮(かさぶた)のやうに所々掘り返された。夏雲の綻目(さけめ)を落ちる强い日は、箱根山の皺襞(ひだ)を蒼く明

るく煙らせて、日光に笑ふ女の髮を思はせた。お捨は、立つてるうちに、今別れた旅人が急になつかしいやうにも思つて、力なく村の方へ歩み出した。砂埃に重くなつた藁草履の音が、一つ〳〵、乾いて引張られる瞼の皮へ響いて來るやうだつた。

お捨はその頃、額ばかり大きくて、手足のかぼそい兒だつた。無理にその時分の姿を思ひ出して見ると、あの夏の初、腐れ木の根などから掘り出される蟬の復蛸、あんなやうな兒だつたと思ふ。腹部ばかりが身體のやうに長くつて、餘計者のやうに托寄なく肩に垂れ下つた細い腕。不發育な、黄色い顏の色まで、あの土の蟲に似て居たやうだ。

然う云へば父親も小さな男で、村の夜番かに賴まれて居た。母親には、肩まで泥になつて餌掘りしてる姿だの、法事の手傳に行つて賑かにはしやいでる大きな笑顏だの、お城壞しの綱引に行く男のやうな姿だの、若い者どもと一所に醉拂つて、肌を脫いで唄つてる肩付など、その頃の事でも隨分思ひ出すけれども、父親には何も無い。怠けて居て、一生お辭儀ばかりしてた人のやうだ。外へ出ては「お捨よ、お前ッちは一體誰が親父の子さ。」などと揶揄はれたが、家ではそんな事も思はせられもしなかつた。兎に角、惡るい人てはなかつた。

てもその父親は、お捨が七つぐらゐの時に、コレラて死んだ。あの時のことだけは不思議にハッキリ覺えてる。患つたのはたゞ一晩なのに、西洋皿にても映つたやうに、顏が固く小さくなつて、拵へたものゝやうに見えた。眉と眉の間が少し光つて居た。母や皆がする通りに、樒の葉で唇を濡してやると、

水は頬を白く流れて、油臭い枕掛の上に小さな水滴をつくつた——少し埃が浮いて。

父が死ぬと間もなく、母と姉は小山の方へ行つた。姉は紡績の工場へ入つた。お捨は叔母の家へ取られた。

その當座、姉や母の事は思ひ出すにも遠いやうだつたが、小さいお夏のことは忘れられなかつた。人の見ない積藁の陰へ行つて、大人のする通りの手付も口眞似もして襁褓を外して見ると、分別臭さい顔した赤坊は、無花果の木が暴風に搖れるやうに、手も足も一緒に振り動かして泣く。踏るたびに赤い腹皮がポコンと固くなつて、あの圓ッこい腹切蜘蛛の腹のやうに可愛らしかつた。目がしらにポッチリとホンの一粒づゝ浮んだ涙を、お捨は然も母親らしい口付して、チユと吸つてやつた。

叔母は母親と違つて、手紙ぐらゐは書いた。村の娘どもの髮を結つてやつたり、仕事なども受取つた。その私得錢を何所へかくすのか、偶に歸つて來る叔父に好く撲たれた。叔父は顴骨の出張つた男で、お捨が見てさへ、叔母よりは若かつた。漆の買出しに行くと、十日も一月も歸らなかつた。叔母は撲つだけ撲たせてから、酒なぞ買つて來て、シゲ〳〵と叔父の機嫌を取るやうだつた。冗談でもあつたらうが、叔父の耳朶を前歯で嚙む眞似なぞしてるのも見た。

枸杞垣の闇が濃く漂つて來る晩、遠い山傍を通る夜汽車が、カラ〳〵と明るく響いた。然う云ふ明日は雨だつた。叔母は俯向いて仕事しながら、悲しい昔話をした。それがお捨に聞かせるのだか、自分に

聞かせるのだか判らないほどしめやかな調子で、時々思ひ出したやうに洋燈の灯を見詰めた。聞いてるうちに、目の玉が段々前額の裏へ粘付いて行くやうで、叔母の圓るい背中まで恐ろしくなつた。

叔母には初めから兒が無かつた。口癖のやうに先祖以來の野墓になつてるのを氣にして、小田原の仕立屋へ年季に行つてる兄の子の重吉に(お捨とは從兄)中舊の裁縫臺の一臺も買つてやり、兄が飲潰ぶした位牌所(實家のこと)を起てたがつて居た。「死ぬ家」の方を、生きてるこの家よりは大事にして居た。お捨の頭へも、それが人間第一の用意のやうに教へた。

叔父は、三人目の叔母の良人だつた。だから、お捨が時々近所のものを盗つて來る懲目のために、遠い山の村へ子守にやられる時にも、叔母は身寄に離れる寂しさに、眞實から泣いてくれた。

五月六月となると、お捨の臑はきまつて浮腫をもつた。ひどく懈るい時には、槖吾の葉なぞ揉んで脛へ貼り付けた。

おつかない夢なぞに目を覺して、足首を揉みながら水腫れたやうな足を見ると、自分でもその不恰好さが厭になつた。土瓶敷のやうに足の裏が扁平ッたく土不踏が無く、甲は高い、何う氣を付けても下駄が横ッちよに減つた。岩崎と一所に居る頃は始終足袋を洗つて、穿物に滲み付く油足を見られまいとした。苦しいと云つても、あの頃は小兒もなく、未だ世の中に將來があるやうな氣がして居た。それであんな事でも苦勞になつたのだ。

お捨は肩ばかり張つてズングリ低い自分の姿付や、日向に少し立つても目が吊り上つて來る頭痛や、この不恰好な足を考へる毎に、九つから十三までこき使はれたあの山の村の馱廣い土間が口惜しく思はれた。と云つて、誰が憎いても、何時が苦しいでもない。たゞ皆がする通りに働いて、喰つて、寝てる傍を、年月が默つて通り過ぎたやうなものだ。

若しこの木が本當に、物を考へないから默つて居るのならば――。お捨は磯傍に捩曲げられた樫の木なぞを見るたび、斯んなに考へながら、節瘤だつた自分の姿なぞ顧みた。このデクリ〳〵顎に響けるやうな歩るき振りは、重い炭俵を背負ひ出す時に、故と腰の關節を一つ落すやうにした。膝頭が開くのは、朝草に西洋鎌を走らせやうとした癖だ。口もポカンと明いた。勢姿なぞに氣が付く年頃には、芽時の風向に恰好づけられた樹のやうなもので、何うする事も出來ない自分だつた。

ても、あれから續いての迫苦しい苦勞を思へば、あのまゝ山の村に苦勞の無い繭をかけた方が好かつたかも知れない。みな好い人達だつた。何が面白いともない代りには嘘を吐く苦勞もなければ、他を嫉み羨むこともなくユックリ生きて居られた。その證據は、四年の間に何一つ他のものを盜つたこともなかつた。あの時母親に連れられて、宿場の方へ奉公に出たのは、好かつたやうにも惡るかつたやうにも思ふ。

その四年の間には、なつかしい叔母も死んで居るし、小さなお夏もお捨へ憎くい口を利くやうになつてた。あれほど苦勞して貯めた叔母の金は、何處へ行つたのか見た人もない。叔父は新らしい女と一緒

になつて居た。

その頃、從兄の重吉は師匠の家を出て、國府津の町に足袋屋を出して居た。母も沼津の方をしまつて、お夏を連れて、邪魔がられながら甥の世帶を助けて居た。おのぶ姉は紡績から歸つて重吉と同棲になる筈だつたが、然うしては赤ン坊(母はこの間に二人產んだ)の里扶持が送れなくなるので、グヅ〳〵に話が乾なかつた。

「生れるだもの爲方がないよ。」と、母は大きな前齒を出して笑つて居たけれども、生れゝば喰はせなければならぬ、これも爲方のない事だ。それは姉もあきらめて居た。

お捨はこの母につれられて、最初は村はづれの貸別莊へ來てる西洋畫家の家へ行つた。そこの主人が東京へ歸る時、お捨は主に別れるのが悲しくて、無理に暇を貰つた。それから警察の署長の家へ雇はれ、自轉車屋へ行き、宿の方へ來て一年半ばかりの間に五軒も步いた。晝間だけ通つて、機屋や笊屋の赤ン坊を負つた事もある。

署長の奥樣は信心に凝つて、綺麗好き過ぎる人だつたが、氣が立つと良人へ刃物など振り上げた。母が來て些いと立話しても、直ぐ氣を廻して、臺所のものに氣を付けた。この時は母も憤つて來て、小兒の痲疹を見込んで小氣味好く暇を取つた。

三人目を產んだ後だ。倒睫の生えた目を鏡に見て、段々と母の若かい頃が顏に鏽付いて來るやうに思

つた。顔ばかりではない。歩るき癖や、些いとした手付の癖まで、好く思ふと、姉か叔母か他の人たちか、誰からか皆來てるやうにも思はれる。裾が少し開らくやうに下前を下げて着るのや、爪を四角に切るのなぞは、然うだ、苦勞してあの畫家の奥樣を眞似たのだ。

あの小さな奥樣、あの人だけは今でも思ひ出す。東京に難儀してる時も、染々とこの苦勞を聞いて貰つたらばと、思ひ立つた事が幾度か知れない。でも、その時は可笑しいほどその時の都合があつて、六七年暮した、後から考へると、誰か見えない者に邪魔されて居たやうにしか思はれない。

あの岩崎に着物をスッカリなくされた時でも然うだ。死ぬか敵を取つて貰ふつもりで、小日向臺を小半日尋ね廻つて、やつとの事に引越先の番地まで聞きあてながら、偶と水道町の活動寫眞へ入つて、知らない男と夜を深かしてしまつた。

忘れても惜しくない自轉車屋の細君(かみさん)には、意地惡るくも、そのあと二度も三度も見窄らしい姿(なり)を見せた。あの支那人の兒を負つて、家へも歸れず、あてもなく四ッ谷をうろつき廻つた時、富久町の針醫者の木戸を出たのはあの人だ。暫く立つて此方を見て居た。あの時は全く、誰に面あてとは云はれないが、日のあたる砂利道へ小兒を叩き付けてやりたかつた。

あれが二人目の——運惡るく產れた奴だ。達者に育てば、今年は慥か七つになる……八つだ。

畫家の小さな奥樣は夕方なぞ、濱の方から目を赤くして上つて來ることがあつた。商人に少し云はれても、ロクに口の利けない人だつた。それが繁ちやんの生れる頃から、急に變つたやうになつた。言葉

もゾンザイになり、あるものはドシ〳〵他へくれて、惜しさうにも無つた。實家へ手紙を書きかけて、「私ほんとに手紙の文句が旨くなつた。」なぞと笑つて居た。

主人が仕事に焦れて、物など投げ附けるやうな事があつても、平氣で髮など直してるやうになつた。

繁ちやんが丈夫過ぎる所以か、奥様は可笑しいほど凡帳面に喰べた。學校も幾つか卒業して、實家は立派に暮して居た。そこから始終金を搬んで來ながら、自分は何時も、小兒でも抱かなければ湯へも行けないやうな姿をして居た。主人が家中に岐阜提灯を點けたり、勿體ないやうな花火を揚げたりして、無駄に小錢を費つても、惡るい顏をしないばかりか、主人の機嫌の惡るい時は、平氣で實家の惡口を云つて酒をはづませるやうにした。たゞ苦勞らしいのは、晩酌の下物だけであつた。繁ちやんを錢湯へ入れてゝも、そればかり算へて居た。

「黑鯛の潮汁に、水膾、紫蘇燒、虎魚…あれ最一つだ、五つだつたね。」終ひにはボウとしてしまつて、道中に立停つたりした。でも、主人はならべるだけて手も付けなかつた。無理に我儘を云ふのが面白さうにも、又、その我儘を通させてやるのが面白さうにも見える事があつた。

十五の時だつた。體は小さくても、何處かくまびた顏付が年を一つ二つ老けさせて、本給金でも通つた。母はその金を前借して、今度の父親と橫濱の方へ行つた。おのぶ姉も同時に茶商館へ擇方に出る筈だつたが、二三日ふてくされて母と大喧嘩した揚句に、東京の方へ逼げてしまつた。

今度の家は、程ヶ谷の町を目の下に見て、山を負ふやうに建てられた。前の方も停車場を境に、焼けたやうな草山に遮られて居た。日は遲く出て、早く沈んだ。石油會社の煉瓦壁が何時も黄疸患者の額のやうに、沈鬱さうに曝れて見えた。一汽車着くたびに、薄黒い煤煙がこの谷底の町をうづめ漂うて、それが忘れた頃に山の方まで匂つて來た。

裏の岩崖からは終日タチリ／＼と水が滴つて居た。

女隱居は、倉庫掃除から今の身代まで爲上げたほどの人だ。辨天通の店は養子に讓つて、耳の遠い下男と一緒に、此の方に來て居た。毎晩寢る時には見當もなく手を揉み合せて、「はい、先づ今日もおかげ樣で。」と、お辭儀してから寢た。自分も洗足になつて青物を作る傍、下男の名義で近所へ質貸しなぞした。デブ／＼肥つた背中を見ると二錢銅貨ぐらゐな灸點の跡が氣味惡るくならんで居た。土曜日ごとに本店の娘どもが來ると、その時ばかり見違ふやうに氣がゆるくなつて、云ふ通りに我儘をさして居た。

向山にシト／＼と根淺く降り續いた雨の後に、明るい日がこの谷間へも落ちて來た。物がみな光り戰ぐやうな中に、豚肉屋の赤い旗だの、乘合馬車の淺葱幕だのが、目に滲みるほど鮮かに動いた。思ひも掛けぬ山の端から、青い海なぞが見付けられた。

試驗休に來てる娘どもは、些つとも凝つとしてられないと云ふ風で、わざと危ない石坂を駈降りたり、大股に堀を飛び越えたりした。毎日のやうに友達へ長がい手紙を書いて、姉妹の間でも好く、「それは秘密よ。」と相互の笑を隱し合つた。お拾よりは一ツ二ツづゝ年下であつた。

横濱から尋ねて來た友達を、或る日姉娘のところへ連れて行くと、暖かい掛葉のかげから飛んで來て、二人はヒタと抱き合つた。唇が鳴つた。お捨は愚鈍さうな口尻を下げて、額の隅から見て居ると、二人は一度離れて、又激しく抱き合つた。澤のつきかけた白い娘の手は、友達の髮の毛を無慘と掴み頽して居た。

「馬鹿だよ、お前。」

娘は凄いやうな眼付して、睨み付けて居た。お捨は彈機が外れたやうに動き出して、スゴ〳〵と家の方へ降りかけた。

「私、本當に貴方の事ばかり思つて居たのよ。」

「私だつて、私だつてもよ。」

町の屋根は最う薄寒く萎れてるのに、山の上には未だ穩やかな春の日が長くたゆたふて居た。

東吉は緣側へ出て、踵の皮を削いて居た。お捨も試しに遣つて見ると、痛くはなかつた。思ひ切つて厚く削ぐと、スンナリした皮膚は軟かに渦巻を輪描いて、海桃色に血の氣を透き通した。疊を歩いて見ると、ムヅ痒いやうな。然し活きた感覺を覺えた。

東吉はお捨のそんな惡戯を長がい間、默つて眺めて居た。彼は身寄の無い不具者だつた。蒲團に粗匆する年頃からこの女主に拾はれて、三十年近くを何事もなく勤めて來た。

お捨は、何時ともなく、東吉の執拗な目から或る威嚇を讀むやうになつた。「東吉さん、何すんのさ、

東吉さん。東吉さァん。」と、泣き出しさうな聲して、ヂリ〳〵と土間の隅へ追ひ詰められた時には、とても抵抗の出來ない力が、自分に迫つて居ると悟つた。

雨に乾いた土に芍藥の新芽が焔と燃えて、廐肥の蒸れる臭氣（にほひ）が息窘まるばかりに鼻口を壓した。お捨は、不熟な果實のやうに、澁酸ッぱい身體を固くして、目の底から來るやうな、東吉の鋭い視線に顫へてるばかりで、憎むことさへ出來なかつた。

その東吉でさへ何かに脅かされてるやうに始終顫へて居た。

約定の一年が過ぎる頃、母はまた産んだ。今度の父の三人目である。お捨はその赤ン坊の世話しながら、家の手助もしなければならなかつた。母はこの産からメッキリ衰へて、長い間腰を曳いて居た。今度の父の偏屈らしい無口に小さくなつて、陰では死んだ父の噂などするほど、氣が弱くなつてた。父は最う六十近かい年寄で、先妻の男の兒が二人とも元町の金物屋に奉公して居た。途中で會ふと小使をせびる、爲にならないと云つて、毎朝青物の買出しに行くにも、故々遠廻りして出掛けた。自分だけの金は、何處かへ貯めて居た。

一度、公園の前で東吉に遇つた。遁げやうにも兩側は異人商館（やしき）の石倉なので、お捨は避け難い場合を從順（すなほ）に悟つた。唇（くち）の中まで日にあたつて、ダラリと立つてた。東吉は默つて通り過ぎたが、戻つて來て白銅を二枚、無理に握らせて行つた。お捨は眞田の工場へ通ふやうになつても、始終それはかり恐れて

居たが、何時となくその心配をも忘れて、朋輩どもの浮付いた話など聞くやうになつた。

お捨はこの春、急に肉づいたと云はれた。髮の毛の先が急に黑くなつたのにも、胸幅が張つたのにも、自分でも成長が知れるやうだつた。一冬光つて居た藁屑が、この頃の雨に急に腐れて土の緑を萠くやうに、眠つて居た身體中が遽かに目を覺ましたやうだ。無上に自分の肉體を虐めて見たいやうな氣分の日が續いた。

生れた兒が死ぬと、母は枯れた乳房をあてに、他の子を預つた。その良人への氣苦勞を見ても、お捨は何がなし氣が苛立つた。今までこの母を恐れて居たのが馬鹿〳〵しいやうな氣がして、小さく見える母の顏を罵つた。引覆返された鐵漿壺を抱いてマゴ〳〵して居られると、氣の毒にもなるが、自然に湧いて來るやうな憎惡は何うする事も出來なかつた。お捨はたゞこの自然に湧くものに押されて、賑かな人通へ引寄せられたり、人と喧嘩したり、犬猫を虐めて見たりした。山の村に居た頃、他の後に口の中で眞似して居た流行唄などを聲高く唄ふと、その時の鬱結がスウッと溶けて行つた。ものが皆新しい意味に見えて來た。

「ぢや俺を何故產んだのさ。俺ア些つとも生れたくなかつた。何故お前こんなに產んだんだよ。」

おのぶ姉が好く母を責めた言葉、呆れて聞いて居た言葉、それが思ひ出された。母の苦勞を見てるだけに、斯うても責める外に氣の晴らしやうがなかつた。母は姉の時と同じやうに當惑して、口をモガモガして居る。

お捨は今になつて初めて、姉の心が汲取られるやうな氣がした。

辛つと探した徒士町の家に姉は居なかつた。彩色の石版繪など看板にした狹苦しい裏長屋だ。薄暗らい三疊に寐てた男がムックリ起きて、目を眩しさうに大きな嚔した。耳の小さな男だ。柱に爪を掘りつゝボンヤリしてるお捨を不審さうにして居たが、やがて西洋紙の截ち屑を拾つて、姉の奉公先を書いてくれた。牛込區市ヶ谷仲町何番地、會社員市來樣方、田中のぶ、と。そして可笑しいほど種々の事を聞いた上に、半分ほどに減つた水飴の壜など持たせるのだつた。

姉は丸髷に結つて、紺足袋のキリ〳〵した姿だつた。一度は邪慳に叱り付けたけれど、病身らしい奥樣に願つて、當分こゝに居られるやうにしてくれた。て、晩に湯に行く途中、下谷のことを話すると、獨りでクス〳〵笑つて居た。着物を脱ぐ時見てると、不似合に派出なものなどを肌につけて居た。

主人は會社員て、下谷の待合とかに奉公してゝ知つてるやうになつたと、姉は話してから、「なァに駄目なんだよ。」と、獨り合點して居た。でも、奥樣は内氣らしい人だつた。腰に蒲鉶などあてゝ、暖かい所に一日小兒だちを遊ばせて居た。主人が醉つて歸つても、起きて來なかつた。主人の世話は、大抵姉が取り仕切つて居た。それでも何うかすると奥樣は時々癇癪を起して、激しく小兒を折檻した。

「何うて母アさんは田舍者だよ。田舍者だから何うしたと云ふんだ。」

やつと學校へ上つたばかりの娘を相手に、眞劍に爭つてた。押入に突倒して錠など下した。然う云ふ

時には主人の方が退いて、傍へ寄らぬやうにして、お捨などにあやまらせるのであつた。この娘の下にも悪戯盛りのコツ〳〵した男の兒が二人と、外に乳飲兒が居た。それを見ても姉は、「厭だ〳〵。」と顔をしがめて居た。

「駄目だよ。お前また騙されたくなつたんだよ。」

主人は冷(ひや)つこいやうな絹裏の襦袢に肌を入れながら、姉の顔を馬鹿にするやうに返り見た。

「嘘、誰があんな奴に。着物が惜しいんですよ。」

「皆云ふ口だ。」

主人は嘲笑つて、二階を下りて行つた。でも、姉は炬燵櫓へ腰掛けて、見送りにも立たずに、凝つと壁の一所など見詰めてる。ホンノリ逆せた蟀谷(こめかみ)に貼つた御所櫻が、不思議になまめかしくお捨の氣を引くのだつた。下谷のあの男だらうか、それとも何時か尋ねて來た、あの學生のやうな男だらうか….。

新芽が光つて來た。ドンヨリと煙つた蒼空を、お捨は末の兒を負つて、通の方へ出るのだつた。琴の音が眠むさうな枳殻垣の間や寺の裏を抜けて、士官學校裏の馬場の方へ來るまでには、途中誘ひ合つて、同じ年頃の子守が四五人手を引き合つてた。一人飄輕なのが、「襁褓(おしめ)の匂も嗅ぎ飽きたよ。厭になつちやつて。」と誰かの口眞似すると、「云つてるよ、この間まで蒲團を穢してた癖に。」と一人が揶揄つたりして、面白さうにドツと笑ひ頽れるのだつた。

雨に洗はれた土に、白い花片がヒラ〳〵と飛んで來た。樹立の影は濃(こま)やかに香つた。馬場に輪乘りす

る蹄はサク／＼と沙を飛ばして、逞ましい馬の背は日に煌めいた。赤い肋骨を箱のやうに張つて、膝の上まである誇慢な長靴を穿いた乘馬下士につゞいて、若かい生徒達は目を据ゑて、堅苦しい顏になつた。

惡戲好きな下士どもは、故と子守どもの方へ馬を擦り寄せたり、鞭を拾はせたりして、面白さうに笑つた。子守の方でも銘々に贔屓の人を決めて、その下士が出た時には、相互に肱で突き合つたりした。

「おい誰か。親切のある奴は柳の枝を折つて來てくれ。」

お捨が振り向くと、一人の下士は上着をはだけて、草原に風を入れて居た。屹と引締つた顏の、額の白い所だけに汗がフツ／＼と湧いて居た。眞白に磨かれた齒を見ながら、少し固くなつて傍へ寄ると、革の匂ひと馬の汗とが混つて、刺戟の強い香氣が嗅がれた。

お捨はこの匂から偶と東吉のことを思ひ出して、愚鈍らしい唇をニヤリと弛めた。默つて居るもの丶、友達どもに對しても、自分だけは隱れた矜を抱いてるやうな氣がしたのて。それと、何時か姉の乳首にある秘密を讀んだ時にも、お捨は何んとも云はれぬ喜悦を心に覺えた。目も鼻も、世間のこの秘密をあばくためのやうに鋭くされた。

姉は主人の顏を惡るくして、ズル／＼に下谷の男の方へ行つた。決つた男がなければ居られないやうな身體になつてたのてある。そして、その後幾度も忍んで來ては、お捨の着物などを借り出した。

「いゝえ、怠けさせてなんか置くものか。ても私がこんな身體だらう。考へるとあの人だつて苦しいん

だよ。」

姉は、小憎らしいほど男をかばつて、先の惡口なぞはケロリと忘れて居た。

姉の產は何時も重かつた。眠り‥‥何んとか云つて、肝心の時になつて眠るのだつた。眠らせまいとして煩さく勵したり、鼻に薄荷なぞ塗ると、終ひには狂者のやうに暴れ狂つて、障子に腕を突拔いたりした。お捨は初產には平氣だつたが、二度目の時には姉の死姿を思ひ出して、急に恐しくなつた。眠るまい〳〵と氣を張つてゐるうちに、不思議に快い氣持になつて、何時か引入られるやうに眠つてしまつた。

姉は三人目を產みかけて、慘らしい死やうをした。それでも生きる生命あつたのか、兒の方は醫者の無法な手術で助けられた。

お捨は足の懶るい晚なぞ、今でも始終、凄い姉の夢に魘された。腰から半分血に塗れて、振り亂して、袷にある產女をソックリの姿だ。姉の男とあゝ云ふ事になつた恨ばかりではなく、兒を產むその事に執念を殘して居るやうだ。生きてる中に恨んだり憎んだりした事は、それほどにお捨の心に殘らなかつた。

三人目を產む時は、姉と同じやうに死ぬものと覺悟した。

牛乳配達に騙されて市ケ谷を出たが、結局姉のところへ戾つて來た。姉は產月だつた。そして姉の所

作を見て居るうちに、不思議なほど強く心を擾まれた。姉のすることは何によらず意味あるやうに見えた。自墮落に膝を割つて坐つてる恰好でも、ホンノリ酒に赤くなつて甘つたれる聲でも、始終無心に來る母をテキパキ遣り込める口上でも、何處かシツカリと根を下した樹のやうに見えた。頰を風に腫らして、寒むさうに夜店から歸つて來る姿までが、本當に生きてる人だ。それに引廻はされてる自分が、口惜しいほど齒痒ゆい。最う小兒ではない――姉と四つしか年が違はないとも、獨語した。

甚吉(姉の男)は爲方のない怠け者で、夜店にもロクに出なかつた。仕込のある間は姉ばかりに働かせて、自分は臺所をしたり、女どもの髮など器用に結つた。些いと齒をお見せなんて、バットの吹殼などを投げ込んで可笑しがつてゐる。

「生れが生れだから、爲やうがないんだよ。困り者さね。」

姉は男をコッパイに云ひながらも、芝居茶屋の息子に生れたと云ふ事が、餘程自慢らしかつた。

お捨は、何か狙つてゞも居るやうな氣持て、姉の夫婦を見て居た。姉の男に弱いのが齒痒ゆくて、始終氣を苛立てた。俺だつてとも、俺ならばとも、好く思はせられた。一口に云ふと、心の底に秘んでるものがあつて、自分の世間へ〳〵と迫き立てるのに、强情にも姉はその前に立塞つてるやうだ。

「さあ、出せるならば出して見ろ。畜生。」姉は自分て齒を摺つて、口惜しさうに二人を睨み付けた。

「畜生?、畜生はお互様だ。」

お捨も負けて居られない。故とフテ〳〵しく云つて、でも竊つと見てると、負けまいと焦れる弱味に、

姉は顔まで小さい、唯の女だつた。これだけでも胸が開らけ、自分の根が据わるやうな氣がしてオドオドしてゐる甚吉の掌を握り寄せた。

初産は姉の三疊で産んだ。田舍から母が出て來て世話してくれたが、自分は七人も産んでる癖に、蒼くなつて産部屋へも近寄れなかつた。目の下をピリピリさして、狹い臺所にマゴマゴして居た。年寄のやうな顔付の嬰兒で、五日ばかり活きて居た。でも姉が拜むやうにして賴むので、半月ばかりでそこを出た。別に眩暈するやうな事もなかつた。

それからの五年。自分の心にさへ開付けられたくないやうな月日だつた。下宿屋から飯屋へ、飯屋から下宿屋へと渡り歩るくうちは未だ好かつたが、姉に死なれてからは妙に寂しくなつて、甚吉の云ふがまゝに、早稻田の支那料理屋へ行つた。

その頃、從兄の重吉は女房に別れて、小兒の始末に弱つて居たが何がなし田舍へは歸りたくなかつた。何んな隅つこからでも、賑やかなこの世間を窺いて居たかつた。で、田舍へ葉書も出せないやうな所を、何かに引摺られるやうにグルグル歩るいてるうちに、腹には何時かあの支那人の兒があつた。氣味惡るいほど智慧の早い兒だつた。

あれを棄てゝ遁げる時に、藥の飯櫃入に入れて、風車を一つ立てゝ來た。お捨は今でも時々、泣き疲れに疲れて、ホッカリと風車を見てる兒があるやうに思はれた。

それから深川の河口の方に居た。淺草邊にも居た。それを順序に思ひ出して見ると、焦り苦しんであの闇らい道々と通つて來たやうだが、その時は不思議に然う行くより外に爲方がなかつたのだ。然う云ふ風に路が出來て居たのだ。

甚吉が居なくなつて、姉の兒を取つた一年は、不思議に死んだ叔母など思ひ出して居た。他の世話になりながらも、内職の達磨なぞ張つて、少しの用意は出來た。

それなのに、あの岩崎に騙されて、乞食のやうな裸體になつた。岩崎とは壁隣りに住んでたから、その惡性も好く知つてた。田舍出の女を短刀で脅して、木更津へ賣る芝居のやうな一幕も見て居るのに――言つて見ると、冗談のやうな事實だ――その惡徒に虐められて見たいやうな氣がして、或る晩、その後を追つて見たのだ。

「へゝ冗談を、姐さん。」なんて岩崎は金歯を光らして、テンデ相手にもしないやうに笑つてる。それも憎かつた。騙せ〳〵と近付いて見ると、岩崎も矢ッ張り世間並の男なのに失望させられた。此方が裸體になつた時は、岩崎も同じやうな身になつて居た。でも、その時は口惜しかつた。

三人目が腹に出來た頃、お捨は惡性の熱病にかゝつた。空嘔吐のはげしい時には、そんな節でないと知りつゝも、棗の實の乾いた酸味が無上に戀しかつた。生れた家の井戸傍にある木までなつかしく夢に見た。

叔母、母、死んだ父と考へ出して、本當の父が無闇に思はれた。廣い世間に、この苦勞の身を置く所

は、血筋のそこより外にないやうに思へた。薄寒い十月の夕暮、施療病院の門を出た時、電信柱の頂に薄く殘つた夕日を見て、涙が止度なく頰をつたつて流れた。

ても、活きることは直ちに喰ふことだつた。喰ふとは身體を虐めることに外ならなかつた。

甚吉はそれでも、着物なぞ用意してくれた。お捨は小兒のやうな新らしい心になつて、國府津まで汽車に乘つた。十二月の暖かい日だつた。東海道筋の松原を越えて、靑い相模灘が見えたり隱れたりした。窓から漂うて來る匂で、お捨は、蜜柑の實の熟してることを知つた。山の方へダラ〳〵に上つてる赤土の坂を見ると、それが何れも、母に連れられて山の村から宿へ下りたあの坂のやうに思はれた。

「おゝ、捨さんか、何うしたよ、まア。」

重吉は埃ッぽいミシン臺から下りて、番火鉢に膝を立て掛けて、中年らしく掌なぞを揉み合はせた。肩が少し圓るくなつた。

「そこだてな。先ぢや今更何う思ふものかな、考へものだて。」

酒にくどくなつて重吉は危ぶんで居たが、訪ねて見ると、本當の父は乾場に網を繕つて居た。何を云つても、笑つてばかり居た

お捨は土を見ながら、俯向いて濱を上つて來た。

鳥越の安宿の二階で三人目を產んだ。手足を固くちゞめた、强さうな男の兒だつた。無愛想な宿の亭

主まで上つて來て懷手のまゝ、「なるほど、これが產れるんだからな。」と、感服して眺めた。宿り合せた人達はスッカリ浮かされて、酒など買つて來て、賑かに夜中騷いだ、唯雄と云ふ、立派な名がついた。

產んだ身の輕るさ、眠つてゝも身體がスウと浮くやうで活々しく胸が張つた。產まない人には話しても判らぬやうな新らしい喜悅が全身に脈打つのだつた。お捨は、產て死んでも……など云ふ田舍の諺を思ひ出して、それが厭らしい意味ばかりを語つてるのではないと考へたりした。あの頂窩の皮を固くして、生乳のやうに溫かい少し靑臭いやうな睡眠に抵抗した時の苦痛なぞは、何處へ行つたか、探しても思ひ出せなかつた。その自分が淺間しいやうでもあつた。

「あれ、この奴は笑ふよ。產土神樣にあやされてるんだよ。」

警察から歸つて來た手引の婆さんが面白がつて騷ぐので、「どれ、お婆さん。」と、お捨は漂ふやうな力の無い目を差寄せた。

「本當ね――お婆さん。」

血の氣の無いお捨の唇にも、曖昧なやうな微笑が掠れた。蒼白い蒼桐の葉が窓の障子に映つて、穢ない部屋を鮮かにした。嬰兒は澄んだ目をホッカリと向けて居た。

母が來て、お捨が村へ歸る頃には、唯雄は這ふばかりになつて居た。月々の苦しい仕送も、この兒の乳になると思へば、辛抱が出來た。時に刑事部屋へ引上げられても、「ぢや、誰が唯雄を喰はしてくれます。」なぞと、平氣で係りの人を遣り込めるやうになつた。また、それが本當なのだもの……と、お捨

は自分に確めて見た。

母の家へ歸つても、遊んで居られる身體ではなかつた。母は、自分の兒の外に、姉の兒まで二人を膝にからめて、氣難しい良人に疲れ切つて居た。でも、お夏は最う横濱の會社員へ奉公して、小兒どもの小遣錢ぐらゐは送つて居た。丁度、お拾が程ヶ谷の質屋へ行つたあの年頃だが、それに較べては氣がませてる。

「お母さんは感心だよ。飽きないんだもの――感心しるわ。」

お拾は苦勞にちゞかまつて小さくなつた母を見ると、何だか鬱陶しいやうな氣がした。「だつて、投げても置けまいづら。皆約束なんだ。」

母は暢氣な事を云つて、海苔拾ひしたり、近所の洗濯したり、ガチ〳〵働いて居るのだつた。小さい兒〳〵と相手に喧嘩して、喰ふ事より外に用がない。

夏の日が工場の四角な敷石へ落ちた。鐵と石と煉瓦とで組立てられた巖丈な窓から見てると、頭腦の底が火藥臭くなつて、その世界が遠いやうに思はれた。男も女も嚴粛に口を結んで、影のやうに行き違つた。然う云ふ時、お拾は、敷石の間に背伸する偶とした青草の日影に搖らぐのなぞに目を吸はれて居た。凝つと眺めてるうちに、溜息が出た。他の身體のやうな氣がしながら、唯雄の顏など描いて居るのだつた。

「皆、順序通りになるんだよ。丁度觀工場を歩るいてるやうなものだよ。」

何時誰に聞いたとも覺えない言葉が思ひ出されたりした。人のあとに喰付いて、唯フラ〳〵と歩いて來るうちに、何時の間にか、入口と背中合せの出口へ來て居たやうなものだ……とも思つた。舊るい人達——伯母だの、小さな奥樣だの、山の村の人達だのが、心の中まで入つて來るやうだつた。

お拾は、今度の良人へ來るまでに、隨分長い間考へた。然し、何う考へても來るより外の工夫はなかつた。

良人は植木屋の地面など持つて、中産の百性だつた。年もお拾より十四五多い。お拾は工場の行歸りに、大人を揶揄つて見るやうな氣て冗談など云つてるうちに、それが不思議な縁になつた。若し本當に身を固める氣なれば、外に幾らでも相手はあつた。そんな譯だから、唯雄の事など今日言出すと云ふ日はなかつた。

先づ無事と云つて好い三四年は、この間に過ぎた。年に二三度は良人にかくれて唯雄にも會つた。甥や弟妹の前では、昔叔母に教へられた口振などをソックリ眞似て、嚴しい人に扱はれるやうになつた。あの意地張りのお夏てさへ、不思議なほど云ふ事を聞いた。

「お前も湯治にても行つて來るか。伊豆のお湯は溫まるッて云ふぜ。」

不機嫌な良人は、或る晩、酒の後でこんな事を云つて、村の理髪屋へ將棋さしに出て行つた。あの吝嗇漢が好くぞ、と思つてその時は聞いて居たが、日增に募るやうな良人の寂しさを見ると、何んとなく氣に掛つて來た。畠へ出ても、良人はボンヤリ土を見詰めて動かないやうな時があつた。そんな時にはメツキリ老けて見えた。

「私に見がないんだか、お前にないんだか、そんな事が判かるもんか、お前だつて、隨分道樂した身體だ。」

お拾は頭から押覆せて云ふもの丶、この間から自分の過去を嗅ぎ出されはすまいかと云ふ不安が絕えず心を襲つて居た。すると良人は皮のたるんだ頸筋を、氣重さうに振つて、

「うゝん、俺には‥‥。」と、何か信仰あるらしい口振りだつた。

「判かるもんかな。お前、醫者樣にでも見てもらつたけ。」

何處までも冗談にしやうとすると、終ひには牛のやうな良人も向ッ腹を立て丶、お拾の髢なぞを引摺り廻はした。お拾は、この根の深かい本來の要求に、良人が段々恐ろしく見えて來た。

お拾は、良人にかくれて村の法院のところへ通つた。日に三挺の蠟燭と洗米を一袋づ丶持つて行つて、三七日目に赤玉の丸藥を二粒頂いて來た。無理に良人を醉はせた頃合を見て、竊つとそれを盃に投入れて見たが、その驗は見えなかつた。矢攻めの法とか云つて、生きた蟲なぞも嚥んだ。

法院も終ひにはあぐねてしまつて、この上はたゞ一つの法しかない、それもと、重々しい口を切るの

であつた。

「その法ッて？」お捨は愚鈍らしく見上げた。

「それがさ、間違ふとお前の壽命ごとだから、滅多に修法は出來ないて。本山でも大修業になつてるてな。」

お捨は聞いたゞけでも腮の下を蒼くして居た。

良人はまた、陰鬱を通り越して狂暴に近くなつた。酒なぞひどく飮んで歸ると、激しい發作のあとに、急にお捨を寢床から引き摺り出して、雨の降る檐下に立たせたりした。お捨は、誰にあやまるのか判からないやうな氣はしながらも、一晩中良人のゆるしを願つて居た。

そこへ、不思議にも四人目が出來た。直ぐ話して悅ばせやうとも思つたが、お捨は確實に確めるまでは、凝つと辛抱して良人の癇癪を怺へて居たが、最う疑ふところはなくなつた。

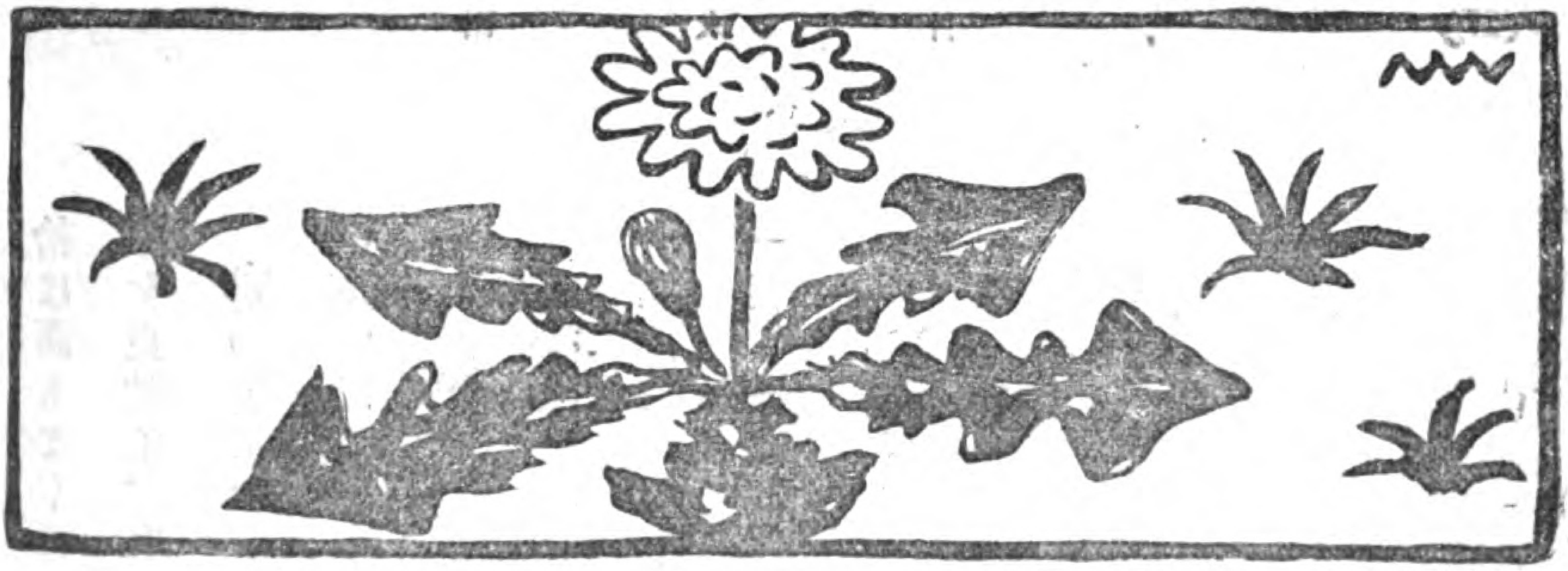
最う七月。小兒の生命は着物の上からも見られた。それと共に姉の無慘な死姿が目に見えて來た。お捨は譯もなく神經を立てゝ良人へ喰つてかゝつたけれど、良人ゎ辛抱强く怺へて居た。トボ〳〵した背中を見せて、臺所の事なぞ働いてるのであつた。

腓の裏がむくんて來た、額の隅が光つて來た。夢が恐しくなつて良人を搖り起すと、良人は農夫らしい重い口て、小兒ても慄すやうな事を云つてなぐさめるのであつた。

「お前、俺の死ぬのを見て、嬉しいんだな。然うだ、然うだよ。」

お捨は口惜しさうに歔欷り上げて、枕へ喰ひ付いた。

過ぎ去つた事どもが、また梭が走るやうに心を往來した。斯うして恐しい夜が續く間に、腹の兒は日一日と確實な生命を握るのだ。(完)



政吉の被り物

岩野泡鳴

『君等は一體』と、政吉はいやにひねくれたまなこを据ゑて、血をおさへ切つた顔で、皆をにらんだ、『おれを歡迎會にかこつけて呼んで置いて、皆てなぶり物にする氣か？』

『そないなことあらへんが、な』と、不思議さうにだが、この家の主人小池も怒りに受けて答へた。

『けれども、そんならなぜ皆ておれをいぢめるやうなことするんだ？』

『何がいぢめるんや？』

『ても、おれの心持ちにまて干渉して、無理に、わざ／＼おれの被り物を取れなんて、情けないこと云はんかてええやないか？』

「室内で帽子を取るのんは當前や。」

「當前やない！」

この返事には、小池もいよ〳〵呆れてしまつた。

「君は妙な男になつた、なア。」杉本と云ふのがまた常ならぬ赤みを顔に帶びて來て、「元はそないでもなかつたやないか——二三年會はんうちに、どないしたんや、來る早々喧嘩をふッかけるなんぞ？」

「誰れが喧嘩をふッかけた？誰れが妙な男になつた？——君等こそ、てんごうに、入らん干渉をするんやないか？」

「えらさうに云ひなはんな。」杉本もます〳〵負けない勢ひを出して、「東京へ行て法律を勉强してたかて、そない友人をふみ付けにして貰はんでもえゝ！」

「誰れがふみ付けにした？誰れが友人をふみ付けにした？」

「玉井はん。」かう優しくだが、別に遠慮のない聲で呼びかけたのは、先刻から、他の男連と一緒にこの云ひ合ひを見つめてゐた初野と云ふ女である。「そないおそろしい目せんかて、ようおまんが、な。」

「おそろしい目などしたうもない、さ。」少し勢ひが挫けて、ちらとかの女の方を見たが、二三年前までのことを思ひ出して、その方に目をとどめるのが氣の毒のやうにもなり、また懷かしいやうにも思はれた。そして直ぐまた杉本に向ひ、訴へるやうな聲で、「君等が久し振りの歡迎會をして呉れる云ふのんで、僕は君等の友情にあまへ、喜んで臨席したんやないか？」

ないか？』

「こりや今云ふ通り帽子やないぞ。」

「あたまに被つてるなら、帽子やないか？」

「帽子とは違とる。」

「無論、シルクハットや山高帽子てはない、さ――そないな茶人か宗匠はんの被るやうなもの！」

ぷッと、初野はこらへ兼たと云ふ風て吹き出した。これが政吉の胸には何よりも情けなく響いて、張り詰めてゐた氣が全くゆるんてしまつた。そして樂しんて來た友情を語り合へるものは、この涼しい新座敷、改築したと聽いただけて、今初めて招ぜられたこの廣い前栽の見える席には、一人もゐないのだと云ふ覺悟を固めた。

茶人か宗匠はん！そんなことを云はれるだけても、何たる變化てあらう！渠は遲まきながら、親の許可を得て、ヤッと年來の望みを實行することが出來て、東京にのぼり、司法官になる目的て日本大學へ這入つた。思ひ思はれた初野と、こちらから進んて手を切つたのも、狹い田舍て親の八百屋の手傳ひをして、自分の若い血を朽ちて行かせるのがいやてあつたからてある。

それがもう直きに卒業と云ふところて、妙な病氣に罹つた。いつも行く床屋て散髪をして二三日立つてから、あたまのかゆいところを掻いてゐると、ぼろ〳〵と髮の毛が一時にかたまつて落ちた。その拔

け跡へ指をやつて見ると、五厘錢大の禿げが出來てゐる。さア、大變なものに取ッつかれたのぢやアないかと心配して、醫者へも行き、藥も塗つた。けれども、藥を塗らない部分からして、毎日のやうに禿げて行つた。

ぽろり――ぽろり――さすがは、秋の木の葉の段々と枯れて落ちるやう。あの時の心細さは、今思ひ出しても、ぞッとする。

卒業後に對する若く燃え立つ望みは、その度、その度に、毛のかたまりとなつて拔けて行き、世間に向ける嬉ばしさうな顏は、時々刻々に、失望の影と變じて机の上の小鏡に寫つた。

いよ〱丸坊主になつてしまつた跡でも考へた、自分の罪でないとしても、故郷の父母、兄弟、友人等にどんな顏をして顏が合はされよう？とう〱、それが爲めに、母の死に目にも會ひに歸らなかつた。そして妹から片言のやうな手紙を度々よこし、

『どうぞ、兄さん、歸つておくれやす。母が死なはつてから、お父さんが困つてやはりますさかい』などとあつたけれども、どうしても歸る氣になれず。その癖、學校へも出ず、下宿屋のわが室にばかりと籠つてゐた。

ふと、それでも、歸郷することになつたのは、この被り物を被ることを思ひ付いたからである。醫者の云ふところに據れば、あたまの毛穴と云ふ毛穴に毛が全くなくなつてしまへば、病菌も亦それてなくなつたわけだから、もう、この上坊主になりようもないし、家族や友人に傳染する恐れもないと。それ

をせめてもの心頼みとして世間へは顔出しをさせて貰へようし、被り物を被つてさへゐれば、さう見ッともないこともなからうと考へた。

その被り物を、今、友人どもはわざ〳〵取れと強ひるのである。「おれが妙なあたまになつてるのは、皆知つてる筈やないか」と、初手は訴へて見たい氣でもあつた。東京から度々よこした友人への手紙には、明けッ放しにこのことをも語つて、「天無情、おれは禿頭病に犯された」とも、「とう〳〵臺灣坊主のおかみ剃りを頂戴して、すッころ坊主になつたぞ」とも云つた。渠は、もう、これ以上の恥はかきたくなかつた。

一座のものは皆氣まづさうに無言になつた。

「ほたら、おれは歸る！」政吉は突然立ちあがつて、廊下へ出た。そのから手の後ろ姿を見て、一番をかしくも又氣の毒にも感じたのは初野だ。われ知らず、これも立ちあがつて、

「どこへ行きなはる、玉井はん？」

「どこもここもあるもんか、僕には落ちつく世界がないんだ。」

「まア、お坐わんなはれ」と、おし付けるやうに云つたが、かの女は目をうるませてゐた。

「そないおこらんでもええやないか、君の爲めに僕等は集つてるんやて。」杉本もかう云つて、やや心を和らげた。

「おこりやへんけれど、なア――」政吉も不承不承にほほゑみながら、こちらを向いた。

「久し振りの會合やないか」と、この家の主人も渠をなだめるやうに、「まア、平和に進行したら、どうや？ほて、又、君の留守に造りかへたこの前栽も、よく見て貰ひたいのやさかい、なア。」

「僕もええ庭園がでけたおもたけれど――けれど、なア――」

政吉は、昔から友人の前で親しみを表する爲めのしるしてあるかのやう爲慣れてゐた通り、手を持つてあたまを掻かうとしたが、その場に氣が付いて苦笑にまぎらせた。そしてまだぐづぐづして、座に返らうとしない。

初野も立つたまま、そのあり様をぢッと見てゐたが、

「まア、お坐わりやしな。」かの女が先づ元の通りに腰をおろして、「あんただけはようおまんが、な、帽――かぶり物取らんかて、――なア、小池はん。」

「そやそや、今晩の女王沼田孃の撤回意見に皆も同意しまッさ」と答へて、小池も政吉に向ひ、「兎も角も、撤回發議者のはたに坐わり給へ――てんて無關係であつた人でもおまへんが、な。」

「およしやす、小池はん！」

「は、は、はア」と、默つてゐた仲間が笑つた。

「關係、無關係など云ふことはやめてもらを。」から眞面目臭つて語りながら、政吉は初野の後ろをまはつて、小池し他の男との間に腰おろした。そしてかの女がこちらを見つめる視線を避けるやうにして、この隣りの室まで明けッ放した十疊の座敷の床の間に生けてある芍藥や、山水の掛け軸をちよッと見て

から、庭の植ゑ込みの間に見ゑる石燈籠に目を放つた。が、何となく自分の眼の筋が眼球の奥の方へ引ッ張られてゐる氣がした。て、もッとうち解けるのが義務であると思つて、主人に向ひ、
「ええ庭がてけた、なア——涼しいやないか？」
「うん、少しやようなつただろ。」小池は得意さうにこついて、『おやぢは何事にも無頓着やつたさかい、なア。』
「君のおやぢは、けれど、なか〳〵面白い人てあつた、さ——極磊落て、なア。」
「あんた、よう知つてなはッたんだッか」と、初野は眞ッ直ぐに向いて政吉に話しかけた。
「そりや知るも知らんもない、さ。』渠はその方をじろりと見たが、それッ切り、また小池に、『僕等は子供の時、一緒に、ようあたまを撫ててもろたやないか？」
「そや、なア——』と云つたが、小池は自分の庭を新たに賞めて吳れた友人の氣を損じない爲めには、今の場合、どう答へていいのかと思つて、ひやりとした。この心持ちがまた列席の人々にも傳はつて、誰れも口を出すのを控へた。
「あたまと云や」と、本人は案外平氣らしく、『僕がこないな病氣にとッつかれたんを見せたら、びッくりしただろに、なア。」
「何を云ふても、もう、死んてしもたものはあかん。」
「ほんまに、なア、この二三年の間に、君はおやぢを失ひ、僕ば母を失うてしもた。」

「年寄りはをつても、邪魔になるばかりやさかい、なア。」

「そりやさうと、君の細君は達者か？」

「相變らず寢てて、なア。」

「君が達者過ぎるんやないか？」

「馬鹿な！」

『玉井君。』杉本は少し座を乘り出して、『僕も行きがかり上妙なことを云うて失敬したが、跡に思ひの殘らんやうに申しわけしとく必要があると思ふ、僕は皆の代表者として君の怒りに觸れたんやさかい。』

「そないなこと、どうでもええやないか――僕が惡かつた。あやまる。」から云つて、政吉は輕くあたまを下げて見せたが、杉本なんかどうでもいいと云ふ反感がこの家の主人ばかりの尊敬に變じて、小池が元の通りに自分をあしらつて吳れる嬉しさが、私かに、淚にまでにじみ出た。

「君にばかりそない云はれても困りまッさ。實は、この會の發起人は小池君と僕て、沼田孃を初め、皆に賛成してもろたんやけれど、君が今回は帽子――てなければ――被り物を取らん云ふのが一問題になつたんや。」

「こりや僕の習慣やて。」

「まア、聽き給へ――習慣なら習慣てもええ、もう、沼田君に許されたんやさかい。けれど、なア、初めは、僕も君の爲めに心配したんやて――」

「そりや濟まん、なア。」

「杉本君は實際」と、小池が口を添へて、「どないしよ知らん云うてたのんや。」

「僕は考へたて、君は小池君が一家の主人になつてから初めての會見やさかい、主人には友人間やてまアどうてもええとしても、ここのうちの人の氣を惡うしたらようないおもて、なア。」

「では」と、政吉はまた少し顏色を變へて、「僕が來なんだらよかつたのんや。」

「そないなことあらへんけれど、なア、それて僕は小池君に相談して見たら、小池君も云ふには、婦人も一人來ることやし、皆の前で禮を缺くやうなことがあつては、交際上、君の將來の爲めにならんちうて、なア。」

「禮を缺くなんて、そないなお考へなら——」

「もう、ええやないかいな」と、初野は中をさへ切り、「玉井はんかて、けふは、お客だッせ。」

「そやけど、なア——」

「僕もただそれだけの經過を述べて置くんだッせ——間違ひのないやうに。」

「そや〳〵」と、小池も皆の荒びた感情をもみ消して、杉本に、「もう、そろ〳〵初めよかい?」

「それがええ、なア。」

「僕も分つた、分つた」と、政吉は固くなつてゐたからだを強ひてゆるめた。けれども、まだ氣になつて仕方がないので、てれ隱しに一つ坐わり直し、「お客に呼ばれて、妙な喧嘩になりかけたのは實以つて

僕が惡かつた。諸君もどうぞ氣を惡うせんやうに賴(たの)んます。」

「無論だッさ」と、別な男が一人で皆を代表したやうに答へた。

「けれど、何(なん)だて、被り物を家の中で被つてる例は仰山あるぞ——僕も、實は、茶人や宗匠のから思ひ付いたんやけど、な、西洋の婦人なんぞ、あの大(おほ)けい奴(やつ)を被つて、教會にも這入つて來るし、な、芝居なんぞでもそのままやで。」

「うん、さうやさうや、な」と、杉本が受けた。「例がないことやないさかい——」

「そないな話やめて、もう、ごッつォにしまほか?」初野はかう云つて、杉本と幹事らしい顏を見合はせた。

政吉は、この時、初めてかの女を横目ながらぢッと見る餘地が出來た。そしてあの元とは違つたやうに大人びてさッぱりしたやうな、またどことなくべた〱したやうな態度で、現在は、自分の代りに誰れを捕へてゐるのだらうかと云ふことを考へて、多少業(ごふ)が煮える感じをおぼえた。

この歡迎會はどこかの料理屋で、藝者をあげて景氣よくやらうと云ふことであつたのだが、初野が耶蘇教信者だからそんなところへは出席しないと拒んだ。で、小池はかの女の出席するのが、政吉の爲めには、何よりも「ごッつォ」であらうし、また皆が會ひたがつてるかの女を逸するのは面白くないと云ふ

考へもあつたので、計畫を改めて、ここにしたのてある。

さきの關係は、小池が一番よく知つてるので、渠はこの二人の仲を成るべく元の通りてあるが如く取り扱ふやうに努めた。皆の膳が初野の手傳ひて、料理について來た女中一人とて運び出されてからも、渠は正座の政吉の隣りへ初野を坐わらせようとして、いやがるのを無理に押して行つたが、かの女はそれを外して、末席の方へ逃げた。そして小池の席から次ぎへ杉本が並んだそのまた次ぎへ坐わつて、

「わたしも幹事だッさ」と云つて、動かない。止むを得ないので、小池と杉本とは一席づつ繰りあがつて、かの女の座が最後の場所にきまつた。て、そこに納得して坐わり直してから、『小池はんも人が惡い』とむきになつて責めるやうな顏をした。

その樣子を見ただけにても、政吉はまだ賴母しい友人がないでもないわいと云ふやうな心になつた。

酒が廻つて大分調子がついて來てから、義太夫をうなるものやら、はやり唄を歌ふものやらがあつた。風を呼ぶ扇子をそのまま使つて、扇舞の眞似をしたものもある。政吉も、皆の席をまはりながら、東京でおぼえた唄などを得意になつて披露した。

「沼田先生、一つ隱し藝をどうぞ」と促したものがある。

「わたし、無藝大食の組だッさ。」

「ても、唱歌なら歌へませう、學校の先生だッさかい」と、橫合から頓狂に叫んだものもある。

「そないなもの、こないな席て歌へまッかいな？」

「でないな席とはけしからん。」小池が自家をけなされたと思ふ不愉快を、强ひて、笑ひにまぎらせて立つて來て、「まア、こッちやへおいてやす」と、かの女を後ろからわざと痛いほど抱き締め、政吉の歌つてるそばへつれて行つた。

初野は自分の、つい、調子に乘つて云つた失言の報いが來たと思つて痛かつたのを默つて辛抱した。その頃には、もう、疾くに電氣がついてゐて、暗やみの中に光る青い木の葉や草葉のみづ〳〵しい上から、如何にも涼しい風が這入つて來た。その風に生え際の長い後れ毛を靡かせて、ぱッちりした眼の、圓い顏をちらと見ると、以前よりも肉が付いて、政吉には一しほ女らしいにほひがするやうだ。歌つてゐた端唄をわざと中途でぷッ切つてしまつて、渠は、何氣なくよそほつて、

「お久しおまん、なア」と云つた。

「ほんまに、なア」と、かの女もはッきりした聲を出して、渠が待ち受けたほど左ほどに恥かしさうでもない。それが渠には憎らしかつた。

「一杯さし給へな。」小池はかう云つて、からの杯を持たせたのを受けて、政吉はわざとそのまゝ初野に渡した。

初野は飮む眞似だけして、酒を杯洗にあげてから、渠にもどした。小池は銚子をこの二人に順番に持たせたのである。そして、

「さア、これで破鏡の歎が再び直つたやうなものや。」

「阿呆らしい！」から叫んで、かの女は席に立ち返つた。

「僕も阿呆らしい、なア」と、政吉に坐わつたまま、ふとまた手をあたまへ持つて行きかけたが、中途からおろして、膝の上に兩手を揃へ、そこに力を入れて兩肩を張り、醉つたふりにまぎらせたが、胸はがき亂れるやうであつた。渠には、昔の許された肉感と今の弱點あるあたまとが及びもつかない距離を有するやうに思はれて、新たに初戀の如き心持ちが湧き出て來たのだ。

友人の間にあつて最もうち解けて、而も何か物足りない情があるのを呼び招くやうに、そツくりと、そこに倒れたが、そのはづみに被り物がゆるくはづれた。急いでそれを兩手で押さへて、渠はまた起きあがつた。

その樣子がをかしかつたので、皆は思はず、

「ふ、ふ、ふッ」と吹き出した。

政吉はそれには少しも氣が付かなかつた振りをして、皆よりも一足さきにそこを出た。

夏の夜は、今、人出の盛りだッた。呉服橋の通りは、猪名川へ涼みに行くもの、行つて來たものの往き來で、こんなしみッたれた町にも似合はず、ちよッと賑かに見えた。どこかの若い衆どもは、どうせ碌な奴等ではあるまいが、浴衣がけにうちわなど持つて、得意さうに挨拶をかはしなどしてゐる。

道の左右には床几を出して涼んでゐる女も多い。が、そこの娘、ここの後家は誰れそれ、なにがしの持ち物であつたがと云ふやうな記憶が浮んで來た。以前よりはまた一段と妾の數がふえたぞと、今しがた、歡迎會の席上で聽いたのが、自分の故郷の不生產的に遊惰で、大して爲すこともなく荒れて行く證據だと思はれた。

こんなところへ、死んでも、また歸つて來るのぢやァなかつた。

政吉は、誰れか知り人に顏を見られないやうにして、こそこそと家路に急いだ。

わが家に近づくに從ひ、僅か四五町のところだが、道は段々ときは立つて寂しくなり、明るいのはところどころの氷屋の店だけだと云つてもいい。それがまた、不景氣にあかりが付いてるだけ、それだけ中の淋ぎたないのが目に立つて、喉のかはきを覺えてゐながら、這入つて見る氣になれなかつた。

あを〳〵した西瓜や胡瓜や、青唐がらしや菜ッ葉に、水をかけて店さきに並べてあるその奥へ飛び込むやうに這入つてから、林檎を二つ鷲づかみにした。大分老いぼれた父の代理にいつも店をしてゐる弟や、そのそばで何かおしやべりをしてゐた妹などが、あッけに取られて見てゐる横を通つて、何にも云はずばた〳〵と二階へあがつた。

まだ東京から歸りたてで、机もなく、僅かの書物の整理も出來てゐないだだッ廣い二階の、家根裏に對したくすぼつた疊の上へ、渠はそれを自分の望まない運命を宣告したかたきでもあるかのやうに踏んまへて、自分の取り外した殘り物を力一杯に投げつけた。

被り物は、堅いふちも張りもないので、ぐちやくと疊の上に横たはつた。そして渠は邪慳に獨坐して、二つの林檎を皮のまま、つづけざまにかじつてしまつた。そして又下り口から下を向いて、

「お杉、店の葡萄酒を一本持て來い！」何だか、もッと醉つてやりたいのだ。

「まだ飮むんだッか？」妹がかう云ひながら、コロプ拔きを添へて持つて來たが、いまだに珍らしさうにじろく兄のあたまを見てゐるのが不愉快なので、渠は返事もせず、壜を奪ひ取つた。

「下へ行とれ、行とれ！」

「ほ、ほ、ほ」と笑つた聲が下から聽えた頃、渠は壜から口うつしにごぶくやつてゐた。

それでも醉ひさうでないので、獨りで褥を取つて、蚊屋の中にあをのけになつた。暑苦しいのに迫はれて心はまたおのづからあの今夜の明けッ放した座敷へ返つた。

小池は渠をよこの方へ呼んで、云つた、

「君さへ縒りをもどす氣なら、僕が仲に立つてやつてもええぞ――その方が君も早う身が固まつて、土地の信用がつき易からうて、なア。」

「…………」

「ここは、一つ、早うせんと、杉本も思召しがあるやうやさかい。あないな奴に君の昔なじみを渡さんかてええやないか？きやつはこの席へも沼田を呼びたう無うたんやし、君に强う當つたのんも、實は、あ

の女を君に見られる不愉快の報いに外(ほか)ならんのや。」

「思召しのある方へやつてしもたらええやないか――僕は、もう、未練なんぞないて、なア。」

「君がこの土地にゐ付くとしてもだッか？」

「勿論、なア」と、この場合、どうしても云はずにはゐられないやうな氣がした。……

如何にも拙かつた――如何にもあッけないやうだ。仲介に頼むべきものであつたか知らん……ても……棄てられた身でありながら、平氣でその棄てたものの歡迎會に列席するとは……こちらの姿を見てふき出したぞ……幹事でもないのに幹事氣取りて杉本と並んだのは、二人の仲を見せようとしたか？……かの女のおとなびて來て、さッぱりしたやうな、あの樣子――元は、さうとも見えなかつたが――ては、ひよッとすると、小池にだけ内心をうち明し、こちらの心を探つて貰つたのか？それにしては、小池の云ひ分が毒性(どくしやう)過ぎた……迷つてるのか？こちらへも氣があるやうに優しくしたし、杉本へも亦愛嬌を送つてゐた……

それでも、耶蘇の信者だけに、義理を重んじてゐて？……が、かの女の迷ひの餘地は、もう！……歸り途が同じ方向なのは、あの二名ばかりで……今夜にも、かの女とあいつとの關係が附いてしまつたやうに思はれて……現在、血を分けた妹でさへ、兄の歸り早々、罪もないあたまを見て馬鹿にする樣子が見えるのに、まして他人だ――一たびこちらから手を切つた女だ。初野はこちらの姿を見て、却て今更らの如く仕合せてあつたと、而もほッと息をついたかも知れない。……皆と一緒に玄關まで

逃つて來た時も、渠はこれを最後の會見だらうとも思つて、皆の見る目も憚らず、「ぢッと見あげて見た(多分、目がうるんでゐた)にも拘はらず、かの女は皆と同じらしい樣子で、ただ世間並みの『左樣なら』を聽かせた。渠は、水でもあびせかけられたやうに、ぞッとしたのであつた。

「どうせ恥をかくなら、見ず知らずの他人の中がえゝ——なんてこないなとこへ舞ひもどつて來たのんや?」こればかりを思ひつめてゐるかと思へば、いつのまにか、また初野の一段と肉づいた顏、手……
……などを自分の肌近く思ひ出してゐる。

渠がこの地で敎會に行き出したのは、實は、初野の姿の出入りするのを見たからである。金曜日の祈禱會に、渠とかの女との外に誰れも來なかつた時が二人の話のし初めだ。それから直接に二三度往き來したあげくが、あの川向ふの……溫泉での…… あの時から見ると、かの女のからだ付きにも、和らかい物の云ひ振りにも、しッかりした手ごたへが出來て來たやうで……あの男と手を取り合つて、橋を渡つたのぢやアないか?……酒にゆるんだ二人の口……麥畑の中を、風に裾を吹かれて、向ふの山まで…… 溫泉……「あんた、ほんまに愛してて?」……十八歲の町娘が、いつのまにか、小學敎員の檢定試驗を受けて、紫紺の行燈ばかまをはいてゐる …… 色男然たる自分は、忽ち、町役場の戶籍掛りに變つた……

「どうしても、あの杉本には、渡したくない。」……「まさか、そない俄かに——」……「それとも、ひよッと——」……

刺戟に刺戟が重なつた神經の游離は、渠のつぶつた目の視力を、どこまでも見えぬ底のないところへ運んで行つた。そして眠つたやうな、また眠らなかつたやうな渠のだらけた疲勞は、その實際の手を以つて、腹の上に丸まつたどてらと共に、更けて行く夜の寢苦しさをしッかりと抱いてゐた。

「どうしても渡したくない！」この觀念を以つて、翌朝はね起きた時は、泥壁格子の間へ、かッかと照らす太陽の、高い日足の流れが隣りの家根から反射してゐた。

「お住寺さんが朝寢しやはつた」と云ふ妹の冷語に早速また元氣をうち碎かれてしまつたが、けふは日曜日だと聽いたのを幸ひ、被り物の上に洋傘をさしかざして、初野の家を訪づれた。

女に對する昔の元氣や意氣込みは思ひ出にさへ出なかつた。しほ〳〵として、新町裏のしもた屋格子に手をかけた時は、ぶる〳〵と顫へた。

「どなた」と云つて、出て來たのはかの女だ。「まア、玉井はん、よんべは、なア――」

「大きにごッつォになりまして――」

「もう、皆はんのとこおまはりやして？」

「いや、これから――」

「一番はなにわたしとこへ來て呉れはッたの？」

「はア。」

「さう」と、嬉しさうに目を開いて、「まア、おあがりやし、な。」

政吉は見おぼえのある奥の座敷へ通された。四疊半の間て、直ぐ外は板壁で圍はれた一坪半ほどの庭に、朝顔が四五本女竹にからまされてゐるのに臨んだところを、青い羅紗て蔽はれた小机が占めてゐて、その上には學校の圖書印らしい物が張りつけてある古びた「教育學」や「淑女叢報」が載つてゐる。

「よんべは、おもしろおました、なア。」

「はア、おもしろがした。」

「あれから、直ぐお歸りやして——寄り路せんと?」から云つて、意味ありさうに笑つた。

「無論。」渠は苦笑ひを以つて答へた。

「それても、なア、あんたも唄が上手になつた。東の都てたんとお仕込みなはつたやうや。」

「そんなことてもせんと、なア。」

「どうせ敎會には行きやへんやろ、なア?」

「行たとて、何も役に立たん。」

「こッちやても、牧師が信者の後家はんとくッつきやはつて、皆が騒動してからは、なア、あまりおもしろうないのだす。」

「あんたもまた出來まへんか」と、政吉は僅かに思ひ切つて聲に出した。

「阿呆らしい！」かの女は高い調子で、あたりかまはず、無邪氣らしく叫んだので、渠はまたしよげた氣味になつた。そして當座のまぎらしに、机の書物の方を見て、

「何を御勉强です？」

「わたし等の」と、かの女も同じ方に向いたが、「讀むのんは、碌なものやおまへんが、な――あんたこそどないおしやした、「天下の名判官」は？」

「…………」

この破れた誓ひは、やがて又破れた望みてあつた。かの女がこれを蜜の如くあまい口から口に受けた昔のことは忘れたやうに平氣て持ち出したのを、渠は皮肉とも見た。あざけりとも見た。且また、こちらに對する勝利の誇りとも見た。そして隣りの室から母らしい人――渠の仕うちを怒つてるに違ひない――が何かことごとやつてる音を聽くと、なほ更らいぢけてしまつて、かの女とさし向ひの爲めに私かにまた新らしい戀のほのほが燃えあがつてゐたのが、無形の鐵槌か、何かでうち碎かれてしまつた。暫く返事も出來なかつた。

杉本と約束が出來たか、どうかと云ふことを第一に確めるつもりてあつたのも、そんな勇氣が出なかつた。

徒らに、女盛りになつたかの女を向き合つて見ただけて、その家を出たが、

「あんたは妙におひねくれやした、なア」と云はれたのを思ひ出して、道々、自分のあたまが恨めしく

て、恨めしくて……「小池はんにお會ひやしたら、よろしう」のことづても、傳へる氣にならないで、直ぐ自分の家へ引ッ歸した。

あんなにきッぱり斷つて置いて、今更ら小池に仲介を頼みたくもない。よしんば、仲介を頼んでも、たとへかの女はまだ杉本と約束してないにせよ、――けふ、かの女は少しも杉本のことに云ひ及ばなかつたが、――この變つた人間に再び承諾を與へるか、どうか？まして、何をして自から獨立するか、まだその當ても付いてゐないとも悶え出した。

「また遊びに來てお呉れやす」と云つた言葉につけ込んで、翌日も亦、よささうな時を見計つて、初野を尋ねた。

「どうせ、ひまだすさかい、なア。」渠はかう云つて招じられるままにあがつて行つた。

「けふは、ちよッと引けが遲かつたんだッさ。」かの女は半ば解いたはかまの紐を引きずりながら、敷き物を出して、「ちよッと失禮」と引ッ込んだ。

「でも、あんたは仕事が決つててよろしい。僕も、今度は、この土地の土になるより仕方が無うなつた

んやさかい、早う何か見つけまッさ。」

「駄目だッせ、こないな土地」と、隣りの室から、『せめて大阪へでも出んと、なア。』

「出たところで、僕のやうなものは、どないせい、駄目や。」

「えらう悲觀しやはる。」

「悲觀もしまッさ」と云つて、かの女の母親が入れ違ひにざるを持つて出て行つたのを思ひ出し、安心して特に哀れッぽく、『罪つくりやさかい、なア。』

「そりやあんたの自業自得や――杉本はんは神戸へ行く云うてやはる。」

「……」ぎッくり胸に來たが、目の前にかの女がゐないのを幸ひに、『あの人はよう來まッか、ここへ？』

「いいや、ちよッとも。」

「でも、約束が出來たさうやおまへんか？」

「阿呆らしい、そないなこと！」

「へい」と、政吉はこちらで舌を出して喜んだ。

そのうちに、初野は白地の浴衣に着かへて、薄化粧までして出て來た。が、母親が歸つて來た様子なので、渠はまた眞面目な話に返つた。そして何度でもここへ來られる口實を作る爲めに、準教員でもするから、口を調べて貰つて呉れろと頼んだ。が、心では、杉本の跡に坐わる運動をしようと決めたので

ある。

直ぐその足で小池の家へ行くと、あがるが早いか、

「君はけしからんぞ」と云はれた。

「何がけしからん？」

「實は、今、杉本が歸つたとこやが、なア、君はきのふも、けふも、あの女のとこへ行てて、僕等のとこへは挨拶にも來ん云うて、あいつがぷり〳〵怒つてたて。」

「そりや、僕も挨拶に來なんだんは惡かつた、さ――氣分が惡うて、そないな氣になれんのは、君にも察して貰ひたい、うちの妹にまで馬鹿にされるんやさかい、なア。」

「それもさうや、なア。」

「でも、あれのとこへ行たと誰れが云うた？」

「杉本、さ――けふも、あの前を通つたら、君の聲がした云うて、眞ッ赤い氣になつてやつて來たて――あいつも失敬な奴ぢや、君が歸つて來たのんをこはがつて、あの女と一緒にこの土地を逃げよしてるて。」

「矢ッ張り、何か、なア」と、思はず口に出たが、それッ切り口をつぐんて、政吉自身の顏も俄かにほ

てつてゐた。

『君はあないにさッぱりしたこと云うたけれど、矢ッ張り、仲介を賴みに來たんやないか？もう、駄目やて、きまつてて。』

『そないな賴みやない。』から答へたが、政吉の胸はどきまぎするのを抑さへ切れなかつた。

『ほたら、なぜさう度々あそこへ行くのんや？』

『實は、敎員の口があるかおもて、行て見たのんや。』

『あないなへぼ敎員のとこて分るもんかい？』

『ほたら、君、世話して吳れんか？』

『世話してやるとも！親の店をやらんとしたら、何がええのんや？』

『實は、それて賴みに來たんやが、な、杉本が神戶へ行く云ふやないか？』

『うん、話がきまつたら、なア、池田町の女王と一緒に。』

『その跡はどうや？』

『うん、役場もよからう――もう、二三日てきまるだろ、あいつ、急いてるから、なア。』

『賴むて、なア』と云つて、この方は少し氣が輕くなつたが、一方ては、初野と杉本との關係を今夜中にも斷たせなけりやアと、ぢッとしてはゐられなくなつた。

一杯やつて行けと云はれたのを無理にふり切つて、再び初野のところへ行つて見たが、母が出て、知

らない人に對するやうな無愛想て、かの女の留守を告げた。

家て夕飯をやりながらも、ぐづ〳〵してゐられないやうて――この一夜中が、きッと、初野を取るか、取られるかの關の山だと思はれた。

落ち付きを失つたまゝに、また自家を出て、沼田の家へ向つた。が、再び留守を喰はせられるのを避けて、後ろの板壁の方へまはつた。その節穴から、昔もよく覗いた經驗があるのである。

「はア――はッちやん」などと合圖すると、初野は急いて身支度をして、外へ出た。そしてこちらの付いて行くのをわざと知らない風をして、川ぶちへ出て、あの假り橋を渡つて、川西の寂しいお宮の森の暗いかげて、二人は手を握り合つた。

その人は今ゐさうてもない。

近處なる杉本へ遊びに行つてるのてはないかと、そこの家のまはりをまはつて見たが、この友人も亦ゐさうてない。が、念の爲め案内を乞ひ、推測通りを確めてから、こないだの禮を傳へて貰ふやうに云ひ置いて、そとへ出た。

渠は、もう、自分の行きどころがないやうな氣がした。が、ふと思ひ出して、川西神社の森へ行つて見たが、やみにふくろふが鳴いてるのが聽えるばかりて、二人のかげも形も見えなかつた。

『ほッほッ、ほッほッ、ほッほッ』と聽える聲に自己の恥辱を感じながら、また橋を渡り返して、初野の裏木戸に立ちどまつたり、杉本のまはりをうろついたりした。

妙な帽子を被つた男が夜おそくまでうろついてゐたと云ふことが翌朝の評判になつて、初野も杉本もそれと察して、朝早くから寄り合つておぞ毛を振つた。渠等は、もう、政吉のゐない所で天下晴れての夫婦になるのだと安心して、狹い土地の噂などに頓着なく、昨夜早くから芝居を見に行つてゐた。

『よかつた、なア、よんべ會はんて。』

『けふ、また來やがるか知れへんて。』

『留守云はせまッさ。』

『それがよろしゆおまん、なア――もう、一二日のとこや。』

から約束し合つて別れてから、初野は急いで學校へ向つたが、その途中に『妙な帽子』が待ち伏せしてゐた。近道をする爲めに草むらや小笹の中を通つて來たものと見え、肩から裾にかけて、朝露が一杯ついてゐる。

『おれを病人と見て見限つた、な！』

『…………』

『うそ云うて、この土地を拔けて出る氣か？』

『…………』

『杉本のやうな人間にだまされて行くんだらう。』

『…………』

『おれと一生ほんまの夫婦になりなはれ？』

初野は、立ちどまつたまま、返事も出來なかつた。そして、この男のいやにひねくれて、いつのまにか底意地の惡く、何かぢッと訴へるやうになつた目の見据ゑ方を、——歡迎會の席上では、まだしも同情して見たが、——けふは、つく／＼いやになつてしまつた。が、何か仕出かすかも知れないので、その目から暫く自分の目を離さなかつた。

『返事しなはれ！』

『へ——へんじ——今晩しまッさ。それに、なア』と、碎けて見せながら、『教員の口がありまッせ。』

『あんたの跡だらう——そないに輕い尻の跡なんぞ御免や。』

『まア、來なはれ、今晩、なア——』かう云つて、かの女は一間ばかりの田舍路をじり／＼と渠と入れ代つたが、別に手向ひもしない樣子なので、そのままおづ／＼歩き初めた。そして渠にそこを動くなと命ずるやうに、後ろを見い／＼、『どうぞ、——今晩、——なア。』

默つて、渠は見送つてゐたが、小學女教員の後ろ姿が見えなくなると、白地の浴衣に薄化粧の初野が

浮び出した。

晩には、無論、渠ははね付けられたので、直ぐまた人に託して熱心の胸中をうち明ける手紙を持つて行かせたが、それも受け付けられなかつた。

その翌日、初野の出勤する學校へ、町から一里半も出かけて行つた所が、もう辭職したと云はれたので、渠はそこの校長に會つて、かの女の事をさん〴〵毒づいてやつた――以前は自分と關係してゐたのに、今回池田町役場の杉本とくッついて逃げるのだ、その間にてもどんな男があつたか分らないと。

『さう云ふ女に大切な教育をまかせてをつたのは、校長としてわたくしの不明てした。』とあやまらせたのをいい土産として、政吉はその歸りに小池をその玄關まで訪問した。

いつも呑氣に在宅してゐる主人は、式臺のはづれまで出て、渠の得意さうな報告を聽き、一層渠をおだてるやうに杉本の惡口をも云つた。

『きのふ、あいつも役場を辭職してながら、僕のとこへは何とも云うて來ん――一言ぐらゐ知らせてもええやないか、跡へ君を入れる都合もあるのんに、なア。』

『あいつアあんな奴ちや――卑怯にも、人の女をこッそり盗み腐つて。』

『そや〳〵――ほて、なア、僕が町長に會うて君を推薦しといたら、あいつが横から茶々を入れたて。』

「怪しからん、なア――きッと、あの會て君が初野を僕のはたへ押しつけたのんを恨んてるのや。」
「勿論、それにきまつてる、さ――僕もあないな奴に女王を渡したうないさかい、君に早う取り返せ云ふたんや。」
「初野が阿呆や!」
「そや、なア――僕は、役場の跡釜は、今晩にも行て、町長はんにもう一遍頼んて見るが、なア、君、あの女をどないにてもしてあいつから取り返してやり給へ。他の土地へやるに及ばん――なぐさんてから、また棄てたかてええやないか?」
「そりや、どうしたかて取り返す――どうしたかて」と、政吉が思ひ詰めて獨りて力んてゐるところへ、杉本が呂の紋つきなど着込んて門を這入つて來た。
「やア」と小池は迎へて譯もなく莞爾し出した。「役場を辭職したさうやが、もう、決つたんだッか?」
「實は、これから直ぐ行くんだす。」
目の色を變へて、ぢッと無言てつッ立つてゐた政吉は、身をふるはせて小池の方を見た。が、相手は今までの話し振りに於けるやうな惡意を杉本に對して持つてゐるとも見えない。不斷の通りて、
「まア、行て來給へ――ほて、今度の日曜あたりに、ゆッくりやつて來給へ。一杯お別れに飮まう。」
「どないせい、もう一遍歸つて來んと、なア――俄か仕立ての挨拶ては君に濟まんけれど、なア――」
「なアに、さ」と、少し不平てあつたと云ふ風て、「早う顔を見せて呉れさへすりや、僕の方は滿足や――

例のも一緒か？」

「うん」と、小池にはいや味を云はれたのに對し、そばの者には初野のことに對し、どッち付かず云ひ難さうに云つて、政吉を見た。政吉の五體が煮えくり返つてるのを示めすやうな目付きに出くはしたので、杉本はまた小池に向き直つて、二人て別々な意味の默笑をし合つた。そして、『また、いづれ。』『こりや失敬。』て別れたが、杉本が行つてしまつてから、小池は政吉に向ひ、

「おい、出し拔かれたて。」

「許すもんか」と、政吉はそこの玄關の障子に響き渡るほどの聲を擧げた。

薄暗くなつたので電氣の付き初めた場末の町を、政吉は一目散に二人の跡を追つた。そして途中から外れて、青々した麥畑の間に隱れた。

間もなく電車が、畑の中の線路を横切つてる小川の手前まて來た時、突然何かにぶつかつて脱線した。

政吉は、故意に障礙物を線路に置いた犯人として、警察署へ連れて行かれた。そこて渠は渠の被り物を命令的に引ッぱがれたのてある。(完)

狂犬

森田草平

一

私が小母さんと同棲する様に成つてから、今年て足掛け十一年に成る。私は高等學校の寄宿舎を出ると、つく〴〵下宿屋住ひが可厭に成つて、如何かして一軒家を持ちたいと思つて居た。恰度、其頃私の保證人に成つて居た下町の或織物問屋の奥にお裁縫師のやうなことをして居た四十餘りの女が有つて、世話をして貰ふに都合の好い所から、談合ひの上、一緒に小やかな家を構へた。それから高等學校が二年、大學が三年、大學を出てから六年、合せて十一箇年に成る。其間、たび〴〵家もかはり、いろ〴〵な轉變も有つたが、小母さんは始終影の形に添ふ如く私に隨いて來た。

實際、小母さんには親もない、子もない、私の外には手頼る者がなかつた。

故國にも、萬一したら東京にも、二軒や三軒親戚の家も有るらしいが、此方から音信もしなければ、勿論先方から訪ねても來ない。たま〳〵昔の話でも出ると、

「えゝ、故郷ぢや、私の事なんざ、最う十八の歳に死んだものと思つてるんでせうよ」と言ひ〳〵した。其外には、何を訊かれても返辭をしない。殊に自分の亭主のことを言はれるのが可厭らしい。只、三十の歳に死別れて、それからずつと一人身で通したとは言つて居た。かうして小母さんは自分でも自分の過去を忘れやうとして居るらしかつた。そして、只私一人に縋らうとした。

て、小母さんが私の爲めに盡して呉れたことは、殆ど親身も及ばない。私の氣心から所好嫌ひ迄呑込んで、一々痒い所へ手の届くやうな世話を見て呉れる。そればかりでなく、小母さんは經濟の思想にも長けて居る。學生々活の間、僅か一人が下宿住ひにも足らない程の金子で、如何して一家を支へて來たものか、私には今以て解らない。學校を出てからも、私位の收入で私の樣なだらしのない生活をしながら、今日迄大しい借金もせずに濟んで來たのは、一重に小母さんのお蔭だと言つても可い。畢竟、私に取つて、小母さんは最う無くて成らぬ人で有る。其の小母さんを私は可成虐待した。大學を出た當座、若氣の過ちから一人黑人の女に關係して、半年餘りの間、其女と他所へ出て同棲したことが有つた。其間小母さんは家を褶んで、元の主人に奉公して居た。そして、私が其女と別れるのを待つて、又一緒に成つた。こんな目に遭ひながら、小母さんは私に對して不足を言ふでもなければ、不快な顏一つするでもない。却て私のことを氣の毒がつて、早く妻を持たせやうとした。私も小母さんに氣の毒なことに成

りはせぬかと心配しながら、餘まり勸められるので、一昨年の暮到頭妻帶することにした。が、其結果は矢張私が豫想した通りて有つた。小母さんは矢張根が他人だけに、私に妻が出來ると、自分は最う要らない人間に成つたやうな氣がするらしい。それとは口に出さないが、小母さんの顏はだん／＼曇つて行つた。勿論、今ても勝手向一切の出納は小母さんが遣つて居る。只、それだけては何うも氣が濟まぬらしい。

ある夏、隣家の醫者が家中を擧げて海岸へ避暑するとて、留守の間、飼猫を私の家に託して行つた。何かの都合て、醫者の家は夏が濟んても歸らなかつた。やう／＼年の暮に歸つて來たが、猫は最う私の家に馴染んて、元の飼主へ歸らうとはしなかつた。間もなく其の醫者は何處かへ轉居したので、いよいよ猫は私の家の所有と成つた。尤もそんなに猫を可愛がつたのは、私の家ても小母さん一人て、左樣成つてからは、いよ／＼我兒の樣に可惜がつた。自分の喫べる物も喫べない樣にして猫に遣つた。猫も小母さんに馴染んて、始終膝の上に坐睡つて居る。たまさか私の膝の上に上らうとして、私が頭ても輕く叩かうものなら、小母さんは泣聲を立て丶庇ひ立てした。私はそんなにして小母さんが猫を可愛がつて居るのを見ると、何となく小母さんの方が可哀相に成つた。

其猫がある日近所のきじ猫と喧嘩して、ひどい負傷をした。それが原因て一箇月の餘も病んだ揚句、到底死んて仕舞つた。小母さんは本當に涙を流して泣いた。女中と二人て死骸を蜜柑箱へ入れて、自分の生れた家の宗旨が禪宗だと云ふので、一番近い禪寺へ舁いて行つて、番僧に賴んて經を上げて貰つた。

そして、わざ〳〵護國寺の先迄行つて埋めて來た。が、一旦左樣して歸つてからは、ふツつりと思ひ諦めた樣に、二たび猫のことは言出さなかつた。小母さんの周圍には又寂しさうな日が續いた。

時には、近所の雌猫が大きな腹を抱へながら屋根傳ひに遊びに來て、小母さんが内密で殘肴を遣つて居るのを見たことも有つた。二三日其猫が來ないと思ふと、それはお產をしたので有つた。可愛らしい三毛の仔猫を三疋生んだ。其家の主婦さんが遣つて來て、それとなく小母さんに貰つて欲しいやうな謎を掛けた。小母さんも心は動いたものゝ、私の氣を兼ねてはツきりした返辭をしなかつた。私もそれとは氣が着いて居ながら、わざと貰つて可いとも言はなかつた。何うも私には猫と云ふ獸が氣に喰はない。外面馴々しくして、ブラ〳〵して居られるのが可厭なのかも知れない。何か書物でもして居る時、こつそり傍へ來て默つて膝の上へ匍ひ上られなぞすると、打殺しても遣りたい程腹が立つ――

二三箇月後のことで有る。私は或女師匠の家で小狗を一疋貰ふ筈にして來た。小母さんはそれを聞いて餘まり好い顏はしなかつた。犬の子は小猫と違つて育てるのが面倒だとも言つた。餘まり吠えて近所の憎まれものに成つても可哀相だとも言つた。兎に角斷つて來たら可からうと迄言つたが、私は耳にも掛けなかつた。そして、半月許り經つてから自分で小狗を引取つて來た。小母さんは如何するだらうと思つて見て居たが、矢張目の前に小さな生物がよち〳〵歩くのを見ては、誰でも可愛く成るものと見えて、最う前に言つたことも忘れた樣に喰べさせるから寐させるから、何から何まで一人で面倒を見た。

夜の間もこんな小さい物を戸外で寐させるのが可哀相だと云ふので、玄關の三疊に座蒲團を敷いて、其

上に寐かせた。そして、時々起きて小水を爲せに雨戸を繰つて遣つた。

ある夜、私は厠へ立つて手水を使ひながら、不圖、庭を彼方此方往き反りして居るつゝましやかな足音に氣が附いた。て、凝乎と息を詰めて聽いて居ると、何うもそれが小母さんの樣である。

「おい、其處に居るのは小母さんかい」と訊いて見た。

「えゝ」と、小母さんの影が立停つた。

「今頃如何したんだな。」

「いえね、餘まりジョン公が鳴いて仕樣がないから、此處にかうして抱いて立つてるんですよ。」

成程、小狗は小母さんの腕に抱かれて居るらしい。闇の中にも圓らな眼が二つくる〳〵と光つて居る。

「何だ、人間の赤ン坊でも生れた樣だね」と、私は笑ひながら雨戸を閉めて居間へ戻つた。其儘ぐつすりと寐て仕舞つた。

こんな風で、小狗を可愛がるものは矢張小母さんで有つた。犬の方でも又小母さんに懷いて、矢張小母さん一人の所有と成つた。最初はとかく病氣勝ちな、痺弱な犬で有つたが、半年餘りの間にめき〳〵大きく成つて、今では一人前の立派な番犬に成つた。

二

私の妻は近頃習字の稽古を始めて、毎日午前中或速成會へ通つて居た。今朝も湯を使つたり髮を撫上

げたり、長い間かゝつて、やつと身仕度が出來ると、次の間に手をつかへたまゝ、毎もの樣に出て行つた。私は一寸振向いたが、又向直つて、机の上の書物に眼を曝した。

やがて又頭を擡げた。少時頰杖を突いたまゝ、障子の腰硝子越しに、垣根に近い木蓮の白い花を見詰めて居たが、つと立上つて緣側へ出た。それから座敷を廻つて、六疊の茶の間へ來た。見ると、小母さんは長火鉢の前に背中を圓くして坐つて、八百屋だの酒屋、肴屋だのゝ帳面をひろげながら、膝の上で小形な算盤を彈いて居る。私が火鉢の前の座蒲團に坐つても、顏一つ上げない。私は少時默つて見て居た。やがて小母さんは算盤を下に置いて、耳に挾んだ筆を執つて、何やら小使帳に記した。それから「ね、貴方」と言ひながら、其小使帳を私の前へ突附ける樣にして、

「宜う御座んすか。此間お預りしたお金子(かね)の中で、拂ひをすつかり濟して仕舞ふと、後には最う八圓五十錢しか殘らないのですよ。」

「あゝ」と、私は氣のなさ相に答へた。少時して、「それで？」

「えゝ、只それだけですがね。餘まりお金子の足が早いから、それで一度聞いて頂いて置くんですよ。」

「併し要るだけのものは要るさ」と言つたが、不圖、小母さんが近頃何かにつけて、自分の潔白を證據立てゝ、一文も私しない所を見せたがる癖を生じたのに氣が附くと、氣の毒と云ふよりは、先づ煩いのが先きに立つた。で、

「だがね、私はそんな事聞きたくないんだから、幾許(いくら)ても有る間(うち)はそれて遣つて行つて貰ひたいね。い

よいよ無く成つてから、私に左様言つて貰はうよ。」
「ですが、そりや矢張言つて置かなきや分りませんからね」と、小母さんは見る〳〵顔を赧くして、額に癇筋を立てながら、「私やこれだけ切詰めて遣つて居て、それて如何かする様に思はれちや、本當に持つた所がない。」
「だから、誰かそんな事言ひやせんぢやないか。誰かそんな事言つたのかい」と、私は言葉忙しく問詰めた。
「えゝ、そりやそんな事言ふやうな人は有りませんが」と、小母さんはしほ〳〵と差俯向いた。少時左樣して居たが、片手に火箸を握つたまゝ、「ですが、私の樣な因緣の惡い者が、斯んな我儘な事言つては濟みませんわねえ。かうして遣つて行かれるだけても有難いんですもの。」
「左樣さ」と、私も優しく言つた。「餘まり因緣が好い方ぢやないね。」
「眞個、親に不孝をした罰だと思ひますよ。」
「そりや如何だか解らんさ。だが、不思議だねえ、小母さんもこれて昔は三萬石のお世繼の嫁に迄成らうとしたんだからね。」
「いえ、お世繼ぢや有りませんよ。御次男ですよ」と、小母さんは遮てゝ打消した。「三五郎樣と云つて、御當主の弟御てしたがね。それが又少し薄野呂なんてすよ。」
かう言ひながら、小母さんはぽつと顔を赧くした。此女の癖て有る。

維新の頃、東海道筋のさる大々名に幕府から附けられた附家老て、竹内式部小輔といふのが有つた。祿高三萬石、飛ぶ鳥を落すやうな威勢て有つたが、其の弟に三五郎といふ薄馬鹿が有つて、始終下邸に置いて有つた。尤も薄馬鹿とは言ひながら、奥方も有れば、子供も二人迄有つた。又、其奥様といふのが少し抜けて居る方て、月々の命日に菩提所へ詣るにも、日傘を翳してお供を伴れながら、眞白に白粉を塗つて、皆衆に後ろ指を差されるやうな女て有つた。此二人を一緒に寄せて置くと、晝日中ても急に屛風の立つたやうな事が有つて、家來どもは此方が恥かしく成つて遁て丶引下つたものだ。小母さんの生れた家は陪臣てはなかつたが、伯母の嫁附いた家が竹内の家來て、お小納戸を勤めて居た所から、かね〲其下邸のことは聞いたり見たりして居た。ある時其奥様が失く成つた。て、何時の間に見染めたものか知れないが、薄馬鹿の殿様は是非小母さんを上げる様に伯母の亭主を以て交渉した。勿論歳も違つて居る。それてなくとも、小母さんはそんな可厭らしい男に侍づく氣はなかつた。如何しても上らなければ成らぬなら、いつそ死んで仕舞はうと迄思ひ詰めた。そんな所から魔が差したものと見えて、ある夜自分の家に居た仲間に連れられて家出をした。間もなく廢藩の令が布かれて、士族も散り〲ばら〲に成つたが、小母さんも自分の身を恥ぢて家へは音信もしなかつたので、到頭それなりに一生を過して、今日の様な身の上に成つて仕舞つた。

　私もこれだけの事は小母さんから聞いて知つて居る。私は小母さんの顔を見返しながら、此話を想出して居た。

「ね、其の三五郎といふ方が可笑しいんですよ」と、小母さんは話を續けた。「如何いふ譯だか、大抵犬が嫌ひでしてね。お供を連れてぼく／＼道を歩いてる間に、向うから犬が來やうものなら、何んな家でも構はない、突然其前の家の玄關へ飛び込んで仕舞ふんですものね。えゝ、それが一寸其邊の物蔭へ隱れて置けば可いのに、ずん／＼奥の間へ這入つて行くんだ相ですから、お供の衆も詫びるのに困つて仕舞つたと云ふ話ですよ。」

「併し何だらうね」と、私も口を挾んだ。「弟は左様でも、兄はそんな間抜けぢやないんだらうね。」

「式部少輔といふ方ですか。えゝ、それは最う立派な、絵もお上手な方で、一時は偉いお羽振りでしたが、何でも掃部様のお首が飛んだ頃から勢がなく成つて、早くから御隱居なすつたんですよ。」

私は幕末の諸藩の動搖を一寸目の前に見るやうな氣がした。小母さんも其渦の中へ捲込まれた一人には違ひない。

少時して、小母さんが言出した。「ね、自宅のジョン公がね、昨宵から何も喰べないんですよ。何處か氣分でも惡いんでせうかね。」

「さ、何んなものかね。」

小母さんはつと立上つて縁側へ出た。日當りの好い縁の上に、ぐつたりと寐て居る飼犬の背を、何やら獨言を言ひ／＼撫でて居たが、やゝあつて又障子を閉めながら、元の座に着いて、

「何うも活氣がないんですよ。」

「ふむ」と、私も向直つたが、「そんなに惡けりや、早く醫者へでも連れて行くさ。」

「えゝ、てすが最う一日待つて見て、それで不可ない樣だつたら」と言ひながら、小母さんは湯呑に茶を注いで出した。

二人の會話は暫らく途絶えた。

先刻から一軒置いて隣家に三味線の音が仕出した。小母さんは茶布（ちやきん）で刳盆（くりぼん）を拭き〳〵耳を澄して居たが、とんと投出す樣に盆を下に置くと、急に顏を蹙めて、

「何うも調子の惡い人と云ふは仕方がないものてすねえ。あんなに毎日浚つて居ながら——本當に如何したと云ふんてせうねえ。」

私は默つて小母さんの顏を見返した。小母さんは折角習つた琴も三味線も忘れて仕舞つて、一つとして滿足には彈けないと言つて居る。何しろ四十年來手に取つたことはないのだから、そんな物かも知れない。が、生れ附敏感な耳だけは殘つて居ると見えて、通りがゝりの裏小路に格子の中でする三味の音を聞いても、又は生垣の中から洩れる琴の音を耳にしても、あゝ、彼處のかんが違ふだの、おんちだのと、好くそんな事を氣にして居た。恰度、潔癖の人が何ても氣に爲るやうなものらしい。

「一體何を彈いてるんだい」と、少時して私が訊いた。

「えゝ、淺妻てすよ。」

かう言つて、小母さんは二たび茶盆を取上げた。

三

明くる日の午頃、私は自分の居間に居て、がら〳〵と表の格子戸の開く音を聞いた。妻は毎もの様に出掛けて居る。小母さんも買物に出て居ない。小女も何をして居るのやら返辭をしない。二たび尖つたやうな案内の聲がすると、私は自分で駈出して上框へ出た。

土間に一人の男が立つて居た。剝げちよろけた絆纏を着て、眼のぎよろりとした人相の惡い男で、私の顔を見ると、

「こりやアお宅の犬ですか」と、後ろを振回つた。

格子戸の外に、ジョン公が尻尾を垂れて、眼に光のない、いかにも懈るさうな顔附をして立つて居る。

私は只點頭いた。

「俺が今通りかゝると、不意に此奴が飛出して來て、俺の此處ンところに喰ひ着いたんですよ」と、其男はわざとらしく顔を蹙めて、股の邊りを摩つて見せた。

「ぢや何かい、負傷でも――」

私は思はず顔色を變へた。

「なにね」と、其男は私の顔を下から見上げながら、「そんなに大した負傷も爲ないやうだから、俺やア構はんがね。只、彼樣して置いちや、又後の人が難儀をするからね。一寸左樣言ひに寄つたんですよ。」

「左樣ですか、そりやア何うもお氣の毒をしましたね」と、私は辭を卑うした。「何れ繫いて置くことに爲ませうから、まア勘辨して下さい。」

「えゝ、左樣した方が宜うがすよ」と言ひながら、がら〳〵と格子を開けて表へ出た。其儘、直に見えなく成つた。

私は少時ぼんやりして立つて居た。犬はと見ると、緣の上にうつとりと横に成つて寐て居る。こんな犬が人を咬んだとは思へない。私は傍へ寄つて眺めて居たが、犬の方ぢや煩さいと見えて、むく〳〵と立上りながら庭の犬小舍へ這入つた。私も二たび自分の居間へ戻つた。

午飯の時、私は小母さんに此話をした。

「へえ、左樣ですか」と、小母さんは案外平氣な顏をしながら、「何ですよ、奧の川上さんからも子供に飛びかゝつて來相だから、如何かして置いて吳れといふお尻が來ましたがね、ジョン公も病氣で氣難かしいんですよ。あれは平常から少し氣に向かぬと直に咬み附き相にする犬でしたからね。」

「何だ、川上さんからもそんな話が有つたのかい。左樣方々から苦情が出る樣ぢや――」

私は容易成らぬやうな氣がした。

「えゝ、ですから庭の木戸を開けない樣にして置きませうよ。彼處さへ閉めて置けば大丈夫ですからね。」

此時の話はそれて濟んだ。

午後三時頃、私が茶の間へ出て行くと、縁側から妻が「ちよいと〳〵」と喚んだ。小母さんは妻と二人犬の傍に蹲がんで、そつと背中を摩つて遣つて居たが、

「ね、如何したんでせうねえ。かうして背中だと默つて摩らせて居るんですが、少しお尻の方へ手が行くと、がぶりと喰ひ附き相にするんですよ。ね、左樣でせう。」

「何だか彼處が紅く成つて腫れてる樣ですわねえ」と、妻も口を添へた。

「うむ、左樣だな」と、私も二人の背後に立つて覗込む樣にした。

犬は不意にむつくり起上つて、よろ〳〵としながら、沓脱の上から庭へ降りやうとした。一度犬小舍の前迄行つて見たが、其中へ這入る氣もないと見えて、又二三歩後へ戻つた。口からだら〳〵と涎を垂して居る。

小母さんは手を引いたまゝ、それを見て居たが、「何だか苦し相てすねえ。それに、何うも後足が變てすよ。尤も此二三日丸で喰べないんですがねえ。」

「えゝ、左樣よ」と、妻が又口を出した。「今朝は未だちよッぴり牛乳を舐めたんですが、今遣つても如何しても飮まないんですよ。」

「矢張早く醫者へ連れて行くんだな」と言ひながら、私は障子の中へ這入つた。「皆衆此方へ來て居るが可い。夕飯でも喫べたら、私が連れて行つて遣るからね。」

て、夕飯後、私はジョン公の頸環に鏈を結び附けて、散歩がてら引張つて行くことにした。小母さん

も着物を代へて、ちよこ／＼走りに隨いて來た。

門を出ると、今迄柔順にして居たジョン公が、突然通りがゝりの女に飛び着かうとした。私は驚いて鏈を引詰めた。女も喫驚して駈出した。て、何事もなく濟んだものゝ、私は始めてこれはと思つた。

一町許り行くと、又一人横手の露路から出て洗湯へ行く男に出逢つた。ジョン公は其男にも飛びかゝらうとした。私は其氣勢を見て直に鏈を引緊めたが、最う迚も向う迄行けないと考へ出した。が、ジョン公はいよ／＼氣が立つと見えて、電信柱にも、人間にも飛びかゝつた。頸環を引張られる苦しさに、がち／＼と鐵の鏈を噛んで、歯莖からぽと／＼血を落した。何となくそれが殺氣立つて見えた。

私は又犬に引摺られる樣にして、三四町行つた。前の通りとは違つて、人通りも少なし、此儘向う迄行き着かれやうかとも思つたが、或坂道へ差かゝると、ジョン公はばつたり立停つたまゝ動かなく成つた。其間、一二間歩き出したかと思ふと、又立停まる。うつとりと行先を見詰めて居るが、向うから酒屋の小僧らしいのが遣つて來ると、突然それに飛び掛らうとした。羅宇屋が妙な音を立てゝ車を曳いて來た時など、はら／＼して堪らない。私は鏈を引緊めたまゝ途方に暮れた。

矢張人力車に載せて來た方が可かつたかとも思つた。が、斯う成つては柔和しく人力車に乘つて居るか如何か分らない。恰度、町の角に人力車の立場が有る。小母さんに交渉させて見たが、車夫は腕組をしたまゝ「へゝ」と笑ひながら相手に成らない。て、兎に角、交番迄車夫を走らせることにした。

其間、だん／＼人簇りがして來た。中にも子供達はわざ／＼犬の傍へ寄つて覗かうとする。「あゝ、危

ない」と言つた位では、却々諾かない。私は犬と二人で人垣の中へ閉ぢられながら、何とも言はれぬ忌忌しさを覺えた。

「ね、少し後ろへ退(さが)つて居て下さい。」

私は齒咬みをしながら言つた。「此犬は狂犬ですよ。何時誰に喰ひ附くかも知れない。私は飼主だから責任上喰ひ附かれても仕方がないと覺悟して、此鏈を持つて居るのですよ。ね、貴方がたが喰ひ附かれても可い氣なら、私は此鏈を離しますよ。可いか、え、可いかい。」

群集はきよと／＼私の顏を見上げながら、一二間後ろへ下つた。少時遠巻にして眺めて居たが、刻々人數の殖えると共に、又ぢり／＼と傍へ押寄せて來た。最う何と言つても手が着けられない。

やつと先の車夫が戻つて來た。

「えゝ、今交番迄行つて來たんですがね」と、片手に項を押へながら、「お巡査(まはり)さんも自分が行つた所で仕樣がないと、如何しても來て呉れないんですよ。」

私は思はずむか／＼とした。が、考へて見れば、薄給の身で、餘まり手柄にも成らない事に手出しをして、負傷でもしちや引合はないには違ひない。

「ぢや、最一度警察へ交渉して見るかな。」

私は暫らくして言出した。「此邊(こゝら)に自動電話でもないかね。何處か借りる家でも――」

「電話なら、私が借りて上げませうか」と、先刻(さつき)から群集の中に立つて居た酒屋の御用聞きが言つた。

自宅へも來る男て顏を知つて居るらしい。

「えゝ、それぢや何卒一つ」と、小母さんが代つて返辭をした。

私は犬の鏈を小母さんに渡して置いて、其男に隨いて前の門構への家へ這入つた。臺所から上つて、電話の番號を繰りながら、所轄の警察署へ掛けて保護を賴んて見た。が、向うの返辭は、此方ても別に保護の仕樣がない。巡査を出せば、負傷のない樣に群集を制する位のものて有る。犬の事は飼主て始末して貰ふ外はないと言ふ。併し警察署にはちやんと犬殺しといふものが有る筈だと遣り返すと、えゝ、あれは平常三河島に居るから、急場の間に合はないとの返辭だ。私は最初むつとしたのも忘れて、思はず噴飯したく成つた。ぢや、いよ／＼手に餘つたら、此方て犬の處分をしても可いかと訊くと、宜しいと言ふ。其儘電話を切つた。

て、私は早速自宅から護身用の拳銃を取寄せやうとしたが、又思ひ返して、最一度先方の家畜醫院に電話を掛けて見る氣に成つた。醫者の許には、斯う云ふ際に何か始末をする道具が有るかも知れない。が、矢張醫者の許にもそんな道具はない。兎に角困つてお出でだらうから、書生を一人遣るといふ返辭を得た。私は切めてそれだけても倚賴にして、其家を出た。見ると、犬は小母さんに引かれたまゝ、門の中へ這入つて、黑板塀の下の蛇跎の上に横に成つて居た。時々起上つて見るが、遠く行くてもなく、又たぐつたりと其場に倒れた。此家の人には迷惑てあるが、街の上を彼方此方されるよりも氣易いのて、少時左樣して待つことにした。

半時間許りして、やつと獸醫の書生が遣つて來た。先づ口環を嵌めるのが第一だと云ふので、犬の鎖を取つて、ぎり／＼と傍の靑桐の木に捲附けやうとしたが、其はづみにすツぽりと頸環が外れて仕舞つた。犬は自由に成つた。最う書生も施すに術がない。私達は尙更如何することも出來ない。

其時、がら／＼と門の潛りを開けて、制服巡査が顏を出した。其後ろから幾つも群集の眼が覗いて、各自にわい／＼騷いて居る。

「あゝ、其處開けちや困りますよ」と、小母さんは振向いて注意した。途端に犬は飛びかゝつて、小母さんの腓の邊りに咬み着いた。

「あッ」と言つたが、顏を蹙めて痛さを怺へながら、「ね、そんなに覗いちや困りますよ。犬が暴れますから覗かぬ樣にして下さい。」

「如何したんぢや。犬は未だ捕まらんかね」と、巡査は東北訛りの發音を出して、眼をしよぼ／＼爲せながら、「ほッほう、そりや弱りましたね。矢張口に環を咬ませるですな。それが一番可えですよ。」

私はわざと返辭を爲なかつた。巡査は尙くど／＼と世話を燒いて居たが、やがて頭を引くと、其儘行つて仕舞つた。

其後、私達はいろ／＼骨を折つて見た。小母さんに一番馴れて居るからと云ふので、背中を撫てながら、だまし／＼頸環を穿めやうとすると、がッと咬み附き相にする。殆ど最う手の出し樣がなかつた。

おひ／＼日は暮れて、四邊が小暗く成つた。風もひや／＼と肌寒い。犬は別段暴れ狂ふてもなく、蛇髭の上に橫に成つて居る。それを見ると、私は不圖一策を案じた。で、直に隣の齒醫者へ電話を掛けて、自宅から犬小舍を取寄せることにした。四半時間許りすると、張場の車夫が犬小舍を載せて曳いて來た。

それを門内へ入れて、犬の傍へ据ゑながら、遠くから見て居ると、ジョン公はのそ〳〵と起上つて、すつと犬小舍の中へ這入つた。さア〆たとばかりて、直に小舍の蓋を卸して、其上からぐる〳〵と麻繩で捲いた。

私はほつと安堵の息を吐いた。て、直様犬小舍を車に載せて、書生を案内にして、ごろ〳〵と曳いて行かせた。私も小母さんと一緒に其後から隨つた。

途中、小母さんは時々自分の脛を氣にした。

「え、痛むのかい」と、私は二三歩後戻りをして訊いた。

「えゝ、少し血が出た樣だから」と、小母さんはまくつて居た裾を下して、ちよこ〳〵と隨いて來た。

「左樣か。向うへ行つたら、醫者に好く診て貰ふが可いね。」

私は別段氣にも掛けなかつた。二人はとぼ〳〵と灯火(あかり)の少ない山の手の街を辿つて歩いた。

川添ひの家畜醫院へ着いた時、犬小舍は最う診療室の中に据ゑられて居た。箱の中では、ごとりとも音を立てない。私は訊かれる儘に、略方(あらかた)これ迄の經過を話した。院長は首を傾けながら一々點頭いて居たが、

「一度診察した上でなけりや好く分りませんが、今お話を伺つた所では、何うも狂犬の疑ひが充分有る樣てすね。」

「併し何てせうか」と、私は遮ぎる樣に言つた。「こんな柔和しい狂犬が有るてせうか。」

「えゝ、そりや狂犬にゃ燥狂性と鬱狂性との二種が有りますからね。」

かう言つて、院長はいろ〳〵狂犬の話を仕出した。「先づ其症候としては、變聲——嗁聲が變るんてす

ね。それから涎を垂らす、第三に下腿の麻痺、から云つた症狀が有れば、大概狂犬と見做すのですが、普通の腦症狀でも殆どこれに似通つたものが有るのですから、確たる判斷は如何しても動物試驗を行つた上でなければ下し難い。」

「動物試驗と云ふと――」

「つまり一旦屍體を解剖した上で、腦漿を取つて他の動物に移植するのですな。其結果は六十日間を經なければ分らないのです。左樣云ふ譯で、生前には確かな診斷は出來ないと云ふことに成るのですが、私どもも多年の經驗で、一目犬の容子を見れば、まア大抵の判斷は着くのですな。併しこれは狂犬でないと確信して居ても、此奴ばかりは後で取返しの着かないことに成るのですからね。えゝ、警察醫などに見せりや、大概の犬は皆狂犬にして仕舞ふのです。左樣すりや、間違ひがないのですからね。兎に角、私どもの職業では此狂犬鑑定が一番艱かしいのですよ。」

私は默つて院長の長話を聽いて居ながら、迚も此醫者から確かな診斷は聞き難いやうな氣がした。やがて院長も話し勞びれた頃、「では、如何にかして犬を診ますかな」と言ひながら立上つた。

が、犬小舍から犬を引出すのが又一仕事で有つた。此儘蓋を開けて、室の中へ飛出されては堪らない。三四寸開けた所から、犬が首を出すのを待つて麻繩で縛らうと云ふのだが、何うも思ふ樣に行かない。四人がゝりで、一時間餘りもどすばた遣つた揚句、やつと後足を縛つて引摺り出した。犬は悲鳴を上げて、手當り次第に咬み附く。漸う〳〵それを抑へ附けて、四肢と口をぐる〳〵に縛つて診察臺の上に載せた。院長の診察には大分手數がかゝつたが、

「併しこれだけ症狀が具はつて居ながら、何うも啼聲の變らんのは可訝しいですね。兎に角、一兩日見

て居たら分るでせう。」

犬は書生の手に渡されて、裏の病室へ連れて行かれた。何んな犬か知れないが、始終きやん／＼と啼き通しに啼いて居るのが耳に着いた。

其間、小母さんは眞蒼な顔をして、物も言はずに立つて居た。

「ね、先刻の足を診て貰つたら如何だい」と、私は傍から注意した。「人間のお醫者ぢやないから分らんけれど――」

「えゝ、左樣しませうか」と、小母さんは始めて我に返つた樣におづ／＼言つた。

「なに、足をお咬まれに成つたのですか。」

院長は小母さんの脛を出させて、當座の消毒をして吳れた。それから豫防注射の話に移つたが、傷も小さい上に、着物の上から咬まれたのだから、唾液が這入つたとも思はれない。大概注射には及ぶまいと思ふが、受けて置くに越したことはないと云ふのだ。眞個ぐるりが黑にぢに成つて居るものゝ、咬傷は錐で突いた程しかなかつた。

二人が家畜醫院を出たのは十一時に近かつた。其町を出離れると、小母さんは追ひ縋る樣にしながら、

「ねえ、あんな手暴なことをしちや、狂犬でなくとも狂犬になりますわねえ。可憫相に、二日も三日も喰はずに居るんだもの――」

私は返辭もせずに前に立つて步いた。半夜の奔走と氣苦勞に勞れて、誰にも物が言ひたくなかつた。

自宅へ戻つて、長火鉢の前に坐つたまゝ、私は小母さんを相手に五勺の酒を傾けた。そして、醉つた勢ひに、床へ這入つて寢て仕舞つた。少時して、

「ね、もし」と、次の間に寢て居る小母さんが聲を掛けた。「未だ起きてかな。」
「あゝ」と、私は生返辭をした。
「如何てせうね。私は如何しても注射を受けなきや不可ないでせうか。」
「左樣さな、受けなきや成るまいね。」私の返辭は半ば寢惚けて居た。

四

次の朝、二人が差向ひに成つた時、小母さんは不意にこんな事を言出した。
「ね、私はジョン公のためなら、此儘死んでも可いから注射を受けずに置かうかと思つてるんですよ。」
私は飽氣に取られて相手の顏を見詰めた。
「如何して――そんな事をしたつて、ジョン公の爲に成る譯ぢやあるまい。」
「えゝ、ですが――」と、少時口籠つて居たが、「何うてせうね、矢張注射を受けるには肌を脫がなきやならないてせうねえ。」
成程――小母さんのから言ふには仔細があつた。維新のどさくさ紛れに仲間に連れられて逃げた時のことだ。先づ最初は男の生れ在所だといふ信州の小諸へ連れられて行つた。仲間は女が持出した金子の有るに任せて、毎日盃莫蓙の間に日を送つた。だん〳〵其金子もなく成つた頃、女と一緒に親分の家へ轉げ込んだ、女も仕方がないから隨いて行つた。或夏の日、一人晝寢をして居ると、子分の者の惡戲から二の腕に入墨をされた。女は目を覺して泣いた。が、破れかぶれに成つて、其上から髑髏に櫻の花を散した割靑をした。そして立派に博奕打の女房と成つて押通して來た。小母さんは私に其話をした時、

「女と云ふは淺薄な者ですねえ。左樣成ると、自分の身を恥かしいとも何とも思はない。却て當前にして居る人達を笑つて居るんですよ」と、自分から蔑視む樣に笑つた。

私は當人の口から聞いても、何うも小母さんの前生涯にそんな事が有得やうとは思はれない。が、二の腕に刺靑のして有るのは事實で有る。三十の歲迄連れ添つた亭主が傳馬町の獄屋で牢死をしたと云ふのも、滿更嘘ではないらしい。

私は默つて小母さんの顏を見返して居た。六十に近い女ながら、人形のやうな淸しい眼をして、皮膚のきめが透き徹る樣に細かい。私は其顏の裏に此女の前半生を讀まうとした。私の眼には振袖を着て、奴の背中に負はれて行く女の姿が泛んだ。そして、われにもなく微笑まれた。不意に、

「ね、小母さんには、昔から犬が祟る樣だね」と言つた。

「え？」と、小母さんは顏を上げたが、何の事とも解らなかつたらしい。

其日の午後、小母さんは妻と二人でジョン公の見舞ひに行つた。歸つて來ても、物も言はないで萎れて居るので、「如何だつたい」と、私の方から訊いた。

「えゝ、大人しくしてましたけれどねえ。私達が檻の前へ行つても、何だかうつとりとして飼つて貰つた人の顏も分らない樣なんですよ。昨宵から水一口飮まないんだ相ですからね。」

「ぢや、最う長いことは有るまい。」

「えゝ」と、小母さんは溜息を吐いて、「あれも小さい時から弱かつたのを丹精してあれ迄育てゝ遣つたんだから、今死んでも心殘りは有りませんがねえ。」かう言つて、竊と眼尻の露を拭つた。

私は氣の弱く成つた年寄が憫れにも、又不思議なやうな心持がした。「併し何だね、犬も犬だが、それよ

りも小母さんの身體を大切にしなきや不可んね。恐水病といふのは、そりやァ怖ろしい病氣だからね。」

私は極力其病氣の怖ろしい所以を說いて、如何かして豫防注射を受けさせやうとした。其病氣に罹つて死んだ人の悽慘な死方など話されると、小母さんは身を縮めて聞いて居たが、未だ何うも決心が着かぬ樣に見えた。

明くる朝、寐起きに家畜醫院から隣家へ電話がかゝつて、犬がいよ〳〵危な相だから見に來て吳れと言つて來た。左う右うして居る間に、又電話で到頭事切れたと知らせが有つた。私は隣家から歸つて、

「おい、小母さんが行くかい」と訊いた。

「私や最う――」と、小母さんは頭振を掉つた。「そんな死骸など見るのは可厭だから、貴方行つて下さいな。」

て、仕方がないから、私は自分で出掛けて行つた。院長は何うも狂犬の症狀は具はつて居るのだが、死ぬ迄聲が變らない、下顎も垂下しないのが不思議だと云ふ。兎に角、警視廳へ送つて解剖して貰ふ手續をして戾つた。

次の日は朝から雨が降つた。小母さん一人薄暗い茶の間に坐つて居たが、外套の雫を垂しながら、巡査が土間へ這入つて來て、突然「お宅の飼犬は狂犬だ相ですよ」と告げた。「今本廳から電話がかゝつて來たんでがね、誰か咬まれた者は有りませんか。」

小母さんは戰々しながら出迎へたが、「いゝえ」と、橫に頭を振つた。

其儘巡査は戾つて行つた。小母さんは上框に立つたまゝ、少時動かなかつた。

――大正二年五月十九日――

關東大賣捌所

東京神田表神保町	東京堂
仝　神田裏神保町	上田屋
仝　京橋尾張町	東海堂
仝　京橋元數寄屋町	北隆館
仝　京橋西紺屋町	良明堂
仝　日本橋本石町	至誠堂

關西大賣捌所

大阪東梅田町	盛文館
仝　[illegible]町堀	太華堂
京[illegible]光寺	東枝書肆

○定價　金貳拾五錢郵税金貳錢（海外郵税拾貳錢但清國を除く）

冊數／國別	內國	外國
六冊	金壹圓五拾錢	金貳圓拾錢
十二冊	金參圓	金四圓貳拾錢
以上郵税共		

▲但　新年號春秋二期附錄號は各倍冊に付普通號二冊の代金を申請くべし、即ち一ヶ年通計十五冊分の割合なれば一ヶ年分御注文の方は內國は金參圓七拾五錢外國は金五圓貳拾五錢拂込まるべし

送金注意

一**郵便爲替**　にて御送金の場合は**本郷西片町十番地反省社**と指定し拂渡局を**東片町局**と指定あれば途中盜取の虞なし

一**振替貯金**　口座は**東京三十四番**なり

一**郵券代用**　必ず**一割增**の事

一**集金郵便**　の便法を利用せらるゝ方は、**座ながらにして誌代の拂込**をなすことを得べし、御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加えたる共總額を前以て弊社へ通知せらるべし弊社は直ちに其取扱をなすべし

一金一圓迄　金五錢
一金三圓迄　金六錢
一金五圓迄　金七錢
（集金委托料及送達料）

一**受領證請求**　は必ず返信料金を要す

大正二年五月廿八日印刷納本
大正二年六月一日發行
（禁轉載）

發行兼編輯人　麻田駒之助
印刷人　藤本兼吉

東京市本郷區駒込西片町十番地
發行所　反省社
電話下谷一九一九
振替東京三十四番
電信略號ハンセイ

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　秀英舍第一工場

CHUO KORON (*The Central Review.*)
By The Hansei-sha Publishing Co., Published Monthly.
Terms of Subscription: annual subscription yen 5.25; Single copy 37 sen including Postage. Entered at the Post Office at Los Angels, Cal. U.S.A. as second-class mail matter

明治三十年一月二十九日第三種郵便物認可
大正二年五月廿八日印刷納本